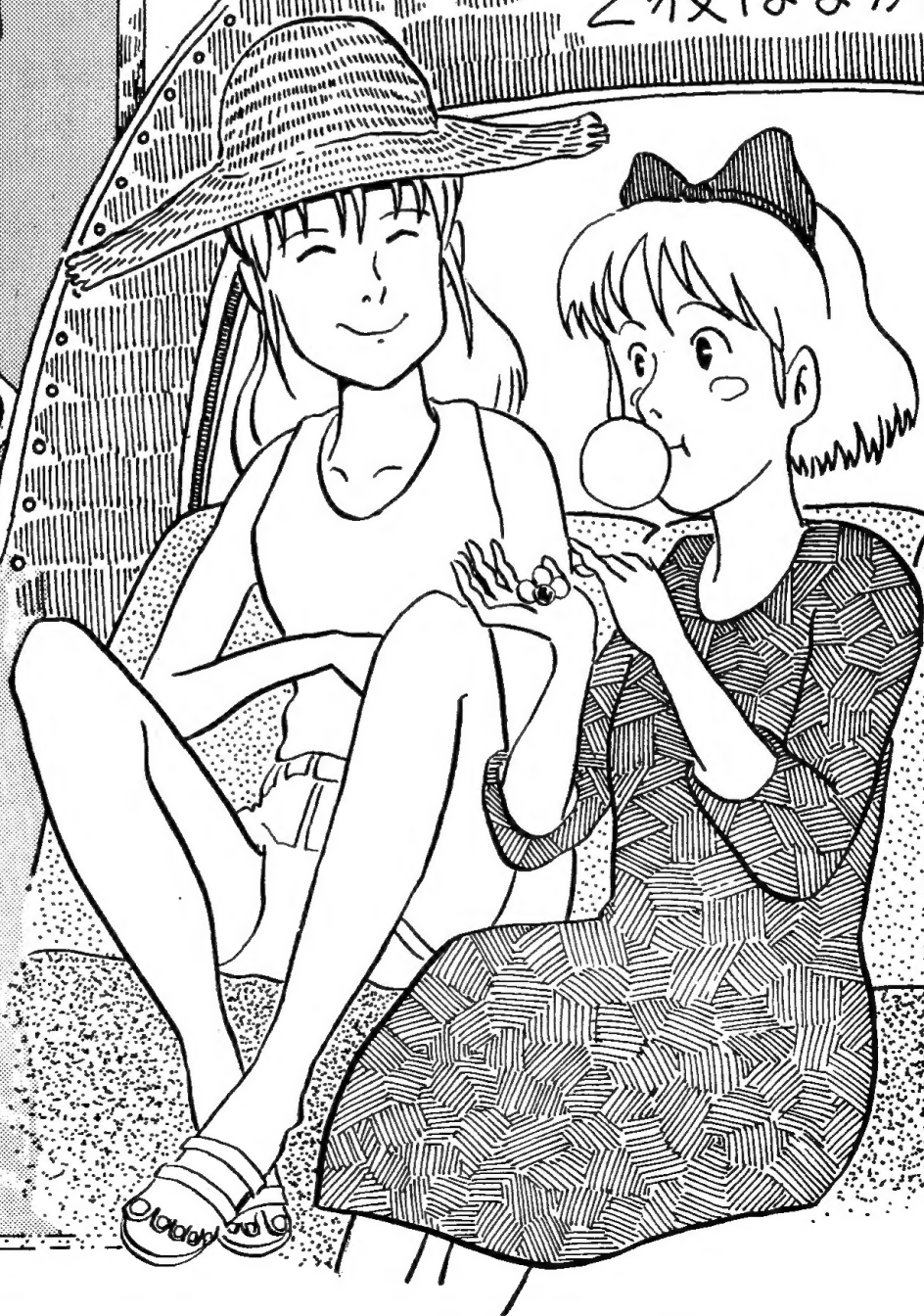
Character Voice

声優大特集

新装版 1

アニメ声優大特集
高山みなみさんの
２役はよかったナァ!

はじめに

一時期、下火になったといわれる声優人気に再び火がつき始めている。第3次声優ブームとでもいおうか。にもかかわらず、われわれ声優ファンが声優の素顔を知り得ていないというのは、どういうことだろうか。これは4、5年前までは声優さんたちの活躍の場であったラジオ番組がたくさん放送されていたのに、現在では一部の地域を除いて、ほとんどなくなってしまい、我々が声優さんの事を詳しく知るチャンスが少なくなっているからではないかと思う。

この様な状況に常々私は不満を抱いていた。少しでも声優さんの素顔を知ってもらいたい。今の彼らが何を考え、どんな活動をしているのかをわかってもらいたい。こう思って作ったのが本書、声優本である。この本を読んで声優さんにもっと興味を持ってもらえたら幸いである。

CONTENTS

声優インタビュー

高山みなみ

佐久間レイ

山口勝平

西原久美子

冨永み〜な

田中真弓

斯波重治

1 声優インタビュー

高山みなみ

Minami Takayama

本気で怒って本気で泣いて本気で笑って、あの味吉陽一に嘘偽りはございません。

1989/11/20　81プロデュース事務所

《プロフィール》

――まず、プロフィールからお訊ききしたいんですが。

高山みなみさん（以下高山）　生年月日が一九六四年5月5日、子供の日（笑）。牡牛座B型。牡牛座には見えないって言われます。身長が一五七かな。趣味はビリヤードと音楽をちょっと。いまバンドも少しやってます。

今の自分たちの夢っていうことで。高校時代からやりたかったけれど周りにそういう人達がいなくてできなかったとか、歌手になりたかったとか、そういうメンバーが集まって、第二の青春っていうかたちで。特技は（笑）、料理かなあ。調理師の免許を取ろうとしたこともあるし。

――アニメビジョンでパイナップルカレーを作ってましたね（笑）。

高山　あれを見たら、できなさそうに見えちゃうけど（笑）。アルバイトで厨房に入ってたこともあるんですよ。だから、実際はすごい得意なんです。出身は東京です。…お見合いのようになってきたな（笑）。

高校卒業してから演劇の専門学校に行ったんですが、中退してOLを一年一ヶ月くらい。よく頑張ったと思うんですけどねえ（笑）。それからしばらくぶらぶらしていたんですけど、広告を見て、声優の養成所に入って、一年で81プロデュースの方へ。もっと言うと、

高校３年のときに「女子中高生ＤＪコンテスト」にいたずらで応募したら通って、そのときにうちのマネージャーと知り合ってはいたんで、その関係もあったんですよね。ほんとに彗星のようにドーンという感じだったんで。

いろいろやったけど、結局収まるところに収まったかな。実は中学２年から高校２年まで劇団ひまわりにいて（笑）、さらにその前からテレビには出ていたんですけど。というのも叔父がアントニオ猪木さんのマネージャーをやっていて、小学校のときに猪木さんの出る子供番組のサクラをやっていたんですね。

――実際にこの業界を意識されたのは。

高山　中学からですね。それまではやだやだ、絶対お巡りさんになるんだって（笑）。卒業アルバム見ると婦人警官になりたいって書いてある（笑）。親は芸能人にさせたいと思っていたらしくて、ひまわりに入りたいと言ったときは目覚めるのが遅いって怒られた（笑）。

――81に入ってからは。

高山　バッカーズオーディションっていう劇がデビューだったんです。それから、夏になって『ミスター味っ子』が決まって、同時期に『一九九九年の夏休み』も。一年足らずで結構いい方向に来て。

その前っていうとほんの数えるぐらいしかやってないんですよね。『味っ子』の前は役名のないものばかり。女生徒Ａとか。『学園特捜ヒカルオン』がアフレコ初めてだったかな。他には『コスビーショウ』や『霊幻道士２』、『デビルマン誕生編』。『機甲戦記ドラグナー』がテロップに名前が載った最初だったんです。

――『一九九九年の夏休み』ですけれど、役柄は。

高山　カオルです。転校してくる子。オーディションを受けて。アフレコに５日間ぐらいかかったんです。最初の２日間は割りと短め（と言っても８時間ぐらい）だったんですけど、あと３日間は、朝９時に入って終わるのが夜中の12時（笑）。うちで明日のチェックをしていると寝るのが２時間とか（笑）。結構楽しかったんですけどね。

あれはうまくやっちゃいけなかったんですよね。演じていたのが素人だったので、私達がやると表情がそこまでいってなくて、「ごめん、うますぎるんだ」って。だから感情を殺して、ただ言えばいいからって。余計に難しいんですよね。そのうえ台本と口の動きがあっていなかったり、ロングになると口の動きが分からなかったり（笑）。録り直しってなると１シーン全部やらなくちゃいけなくて、ひどいのはテイク24まで（笑）。

毎日合宿みたいだったんで、辛いんだけど楽しかった。

《『味っ子』の思い出――陽一と自分》

――『味っ子』ですが、これもオーディションですか。

高山　そうです。あれは、もう、きたな、みたいな（笑）。いまだに盛り上がりがあって。

あの作品に関してはあまりに思い入れが強すぎちゃって、まだ最終回近くが見られないんですよ。結局、自分と同じようにキャラクターが成長してったんですよね。自分が周りの方達に支えられて、声優として新人の域を脱して若手に入っていく（笑）。それがキャラクターもそうだったんですよね。少年料理人から成長して、やっぱり周りに支えられながら強くなっていく…。自分とものすごくダブってやってたものなんですよ。周りの皆さんが陽一に接するように私に接してくれていたんで、まだちょっと辛いんですよね、終わ

っちゃったっていうのが。ゲストの方に外で会っても、優しく、終わっちゃったねって声をかけてくれるような、すごくいい作品だった。

　とにかく最終回近くで、「おいしいよ」ってどうしても言えないってディレクターに話して、「おたのしみに」ぐらいにしていただいたんですよ。にもかかわらず、その次の週は予告録れなくなっちゃったんですよね。予告を録るのを来週に回してもらって。思いっきりのめり込んじゃう方なんですよねえ。だから出来上がるの早くて（笑）って笑われてるんですけど。6週ぐらいずーっと泣かされたの。あーれは辛かったんだ（と陽一風に）。もう思い出すだけでも辛い。自分の感情なのか陽一の感情なのかもう分からないんですよね。悔しいのとで、もう普通には話してられない。このこと話していると夜が明けちゃいますよ（笑）。

——どんなキャラでも思い入れが強い方…。

高山　それはそうですけど、あれは特別ですね。自分と似てる部分が多いと思うんですよ。周りの状況とか性格設定とか。だから、すごいすんなりそのキャラクターに入っちゃったんですよ。落ち込んでるときは自分も落ち込んでたり、夢の中でもいろんな勝負をやっていたりね（笑）。私は一体誰なんだー（笑）。それを引き離して、これはキャラクターなんだよと考えるようにはしてたんですけど、やっぱりだめですね、そこまで一回入っちゃうと。だから、今も陽一の感情で話せって言われればいくらだって出るような気がする。

——確かにいまお声を聴いていても陽一そのままですね。

高山　うん。地声でやってたし、感情の流れにしても何にも無理してなかった。本気で怒って本気で泣いて本気で笑って、あの陽一には嘘偽りはございません（笑）。

《『味っ子』のスタジオ風景》

——それでは、少し話を戻して、『味っ子』のオーディションの話を伺いたいんですが。

高山　話が来て、原作を読んだんですよ。お好み焼きのあたりを。で、私そのちょっと前ぐらいまで、そのバイトをやってたんで（笑）、料理物かこれはいいなあなんて、共感して。でもまだ一年目で主役なんてとんでもない、皆さんの胸を借りるつもりでって受けたんですよ。そうしたら、どーっとそうそうたるメンバーが（笑）。4役（お母さん、陽一、みつこ、しげる）いっぺんに選考していたんですごい人数来ていたんですよ。いやーこんなところへ来ちゃっていいのかなあみたいな（笑）。ちょうど横尾まりさん（味吉法子役）と組んでやったんですよね。で、とにかく思いっきりやって帰ってこよう（笑）ぐらいだったんですよ。これで落ちても悔いなしみたいな感じで（笑）。そうしたら次の日に通ったぞって。2日間泣きましたね。嬉しくて（笑）。それから、アニメ雑誌を見たらまあ、期待度の高いこと。それからはもうプレッシャーですよ。

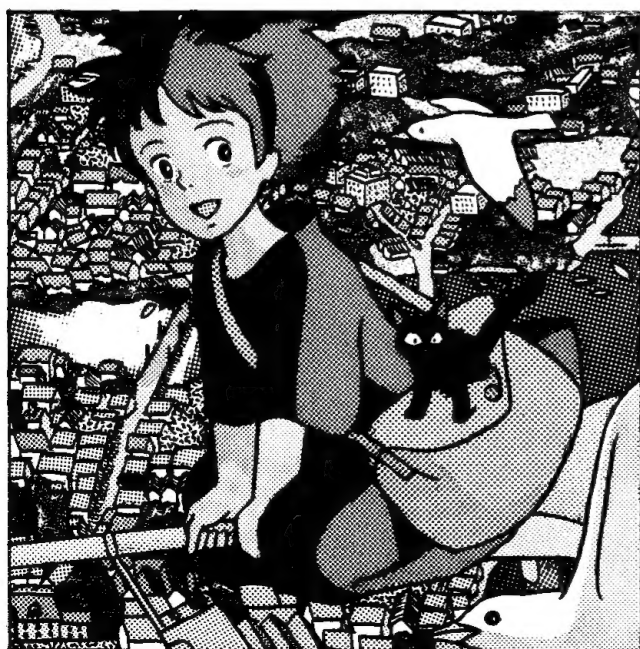
　でも、一回目のカツ丼が光ったときは（笑）、驚きましたね（笑）。まさかああなるとは思わなかった（笑）。スタジオの中も大笑いだったんですよ。でもそれだけには止まらなかったんですねえ（笑）。

——スタジオの雰囲気もよかったと伺っていますが。

高山　家庭なんですよね、スタジオ自体が。周りは大ベテランの方達ばかりで、こっちがどんなに暴投しても抑えてくれるんです。おまえは好き勝手にのびのびやりなさいって初

めから言われてたから、押さえつけられることも全くなかったんです。で、みんな何となくキャラクターに似てたりね（笑）。ゲストの方は「いらっしゃいませ。どうぞごゆっくり」っていうお客様みたいな感じで。だからゲストに来たいって言う声優さんが多かったんですよ。それこそスタジオが日の出食堂かな（笑）みたいな感じだったんですよね。
　みんなが割りと同じ方向を見ていたっていうか、ベテランも若手もひとつのことでぱっと笑える雰囲気でした。スタジオ行くとほっとするっていう感じだったんですよね。
――あの画面に圧倒されるということはなかったんですか。
高山　ゲストの方にはなんじゃこりゃ（笑）って言われましたよ。一番トリップしていたのは味皇様（藤本譲氏）なんですけどもね。お茶漬け勝負の時に藤本さんが、「私に何をさせる気じゃ」って調整室に向かっていったんですよ（大笑）。もう監督なんか手をついて謝っているし（笑）。もうあれは藤本さん笑っちゃって台詞言えなくなっちゃうし。みんな体かかえて笑いをこらえていると、藤本さんが、「俺の視界に入るなっ！」（大笑）。
　ゲストの方が抑えていると、好きなよぉにやって下さいって指示がくる。何回か来るうちにキャラクターをどんどん作りあげていかれるんで、初めとは違ったキャラクターになることが多かった。

《『魔女の宅急便』――２役への挑戦》

――『味っ子』はこのぐらいで（笑）。『魔女の宅急便』の方に。最初はウルスラ役で決まっていたとか。
高山　そんな感じですね。ただ、その後キキ役が決まらなかったらしくて、キキもウルスラもオソノさんももともと同じ人ができるぐらいのラインなので、もしかしたらというんで再度オーディションして。最終的にキキって決まって、ウルスラは別の方がいたんですけど、アフレコ２日目の帰り際、ディレクターにちょっと両方やってみてと言われて、で、（編集したのを）聞いたら、「…おかしいよー、こんなのー（笑）」。本人は自分の声で会話してるんですから、すごく変なんですよ。「どうするの」「いや、これで２役でやってもらおうと思って」「えっ！」。
　で、主役だけでも大変なのにってすっごく悩んだんですけど、宮崎監督も浅梨録音監督も大丈夫だからって言って下さって。こんなチャンスは二度とないかもしれないし、チャレンジしてみようと思って。
　公開までは２役というのは伏せとくということだったんですけど、公開しても分からなかったみたいですね（笑）。
――ウルスラの方がどちらかといえば作ってないですよね。
高山　そうですね。キキみたいな小っちゃい女の子って初めてだったんですよ。どうやっていいのか分からなくて、オーディションのときも、「かわいくしようとしなくていいよ。かわいい声が欲しいんだったらあんたは呼ばないわ」って言われたんですよ（笑）。フランクで割りときつい表現なさるんですよ、浅梨さん。それで、いつもの普通の感じでやったらＯＫって。あんまりアニメーションって意識しないで、ナチュラルトークが合うんじゃないかっていうんでそうしたんですけど。やたらと大きい声も出していないし。それが良かったみたいですね。
――そうですね。陽一のときは作っているっていう感じでしたけれど、キキは自然な感じで。
高山　逆なんですけどね（笑）。キキの声が

PROFILE プロフィール

☆本名・新井泉　S39.5.5生まれ

S62.10 TV「ミスター味っ子」味吉 陽一

62.11 OVA「デビルマン・誕生編」

63. 1 TV「小公子セディ」ロイ

H 1. 4 TV「らんま½」天道 なびき

1. 5 OVA「EXPLORER WOMAN・レイ」マミ

1. 7 劇画「魔女の宅急便」キキ、ウルスラ

2. 4 TV「楽しいムーミン一家」ムーミン

その他、ゲスト出演・アルバム参加など。ボーイッシュな声と演技が魅力のボイスプレイヤー。81プロデュース所属。

地声だって思ってる方が多くてね。ラジオに出たあとで、キキは地声じゃないんですねっていう葉書を結構もらったんですよ。違うんだよ、ごめんね（笑）。ウルスラの方が近いけど、またちょっと違うし。キキなんか今やれって言われても出ませんからね、もう。あの状況だったから出たんであって。

―― 佐久間レイさんから役作りに悩まれたと聞いていますが。

高山　レイちゃんの方が大変だったんですよ。で、私はもともと役作りっていうのをしないんです。画面を見て台本を読んでる内にその子の考えがまとまってくるっていうすごい未完成な部分でやっていて、アテながらキャラクターになっていくんで、あまり役作りの苦労ってなかったんですよ。その場その場の感情でやっていく方がより自然だと思うし。だから、なんども繰り返しやると駄目になって、最初にやったときの感じはって悩むことはあったけれど。

《アンニュイなびき》

―― じゃあ、『らんま½』のなびきみたいな役はどうなんでしょう。

高山　あれ？（笑）　あれもだんだんキャラクター変わっていっちゃったんだよねえ。最初と途中と今で全然違うんですよ。

面白いは面白いですよ。最初どう料理していいか分かんなくて、声もどう出していいか分かんないし、落ち着かなかった。ただ、かすみやあかねと一緒になっちゃ絶対に駄目って思っていたんで、どっちかっていうとアンニュイな方向に（笑）もっていこうかって、原作のイメージはそういうとこないですけど、割りとボソッと喋ったら、結構よかったらしくて。そうしたら、キャラクターもなんとなくアンニュイな方向に。最近また元気になってきてますけど。

―― オーディションもなびきで受けられたんですか。

高山　いえ、らんま（笑）。（編注　当初、男女とも同じ声優がやる予定だった）

―― なびきと九能（鈴置洋孝氏）のからみについては…（笑）。

高山　酒場だって言われるのー（笑）。やっぱり、『味っ子』で御一緒してるから外さないんですよねえ。あれは面白かったようですね。

―― 最近出番が少ないんでちょっとさびしいですね。

高山　でも、最近は必ずひとこと、ふたことあるようになったんですよ。

―― らんまのスタジオの雰囲気は。

高山　どっちかっていうと学校みたい。適当にみんながやがやがやしてるって感じ。で帰りは一緒に帰ろうって（笑）そういう感じ。

《ゲストキャラ模様》

―― 最近のゲストでは『ダッシュ四駆郎』の源太がありますね。

高山　あたしってパターンないから、何やっても陽一になるって大笑いされちゃった。

―― でも『シティハンター3』では女性のゲスト（女性弁護士役）をおやりになっていましたが。

高山　あれ!?（笑）　言わないでお願い。あのあとすっごい落ち込んだの。できないって、まだあんな歳の女性をやったことがないんで、すっごいプレッシャーで。これは大変だ！、これでもうあたし仕事来ない（笑）っていうぐらい落ち込んでたの。

―― 『エクスプローラーウーマンレイ』では大分高い声を出されていましたが。

高山　キャピキャピの女子大生って言われたから。キャピキャピ？　分かんないんだよねえ（笑）って言いながらのどから血が出るほどやっていたような気がする（笑）。
　あとは『魔狩人』の夜摩。『イース』のフィーナっていう女の子。それからPCエンジンCDロムの『コズミックファンタジー　冒険少年ユウ』っていうゲームでユウっていう主人公の声を。それでうちもロムロム買わなきゃって（笑）。
――それではアニメ以外のお仕事といいますと。
高山　あ、地声でバンとできるCMは好きですね。ラジオのCMになるとまた違うんですけどね。気取っちゃってね（笑）。
――洋画の吹き替えは。
高山　木曜洋画劇場の『デビルズダンシング』。それからビデオで『パープルピープルイーター』。あと、花の万博のパビリオンで流れる『シネラビリンス』というのを。
　顔出しはあまり考えてないですね。ラジオはやりたい。最近ゲストでちょこちょこ出ていますけど。どちらかというと音楽情報番組をやりたいなと。もともとDJがきっかけみたいなものだから。

《絶対、ヒーロー！》

――『魔女の宅急便』のロマンアルバムに詩を載せていましたね。
高山　はい。文章を書くのは好きですよ。今小説書いてたり。音楽につながるものはなんでも。最初はエッセイみたいなもののつもりだったんだけど、バンドのメンバーとも相談して、詩を入れることにしたの。
――作曲もなさるんですか。
高山　作詩から編曲までしますよ。楽器はシンセです。楽譜も書けないんでシンセは好きですね（笑）。歌うのも好きなんですけど、女性キーで歌えないんですよ。
――『味っ子』のレコードがありましたよね。
高山　何でソロで歌わせないんだってさんざん文句言ってねー（笑）。2を出せって怒って。

　でも、ファンのみなさんの働きかけによってはOVAになりそうなんですよ。葉書出して下さい。
――目標とする声優さんやお仕事は。
高山　声優さんっていうのは分かんないけど、やっぱりずっとヒーローを続けていければなと。その間に女の子も。
――あ、ヒロインじゃなくて、ヒーロー？
高山　うん、絶対（笑）。だって、（声を）作らないで済むのはヒーローですから（笑）。
――バンドの方はどうなるんですか。
高山　まだ本格的には決まってないんですよ。来年中には出ていかなくちゃいけないねって言ってるんですけど。声優として、ではなくやっていきたいとは思ってるんですけどね。
――今日は長い間ありがとうございました。

高山みなみさんへのインタビュウは、山手通りに面した81プロデュウスで、一九八九年十一月二十日に行われた。

当日のインタビュウは爆笑の連続で、あっと言う間に予定の時間が過ぎてしまった。みなみさんの地声というのが、「ミスター味っ子」の陽一くんだったというのは驚きだった。加えて、バンドで編曲もこなしてしまうというのも、音楽をかじったことのある僕としては尊敬せずにはいられなかった。もっとも、楽譜は全然書けないというのも彼女らしくて面白かった。とにかく、笑いあり涙ありのこのインタビュウをCD化したら、きっと売れるんじゃないだろうか？　そんな気さえしてしまった。

彼女は、とっても陽気で、茶目っ気たっぷりで、少年のような瞳の輝きをもった魅力的な女性だった。ファンが急増しているのもうなずける。これからも益々活躍して、僕らを楽しませてくれるに違いない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

話はかわるが、日本アカデミー賞において、「魔女の宅急便」が話題賞を受賞した。この賞は、ニッポン放送「オールナイトニッポン」を通じて、全国の一般映画ファンに投票を呼びかけ、その投票結果に基づいて決定されるというもので、考え方によっては、日本アカデミー賞なんかよりも、ずぅ～っと価値がある賞なのだ。

そして、その受賞式が二月二十三日に、東京は赤坂プリンスホテル鳳凰の間で盛大に催された。この模様は日本テレビ系で全国に中継されたので、ご覧になられた方も多いと思う。話題賞の受賞式は助演賞部門と主演賞部門の間におこなわれた。

「魔女の宅急便」の名前が発表されると、ステージには主役のキキを演じた高山みなみさんが、さっそうとタキシード姿であらわれた。どういうわけかトンボ役の山口勝平さんも一緒に登場した。話題賞を受賞した作品は他にもうひとつあって、それはビートたけし主演の「その男凶暴につき」であった。当然受賞は同じステージに行われたのだが、その時ステージの上にいた顔触れと比べても高山みなみの人気も知名度も、とても比較の対象にはならないだろう。確かに全国区の知名度をもつスターたちと比較するというのは無謀なことなのかもしれない。しかし、その時、僕には一五八センチのみなみさんが、誰よりも大きく、そして、どんなスターよりも明るく輝いているように見えた。

翌日の新聞各紙は、日本アカデミー賞を報じていたが、高山みなみの記事は一文字もなかった。それは当然のことなのだろう。だけど、僕は知っている。誰よりもみなみさんがキラキラしているそのことを！

これは僕の勝手な思い込みにすぎないのかもしれませんが。

だけど、やっぱりみなみさんは

ブラボー！

だと思います。・・・・よね？

（たけ）

"ミスター味っ子
おいしいよ！
味吉陽一
1989.11.20

らんま1/2 アフレコレポート PART1

時は平成二年三月八日、所は港区ニュージャパンスタジオ。その日我々は出来れば来ないで欲しいという斯波重治氏の言葉にもかかわらず、「らんま1／2」のアフレコ見学にお邪魔してしまった。しかし、今考えてみれば、あの切羽詰まった製作状況の真っ只中にお邪魔するとは、なんと非常識な事をしてしまったのだろうとスタッフ一同深く反省している次第。が、今更悔やんでも仕方がない。では気を取り直して「らんま1／2・熱闘編」アフレコレポートのはじまりはじまりぃ～。

その日、完全に舞い上がっていた我々はいきなりアフレコ開始より一時間半も早く駅に着いてしまった。極寒の中で待っているのも耐えられないので、少々早いとは思ったが、とりあえず目的地に向かうことにした。予想外にスタジオの前にはファンとおぼしき人達が集まっており、その横を悠々と通り過ぎスタジオの中に入って行く。悪いなと思いつつも軽い優越感をおぼえてしまうのであった。

「えっ！本当に来ちゃったの！」これが我々が挨拶に行った時の斯波さんの第一声である。これはマズったなと思った時にはすでに遅く、後には退けない状況になっていた。先の思いやられるアフレコ見学のスタートであった。

ロビーで待つこと数十分、続々と声優さん方が到着する。さすがに若手の人達は早い。女生徒役の中沢みどりさん、亀井芳子さん、小林優子さんらが真っ先にいらして、入念に台本のチェックを始める。そのあまりの真剣さにこちらも声を掛けられない雰囲気だった。そうこうしているうちに男乱馬役の山口勝平さん登場。彼には今日ここに来る事を伝えていなかったので、我々に気付いた時、少々驚かれたようだった。相変わらず元気そうでなにより。とそこに元気な声の女性が現れた。一目でわかる、天道あかね役の日高のり子さんだ。グリーンのワンピース（というのだろうか、服の事はよくわからん）がとてもよくお似合いだった。さすがタレントさん、ファッションセンスは抜群だね。続いてゲストの沢木郁也さん、天道早雲役の大林隆介さんといったベテラン勢が到着。早雲だけでなく「パトレイバー」の後藤隊長など、独特の演技で有名な大林隆介さんがあんなに渋くて落ち着いた感じの方だったとは意外だった。そして、黒い皮ジャンに身を包んだカッコイイ男性が足早に入って来た。そう、良牙役の山寺宏一さんである。声を掛けようと席を立つよりも速く、台本を手にした山寺さんはわき目もふらずスタジオの中に消えてしまった。ううっ、なんということを、絶好のチャンスを逃してしまった。まあいい、まだ帰りがある（と思ったのが甘かった。後悔することになるんだ、これが）。

などとバカなことをやっているうちに、時は既に六時半。アレレ、主要キャラクターの声優さんがまだ全然来てないぞ。と思っていたら、大慌てで女らんま役の林原めぐみさんが入って来た。まさに滑り込みセーフといった感じである。この時点で本読みのため、全員スタジオの中に入ってしまう。他の人達はどうしたのだろうと尋ねてみたら、八宝斎役の永井一郎さんは「悪魔くん」のアフレコが押しており、遅れていらっしゃるとのこと。なびき役の高山みなみさん、かすみ役の井上喜久子さんは、残念ながらお休みであった。そして調整室に入れていただいた私は生まれて初めてアフレコというものを目のあたりにするのである…。

（以下、パート2に続く）

私、七十になっても『今度は何をしようかしら、私は何になるのかしら』って楽しんでると思うのですョ…。

Ray Sakuma 佐久間レイ

——今日は何の御仕事だったんでしょう。

佐久間レイ　『それいけアンパンマン』です。アンパンマンは、十時集合なんですけれど、みんな来るのが遅いんですよね。十時半ぐらいから録り始めているんですが、大体一時ぐらいには終わって食事してますね。

——すると二時間半ぐらい…

佐久間　それは短い方ですね。長いのになると、ビデオとか三十分モノで、六時間七時間なんかザラですよ。

——では、現在のレギュラーはかなりあると思うんですが…、それぞれの番組の録音スタジオの様子などを聞きたいのですが。

佐久間　あのね、最近どのスタジオでも、積立金というのがはやっているんですよ。パーティーとか温泉旅行とかできればいいなって、多いところで千円ぐらい、若い人が集め係になって積み立てているんですよ。

私、「アンパンマン」の集め係なんだけれど、仕事の多い——例えば中尾（隆聖）さんとかにね、「バイキンマン、たまってるよ」（笑）って。そしたら中尾さんすごく悲しそうな顔をしてね、「積立金足してみたんだよ、俺。そうしたら、すごい額になってね。」って。みなさんの知らないところで苦労しているんですよ（笑）。

《「童夢くん」ーアンディとメロディ》

…どのスタジオも個性強いですけれどね。『童夢くん』では、おふざけのいじめがはやってましたね。

『童夢くん』って、メンバーが大勢で、それぞれの選手の役に一人づつついているでしょ。でも、『原』とかついていても、「よお童夢」の一言だったり（笑）。また、よりによって、そういう短いセリフをとちっちゃうんですよね。すると、どこからともなく「来週、原は誰だろう」ってササヤキが（笑）。

それがスタジオの中だけだったのが、裏のスタッフの間にもからんできて、秒数オーバーで欠番カットが出たとき、たまたまいつも同じ人が切られたりするでしょ。そうすると演出の加藤さんが、わざと冷たく「52カット欠番」と言うと、みんなが「評判悪いよ、評判悪いよ。」ってササやくのね（笑）。

私、初めて行った時驚いちゃって、直しの時に「評判悪いよ」とか、「風邪ひいて休んだら次の週から別の人がやってると思って下さい」とか言われたり（笑）。ギャグだとは思わなかったし、結構、わたしマジでとっちゃう方だから、かなり緊張して録ってたら、ナンノそのって…（笑）。

——『童夢くん』では、最初はアンディの英語っぽいセリフとかありましたが。

佐久間　あ、気付きました、やっぱり。それが突然普通の日本語に変わったところに、深～くて浅いワケがあるんです（笑）。

オーディションの時、このキャラクターは男の子と女の子の両面があるけど、基本的に

2 声優インタビュー

1989年10月30日
81プロデュース事務所

は女の子の声でいいですって。ただし、完璧なアメリカ人に聞えるようにってセリフの日本語、英語まざってて、英語の部分も極力アメリカ英語に聞えて欲しいって、それが条件だったの。

私、そういうデタラメっぽいの大好きなんです。ところがギッチョン（笑）。

二、三話目から、メロディちゃんのおじいちゃんとか先生とか、他の外人がでてきたんですよ。それでリハーサルの時に、おかしなことになっちゃって…。榊原さんも一所懸命「ハーイ、メロディ。あなたのlast concert、タイヘンスバラシカッタワ」とか言うと、こっちも「ワタシモ先生ニハ…」とかやるでしょ。どうしてアメリカ人同士がこんなに難しそうな日本語をしゃべらなきゃならないんだろって（笑）、みんな頭かかえちゃって。これにさらに、おじいさまやおかあさまとか入ると思うと…（笑）。

それでみんな、一斉に演出の加藤さんに非難の目がいったんです。「だったら最初から日本語で…」って。でも、「童夢くん」はスケジュールつまってたから、メロディの「ハーイ、童夢」って登場した回、もう放送しちゃってたから、「今さら日本語ペラペラは嘘がありません？」って言ったら、加藤さん、なんて返事したと思います？…「子供は上達が早いから」って（笑）。

――僕は好意的に童夢君と話しているうちに、だんだん日本語がうまくなる、という演出上の解釈かなって。

佐久間　スバラシイ、でも単につじつまあわなかっただけで…

…短かったけどおもしろい作品でしたね。

その直後ですね。変な外人シャンプーちゃん…

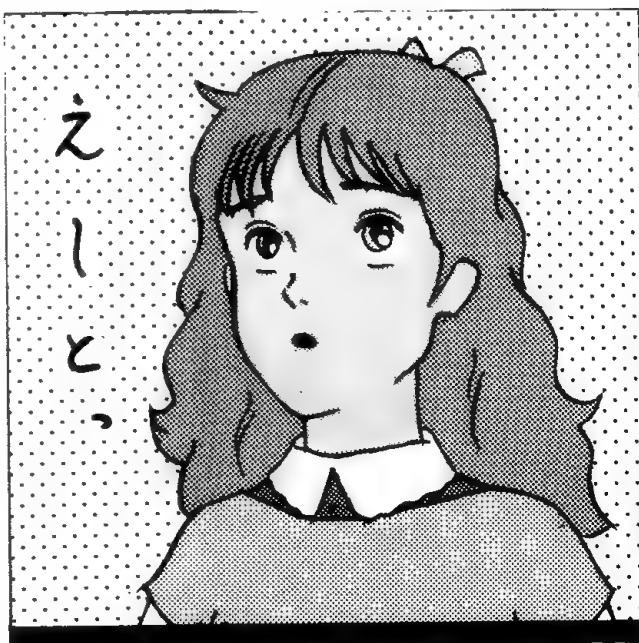
《るい子とシャンプー》

――シャンプーというと、録音監督の斯波重治さんですよね。斯波さんとの仕事は…。

佐久間　声優の成り立ての時に一度二時間ものの特番のオーディションに斯波さんに呼ばれたことがあったんですけれど、みごとにおちました。ー私、オーディションは駄目なん

です。キャラクター表を棒読みしちゃうんですよねー、一番最初は『F』のるい子ですね。
　『F』の時は、純子でオーディション受けているんです。で、純子役をやるサッコさんー玉川紗己子さんがるい子を受けているんですよ。お互い『F』決ったよって聞いた時、逆だったから、二人で「絶対間違いよね」、「どうしてだろうね」って。彼女の方が年上だし、イメージとしてアダルトした声だし。それで斯波さんに「低い声をだせ」といわれて…私、エイミーとか高い子供が多くて、唯一大人っぽい声というと、知る人ぞ知る「日本経済入門」の…
――アン＝マリィテイラー。
佐久間　そう、それもやっぱり変な外人で、そう、今気付いた、変な外人が多い（笑）。…るい子の時は低い声で、としかいわれませんでした。あの子はほとんどしゃべらないでしょ。私は、ワアと声をだすのが好きなんですよね、エイミーみたいに。斯波さんもそれを知ってて、それでもわざとるい子なんですよ。そんな斯波さんの意図が途中でわかってきて、「こういう低い声の冷静な役がきっと今に役立つのかな」って思ったんです。
　で、その次に「アヒルのクワック」でヒトデ役で呼ばれて、それでシャンプーで。シャンプーは中国の女拳闘士っていうから、私あまり話知らなかったし、また低い声の役かなと思っていったら、絵がカワイイでしょ（笑）…意外かもしれないけど、私カワイイキャラってやったことがなかったんですよ。絶対悪役だったり、クセがあったり、という変わったキャラばっかりだったんです。だから、シャンプーはまだ四苦八苦しながらも楽しんでやってます。

《エイミー―『愛の若草物語』について》

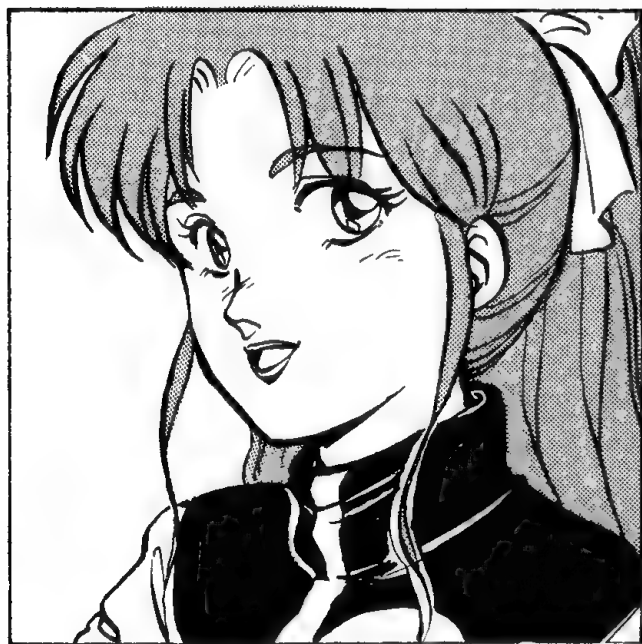
――佐久間さんの場合、幾つも声がだせますよね。有名なのはエイミーのあの鼻にかかった声ですが。
佐久間　あれ、どうしてみんな鼻づまりって言うのかしら。あれは鼻に抜いているんです。
　あの、子役のカワイイ声ってあるでしょ。でも、私のまわりにいる小さい子って全然カワイイ声じゃないんですよ。鼻つまってたり、ガラガラ声でとかで…。それには私、前から興味あったの、やってみたいなって。それで「ゲディズバーグ…」とか（笑）いう感じでやっちゃったのね、オーディションのとき。
　丁度その頃「ポリアンナ」でサディをやってましたから、次の週に行った時、山田（録音監督）さんがすり寄ってきて、「この間具合悪かった？」って（笑）。それで、今度は二回目のオーディションー四人づつ組んでのーに呼んでくれたのね。
　悩んだんですよね。ここで残してくれたってことは、ちょっとは気にしてくれているのでは…、と。ここでカワイイ声でやればいいのかなって思ったけれど、やっぱり頑固者な

んですよね。あの絵を見た時に、やっぱりカワイイ声で「アタシ、エイミーよ」とは言わないと思ったの。
　で、山田栄子さんと絡んでしゃべるところで「エイミー、～でしょ！」「だってしょうがないじゃない」。そうしたら、スタッフで賛否両論がでて、ベスの荘真由美ちゃんが線の細い声だったから－真由美ちゃんとは最近仲がいいんですけれど－バランスをとるのにいいだろうってことになったんです。
　で、スタートはしたんだけれど、子供からの投書で「エイミーは風邪をひいているんですか？」（笑）。それは、作る側としては面白い反応なんですね。で、他に、深夜番組でからかわれたり、スポンサーのハウス食品の方から注文がついたり、いろいろあったみたいですけれど、結局ものすごくいいスタッフに恵まれたこともあって自分の作ったイメージで最後までやれたんですね。「好きにやってみろ…」って、まかせてもらったのです。
　それで、作品の終わった後の投書の中に、大学生かＯＬぐらいの女の子から、こういう手紙が来たんです。彼女は、若草物語が大好きで－女の子にとって、若草物語ってある種のバイブルにしていることがあるんです。それで、アニメ化されて、イメージが違うとか思ってたらしいのね。でも「大好きな作品だったけど、エイミーの傲慢さやわがままさが大嫌いで、この娘さえいなければいいのにというくらい嫌いだった」と。でも「アニメの若草物語を見た後にエイミーが好きになりました」って。つまりワガママの中にある彼女の弱さ、一番生意気なのに一番弱いんです。一番強いのはベスですけれど、そういうのが見えたって言うんです。
　その手紙を演出の人が読ませてくれて、一人でも、小説で大嫌いなところがあった人が、このアニメを見て変わるっていうのはスゴイなって、すごく嬉しかったですね。そう言う時って、やっぱりやっててよかったと思います。自分のやっている役をとても愛していますからねー。分身のように。

《仕事のやりがい
『アンパンマン』と『トップをねらえ』》

——しかし、声優さんのギャラはあまりよくないとは聞いていますが。
佐久間　そう、今日『アンパンマン』で面白い話があったの。今日、ゲストで井上和彦さんがいらしてたの、カツオブシマンという役で（笑）。そのカツオブシマンが「いやあ、アンパンマンすごい人気だね」って。ほんと、巷ですごい人気なんですよ。でも戸田（恵子）さんが、独りでコーヒーポコポコ入れながら「もうかんないけどねェ～」（笑）。
　でももし一方でこのつまらない仕事に百万円だします、一方で素晴らしい仕事に十円しか出せないんです、と言われた時、私は多分十円の方をとる人が多いと思うんですよ、本質的にね。「これを観て、観た人が決していいものを感じないはずだ」っていうもの、そういうのはやはりやりたくないですよね。
　だから、アンパンマンが好きなのは、ブームにならなくても、何かほのぼのとしたり、観てる子供の喜んでる姿がうれしかったり、そうするとみんなも「アンパンマンやって家建たないわよね」っていいながらも楽しいんですよ。そりゃ、慈善事業じゃないから、お給料ももらわないと困るけれど…。
——精神的な充足みたいな…
佐久間　やっぱり、いい作品作りたいってみんなの雰囲気がある時は楽しいし…。
　『トップをねらえ！』ってＧＡＩＮＡＸ？。はっきし言って売れたからいいですけれど、

あれもスタッフが自腹バサバサ切ってたみたいで、最初は。いいもの作りたい！けどお金がたりない！じゃ、自分が出す！ってね。それがスタジオにも伝わってくるんですよ。あー一所懸命なんだな…作品に愛情もってやってるんだな…って。こっちも責任かんじる。
　また、のん子（日高のり子）さん、私、この時はじめて一緒に仕事したんですけれど、彼女もノリコの役でふりきりたいっていうのもあったんですよ。『タッチ』のみなみ役のイメージが周りで強くて、で彼女は「私はみなみちゃんじゃないもん」ってみたいのがあって、ぶつかるものがやりたかったみたい。それで、叫ぶシーンが多かったでしょ、「稲妻キック」だの…あれが想像を絶するほど喉を痛めるんです。そう、側で聞いた方が迫力のあるくらいの音出すから、物語の途中でやってると、次もう声がでないくらいなんです。それで、タメ録りで最後の二人残されて、私はせいぜい二つ三つなんですけれど、彼女は十個も二十個も叫ぶんですよ。明日も仕事があるのに、叫ぶのね。あれは心打たれましたね。

――それは見てる方でも感じますよ。

佐久間　彼女も録ってるほうも妥協しませんでしたしね。
　だから、一本目を出したら売れたって聞いた時、普通だったら「フーン」って感じなんですけれど、ところが妙に嬉しかったりして、「ガンバッタもんねー」とか。

　みんなすごい情熱で作っているし、私もそれにひっぱられていくの「いいなあ」と思ったの。悪ノリと違う、すごいイイノリ。
…この〝お姉さま〟も、私もこの会社とはおつきあいがなかったから、「なんで私がカズミなの？」って、岡田（斗司夫）社長に聞いてみたんです。そしたら「フフフ、3チャンネルの『ピックンとアップン』をみたんだよ」（笑）。
　私はこの時「るい子さんを見た」とか「洋画を見た」とか言う答えを期待していたんですよ。だから「〝ハーイ、元気ィ？〟のお姉さんですか？　あれとアマノカズミとなんでくっつくんですか」って聞いたんです。すると「うーん、誰にしようかなあって悩んだわけよ。普通こういうキャラは川村万梨阿さんなんだけれど、今回はユングやって欲しかった。で、既製の声優さんのカセットとか、TVとかラジオとか片端から聞いていって、ほとんど捨身の感じで3チャンネルを見て〝これだ〟って」とおっしゃるの。「やはり、声質っていうか。わかるんですよ、このキャラにはこの人だっていうのが」って。
　だから、この世の中何がどうつながるかわかんないですよ。だって、まさか『ピックンとアップン』やってて、あんな〝お姉さま〟役がくるとは思わなかったですからね。

――岡田さんって、おもしろい人ですね。

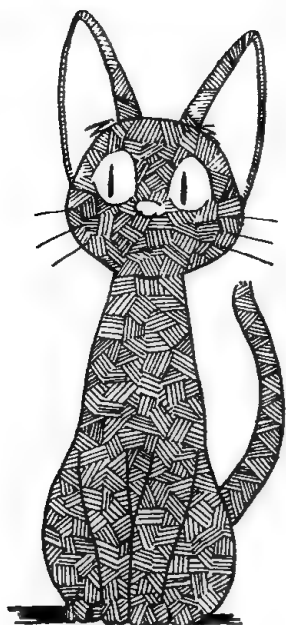
佐久間　あの少年のような情熱いつまでも持ってて欲しいですね。彼は相変らず「アマノカズミ」って名前に「うーん、わが女房よ」って（笑）やるんです。でも何とも言えない可愛らしさというか、あるでしょ？
　今、そんなに何かにこだわるより、みんな冷めた方が楽だから「馬鹿みたい」の一言ですますでしょ。それってすごくイヤだなって最近思うんです。何かに燃えている、少年みたいな人っていいと思う。

《魔女の宅急便－浅梨さんと宮崎さん》

――では、『魔女の宅急便』は、あれはどういう経緯で…

佐久間　最初おソノさんうけたんです。

――そうなんですか？

声優インタビュー

佐久間　私、呼んでくれた役では受からないの。で、おソノさんで受けに行ったら大勢いて、高山みなみちゃんとか他の若い子はジジやウルスラやキキで受けてるでしょ。おソノさんは私の他はもうちょっと先輩の方がいらしていて、「おソノさんはやっぱり無理じゃないですか」って演出の浅梨（なお子）さんに言ったんです。で、やっぱりできないんです。自分で違うっておもっているから。

　で、他の人もいっぱい受けているから、浅梨さんに言って、ジジをやったんです。それまで結構、他の人のやってるの聞えるからね、「ああやってカワイクやればいいんだな」って、それでやってみたの。そしたら「あのさあ、佐久間さんて…、変じゃん」（笑）。こういう感じの人なんですよ、浅梨さんって。

　それで、浅梨さんは「このネコも変なの、だからそのままやって」って。「カワイくなくていいから、だけどこのネコは変な奴でいいの」って。私、「何かよくわからないよ～」って言ったら、「それ（その言い方）でいいの」って（笑）。

　結局。緊張して作った声のパターンと、もう一つ捨身で録ったパターンと二回録ってもらったら、後の方で受かったらしくて、当日浅梨さんが「変な方でやって」って（笑）。

　でも、本番では今までにないダメ出し、要するに注意ですよ。普通のダメ出しっていうのは、「じゃ」を足すとか「私は」を切るとか、尺数に合せる程度のことや、「あんまり怒らないで」とかそういう気持ちの問題ぐらいなんですよ。

　ところが浅梨さん、言葉で説明できない根本的なことを言ってくるんです。時にきついの、トコトコッてきて「全然違う！」って。それはもう、元々不安でやってるものに対して釘でガンガン打たれるような…。それをいとも簡単に「違う！」「猫じゃん、猫だから猫っぽいわけよ」（笑）。

「ジジは、キキをとても慕っているけれど、所詮は、自分は猫、キキはキキなの。キキにとっての問題は、自分にとっても生活かかっているから大問題だけど、でもやっぱり猫なの」で、「なる程」と思ってやってみると今度は「冷たい！」。その次は「感情が入りすぎ！」って。「クールで人情もろくて」とかいろいろ言うの。そしたら、斯波さんが「猫は声量がないと思います」（笑）。

　劇場で聞くとわかるけれど、ジジって音量が低いですよね、他のキャラに比べて。体の比率からいってジジが一所懸命しゃべっても音量が違う、というのが狙いだったらしいですけれど…。そういう風にさんざんいわれた挙句、浅梨さんいわく、「言うが易しよね」（笑）。あれもいい経験だった。最近結構動物とか多いですよね。

――ジジは最後の方セリフがなくなってしまいますね。

佐久間　シャンプーは、猫のところもやってますけれどね。やろうと思えば、私は別名動物タレントですから、『ヘンペエ』ではにわとりとか鳥とか、動物みんなやってるんですけれど…。

――ジジは違うんですか。

佐久間　あれは本当の猫だって。「猫になったら本当の猫になってほしい」って宮崎（駿）さんの主旨だって。

　でも本当、宮崎さんはすごいなって。全然口をだしませんでしたよ。

――何か、そんな感じしませんですけど。

佐久間　言いそうでしょ。でも言わない。それくらい太っ腹なんですよね。それと、そこまで自分の作ってきたものへの自信と、任せた人への信頼…。やはり、監督が後ろからいろいろ言うと、スタジオも険悪な雰囲気にな

っちゃうんですよね。その点、あの方はすばらしいと思った、何も言わなくて。もちろん放っておくわけじゃなくて、絶対駄目なら絶対ＯＫっていわないから二十回以上やったシーンもあるんじゃないかな。

《アイドルとしてのデビュー》

――話は変わりますが、デビューはいわゆるアイドルとしてでしたよね。

佐久間　あれはね…。あの頃って全盛期でしょフリフリの。苦労しましたよ、私ものん子さんも。本当に強くなけりゃ、アイドルさんはやれないのよ。私も精神的にまいって入院しちゃったし、「レッツゴーヤング」なんて点滴打ちながらやってた。今、思えば楽しかったけどね。

だって、十六・十七の女の子を一日中鏡の部屋に閉じこめてごらんなさいよ、おかしくなりますよ。それと、やはり周りは大人の、すごっく汚い世界ですから！そのころの私のとんがった感受性にはそう見えたの。私は潔癖症というか、大人の世界とかみあわなかったんです。もちろん、いい人、ずば抜けた人もいるでしょうけど、でも、新人だからレオタードで取材とか、いいもしないことを書かれたり、とか、プライベートなこと平気で聞いてきたりとか、そういうの許せなかったの。

でもね、ズタズタに傷ついちゃう子も本当に多いのね。岡田有希子ちゃんの自殺、あれって恋愛とかだけじゃないですよ、ふつうの精神状態じゃなくなっていたんだと思うの。心がつかれきって、ボロボロ…。

十五、六才ぐらいの女の子がね、ＴＶや雑誌のオーディションに受かって、スター扱いされて、本人も洗脳されちゃって…。すると、世界がドンドン狭くなるのね。服のこととか、顔のこととかしか話題がなくなっていくの。人の反応とかにビクビクして。でも世の中で、チヤホヤされるの半年ぐらいでしょ。すると「売れなくなってきた、今更やめられない、どうしよう」って。挙句の果てには、同じレコード会社からデビューした他の子の陰口をたたいたり…。ホント、そうなっちゃうんですよ。そうすることでしか自分を守れなくなったり。そういうことに、矛盾を感じてくるでしょ。自分がイヤになったり…私、何をしているのかしら…って。

前向きな考えができなくなるとね、全てがおかしくなるのよ。本当は楽しい青春の真ん中にいるのに、そしてステキな人もいるのに、見えなくなるの。

この世の中、とくにアイドルの世界って、一所懸命やることイコール応援されるわけでもない。挙句の果て、あらぬ疑いで卵ぶつけられたり…なんでこんな目に会わなけりゃならないんだろって。

――それが何故、アイドルでデビューを…

佐久間　ホント！だから人生おもしろいよねー、私、松田聖子も知らなかったんだから。

もともと私は芝居、というか…ずっとバレエをやってたんですけれど、自分で「演じる」ことが好きなんです。「ごっこ」が好きなのね。「ごっこ」がこうじて仕事になってるだけで。だから、初めてすぐ自分のやりたいことはこれじゃない、ってわかったの。

それで、入院とかもあって、徳間ジャパンのアニメＧＰとかでつきあいのあった８１プロデュースにやってきたんです。

この仕事だとね、一所懸命やったことが報いられることがあるのね。別にすばらしい、と言われることじゃなくて、やった通りのことがそのまま声になって出る、それをたまま見た人が喜んでくれる、それだけで手応えを感じられるのね。それはアニメでも洋画で

もナレーションでも同じなんですよ。

――日高のり子さんも同じようなコメントをー この業界はすごく居心地がいいとー。

佐久間　そう、お互いそういう話を始めると「やっぱり」ということになるの。でも、居心地のいい所をつくるまでは、彼女なりに苦労してるんですよ。

私の場合、８１にはベテランの人が多いから、私のことを「新人の女の子」ということで大切にしてくれたの、アドバイスしてもらったり。ところがのん子さんは幸か不幸か最初から『タッチ』で名前が売れちゃったでしょ。でも彼女は事務所に声優の先輩がいないから一人でやらなくちゃならない。本当に頑張り屋さん。

でも、彼女も私も結構、地味なのよ。

――そうなんですか。

佐久間　ほら、信じてない。（笑）

――日高さんはそうは見えないですけれど。

佐久間　そう？すごく恥かしがり屋だし、大人しいの。でも、楽しくしてあげようという気持ちがすごくあるから、一所懸命明るくするし。だから、すごく好きだし、偉いと思う。今、一番仲よく何でも話せる人ですね。

《声優デビューと『ごっこ』》

――佐久間さんの声優としてのお仕事のはじめというのは？

佐久間　『パトカーアダム３０』ですね。洋画はアニメと違って絵があるからいいんですよ。オーディションでも、紙だけだとだめなんだけれど、顔見せられるとできるんですよ。それで、全然緊張しないで、読んだんですよ。

ヘザー＝ロックリアの声をアテたんですけど、彼女自身が『アダム３０』のとき、緊張して撮ってるんですよ。そのカチカチの感じが、私の緊張しているのと合うってことで、決ったということらしいです。

――アニメーションの最初は、『ラブポジション』ですが…。

佐久間　シリーズは『ボタンノーズ』ですね。

『ボタンノーズ』は好きでしたね。

――声優の仕事を始めるのに抵抗とかは…。

佐久間　むしろ、すごーくやりたかった。

私は台本が好きなんです。何ていったらいいかわからないけれど、その台本がメジャーだとかそういう意味じゃなくて、「台本」が好きなんです。台本が元になった「ごっこ」が好きなの。

小学校の頃「お芝居」とかいってやってたの。友達の家に集って、役決めて、小道具作って…、誰も見てないんですよ！

それがクラス中にはやって、「ベルサイユのバラ」やろうってことになって、で、私オスカルだったんです。その頃、クラシックバレエをやってたんですけど、みんなが「あんたはオスカルだ」って。私はドレスが着たいからロザリーがやりたかったのに。

私ね、年子の兄がいるんで、その頃はＧパンばっかりはいてたし、男みたいな格好して

PROFILE プロフィール

☆本名・佐久間(野田)玲子　S40.1.5生まれ
S58. 2 アイドルとしてデビュー(ＮＨＫレッツゴーヤング、サンデーズ第6期生)
S60.10 TV「夢の星のボタンノーズ」 ピアス
62. 1 TV「愛の若草物語」 エイミー
63. 3 TV「F」 るい子
63.10 OVA「トップをねらえ」 アマノ カズミ
63.10 TV「それいけアンパンマン」 バタ子
H 1. 4 TV「らんま½」 シャンプー
1. 4 TV「ミラクルジャイアンツ・童夢くん」メロディ(アンディ)
1. 7 映「魔女の宅急便」 ジジ
1.10 TV「たいむとらぶるトンデケマン」 シャララ姫
2. 4 TV「楽しいムーミン一家」 ミー
ＴＶ出演「ピックンとアップン」ＮＨＫ教育
ほか多数の作品に出演、マルチボイスプレーヤーとして活動中。水島裕氏の奥さんでもある。81プロデュース所属。

いたから。それで、台本作って来た子がいて、その子を中心に、マントを作ったり、公民館借りて練習したり、とにかく徹底していた。おもしろかったですね、勉強なんかどうでもいいぐらい。一生こうやってあそんでいたいと思ったの。

だから、そういう「ごっこ」が好きなの。役者って「ごっこ」そのものだもんね。

《ＴＶ出演についてーＮＨＫの仕事》

――ＴＶ出演はどうやって。

佐久間　事務所からの連絡です。

――「ピックンとアップン」もそうですか。

佐久間　あれはすごく不思議なことがあって。堀江しのぶちゃんがやることになってたの。あれは生で歌いながら子供たちに説明できなくちゃいけないということで、彼女ピッタリだと思ったの、やわらかい笑顔があるから。ところがスケジュールの問題だかで私が歌のコーナーをやることになったの。

その時彼女に会ったのね。「やせたね。」って言ったら、「うん、やっとね。」とか言ったのが耳に残ってるの。そんな親しくなかったのに、何か渡されたような気がしてならないの…わかる？そういうの。そのすぐ後に彼女倒れたのね。

…何かいろいろなことがあるんですね。

――ＮＨＫではナレーションもやってらっしゃる…。

佐久間　うん…でもＮＨＫのはね、やっぱりレッツゴーヤングのおかげですね。人事移動したスタッフの方とが覚えてくれたりね。やっぱり人生おもしろい。

――特に８１プロデュースはＮＨＫに強いですね。プロダクションによって洋画に強いとかアニメに強いとかがあると…。

佐久間　そうですね。確かに８１プロデュースはＮＨＫに強いですね。でも、強いっていってもあそこは癒着するようなところではないでしょ。うちが実権持っているわけじゃなくて、たまたまＮＨＫの仕事しているタレントが多いからつながりが出来るってみたいですよ。

＊　＊　＊

――仕事のことから離れますが、今主婦をされてますよね。

佐久間　そう、手荒れがひどくて(笑)。

――水島裕さんとお互いに仕事を抱えてらしゃいますよね。

佐久間　まー私は『仕事』と言うよりたのしませてもらってる…と言う気分です。仕事がなくても家でるんるんあそんでる。

でも、男の人は大変よね、家族がドサッと肩にのっているもの…。

――趣味とかになりますと…。

佐久間　盆栽…何か、年寄りくさい(笑)。あと洋服作ったり、クリスタル集めとか、英会話とか、母のやってる三味線とか、インコの世話とか…。絵もかくよ。ピアノも好きだよー!。

――多趣味ですね。

佐久間　私、いろんなことに手を出して、面白がっちゃうんですよ。

占いで何か、私って一つのことに集中すると、第一線までいくんですって。声優なら声優でキャスターならキャスターで、とか。何か一つに絞ればいいんでしょうけど、でもそうしない方がいいでしょう、女性だしって…。

やっぱりいろんなものに興味を持つのが好きですね。きっとね、私70才になっても「今度は何をしようかしら…」、私は何になるのかな」って、たのしんでいると思うのですョ…。

Seiyu

何度かインタビューに参加させて頂いたが、それほど緊張するということはなかった。いつもバカをやっていたという感じだ（編集長ごめんなさい）。ところが、佐久間レイさんのときだけは勝手が違った。もう、とにかく終始ガチガチで、何をやっているんだか自分で分からない。お声を聞いているだけで幸せ、お姿を拝見したら目がつぶれてしまうってなありさまである。今でもそのときのインタビューテープを聞き返すたび、冷汗が出てきてしまう。

特にあれがまずかった。その頃の僕ときたら、寝ても覚めてもメロディ、メロディという、メロディ熱冷めやらぬときである（今だってそうだが）。話がのっけからそちらの方へいったものだから、必要以上に緊張してしまって声も出せない。さらに、佐久間さんは役柄の説明をなさるとき、わざわざその声を演じてくださるのである。いきなりメロディの声をやって頂けたとき、「これは！」と思わず机の下で手をぎゅっと握りしめてしまった。あのときから理性は空のかなたにすっとんでいたに違いない。はっと気がつくと喫茶店で、同行した編集長たち3人と興奮冷めやらぬままに話しており、手にはしっかりと先ほど「アンディより」と恥ずかしげもなく書いて頂いた色紙が残っていたという次第。

×　×　×

恥かきついでに話を続ける。最近ひょんなことから、『童夢くん』のアフレコを見学する機会があった。あの、坂本千夏さんや太田淑子さんにお会いできるというのでホイホイと喜び勇んで出かけたのだが、ひとつ不安なことがあった。何ともう出ないと思っていたメロディがまた出るというのである。つまり、佐久間さんがいらっしゃるというのだ。

まさかとは思うが、僕のことをもし憶えていらっしゃったら…。そう考えると足取りが重くなった。何せ、こんな事態はまったく予想していなかったのだ（そりゃそうだ）。インタビューのとき、もっとしっかりしていれば…後悔先に立たずとはこのことかと臍をかむことしきり。でも、その一方で、憶えていることはあるまいと開きなおってもいたんだけどね。

ところが、である。

「憶えていますとも」

お会いして、初めましてと言おうとした矢先の言葉がこれであった。そのときの僕の気持ちを想像してほしい。まるでドード（という選手がいるんだ。童夢くんに）が打った、ニューレインボースパークボール（という魔球があるのだよ。童夢くんに）のように、気持ちの半分は東京ドームの屋根を突き抜け、天へと昇っていき、残りの半分は地獄へ落ちるかのようにがっちりと捕球され、アウトを宣告されてしまったようだった（という場面があるのだ。分からないやつは、童夢くんを見なかったことをあの世で後悔しなさい）。

そのあとはひたすら謝り続けたというわけ。詳しくはARE＋東大SFA発行の童夢くん本を見て頂戴（なんて宣伝…いいのかいな？）。

×　×　×

とにかく、優しくて、すごくまじめな方なのである。水島裕氏が羨ましい限りなのだ。

（敏）

早丁同のみなさまへ

れい♡

1989. 10. 30

平日・朝九時〜正午のNHK教育・声優銀座ガイド

1 幼稚園・保育所の時間

今年度新番組の目玉「ともだちいっぱい」は、前年度までの「できるかな」「やっぱりヤンチャー」「ピックンとアップン」「プルプルプルン」を一手に吸収し発展させた、週四日編成の番組である。

特徴としては、①遊び的要素の前面的な押しだし、②教育現場における、学年・クラスを超えた体験共有の見地から、番組内共通のキャラクター（モンタ・ソラミ・ゴロリ・ヒヨロリ）を毎回登場させる、③②との関連で、番組を共通キャラの出る前半（約六分）、本題たる後半の二つに分けたこと、が挙げられる。出演担当区分は別表1に掲げた通り。潮おねえさんは金・土曜日、といった要領である。なお、水島裕・田中真弓・林原めぐみ・鈴木清信は前年度「ヤンチャー」からの残留組。それにしても津久井教生はやっぱりいいねえ。

新番組「英語であそぼ」には、アニメ『たんけんゴブリン島』がお目見栄。これを見終えてからNHK総合にチャンネルを回すと、「へんべえ」が見れる、てな具合。

また、残留組のなかでは、沖浩一のモダンな音楽がうれしい「ピコピコポン」（大塚周夫演ずる狂気の科学者ガルガリにネーミングの妙を感じる）、井出隆夫・越部信義が放つ長寿コーナー「にこにこぷん」が、絶妙のチームワークで新参組と互角にわたりあっている。再放送が多いのはしかたないよね。

表１「ともだちいっぱい」出演リスト

	導入	スキット	本編
つくってあそぼ	水島	モンタ 田中真弓	ワクワクさん 久保田雅人 水 ゴロリ （翌月、火）
なかよくあそぼ	裕	ソラミ 林原めぐみ	ゆう兄ちゃん 水島 裕 木 ヤンチャー 鈴木清信 （翌火、水） ギャースカ 田中真弓 モンタ、ソラミ
しぜんとあそぼ	橋本	ゴロリ 仲村秀利	金 潮おねえさん 橋本 潮 （翌水、木）
うたってあそぼ	潮	ヒヨロリ 津久井教生	ヒヨロリ 土 （翌木、金）

表2 幼稚園・保育所の時間

番組	出演	放送時間
[ともだちいっぱい] 10：30〜10：45 再 9：15〜 9：30、16：00〜16：15		
[ピコピコポン]	杉山佳寿子・小林優子 大塚周夫・西尾 徳	火 10：30〜10：45 翌月 9：15〜 9：30
[こども人形劇場] [にんぎょうげき] 再 [おとぎのへや] 再	1話完結の為 レギュラーなし	月 10：30〜10：15他 月〜木16：15〜16：30 金 16：15〜16：30
[たんけん ゴブリン島]	アーク 松島みのり ビューティ 荒木香恵 キャビー 頓宮恭子 チャビー 高野 麗 ピンキー 藩 恵子	月〜金 17：40〜17：55
[にこにこぷん]	じゃじゃまる 肝付兼太 ぴっころ 横沢啓子 ぽろり 中尾隆聖 かしの木おじさん 高木 均	月〜土 9：30〜 9：36 〃 17：00〜17：06

2 小学校理科教室

平成四年度からの「生活科」課程スタートをふまえ、「教室」色を排除。全学年にわたってやわらかい番組名が付くようになり、先生役の理科のおじさんはお役目御免。「実験」から「体験」へ、の路線変更は、ドキュメンタリー性強調の小六理科「はてな・サイエンス」が象徴的に示している。

出演者も、完全残留の一年・二年を除けば大きく入れ替わったといえよう。番組の全体的な刷新とあいまって、週三回白石冬美・松尾佳子を聞けたあの頃が急に遠のいたような……。

表3　小学校理科教室

学年・番組	出演	曜日
1年 なんなん なあに	のっくちゃん　山田信子 やったくん　向殿あさみ めるちゃん　深雪さなえ	月 木
2年 はてな はてな	彦兄さん　根本泰彦 グラ　鈴木みえ ポトリ　西原久美子	水 金
3年 しぜん だいすき	あや姉さん　竹田彩子 大ちゃん　山田栄子	水 金 土
4年 はてなを さがそう	カズさん　安藤一人 マッキー　松島みのり	月 木 金
5年 はてなに タックル	森井佳江 中野聖子	火 水 土
6年 はてな サイエンス	西川　潤 渕崎有里子	月 火

3　小学低学年向け国語・道徳

国語は「心を豊かにする」名作鑑賞に力点を置くかたちで「こども人形劇場」を新設。超シブ（四月放送分だけで松島みのり・堂家貴子・花形恵子・中村正・喜多道枝など）と若手（『やまたのおろち』に矢尾一樹）の二路線があるようで、要注意。「おとぎのへや」は、実質的に終了したが、再放送で一応存続。そのアオリをくって「ことばのくに」（ああ感動の最終回！）、は切り捨てられた。その分、「あいうえお」に大きな期待がかかるところ。実際、出演・人形操作だけで11人という編成は相当のボリュームである。

道徳は、児童の成長過程にきめ細かくあわせるため、従来の一・二年向け「じゃんけんぽん」を二年オンリーに。一年には新番組「のびのびノンちゃん」が登場。五月蝿な役どころの続くペリーヌの夢は再び成るのだろうか。

4　その他の低学年向け

算数・社会・音楽ともに大きな変化はないが、「ノンタック」のおばあちゃん交替はやはりショック。「はたらくひとたち」、ケーキ好きの人語犬フムフムの三輪と、飼い犬に似てしまったケンちゃんの川島は息が長い。表にはないが、大和田りつこが「ワンツーどん」にどんぐん役で出演。小三音楽「ふえはうたう」の関俊彦、小四音楽「ゆかいなコンサート」の山野さと子も。

表4　小学校低学年向け番組

国語科対応	［あいうえお］ もんじゃ船長　緒方賢一 クークー　柴田由美子 タコ八郎えもん　川久保　潔 三人組　塩野幹聰 和田勝代 山口勝平	
国語科対応	［ことばの教室1年生］ ミッキー先生　白坂道子 チュー吉　山本百合子	［ことばの教室2年生］ 里見京子・斉藤　隆
算数科	［いちにの算数］ さんた　安永沙都子 モック　富永みーな ガンマー　関根信昭	［さんすうすいすい］ マチ姉さん　池上真知 パック　高田由美 ジャック　津久井教生
社会科	［それいけノンタック］ ノンタック　菅谷政子 おばあちゃん　島田果枝 物の精　三田ゆう子	［はたらくひとたち］ ケンちゃん　川島千代子 フムフム　三輪勝恵 おじさん　八奈見乗児
道徳	［のびのびノンちゃん］ ノンちゃん　鶴ひろみ たぬくん　野沢雅子 うりちゃん　島津冴子 あなちゃん　高山みなみ 川久保　潔・吉田理保子 横田みはる・滝沢ロコ	［あつめれ！じゃんけんぽん］ ケン　松岡洋子 ララ　池本小百合 ミーコ　本多知恵子 アビー先生　島本須美 コロ　渕崎有里子 サブ　堀　絢子 白坂道子・兼子由利子 塩屋浩三・辻谷耕史
	［いってみよう　やってみよう］ ポッケ　ごみみえこ	［たのしいきょうしつ］ モジャくん　みついようこ ももちゃん　なかもりこうこ たぬきくん　さとうしん

山口勝平 Yamaguchi Kappei

僕は野沢雅子さんが好きだったんですよ。それで『ガンバの冒険』を見て、声の吹替えっていうのが面白そうな仕事だと思ったんです。

1989/10/31『新宿カトレア』

～まず、簡単なプロフィールをお聞きしたいんですが。出身は九州でしたよね？

山口／そうです福岡なんです。博多山笠で有名な福岡市博多区、俗に言う博多っ子っていうのですね。

～東京にはいつ？

山口／高校卒業した後です。東京アナウンス学院に入ったんですよ。

～どういうきっかけで？

山口／動機というか、目覚めたのは小学校三年生の頃なんですよ。僕は野沢雅子さんが好きだったんですよ。それで『ガンバの冒険』を見て、声の吹き替えっていうのがおもしろそうな仕事だと思ったんです。それで、中学校、高校の間は全然演劇とかやっていなかったんですが、そういう方向に進みたいたいと思ってはいたんですよ。それで高校三年の時に、リクルートの専門学校案内みたいなのを見たんですが、放送関係というのは、丹波道場と東京アナウンス学院しか載ってなかったんですよ。それで、丹波道場の写真を見たら竹刀持った人が写っていたんで、こういうのは嫌だなと思ってね。

～それで「アナ学」に入ったんですね。

山口／そうですね。それで、しばらくの間は新聞奨学生をしながら「アナ学」に通っていたんですけど、ある時、新聞の折り込みで声優養成所の広告を見たんですよ。そしたら、講師がなんと野沢雅子さんではないですか！もう、すぐにそこを受けて入ったんですよ。

声優インタビュー

～今の劇団にはどうして？

山口／その養成所で話を聞いていているうちに、きちんと芝居をやっとかないといけないと思って、そこの講師をしてらした肝付さんに相談したんですよ。そしたら、肝さんに「ちょうど、若い人集めて劇団つくったところだからおいで」って言われたんです。それが、十九の時です。

～それからは舞台の方をずっと。

山口／そうですね。劇団に入って芝居やっているうちに、舞台の方が面白くなって。「よし、俺は舞台に生きるぞ」みたいに思ってね。単純なんですよ、僕は。

～舞台から声の仕事に入ろうと思ったきっかけというのは？

山口／それがないんですよ。たまたま舞台を録音監督の浅梨さんが観に来ていて、それで『ドメルとロン』に呼んでいただいたんです。だからほんとにラッキィなんですよ。それ以外には何もないんです。だから長続きしないでしょう、きっと、うん。

《録音スタジオの様子》

～録音スタジオの様子などをお聞きしたいんですが？

山口／そうですね……今は、絵の方が追いついていないんですね。まだ線画が入っている時はいいんですけどね、ひどい時になると絵が無かったり、絵コンテ映したりですね。まだ絵コンテに表情が描いてあればいいんですけど、丸書いて十字ですましてたら、どんな顔してるのかな？とか…

～アニメの濫造の影響みたいなものが？

山口／あるんじゃないでしょうか。だから、たまに『ジャングル大帝』を観ると、自分が出てたから言うわけじゃないですけど、ああいうのはいいですね。ああいうのをもっとつくっていかなきゃいけないんじゃないかな。

～『ジャングル大帝』は絵があるんですか？

山口／僕がやってた時はありましたね。絵が出来上がってから録りますみたいな感じでやってましたからね。そういう点で言うと『らんま』も前のシリーズは絵が全部出来てましたね。熱闘編になってからは98％絵がない。丸にセリフが書いてある、俗に「まるセマーク」とか呼ばれているのが出て、その間にしゃべるんです。だからたまに絵があったりすると驚いちゃうんです。

～それ位に絵のない作品が増えたってことですね。

山口／だから困るんですよ。熱闘編になって闘うシーンが増えた割には、闘ってるところの絵がないんですよ。アクションシーンなんか演技のしようがないですからね。

～どんな格好してるかわからないと大変でしょうね。

山口／だから、闘ってる間はしゃべらないとかね。だって、適当に入れてみると、全然違うんだもん。

～役作りなんかはどうやっているんですか？

山口／役作りと言うか、演技なんかはその場のフィーリングというか、絵を見た感じで考えるんですけど、さっきも言ったように絵がないですからね……。

～台本にはどういう表情とかないんですか

山口／詳しくは書いてないですね。

～そういうのは、やっぱり自分で考えてやるんですか？

山口／そうですね…でも、あんまり考えすぎて、何回も失敗しましたから、もう考えるのやめたんです。

～録音監督からの注意は？

山口／それはもちろんありますね。だから、声優さんは制作サイドだと、録音監督さんと

の関係が一番密なんですね。

〜なるほど。『らんま1／2』でいえば斯波重治さんですね。

山口／はい、もう斯波さんは厳しい方ですから、もう怒られてばっかりですよ。

〜どういう時に怒られるんですか？

山口／僕が悪い時ですね。もう最近は怒られなくなったんですけど、『らんま』の18話だったかな？「格闘スケート」の回で、「あかねはオレのいいなづけだ」っていう部分があったんですよ。それで、「手ぇ出したらぶっころすぞ」っていうセリフの「ぶっ」っていうのがマイクを吹いちゃうんですよ。リハーサルの時に注意されたんだけど、二回目の時もまた吹いちゃって注意されたんです。それで、本番の時に吹かないように、マイクに向かないようにセリフを言おうとしたら、喉がうなっちゃったんですよ。そしたら、そこで止められて烈火の如く怒られてしまいましたね。「そんな基本的なことできなくてどうするんだ。もう何本やってると思ってるんだ」って、本当に恐かったですよ。思わず泣きそうになっちゃいましたね。

〜『魔女の宅急便』の音響監督の浅梨さんは斯波さんとはまた違った感じの方なんでしょうね？

山口／そうですね……。すごくパキパキしてる人ですね。僕はどちらかと言うと斯波さんじゃなく、浅梨さんに拾われたというのがありますからね。この世界で一番最初に知ったのは浅梨さんですから、そういう意味で言えば、すごくやりやすかったですね。やっぱり、何だかんだ言いながら斯波さんと浅梨さんが一番やりやすいですね。

〜どういう感じで注意を？

山口／そうですね、やっぱり、ただダメだって言うんじゃなくて、斯波さんにしても、浅梨さんにしても自分のイメージをきちんと相手に伝えるんですね。頭ごなしにどうのこうのじゃないですね。自分のイメージを伝えて、それでもって役者が何をどうやってるのかという部分で照らし合わせてやってるみたいですけどね。だから、そういう意味ではすごくやりやすいんですが、ただ、御二方とも妥協はしませんから、結構大変ですね。そう言えば、斯波さんで思い出したんですけど『らんま』で二回目に呼ばれた時に、斯波さんが『あひるのクワック』のオーディションをしてたんです。それで、『クワック』が終わってから『らんま』をやることになってたから、ずっと待ってたんですよ。そしたら斯波さんが台本持ってきて「ちょっと山口くん、このクワックっていうのやってみて。これ五歳のアヒルだからね」とか言いながら上にあがっちゃって、あれは完全にスタッフの息抜きにやらされたんですね。でも、こっちにしては必死ですからね。一生懸命声作ってやりましたよ。やった後に「大変楽しめました。じゃ、向こうで待っててください」ですからね。なんだったんでしょうね、一体あれは。

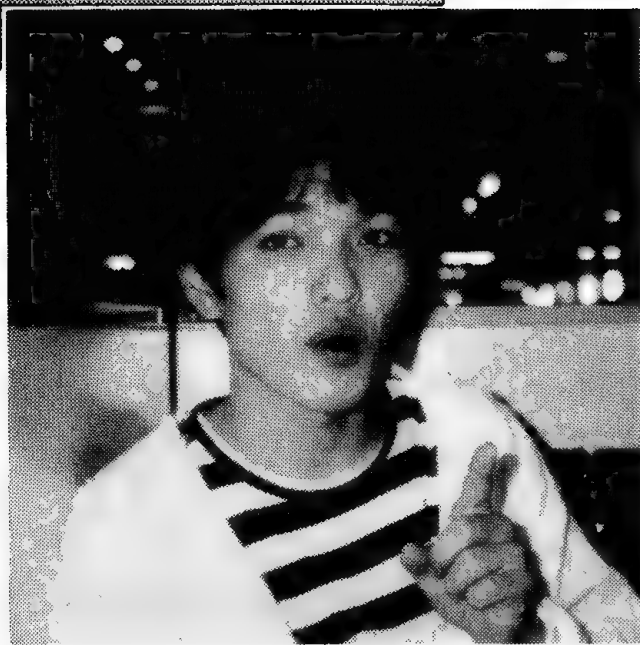
〜せっかくやったのに？

山口／でも、その後で『クワック』には別の役で呼んでくれましたけどね。結構かわいいキャラクターで、台本見たら王子様の役だったんですよ。「ラッキィ、王子様だ」と思ってずっと読んでると、イモ虫の王子様なんです……。悲しいものがありました。でも『クワック』はまたやりたいですね。

《魔女の宅急便》

〜『魔女の宅急便』についてお聞きしたいんですが？

山口／昨日『魔女の宅急便』のヒット記念パーティーみたいなものがあって出席したら、

声優インタビュー

来てる人が知らない人ばかりだったんですよ。や○ざの襲名式みたいに黒いスーツ着て、徳間書店とか、ヤマト運輸の人とか、日テレとか、全然僕たちに関係ないような人達ばかりで、本当は来るはずだった佐久間レイさんも来てくれなくて、僕とみなみさんだけで隅の方で小さくなって怯えてたんですよ。

～実は昨日、佐久間さんにインタビュウをしていたんですが、夕方から新宿で仕事があると言われてましたよ。

山口／そうだったのか。みなみさんと「レイさんは裏切り者だ」とか言ってたんですよ。もう、今度会ったら文句言うしかないですよ。

＊　＊

山口／『宅急便』は十二月頃にオーディションがあったんです。

～随分前にオーディションがあったんですね。それで、勝平さんが演られた「トンボ」の役については？

山口／「トンボ」はけっこう苦労したんです。つかみどころがないんですよ。

～と言いますと？

山口／いい子っていうのは、ある程度の指向性みたいなものがあるものなんですが、あの「トンボ」という男の子の場合、何を考えているのかわからないところがあるんですよ。一生懸命話してるとマジメなかんじになっちゃって、「トンボ」の軽い部分が出なくなっちゃうし、ただ軽く演っちゃうと、本当にただのバカみたいですからね。やっぱり合ってなかったんじゃないでしょうか。

～そんなことはないですよ。でも、最初は山口さんの声だとは判りませんでした。

山口／そうですね、皆さん「らんま」の声のイメージが強いですから、判らなかった人が多いみたいですね。普通二十四歳の男であのてのキャラクターはやりませんよね。だからみんなに「おまえは何者なんだ!?」って言われるんですよ。だいたいああいうのって女の人がやっちゃいますよね。

～こうして話してる声は「らんま」が一番近いようですが。

山口／そうですね、落としてしゃべってるとそうかもしれませんね。でも、本当は「らんま」をやったおかげで低い声がでるようになったんですよ。だから、『魔女の宅急便』を録る時に浅梨さんが一番気にしてたのは、ずっと「らんま」をやってたことで、芝居がくずれちゃってないかっていうことと、高いトーンの声が出なくなっちゃってるんじゃないかっていうことだったみたいなんです。それで浅梨さんから劇団に電話がかかってきたんです。電話に出た時の僕の声は高いんですよ。別に意識しているわけじゃないですけど、他所行きの声になっちゃうんですよ。

～そう言えば、お電話でお話した時は女の子みたいな声でしたよね。

山口／大体みんな女の子と間違えちゃうんですよね。だから、「はい、お電話かわりました」って言ったら、浅梨さん「あの、山口さ

んをお願いしたいんですけど」って。こっちが「あっ、勝平です」って言ったら、「その声でやってくださいよ、もう」って…。

～浅梨さんにはどういう注意を受けたんですか？

山口／浅梨さんというか、宮崎さんの作品の作り方っていうのは洋画のつくり方なんですよ。だから、アニメ台詞っていうのは一切やらないで欲しいというような感じのことを注意されましたね。それと、『トトロ』では糸井重里さんなんかを使っていたように、声が合ってるとか合ってないじゃなくて、本当に言っていることが伝わるような人を使いたいっていうのがあるみたいなんですよね。

～自然に近い感じですね。

山口／そうですね、けっこう難しいんですよ。何が難しいって、「自然にやって下さい」って言われるのが一番難しいんですよ。

～そうでしょうね。

山口／ましてやトンボの場合なんか、浅梨さんに「ホントにこの子は明るい子だから、山口くんの中に暗い部分があったらトンボはできないよ」とまで言われちゃいましたからね。僕は本当は根が暗いんですよ。だから、劇場に自分で行って観るまでは安心できませんでした。もしかしたら違う人がやってるんじゃないかってね。一回決定した人でもおろしちゃうとか、そういう点ではシビアですよ。

《らんま1／2》

～『らんま1／2』についてですが、これは、最初から「らんま」の役でオーディションを受けたんですか？

山口／そうです。最初に受けたのが二月の頭だったんですけど、その時は女になっても気にしないで男のまんまでやって下さいみたいな感じだったんですよ。

～ダブルキャストじゃなくて？

山口／そうなんですよ。原作では女らんまの方が比重が高いんですけど、アニメの方は男らんま主体でやるということだったんですよ。それから二週間程してもう一回呼ばれたんですよ。その時は女の部分は女の感じを出してやる様に指示されたんです。それは別に女らしく芝居するとかじゃなくて、声のトーンを変えてやるみたいな感じだったんですけどね。僕は元々そんなに低い声じゃなかったから、男らんまの声の方をつくってたんですよ。それでその時に、僕と高山みなみさんと、鶴ひろみさん、それに田中真弓さんがきてたんですよ。そのメンバーでしたからね、「ダメでもともと」みたいな感じで、開き直って気楽に受けてきたら受かってしまったんですよ。

～後から監督さんにきいた話ですが、男性の中では一番若々しい声だったんで山口さんに決まったということですよ。安易に田中さんにするという案もあったそうですが。

山口／そうでしょうね、だっていまだに「やっぱり田中さんが」とかいう声を聞きますからね。でも、「女らんま」の方は田中さんも自分でやってて気持ち悪くてできないとか言ってましたけどね。とにかく高橋先生の作品はチェックが厳しいでしょう。厳しいんですよ、高橋先生のファンの人って。

～イメージがあわないとか

山口／そういう部分で結構あったみたいですね。結局「らんま」はすごく不本意な形で終わっちゃったみたいな、実際ネット数がかなり減りましたからね。元々前から視聴率はそんなに良くなかったのかなという気はしますけどもね。

～そうでもないと思いますが。

山口／話を聞いたところによると、雑誌とかの毎週観たアニメーションでは『らんま』が一位になってるんだけど、視聴率のところを

声優インタビュー

PROFILE プロフィール

☆本名・山口光雄　S40.5.23生まれ

H 1. 4 TV「らんま½」 早乙女 乱馬

1. 7 劇「魔女の宅急便」 トンボ

1.10 TV「ジャングル大帝」 ケンー

1.10 TV「ダッシュ！四駆郎」 前戸さん

2. 1 TV「ｷｬｯ党忍伝てやんでえ」 ヤッ太郎

TV出演「あいうえお」 教育TV

某音響スタッフいわく「彼の声はとても20代のものとは思えない」。それほどに「少年」らしい演技が光る、人気・実力ともに上昇中の声優。舞台でも活躍中。21世紀FOX所属。

見るとどこにも入ってない。結局視聴率が全ての世界ですからね。視聴率が悪いとカット、おもちゃが売れないとカット。

〜『らんま』のおもちゃというのがあるんですか？

山口／もう出てるんですよ。「おやじパンダ」と「Pちゃん」のぬいぐるみ。「Pちゃん」の方はですね、置いてあると普通なんですけど、持ち上げると振動するんですよ。それで、胸に抱いてあげるとふるえがとまるんですよ。おもちゃになってもむかつくやつだなー。

〜ところで、「女らんま」の方が林原めぐみさんというのはいつごろになってわかったんですか？

山口／わかったのは決定をもらってからですね。だから二月の終わりですね。収録がすごく早くて三月六日からだったんですよ。それで、本番の前の日に、僕とか初めての人たちだけ集めて先に絵をみせてもらったんですよ。その時に林原が一応相手だからってことで来てくれたんですよ。申し訳なかったことに、それまでアニメはそれほどみてなかったんで、知らなかったんですよ、林原のこと。日高さんなら知ってたんですけどね。

〜日高さんとは以前から面識があったんですか？

山口／実は、日高さんとは変なエピソードがあって、僕は昔「東映ぬいぐるみショー」をやってたんです。『ドラゴンボール』とか『ビックリマン』とか。それで、そのイベントで、日高さんが声の仕事で来てたんですよね。僕はぬいぐるみに入ってたんですけど。それで、仕事の後一緒に飲み行って、「僕も声の仕事やりはじめたんです」みたいなこと話したら、日高さんが、「じゃあ、いつかスタジオで会えると楽しいですね。」とか言ってくれたんですよ。そしたら、すぐ『らんま』でバッタリで二人とも大笑いしちゃった。

〜佐久間さんがおっしゃったんですが、日高さんは普段は非常に地味な方だそうですが。

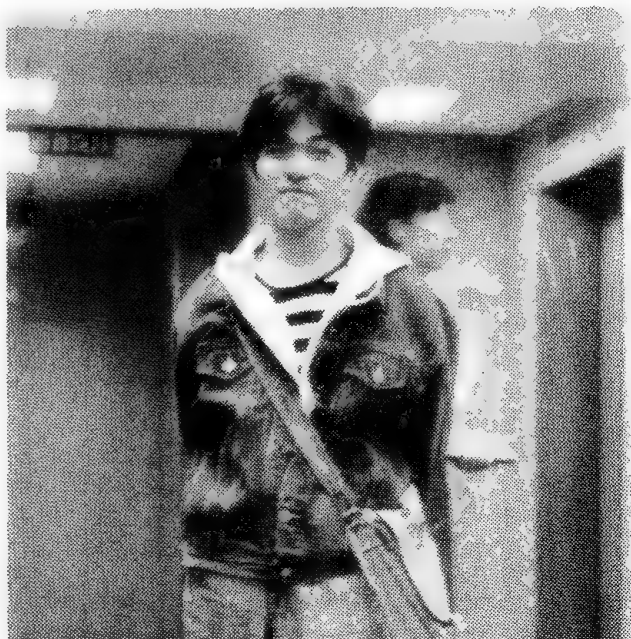
山口／日高さんが地味なんですか!?

〜引っ込み思案だともおっしゃってましたけれど。

山口／そんなことはないと思いますよ。何かする時には、日高さんがいろいろ先にやってくれますしね。それは、僕だからかな？　イベントなんかに行った時にも、僕は全然しゃべれないんです。「はぁー」とか「ええ」とかしか言わないんですよ。だから、たいてい日高さんが横でペラペラしゃべってくれるんです。「ねー勝平ちゃん？」「あ、そうですね。実にその通りです」とか、ほとんどそういう感じです。

〜意外ですね。舞台やってる人って、その辺で自分をアピールするのが得意なんじゃないですか？

山口／そうでもないですね。芝居やってる人って概してフリートークが苦手なんじゃないですかね。

〜そうですか？

山口／「台本があればできる」みたいな人が多いんですよ。けっこう普段は恥ずかしがりやな人が多いですよ。たとえば千葉さんなんかもスタジオにいる間はしゃべりませんからね。じーっと座ってて。それでしゃべりだすとすごいですからね。
〜千葉さんとは親しいんですか？
山口／そうですね。『らんま1／2』のイベントは千葉さんが司会なんで、ご一緒することが多いんですよ。そういう時に千葉さん忙しくて眠いだろうけど話相手になってくれるんですね。すごくいい方です、千葉さんは。
〜他に親しい声優さんとかは？
山口／親しい声優さんですか……仕事の帰りに飲みに行くとかはよくありますけど、休みの日に誘い会って遊びに行くというのは少ないですね。皆さん忙しいですから。だから、どうしても仕事で一緒の方になってしまうんですが、高山みなみさんが一番親しいと思います。他には林原とか日高さんですね。男の声優さんが少ないから。山寺さんなんか忙しくてつかまらないし。
〜やはり、普段は劇団の人とのつながりが強いんですか？
山口／そうですね。芝居やってると何かにつけてお酒飲みにいきますからね。

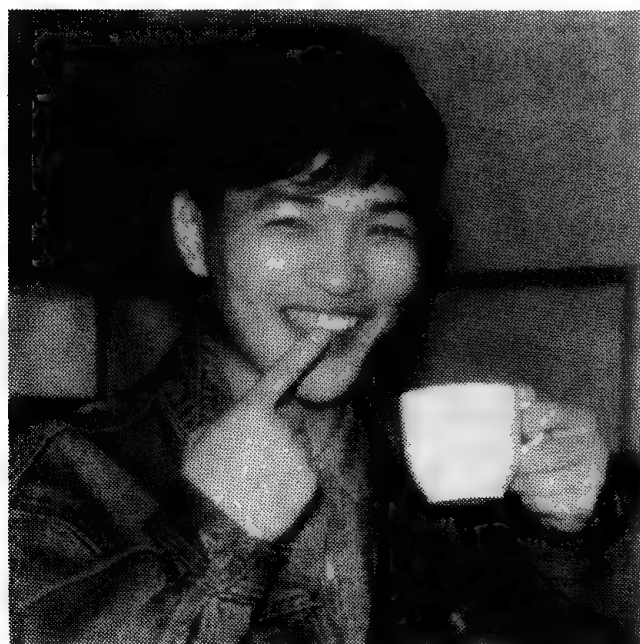
《劇団について》

〜山口さんは「劇団二十一世紀FOX」という劇団に所属していますよね。劇団の場合にはどういうシステムで仕事が入ってくるようになっているんですか？
山口／うちは主催者が肝付さんですからね、観に来る人もそういう関係のひとが多いんですよ。だから、結構舞台がマネージメントみたいな部分があるんですよ。斯波さんと浅梨さんはたしか『踊り子』を観てくれたんだと思います。
〜やっぱりそうなんですか。あれを観たら誰でも山口さんに注目すると思います。
山口／もう、あれは何よりも肝さんに感謝しています。
〜でも、舞台の方もオーディションがあるわけですよね。
山口／舞台の方はほとんど演出が配役決めてしまうんですよ。もちろん本読みみたいなことはしますよ。だから僕なんかずっと子供の役しかやらせてもらえないし……。
〜劇団にいると月謝とかかかるんじゃないんですか？
山口／うちの劇団は養成という形をとっていないから、入ったらもう劇団員なんですよ。そのかわり、「その後は知らないよ」という感じで、だから役につかない人はつかないし、本人がどれだけ努力したかにかかっているということで……。
〜けっこう厳しいですね。
山口／そうですね。でも、肝さんは優しいですから、何年かいると役つけてくれるんですよ。でも何年かいるとうまくなるから、そういうことはないんですけどね。
〜舞台とアフレコと比べるとどうですか？
山口／全く別物ですね。声優の仕事も舞台の仕事も同じ芝居っていう枠の中ではあるんだけど、違うものとしてやってますけどね。
〜どちらが自分にあってると思いますか？
山口／自分は舞台の方があってるんじゃないかと思うんです。
〜好みとしては舞台の方が？
山口／そうですね……どっちをメインにやっていきたいかって言われると困るんですよ。「舞台」って言っちゃうと仕事が来なくなっちゃいますからね。

声優インタビュー

～体で発散するようなことが好きなわけですか？
山口／そうですね。やっぱり舞台っていいですよ。生で反応が来ますからね。同じ事やってても、お客さんのリアクションで違いますからね。その日その日で、ほんのちょっとの間とか、ほんのちょっとのことで、お客さんの反応があったりなかったりで結構楽しいですね。
～役を演じながら、その時の反応ってわかりますか？
山口／わかるところはわかりますね。お客さんが多分ウケるだろうから、次のセリフはちょっと待つとか、そういう計算までしてしまう。なるべくそういう事は気にしないようにしているんですけどね。たまにお客さんと目があっちゃったりとかね。これが結構照れくさいもんで、なるべくあわせないようにしてるんですけどね。小劇場だと一番前のお客さんなんかすぐ目の前にいますからね。
～ほんとアニメと全然違うという気がしましたね。
山口／そうですね、肝さんも出ませんしね。本当にただの演劇集団みたいな感じなんですよね。
～北村想さんをやっているんですね。
山口／うちは北村想しかやらないんですよ。ずっと北村想の作品ばかりやってます。
～舞台の稽古はかなり厳しいんですか？
山口／いや、そんなにばっきんばっきん厳しくはやってないです。でも、やっぱり演出が肝さんですからね。肝さんの仕事の時間に合わせてやるみたいな部分があるから、どうしても、稽古がイレギュラーになるんですよ。だから、どうしても長期間になっちゃうんですよね。
～ほとんど劇団には毎日行ってらっしゃるんですか？
山口／そうですね。舞台の稽古のない時でも、道具作らなきゃいけないから、結局劇団に行きますけどね。ヒマな時にはうちで寝てます。仕事もなくて劇団もない時は寝るに限りますね。あと、一日中ブラブラしてるとか。でも、最近はそういう日の方が、かえって手持ち無沙汰でどうしたらいいかわかんなかったりしますね。やっぱり仕事している時のほうが忙しくていいですね。

《目標は肝付さん！》

～ファンレターは沢山いただくんですか？
山口／「らんま」をやるようになって、おかげさまでファンレターはいただくようになりました。
～年齢層とか男女比は？
山口／やっぱり女の子が多いですね。ほとんど女の子。中高生位が多いですね。
～どんな事を書いてこられるんですか？
山口／「声優になるためには、どうやったらいいですか？」とか。
～お兄さんに相談するような感じで？
山口／いやー、どうなんですかね、相談というよりも、「何か具体的な方法を教えて下さい」みたいな感じですからね。そんなの判りませんよ。あとは、「サイン下さい」とか、「生写真下さい」っていうのが多いですね。この前、「貴方の声は『らんま』に合いません」とか文句を書くだけ書いといて、最後に「生写真とサイン下さい」というのもありましたけどね。何者なんでしょう？
～返事は書いてらっしゃるんですか？
山口／最初はずっと書いていたんですけどね。最近書けなくなっちゃったんです。元々筆無精なんですよ、僕。だから、ただでさえ遅れてたんだけど、どんどん遅れちゃって、暇が

あれば書くようにはしてるんですけど、ごめんなさーいですね。

～これからやってみたい役なんかは？

山口／『まじかるハットくん』で鈴木みえさんがやってらした「悪いキツネ」。あれをやりたかったんですよね。初の悪役というか、ああいう「強い奴にはペコペコするけど、弱い奴には強いぜ」みたいな役いいですね。

～やっぱり、演技の幅を広げるような役ですか？　今までは少年役が多かったと思うんですけど……。

山口／あんまりそういう事は意識していないんですけどね。ただ少年っていうのはいつまで出来るものか判らないですからね、やれるうちに少年をやっておきたいというのはありますね。

～ラジオとか、CMとかやってみたい事とかありますか？

山口／そうですね、ラジオってやりたいですね。でも、番組ひとつ任されちゃうと出来ないだろうから、誰かのゲストに呼んで欲しいですね。CMは『三菱キャンター』っていうトラックのCMに出てます。

～ラジオですか？

山口／いや、テレビです。顔出しの仕事だって聞いて「ラッキィ」なんて思ってたら、ずっとロングばっかりで顔なんて全然判んないんですよ。それじゃ、誰がやったって同じじゃないか！

～声優さんの中にも、山寺宏一さんとか歌を歌われる方がいますが、勝平さんはどうですか？

山口／歌は歌いたいんですけどね……歌わせてくれないんですよ。実は、『らんま』の中で挿入歌を歌うというような話があって、サンプルテープを送るということになったんですけど、僕のサンプルテープというのが無かったんです。そしたら、プロダクションの方が『あいうえお』で歌った歌を送っちゃったんです。それ以来プッツリです。あれは、子供向けだから、わざと普通に歌わないで下手にして歌っているんですよ。

～歌には自信があるんですか？

山口／いや、自信はないですけど、高校の時にバンドでヴォーカルやってましたから、音痴じゃないと思いますよ。

～突然話がとびますが、好きな女性のタイプなんかは？

山口／好きな女性のタイプですか？　結構核心に来ましたね。そうですね、明るい人がいいです。「あかね」みたいなタイプは好きです。ああいうパキパキした子いいですね。

～声の仕事をやっていて良かったと思うことはなんですか？

山口／そうですね、具体的に良かったということはないです。どちらかと言うと「声の仕事をやれるようになって良かった」ですね。ほんと、福岡から出てきた甲斐もあったという感じです。

～最後になりますが、目標になさっている声優さんがいらっしゃれば教えていただけますか？

山口／目標になる声優というか、色々な意味での目標ということですが、やっぱり肝付さんです。芝居に対する姿勢とか、人間的なものとか、全ての面で自分は最終的には肝さんを見てるんだと思います。……こういう話をすると照れますね。

～今日は長い間、ありがとうございました。

Seiyu

私が最初に山口勝平という役者に出会ったのは、忘れもしない昭和六十三年四月十二日、劇団21世紀FOX公演『踊子』（於・下北沢ザ・スズナリ）という芝居でのことである。舞台演劇を観るのはその日が生まれて初めてだった私は、前々から声優さんの出演している芝居を一度は見てみたいと思ってはいたものの聞いたこともない劇団の公演に別段期待もしていなかった。せっかく友人からもらったチケットをムダにするのももったいないと思い、暇つぶしのつもりで劇場の席についた。ところがギッチョンチョン、ふたを開けてビックリ、その面白さたるやテレビドラマの比ではない。中でも主役を張った一人の美青年の狂気じみた演技には目を見張るものがあり、私の胸に深く印象づけられた。そして、その美青年こそが、山口勝平その人だったのである。しかし、その彼が一年後に高橋留美子アニメ「らんま1／2」の主役、乱馬役で華々しくデビューすると聞いた時の私の驚き様といったら…。

◆ ◆

その一年後、私がこの本を作ろうと思い立った時、これはあの美青年と直接話が出来る絶好のチャンスだと思い、まだ知名度が低すぎるのではないかという他のスタッフたちの意見を尻目に、真っ先にインタビューの予定者にしてしまった。ただ、舞台から受けた印象では、一見冷たそうで少しあやしげな美青年という感じだったので、インタビューの申し出を冷たく断られるのではないかという不安もあるにはあった。

しかし、そんな不安は勝平さんの第一声を聞いただけで吹き飛んでしまった。受話器の向こうから聞こえて来る勝平さんの口調は驚くほど丁寧で、逆にこちらが恐縮してしまう程だった。声も男性にしては高く、初めて聞く人は女性と勘違いされるかもしれない。そして、勝平さんは我々の不躾なお願いを快く承諾してくださったのである。

◆ ◆

平成元年十月三十一日、雨の新宿アルタ前。我々取材陣はいつも以上に緊張した面持ちで勝平さんの到着を待っていた。なにせ我々の中で彼の顔を知っているのは私だけだったし、その私も一年半前に一度舞台で見たきりだったのだから。さらに我々は、ほんの二十時間前に佐久間レイさんとのインタビューを終えたばかりだったのだから。疲労と緊張が入り交じった、非常にハイな状態で勝平さんとの対面をむかえるのであった。

ここでもまた、私は彼に良い方に予想を裏切られるのである。我々の前に姿を現した勝平さんは、小柄で一見すると少年のような、とてもとても二十四才には見えない方だった。実際にお話を聞いてみると、非常に礼儀正しく、気さくで、我々は緊張感や疲労を全く感じずにインタビューをすることが出来た。

最後に、勝平さんにはインタビューの後も個人的にお会いして頂いたり、21世紀FOXの公演や「らんま」のアフレコなどで大変お世話になり、本当に有り難うございました。

（阿佐美）

89.10.31.

今は未完成だからなおさら充実してますね。嫌なことは、オーディションの返事を待つことかな…。

K.Nishihara 西原久美子

1990/2/6　『新宿カトレア』

――先日、アニメージュにお写真が載っていましたね。

西原　あ、嘘がかいてある（笑）。自分で幅広いなんて言うわけないと思いません（笑）。

――プロフィールをお願いします。

西原　本名は山野井久美子。誕生日は四月二十七日で、AB型の牡牛座、神奈川県出身です。

　普通の大学生だったんですけど、このままではと思って声優の学校に行ったんです。そこに肝付兼太さんが講師できていらして、それで肝付さんが劇団をつくると聞いて、それでこの世界に。

　高校生の時に東京キッドブラザーズを見て感動しちゃったんですよ。それで私もああいうのやりたいなと思って、でも私が舞台に立てるわけがないと思っていたんです。それで、もともとこういう声なので、周りから声優ならできるんじゃないと言われていて、本人もひょっとしたらと思ったので声優の学校へいったんです。でもやっぱり芝居がやりたくて、東京キッドブラザーズを受けて受かったんです。でも色々あって駄目になってしまって、そのあとキモさんの劇団に入ったんです。

――そのあと声の仕事がきたのはいつごろですか。

西原　すぐ（笑）。何もやったことないのに、声が変だから（笑）。一番初めは『ドラえもん』のスペシャルで、次の年がねずみ年だったので、ねずみの人形の声をやらせてもらっ

たんですね。キモさんの紹介で。
それ以後は、すぐ、ピー（『とんがり帽子のメモル』）になって、雪之丞になって、その間って、他の仕事って全然やっていないんです。あ、途中『リヨン伝説フレア』でポペポペいってたドラゴンを（笑）。
ピーと雪之丞っていうのは、両方ともキモさんが劇団作っておめでとうみたいな形でもらったような役なんですよ。
だから、本当にお勉強をしはじめたのは、『あんみつ姫』のキナコのころからで。音響監督の藤村（房延）さんが、ゲストなど色々な役をやらせて下さって。
『ハットリくん』や『ドラえもん』なんかもちょこちょこ出させて頂いていたんですけれど、男の子Aなんて役です。

――一番出世は、『ハロー！レディリン』のリン・ラッセルだったと思うのですが、これは。

西原　オーディションです。その前までは『のらくろくん』でもお勉強させて頂いていたんですけれど、役付きじゃなかったんですよね。それで、ちゃんとやってみたいな、と言うのも変ですけれど（笑）、思っていて、で、たまたまリンに受かってしまった、という。

――前作（『レディレディ！』）がありましたけれど、抵抗はなかったんですが。

西原　見てなかったんです（笑）。それに変な話、受かるわけがないと思って行っちゃったところがあるんですよ。
それで自分なりにやりました。結構言われましたけどね。前の方がいいだの（笑）。

――初の主役ということでプレッシャーなんかは。

西原　それはもちろんありました。やっぱり自分は引っぱっていかなきゃとか、物語が自分中心に流れていくから、やっぱり細かく感情があるんだろうな、どうやったらいいのかなって、何回も読んで考えすぎて失敗したり、とか（笑）。

――周囲も若い方が多かったですね。

西原　やりやすかったです。片石千春ちゃんとは、結構意気投合したり。そんなには緊張しないでできました。

――それから、最近のめざましい活躍までポッカリ間があいてしまうんですが…。

西原　そうなんですよね。ウチは事務所がないのでそれでかしら。でも、あまりオーディションは受けていないので、打率はいいかな（笑）。
『悪魔くん』のスタッフはリンとほとんど同じなんですよ。それで、リンをがんばったからというので、幽子とピクシーはオーディションなしで。

――幽子ちゃんは結構活躍する話もあったり。いつも悪魔くんの側にいるから出番も多くて…。

西原　ラッキーだったですね（笑）。他の十二使徒ってあまり出てきませんものね。

――最近すごいですよね。今、レギュラー5本ですか。

西原　これはもう二度とないんじゃないかっていう（笑）。『魔法使いサリー』（ポロン役）と『まじかるハット君』（ロボック役）はオーディションがありましたけど、あとはなしで。『たいむとらぶる　トンデケマン』（ユミ役）は音響監督が藤村さんで、私のことをよく知って下さる方なので、（それに『小助さま力丸さま』もそうなんですが）私の声のテープを持っていらしたんですよ。

――ご自分ではこうした状況をどう感じていらっしゃいますか。

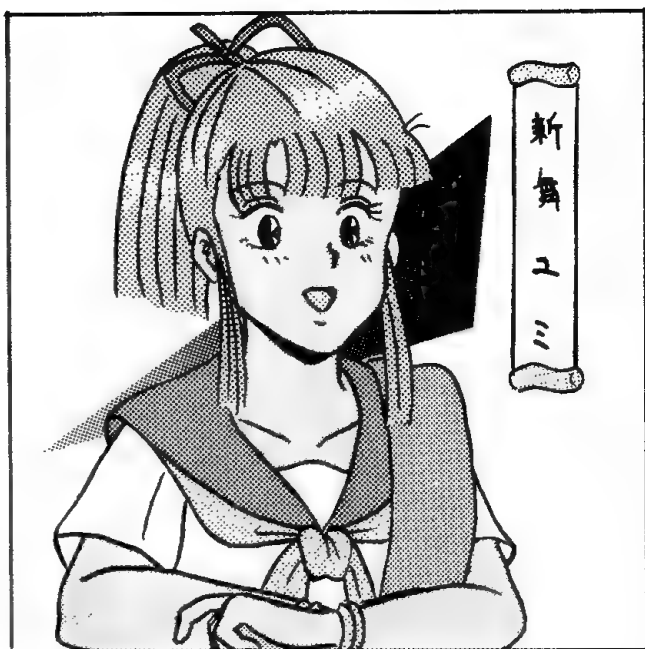
西原　目が点（笑）。でも、水モノですから、春になったらどうなるか（笑）。だから今も

五本あるけど、一本一本大切にやっていこうと思っています。

――毎日のように役柄が変わりますけれど、演じわけの苦労のようなものは。

西原　声が似ちゃったりするのもあるんですけれど（笑）。でも、行って絵を見るとキャラクターを違えようということはないです、それほどは。

――地声に近いというとどれになるんでしょう。

西原　（笑）私は幽子だと思うんですけど、最近は『トンデケマン』じゃないなんて言われたり。でも、ユミ子は声をなるべく低くしていて、叫ぶところでもなるべくリンなどより低い声を出そうとしています。

――リンの声は全く作っていませんよね。

西原　全然。「ハマリだったからヘタクソなお前を使うんだ」なんて言われました（笑）。もう自分のままで演じて。

――ポロン（『魔法使いサリー』）はどうなんですか。

西原　難しい。どういう風にしたら（年齢的に）小さくなるのかなって今もまだ迷っています。感情表現がでてくると、つい、大人っぽくなっちゃんうんですよね。サリーちゃんがしゃべっているのかポロンがしゃべっているのかオフだと分かんなくなりそうで、その辺りを気をつけています。

――雪之丞もそういう役柄ですよね。

西原　でも、ロボットだったから、あまり…。「〜でちゅ」という口癖もあったし、まだ始めたばかりだったから、考えてなかったんですよね、その頃は（笑）。最近は、考えるようになったし。

　雪之丞は言ってしまえば、感情表現なんかしていないし、できなかったんですよ。でも、少しできるようになると、ついやっちゃって、大人の感情表現をしてしまうんです。そうすると、たまにポロンちゃんがリンちゃんに変わってしまった、なんて（笑）。

――ポロンが先生を好きになる話がありましたね。

西原　それも危ないんですよね。ポロンの気持ちに一生懸命になろうとするんですけれど、ボソボソ喋るところなんか、リンちゃんになってしまいそうで。

　音響監督さんからは何も言われないんですよ。だからかえって不安で。

　リンのときは結構言われたんですよ。「かわいくない」とか（笑）。タイトルなんか毎回十回ぐらい言わされて（笑）。

――それぞれの音響監督さんに対する印象は。

西原　私は東映が多くて、東映の場合、毎回音響監督が違うんですよ。シリーズを通して一人の方が何本かやるという形で。だからあまり知らないんですよ。他では、藤山さんですけど、この方もあんまり言わない方なんですね。細かいことはいわずにのびのびと。

浦上（靖夫）さんは、厳しいって言われて

声優インタビュー

PROFILE プロフィール

☆本名・山野井久美子　S40.4.27生まれ

S59. 3「とんがり帽子のメモル」ピー
60. 3「は〜い・ステップジュン」雪之嬢
61.10「あんみつ姫」きなこ
63.10「ハロー！レディーリン」リン
H 1. 4「悪魔くん」幽子、赤ピクシー
1.10「ダッシュ！四駆郎」河井アナウンサー
1.10「魔法使いサリー」ポロン
1.10「まじかるハット」ロボック
1.10「たいむとらぶるトンデケマン」あらま ゆみ

これまで舞台活動が中心で出演作品は余り多くはないが、個性・実力とも充分に備えた若手声優。舞台でも個性的（？）な演技で観客を楽しませている。劇団21世紀ＦＯＸ所属。

いて、先日も『エスパー魔美』にゲストで出たとき、すごく細かいダメを出していただいたけれど、うれしかったですね（笑）。

芝居をやっているせいか、ダメが出ないと不安になっちゃうんですね。ダメが出るとこういう方向で作っていけばいいとはっきりするんでやりやすいです。

――ＮＨＫ教育の『はてなはてな』（小二向け理科／ポトリ役）はどういった経緯で。

西原　あれは、昔いたマネージャーがとってきた仕事です。もう4、5年になりますね。最初は内海（賢二）さんの博士もいたんですが、途中からお兄さんに代わって。

――個人的には、ポトリが西原さんの地声に近いのではと思っているんですが。

西原　あ、そうですね（笑）。何も声作りをしていないから（笑）。

――演劇活動の方は入団当初からずっと続けていらっしゃるんですか。

西原　出たり出なかったりです。何もやったことなかったし、なかなかいい役はもらえなかったですね。若かったし…一番最初は若かったんですよ（笑）。

――主役をやったことは。

西原　なぜかあるんですよね（笑）。『月夜とオルガン』という教師と生徒の恋愛物で、竹取物語が基調のメルヘン調のものなんですが、その時私が一番若かったんです（笑）。高校生の女の子の役なので、それで私になってしまったという、それだけの。ロッキーホラーショーも下敷になってるんです。

あ、他にも『アリス　イン　ワンダーランド』でアリス役を。キモさんの演出で、本多座組の企画公演だったんですが、つかせ（のりこ）さんたちと一緒に。

――先日の公演（『日曜日ラビはオルガンを弾いた』）を拝見させて頂いたんですが、男の子が憧れるのにふさわしいきれいで、色っぽい役作り（女子大生の家庭教師役）で素晴らしかったです。

西原　アハハ。ここんとこですね。ああいう役が増えたのは。それまではキャピキャピした女の子、かわいらしい少女だったのに。だんだん（笑）。

――それはやっぱり声優の方で、色々な役がくるようになったのと重なってきますね。

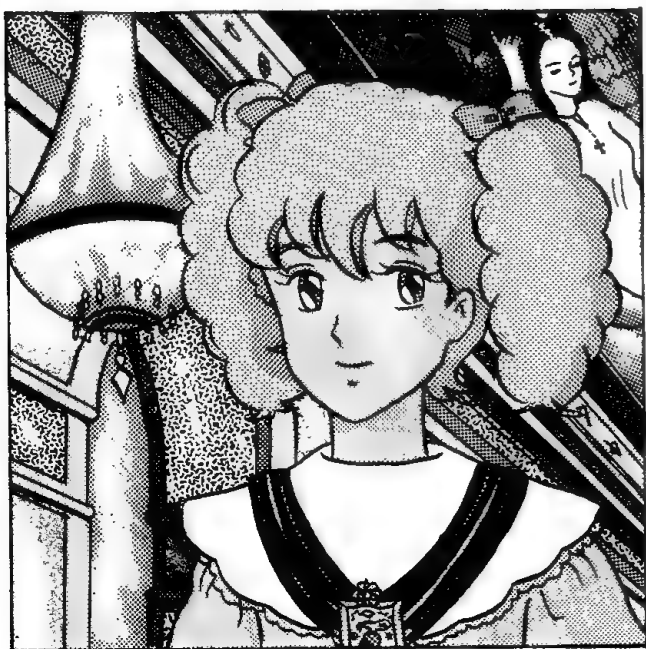
西原　そうかもしれませんね。やっぱり年とってきた（笑）って言うか、大人の気持ちも分かるようになったんで、先日の公演も3年ぐらい前じゃ絶対にできない役だと思いますし。

――そういえば、犬の声（『ダッシュ四駆郎』のワン駆郎）というのも初めてだと思うんですが（笑）。

西原　やだぁ、穴に入りたい。やってくれって言うから何の気なしに引き受けたんです。ちょっとしか出ないのかなと思って。そうしたら、とんでもなくて。それで河井アナウンサーと一緒に出てくる時が多くて、どうしてもセリフの多い河井さんの方に気持ちがいっちゃっていて、ワン駆郎をどうやってつくるか考える余裕がなかったんですよ。で、気がついたら、ああいう風になっちゃっていて。で、ワン駆郎だけでいくと…。ギャラ泥棒って言われる（笑）。こんな演技をしていて恥ずかしいと思うぐらい考えなしにやってしまったと反省しているんです。

――今でもガヤみたいな仕事もあるんですか。

西原　ええ。先日も『美味しんぼ』で子供Bという役を。シティハンターを目指していたのに終わってしまった（笑）。シティハンターに出ていない人は声優じゃない（笑）なんて。浦上さんの中で西原＝子供なのかもしれない。

——最近の仕事の多さで何か問題は。
西原　『トンデケマン』の次の日が『四駆郎』なんですけれど、その次の日疲れちゃったりして（笑）。両方ともテンションが高くて。でも、その日の朝はＮＨＫなんで、あ、自分に戻れたみたいな。
　慣れるまではうちで練習していたんですよ。だから、大変だったかな。脚本をわざわざ取りにいったりして。河井さんは多すぎて速いし、どこに入れるのか、カット割りも分かんないですよね。絵もなかったし。でも『四駆郎』は脚本が上がるのがだいたい当日で。だから、午前中脚本とりにいって、午後また同じところへ。最近では適当に入れておけばあとで上げ下げしてくれる（笑）みたいに。
　あと『トンデケマン』は周りがみんなベテランさんですよね。私だけちゃんと喋れないんですよ。３行以上のセリフがあると絶対つっかえるんです。それで、三ツ矢さんにボロクソに言われているし（笑）。藤山さんには『じゃ、クミちゃんなるべくお勉強してきてね』（笑）。だから、なるべく脚本を取りにいくようにしていたんですが。
　でも秋に始まった番組って、脚本ができるのが遅いんですよ。
——『四駆郎』が終わってしまうそうですが、今度は減っていくんじゃないかという危機感はありますか。
西原　それはあります、どうしよう（笑）。誰かうちのマネージャーにならないかしら（笑）。
——最近のオーディションで受けられたのは。
西原　去年の夏に『ちびまる子ちゃん』。それから『エクスカイザー』のお姉さん。
——ご自分のお声は気に入ってらっしゃいますか。
西原　やっぱり、大人の声も出せるようにならないと、この先生きていけないみたいな危機感はあります。
——特色のある声ですから、それだけでいけるのではないですか。
西原　そうなれば、いいんですけどね。
——最近は専業声優の方もいらしゃいますが、そういう方々と舞台をやっているご自分と比べてどう思われますか。
西原　やっぱり、そういう方達って上手ですよね。マイクの使い方ひとつを取っても違うし。私はどうしても足バタバタさせて体が動いちゃうんですよ。
　でも、私はせっかく芝居をやっているんだから、芝居心だけは負けないぞとは思います。
——ギャラの問題については。
西原　逆にこんな演技でこんなにもらっていいのかなっていうのもあります。でも、そういえばレギュラーこんなにあるのに、私貧乏だなっていうのも。
——アフレコでの面白いエピソードはありますか。
西原　『小助さま力丸さま』をやったときに、どうしても吹いちゃう（マイクに息の音が入ること）んですよ。それで、絶対ここから近付いちゃだめだよって言われるんですけれど、一生懸命やってるとどうしても前のめりになって近づいちゃうんですよ。それで今度は線を引いてもらったんです（笑）けど、画面を見ちゃうと見えないんですよね。じゃあ、体に当たればきっと分かるからというので、マイクにうちわをつけてくれたんです（笑）。そうしたらそれに当たってノイズが入ってだめだったという（笑）。
　『リン』のときは発音も厳しくて、タイトルで『～リンの危機』っていうのがあったとき、「危機」は無声音じゃなきゃいけないって言われて「無声音ってなんですか」（笑）。

そういう、ベテランチェックが（笑）結構ありましたね。でもそれは、ラッキーだなって。

——仲の良い声優さんは。

西原　山口勝平（笑　編注　当日は山口さんも一緒に付き添うようにおられたのです）。他には鈴木みえさんが長いつき合いですから（小2理科で共演）。色々教えて下さるんです。あとは佐久間レイさんや、渡辺菜生子ちゃん。年が近い方では片石千春ちゃんや、中とも子ちゃんとか、柳沢三千代ちゃんとか。

　でも、普段から、つい相談してしまうのはやっぱりみえさんかな。

——他の声優さんの印象は。

西原　三ツ矢さんは…（笑）。自分がいくらテンション低くても上げてくださるから。でも、みなさんいい方です（大笑）。

　昔、神谷明さんが、イベントで来られたときに、私もアルバイトで司会をしていて、「わあ、タレントさん」なんて思っていたのが、いま仕事でご一緒しているというのも不思議ですよね。神谷さんも憶えていらして、結構かわいがいってくださるんです。

——この人には負けたくないみたいなことは。

西原　そういうことはありませんけど、私と同じような声質の方がやっていらしゃるのを聞くと、あの役は私でも頑張ればできるんだと思うことはあります。

　目標って言うと私、三田ゆう子さんが好きなんですよ。ハートがこもっていらっしゃるし。『悪魔くん』で悪魔くんにものを渡したとき、「ありがとう、幽子」って言われたその受け方がすごく優しくて感動してしまいました。

——声優をやっていて良かったこととか、逆に嫌なことは。

西原　いま、いろんな役をやっているし、未完成だからなおさら充実していますね。嫌なことは、オーディションの返事を待つことですね（笑）。

——将来やってみたい役柄は。

西原　洋画をやれるようになりたいなと。

　ＣＭのお仕事は。

西原　ないんですよ。リンちゃんとか（笑）。だから、そういうアニメじゃない声のお仕事もしてみたいなと思います。

——今日はお忙しいところ、どうも有難うございました。

インタビューを終えて Seiyu

教育ＴＶマニアというものが存在する。島本須美の声聞きたさに『あつまれじゃんけんぽん』を見たり、『ピコピコポン』のパッキーに思い入れしたり、関俊彦を拝むために『ふえはうたう』を見たりするやからのことだ。で、僕はというと西原さんの声聞きたさに、『はてなはてな』を見ていたくちである。

◇　◇　◇

一時期、周囲が『レディレディ！』に燃え上がっていた時期があった。「リンちゃんの明日はどっちだ」に夢中になっていたのである。それゆえ、番組がダイアポロン現象をおこしたときは驚いた。そして、本編を見て二度びっくり。こ、声が違～う！…が、ひとりだけ変わらぬ声を発しているキャラクターがいた。他ならぬ、主人公リン・ラッセルである。ところが、エンド・テロップをみて三たび驚愕。だ、誰だこの西原久美子というのは～！…こうして僕は西原さんをおっかけることになった。

調べてみれば、雪之嬢なんて結構印象に残っている。こりゃまいったね。何で気がつかなかったんだろ。などと右往左往しているうちに、悲しいかな、『ハロー！レディリン』は終わりを告げ、再び西原さんの声は僕の耳の前から消えていってしまった。その渇きを癒してくれたのが『はてなはてな』というわけだ。それは、89秋の怒濤の西原久美子攻勢まで続いたのである。

◇　◇　◇

さて、御本人にお会いするまで、身内でちょっとした論争があった。「西原さんのあの声は作ったものか否か」である。僕は「もちろん」作り声派であった。『トンデケマン』のユミの声を聞いてそれは確信に変わっていた。ゆえに、公演を初めて拝見したとき、大地が崩れ落ちるような衝撃を感じたものである。それは、

第一にユミの方が作り声である
第二にすっごい美人である

からであった。

そして、いやがおうにも声優本スタッフ内での西原熱が高まり、インタビューをせねばなるまいということになったのである（そして、ある事実を知らされてがーっくりくることになるのだが…）。

お会いしてみると、西原さんは、声のような子供っぽいところを残しながらも、とても艶やかな女性だった。公演での家庭教師役に魅せられた僕らとしては、得心のいくところであった。…が、どう聞いても声はリンそのものだったのもまた事実なのである。

◇　◇　◇

春。雨の日。僕らは再び公演を見るため、新宿の街へやってきた。そこで四たび僕は衝撃をうけることになった。

なんと劇中で、西原さんはしきりにとんでもない言葉を発していたのである。ったく、責任者出てこい！

――とは、肝付兼太さんが怖いので言わないが…。

そう、西原さんは、

「き・ん・○・ま」
（一部自粛）

などと口走っていたのであった。

…まだまだ西原ファンはやめられそうにない。

（敏）

らんま1/2 アフレコレポート PART2

アフレコ開始直前、斯波さんから我々のさし入れが声優さん方に手渡されると、金魚鉢の向こうから日高さんや林原さんに会釈されてしまい、この時からわれわれの理性のタガはどこかへ吹き飛んでしまった。

その日は、第十六話『女子更衣室を襲え』のアフレコであった。簡単にストーリーを説明すると、和風男溺泉の地図を手に入れた良牙は旅から戻り、乱馬と共に和風男溺泉探しを始める。ところがそれは、風林館高校の女子更衣室の真下にあったのだった。さらに八宝斎の邪魔にあった乱馬は、あかねに下着泥棒と疑われてしまう、というものである。

まずは日高のり子さんのタイトル紹介から。そして次々にセリフは進んで行く。スゴイ!みんなほとんとリテークが入らない。ほんの数十分前に台本を受け取ったばかりだというのに、何故あそこまで完璧にセリフが言えるんだ?それもしっかり演技しながら。やはり声優業は凡人にはつとまらないというのを実感してしまった。しかし、録音監督の方からもっと細かい指示が出されるのかと思ったら、それが全然ないのである。私の勝手な予測では、斯波さんとしては、声優さん方も随分慣れて来たので、ここらで彼らの好きに任せよう、という事なのではないだろうか。さらにアフレコは進んでいく。

物語中に『むか〜しむかし、あるところに…』というナレーションが入るところがあったのだが、それを山寺宏一さんがいきなり「まんが日本昔話」の常田不二男さん調でやったものだから、スタジオの中は大爆笑。斯波さんも感心してらした。しかも、これがまたよく似てるんだ。あれを事もなげにやってしまうんだからやはり山寺さんは天才だ。もう一人の天才、林原めぐみさんはというと、自分の出番がない時に、なにやら後ろのソファーのところでキックやパンチをしきりに繰り出していた。あれは一体何だったのだろう。

調整室の中は終始和やかな雰囲気で、スタッフの方々には我々のためにわざわざ機械をどかしてスペースを作ってくれた上、おすしやシュークリームなどのさし入れまでいただいてしまった(なんてずうずうしいヤツなんだろ)。

そうこうしているうちにアフレコも無事終了。斯波さんにお礼を言って調整室を退出する。興奮冷めやらぬまま、我々はロビーに駆け込み、用意して来た色紙を取り出し、あたり構わずサインを頼みまくる。(我々は天よりも高く舞い上がり、もう完全に我を忘れてしまっていた。ううっ、今思い出しただけでも顔から火が出そうだ。)そこへ斯波さんがとどめの一言、『君達、それが目的で来たんじゃないの?』我々はひきつった笑いを浮かべるしかなかった。どうみても弁解の余地はない。(だけど斯波さん、信じて下さい。本当にあれが目的で見学を申し込んだんじゃないんですぅ。)

しかし、我々は性懲りもなくサインねだりを続けたのだった。さっきは声を掛けそびれた山寺さんに再度アタックを試みようとした瞬間、彼は足早に我々の前を通り過ぎ、奥の部屋に消えたまま、二度と出て来ることはなかった…。グッスン。ふと視線を移すと、ソファーに横になってグッタリしている女性がいる。林原めぐみさんだ。おそるおそる声を掛けてみると、最近はオフが全くなく、その上体調が芳しくないとのこと。アフレコの最中はあんなに元気だったのに、さすがプロだなぁ、と感心してしまった。

こうして我々は幸福と後悔の入り交じった複雑な心境で家路についたのである。

(終)

…占い師の人にどんな芸名がいいですかって聞いたら、『み〜な』だって言うの。そんな猫みたいな名前はイヤダって。（笑）

《現在のお仕事》

——では、現在のレギュラーから。

冨永み〜な　『機動警察パトレイバー』と『サザエさん』と『ディズニー劇場・チップとデールの大冒険』。あと、NHKの『いちにのさんすう』という小学校一年生向けの人形劇でチンチラという人形の声ね。あと、KBS京都の方のラジオ『ペーパーナイト』と、もうひとつ、三ッ矢雄二さんと二人で昔の『アニメトピア』再来かな?っていう感じの番組なんですけど、FM大阪で『空飛ぶアルマジロ』っていう番組、やってます。

——それは京都とか大阪の放送ですが、そちらの方に出向いて?

冨永　京都は生放送なんですけど、こちらの表参道から…原宿から生放送してるの。FM大阪の方はこちらで録ってます。ですから、関西の方には行ってないです。

——録音スタジオの様子みたいなものを。例えば、『パトレイバー』…。

冨永　『パトレイバー』はですねぇ、ずっとビデオも映画もやってのTV化なんで、みんな、もう新番組って感じがしなくて、もう慣れた感じで、やりやすいですね。

でも、ビデオなんかに比べて大人っぽさが抜けたっていうか、子供っぽくなってるんですよね、TVシリーズの方は。絵は変わってますけど、とりあえずそんなに意識しないでって指示はあったんですけど、やっぱりしゃべり言葉からしても、私も今までそんなに叫ぶところなかったのが、結構多くなってきて、「太田っぽく」なってきたなって。…だから、野明ちゃんが叫びまくっているって感じで、前よりもにぎやかな雰囲気になりました。『パトレイバー』自体も。

——『パトレイバー』の他の声優さんの雰囲気というのは、どうでしょうか?

冨永　あ、私、南雲さんの役やってらっしゃる榊原良子さん、すんごく好きなんで、仲良くしていただいてて。女性が少ないですから、良子さんといつも、ごはん食べたりしてますけど。他の声優さんたちも『パトレイバー』の作品が好きなんで、力入れてやっているみたいな気がします。

——『サザエさん』ですけど、途中まで潘恵子さんがやってらっしゃいましたよね。

冨永　これは突然の話だったんですが、潘恵子さんがお子さんをお産みになるんで、…で、産休の間だけかなあ?と私も思ってたんですけど。オーディションもなく、直にお話いただいて。行ってみたら、産休の間だけでなく、もう交代ということで。

《オーディションの様子》

——オーディションというのはどのような形で行われるのでしょうか。

冨永　普段は、まず事務所の方から話がきて、

1989/10/19『信濃町ルノアール』

冨永み〜な

Tominaga

その中でどの役を受けるとか決まってて、で、冨永さんは何の役で来て下さいって、で、行くでしょう。そうすると同じような方がいて、順番が決まっていて、キャラ表とセリフをコピーしたの一ページか二ページ、…フィルムはまだ出来上がってないですね、大体は…それはオーディションによって違うんですけど…配られて、それをしゃべる、と。

――どのようなキャラの性格とか、指示されないんですか?

冨永　音響監督とか作家の方とか、そういう人と話をして…。大体原作がある場合は、オーディションが決まった時に、これ原作ありますかって聞いて、あるって場合は本屋さんで探して読んだりというのはありますけど…。

　だけど私の場合ですけど、なにか直感的な仕事の仕方というか、自分のイメージで絵を見ると声が出るというか。まあ、あんまり声、変わってないけど、あんまり予備知識をいろいろ頭に詰めるよりも…。

　…で、受かったり、落っこったり。だいたいは、一週間ぐらいでわかるんですけど。

――他の声優さんとのインタビューなどをテープに吹き込んで、それを送ることも…。

冨永　それはサンプル・テープというものをどの事務所も作ってると思うんですけど。いろんなパターンでしゃべって…詩の朗読とか男の子の声とか、一人一分から三分くらいのテープを作っとくんですね。事務所には私のテープも、いろいろな人のテープもあるし、CM会社とかアニメの制作の会社にも出してあるんですね。それを聞いて選ぶ方もいるし。

　大体アニメの場合は、実際行ってキャラを見てって感じですね。CMのナレーションとかやる場合は、そのテープを聞いて呼ばれたりする時ありますけど…。

――自分の受けたキャラ以外で選ばれるときもありますか。

冨永　あ、そういう時もあります。

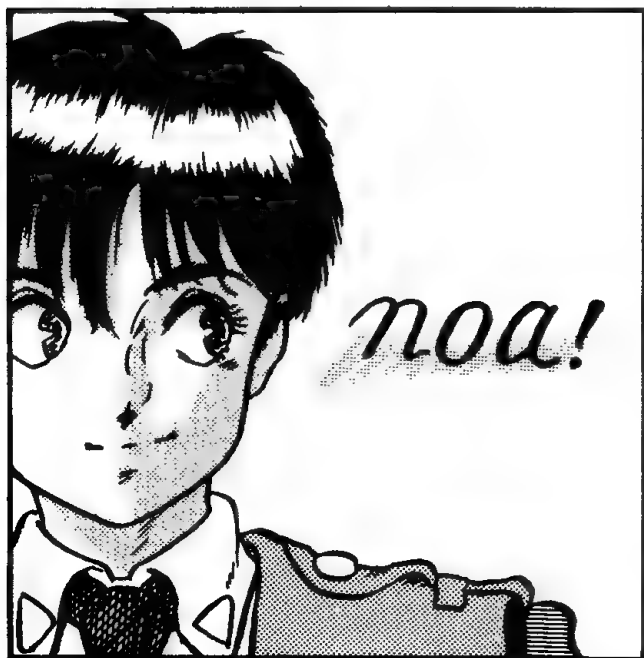
　すごい昔の話になってしまいますが、『銀河漂流バイファム』で、どの役を受けてもいいって言われたんですよね。はじめ、一応クレアって言われてたんですけど、ちっちゃいチビちゃんとかもやった覚えがあります。みんなも、いろんなのやってました。ロディの

難波くんもスコットをやってたりとか。いろんなのやった中でピックアップされたのが、あのメンバーだったんですけど。…受けたその役だけがダメだったからっていって、全部ダメっていうことはないみたいですね。

——冨永さんの場合は男の子役とかあまりないですね。

冨永　そ、なんですね。だから、この前までやってた『ビリ犬なんでも商会』の中でテッオという男の子をやってて、それがはじめて。最初で最後になってしまいました。（笑）

　男の子、やりたいですけどね。ただ、今は野明ちゃんが男っぽい性格だから、意外と満たされてますけど。

——そういう、自分で声を作るというのは、苦痛とかなくて楽しいことですか？

冨永　そう、できる範囲じゃないとね…。

　「ハイ」というのだけね、すごく男の低い声でできても、セリフは「ハイ」だけじゃないでしょ。その声で泣いたり笑ったりできなくちゃ。自分の出来る範囲って意外と決まってるから、自分の中で無理な範囲はやめてるっていうか…。後で苦しくなっちゃいますから。オーディションの一枚だけはちゃんとその声でできても、本編始まったら、泣けない…泣いたらペルシャになっちゃう…じゃ、ちょっと、まずいですから。

《初アニメと小中学生時代》

——初アニメは『みつばちマーヤの冒険』でいいんでしょうか。

冨永　すばらしい！すごい！『みつばちマーヤ』を知ってる人はいないナ。

——本によっては、『マーヤ』と『あらいぐまラスカル』と…

冨永　『ラスカル』の方がレギュラーだったし、『マーヤ』はこれをやる前の練習みたいな感じで…。草むらにみつばちマーヤがいて…そこを足がインしてきて、足だけ写ってる女の子みたいなぁ感じ…。だけど、ふた言ぐらいだったのね。で、一応、初めのアニメは『あらいぐまラスカル』っていうふうにしてるんです。…小学生…五年生の時ですね。

——それから、アニメの方は？

冨永　全然やってないです。

——それっていうのは何か理由が…？

冨永　いや、別に理由はないんですけど…。

　とりあえず、『あらいぐまラスカル』みたいに、…「つくらないアニメ」っていうのは変ですけど…『名作劇場』ってゆうのは、意外と洋画に近いでしょ。ギャグアニメじゃないでしょ。ギャグアニメをやるには、ちょっと力不足の年齢なんですよね。本当の子供がやっちゃって面白い場合と、出来ない場合ってアニメにはあるんで…。そういうアニメに、たまたま私が当たらなかったってゆうのと、…あと、洋画ばっかりやってたのかなぁ？

　アニメは『ときめきトゥナイト』からですね、少しずつ増えてきたのは。

——それは、高校入ってから？

冨永　そ、高校生ですね。意外と出来る年齢になってきたこともあると思うんですけど。

——洋画時代の感想を聞きたいんですが、『大草原の小さな家』とかは、どうでしょうか？　今も再放送してますが。

冨永　そう、それが、だいたい最初にした声の仕事だと思うんですけど。小学校の二年生か、そのくらいの時行って、まだランドセルしょって…。八年間続けて、本当の家族みたいに…私一番下だから、かわいがってもらったんで、すごい残ってます。

——三女のキャリィ。

冨永　はい、そうです。今、再放送で、四女のグレイスが出てるんですけど、グレイスも

声優インタビュー

時々やってます。…しゃべらないですからね。
――キャリィも毎回二言三言ある位で…。
冨永　そうです。だから、学校行く前に寄って、「パパ」「ママ」とか二、三言とって、すぐ帰ったり、学校行ったりとか、…意外と、みんなの録音付き合ってたというのないですね。ちっちゃい子だから飽きちゃって（笑）。
――雑誌で読んだんですけど、おにぎりとか、お団子を買ってって…
冨永　それは、『あらいぐまラスカル』の時。お団子とか買ってって、スタジオで売ってたんです。（笑）
　うちのお父さんがお料理屋さんを昔やってて、そこでお弁当作ってて…。なんか録音時間がすごくかかってて、みんなね、いつもおなかがすく時間なんですよ。それで、早稲田の『アバコ』という所で録ってたんですけど、そこにはちゃんとカウンターの喫茶店みたいなのがあるんですけど、そこが閉まっちゃう時間になっちゃうんですよ。そいで、みんながお腹すいた、すいたって言ってて、いつか私がお団子かなんか買ってったのを、みんなに取られちゃったんで、今度はいっぱい買ってこうって…。ママがね…付き添いで来てますから…ママと一緒に買ってったら、じゃ、おこづかいってんじゃないけど、お団子代って、十円ずつくれたとか、…そういう商売。

《ペルシャの独特の言い回しについて》

――今、お声聞いていますと、嗄(か)れてらっしゃるんですか？
冨永　普通こういう声なんです。ええ。
――全然違いますね。
冨永　そうですか？　ウソなんです、アタシ冨永み～なじゃないんですよ。（笑）
　緊張すると、だんだん高くなってきちゃうんですよね、私って。だから、普段こうやってしゃべってると、そんなに子供っぽくないんですけど。どうしても「本番」とか言われると緊張して高くなっちゃうんで、意外と大人の役って、まだやらせてもらってないんで。
――今は、普通の声というか…。
冨永　普通の二十三歳だったでしょう？　良かったでしょ。
　けどね、タクシーとか乗ったり、電話とかにでる時の緊張する声って、みんなもあるでしょ？　そういう時の声って、やっぱり幼くなっちゃうみたいで、タクシーにこの前乗った時に、「どこどこまでお願いします」って言ったら、「お客さんは、変わった、アニメみたいな声だね」って（笑）。
　ちょっと緊張すると、高めになるっていうか…。べつに今、緊張してないって訳じゃないですけど。
――『魔法の妖精ペルシャ』の話になるんですけど、「～ですの」という独特の表現ありますけど、あれは、冨永さん自身で…。
冨永　あれは一番最初に台本もらった時、多分「ですの」ってひらがなで書いて、カタカナ

ナの「ォ」が小さく書いてあったんです。で、「これってどうやって読むんですか」って言ったんですけど、「好きなように読んでいいよ」って言われて…。で、言ってみるとすごく面白くて、じゃあ、できるだけ付けれるところは付けちゃおうって…。だから、元々ありました。台本に。

　でも、これって私のとっておきって感じですね。

《プロジェクト・レビューへの移籍》

——何故グループこまどりからプロジェクト・レヴューに移ったかってことですが…。

冨永　深いですね。どうして？

——冨永さんと、三ッ矢さんとか田中さんのつながりが、全然見えなかったんで…。

冨永　うーん、なるほどね。

　まずお芝居をやりたいと思って、こまどりでやってたんですけど、でも私も年とってきたし、こまどりはやっぱり子役さんの児童劇団だから、大人の仕事ってこないと、いうのがあるのね。裏の事情として。じゃあ、どこか移ろうかって先生と相談して、「いっしょに仕事してる三ッ矢さんとかと相談してみたら」って言われて…『タッチ』とかやってたんで…じゃあ三ッ矢さんと話したら、「うちに来てみる？」ってみたいなことで。

　で、『マザー』っというプロジェクト・レヴューでやった舞台に、まだ所属してないうちに、ゲストで出してもらったんです。客演で。…で、みんなとも仲よくなって、事務所の人とかとも会って、「ここはすごく私に合ってるかなあ」っと思って入ったんです。

——じゃあ、『タッチ』をやってる頃…。

冨永　そうですね。もう三年くらいたつのかな…。『タッチ』は六一年で、三年ですね。三ッ矢さんとかは、昔から知ってたし。

PROFILE プロフィール

☆本名・冨永美子　S41.4.3生まれ

S52. 1 TV「あらいぐまラスカル」　アリス
59.10 TV「ときめきトゥナイト」　神谷 曜子
58.10 TV「銀河漂流バイファム」　クレア
59. 2 劇場「綿の国星」　チビ猫
59. 7 TV「魔法の妖精ペルシャ」　ペルシャ
61. 3 TV「タッチ」　新田 由加
61. 3 TV「めぞん一刻」　七尾 こずえ
62. 3 TV「世紀末救世主伝説 北斗の拳2」　リン
63. 4 OVA（H1.7 劇場、H1.10 TV）「機動警察パトレイバー」　泉 野明

教育TV　「いちにのさんすう」
ラジオ　「アニメトピア」
イメージアルバム　「究極超人あ～る」　堀川 椎子
アルバム　「AHA・I'm twenty?」

ほか、洋画吹替え・ナレーターなど幅広いメディアで活躍中。プロジェクトレヴュー所属（インタヴュー時）

《学園祭とイベント—観客との対話》

——学園祭とかは、どのくらいやってらしたんですか？　高校の学園祭に呼ばれたこともあると聞きましたが。

冨永　学園祭は、ちょうどその頃二、三校行ったんですけど。LPも出していた時なんで、歌もあるしってことで。

——冨永さんも当時、高校生だったと思うんですけど、同世代の高校生とかお話して、どういうふうな感想をもちましたか？

冨永　男の子ばっかりだったから、ちょっと初め怖いと思ったけど（笑）。

　…イベントでもそうなんだけど、私を応援してくれる人の前で歌うのは、楽なのね。楽なのねっていったら変だけど、そのまんま楽しめるのね。何やったって許されるっじゃないけど。…けど、番組のイベントとか行くと、冨永み～なが嫌いだっていう人もいるわけですよ。好きな人もいれば嫌いな人もいるわけだから、そういう人たちもいっぱいいる中で、

与えられた時間の中でどれだけ自分をわかってもらえるか、で。わかってもらった上で嫌われるんだったらいいのね。…もし、イメージだけとか、ありもしない噂とかで嫌いとか言われたりしてたら、それで誤解がとければいいと思うのね。

それと一緒で、学園祭とかって私をまるっきり知らない人もいるわけでしょ。そういう怖さっていうのが、高校生の私にとっては、とてもたいへんでしたけど。

けどね、少しの人でも、そこに出たことによってラジオ聴いてくれたりとか、なんらかの手紙くれたりとか、「卒業しました」というのがあるっていうのは、すっごい、やって良かったって、嬉しいなって思いました。たまには、そういう「冒険しなきゃ」じゃないけど、…嫌われてもいいやって…いうのがないとだめだなって。

《アニメトピア――ラジオ番組の体験》

――『アニメトピア』のことについてですが、番組では、投票で選ばれたって発表してましたけど、あれは、事実で?

冨永　投票は見せてもらってないけど。…本当にラジオで言ってた通りに、私、ゲストで何回か呼ばれてたでしょ…そういうつもりで行ったんですよ。そしたら、第四代目に決まりましたっていうか…今日からだからって言われてって、本当にそんな感じだったんです。

――それって、いきなり言われて、すぐできちゃうものなんですか?

冨永　やりぃ!って感じ。(笑)

ラジオができるってこともちろんだけど、やっぱり憧れだったから。私が勝手に思ってるんだけど、『アニメトピア』の二人に選ばれるってことは、すごく声優として光栄なことのように思ったのね。一代目から三代目の方を見てても、今でもなお、第一線でなさっている方ばかりでしょう。私もそういうふうになれるんじゃないかという、線路を敷かれたような、すごい嬉しかったですよ。

――そうですね、あの番組に選ばれるってことは、女性声優の方の中でもトップに…。

冨永　認められたっていうか、声優の中に入れてもらえたっていうか…。

――川村万梨阿さんとかは以前からご存じだったんですか?

冨永　『アニメトピア』やる前は『ペルシャ』で、一回来てるの、万梨阿さんが。その時が初めてお会いした時なのね。「ほんとにキレイな人だなあ」って思ったのが第一印象で。だんだん話すようになったのは、『トピア』始まってからですね。あたしなんかにも素直に言って下さったりする人だったから、そういう意味では仲が良すぎたって言われました。

あの『トピア』やってる時は、別にベタベタしてるわけじゃ、つるんでるわけじゃないけど、お互いけなさないでしょ。そこがつまんないっていわれたの。けど、私はあの番組をやってた時に自分の中で抵抗があったのは、人をけなして笑いをとるんだったら、いくらでもできるって。だけど、私はそうじゃないと思ってたの。なんか、「ブス」とかって言えばね、まわりは笑うよね。だけど、そういうのじゃなくて、なんか他に面白いのはないかなって、『トピア』の毛色とはちょっと違ったのかもしれないけど。あがいてたんですよね、あの中で、私は私なりに。

けど、電波にのった時に、…『トピア』の色っていうものにガラッと変えられれば、みんな納得してもらえたと思うけど、そこまで行けなかったし。かといって、『トピア』の色に染まりきれなかったしって所が、ちょっとありましたね。

けど、すっごい勉強になりました。やっぱり女性同志のかけあいのラジオって。

――確かに始めた年は何かお互いに遠慮してやってるような感じがしたんですけど、暮れの何百回記念かなにかで歴代の声優さんたちが来てらして、そのあと急に話が面白くなったっていう印象があったんですが。

冨永　あれは本当にいい経験だったと思いますね。私が、けなしあいじゃいやだな、ってカンチガイしてただけで、実はそうじゃなかったって。歴代の人たちがしてた笑いというのが、あたしが思ってたのじゃなくて…。一人のラジオとかけあいのラジオと、面白さも出し方も違うし、そこで万梨阿さんも気が付いたんだろうし、私も何か学ぶものがあったんだろうし。そいで、慣れてきたってゆうのもあって、少しずつ出来てきたんじゃないかと。

《ラジオ番組―リスナーとの対話》

――パーソナリティー一般については？

冨永　私の中でラジオって、一番好きな仕事なんですよね。勿論、ラジオだけじゃダメなんですけど、アニメとかいろんな仕事をしてる中の一つに、ラジオは必ず入っていたいっていうか。毎日ずっとラジオでっていうんじゃなくて、一ケ所場所が欲しいんですよね。

　ラジオって、大体みんなが部屋で一人で、聴いてるわけでしょ。夜の放送だから。そうすると、いろんな人がいろんな気持ちで聴いてるわけで。私の言った一言が真っすぐ通じる人もいれば、全く逆の思想をしてとらえる人もいるし、私の言葉で励まされる人もいれば、傷つく人もいるし…。「ガンバッテネ」ってつもりで言わなくても、そうなのかと思われたり。そういう、どこでつながってるか分からないラジオの面白さっていうかなあ…。で、私も役をもらって毎日仕事をしてるわけですから、役とかじゃなくて冨永み～なとして仕事をする場所が一ケ所あると、楽って言ったら変ですけど、自分のはけ口にもなるし、すごくいい場所なんですよね。ラジオって。

　で、今KBS京都の方が、すっごくハガキもらってて、嬉しいなって思ってるんですけど。みんなの情報の交換じゃないけど、「あ、こういう人もいるのか」「ドジな奴だなあ」って。そういう、聴いてる人たちの、流れる中の…高校一年生の春からね、今度の春までの一年間にこれを聴いてたんだってだけでいいのね。流れてる中に、いたいなって。

　…深いなあー、こんなに考えて仕事してるんですね、私って。（笑）

――リスナーの立場から言っても、声優さんってアニメの中の声だけですよね。それが、ラジオのDJとかやると、その地というか、その人自身を出してくれますよね。

冨永　ね、やっぱりラジオってそうだと思うんですよね。歌手の人とかも、ラジオやると、自分の話とかしてくれるでしょ、それが面白いところでもあるし。私のファンの人や、ファンじゃなくても楽しめるようにしていくってのもあるし。

　あと、声優を活かしたコーナーとかもやりたいし、そのバランスが難しいし…。アニメが好きな人だったら、声優さんがいっぱい来てね、キャラクターの声でしゃべるのも面白いと思うのね。けど、それだけじゃみんなも足りないと思いだすだろうし。

　一回『トピア』の何かの記念の時に、万梨阿さんに一本、私に一本、台本書いてこいって言われた時、あったの。そのときまで、私は敢えて、今まで『トピア』の中で投書とかの「ペルシャの声でしゃべってください」っていうのを全部省いてきたのね。ハガキとかで、あまりにも多いから。だけど、ペルシャ

の声をやって、みんなに一回喜んでもらってもいいなっていうのがあったのね。それで、じゃ、スペシャルで全部やっちゃおうって。

《同世代からの刺激》

――仲の良い声優さんていうと…

冨永　あんまり友達いないんで、ホントに。こまどりの頃から一緒だった皆口裕子だけですね。さびしいでしょ…。みんな友達になってくれないんですよ。

――いやいやいや…

冨永　と、言うか、私って中途半端なんですよ。ちっちゃい頃からやってて、大人の人とかと仲いいでしょ。で、今おんなじ年代で出てきてる声優さんて、まだそんなにやってらしてないから、長さとしては。ただ長いだけなんですけど、私は。ただ、この業界は意外と横のつながりのが多いんですよ、同期とか。そうすると、私も入っていけないし、向こうもなんとなく、ねえ、近づきにくそうというのもあるみたいですね。

――ベテランみたいに思われちゃう…。

冨永　いやあ、そうでもないと思うんですけどね。松野達也とか三ッ矢さんとかとは仲がいいですけど…。同年代っていうと、達也とか皆口裕子になっちゃう。

――『トピア』の本とかに、中二の頃に声優さんとしてやってこうと思った、って書いてらしたと思うんですが、声優とか俳優とかに本気になろうとした理由は?

冨永　ちっちゃい頃からずーっとやってると、仕事が来たからやりますっていうか、変な癖がついちゃうのよね。学校にも行ってたし、子供のクセに「仕事」というのもないでしょ。だから、「今度～やるのよ」って言われて、「はい」ってやってた部分があるのね。

　だけど、劇団に入ってて、中学二年生ぐらいの時に皆口裕子とか、同じぐらいの年代の人が入ってきたんです。その時に、その人たちってゆうのは、キチンと意志を持って入ってきたのね。「こうなりたい」とかね。私は、中途半端な意志だったのね。その人たちと一緒にレッスンとかやってて、この人たちって本当に自分が将来「TVの仕事をしたい」とか「ラジオの仕事をしたい」とかって入ってきたのを見て、「私は仕事が現在できているから幸せなんだけど、それじゃいけないな」って思ったのがキッカケで、そこで、続けてこうって思ったんです。あらためてね。

＊　プライベート♡　＊

――趣味とか凝ってることとありますか?

冨永　一般的には「うめ吉」って呼ばれているぬいぐるみがあるんですよ。それが好きで、皆口（裕子）と一緒に集めてたことがあったんですよ。たくさんいただいて、もう一杯だなあって（笑）。もう充分だって。

――自分のやったテレビとかは見たりしますか?

冨永　だいたい見ますけど、ビデオにとり忘れちゃうんです。でかけちゃってる時は。でも、だいたい見ますね。ラジオも。

――あと、男性の好みとか…（笑）

冨永　いきなり、とびましたね。

　そうだな、とりあえず、見かけじゃなくて、中身は、ほんとに誠実な人。それは、見かけの優しさとかじゃなくて、…一番大事なものが、私と合う人。私が一番大事なものが何か、ってきかれたら困るけど、人の中で大事にしてる気持ちって、人それぞれ違うと思うのね。それが私と似かよっている人が、やっぱり私と合う人だと思うんですけど。人と接してても…価値観かな、やっぱり…、友達とか両親

とか大切にしてるものが同じとか、気持ちの向いてるベクトルが同じ人が、その時々に好みの男性になっちゃうから。好みって、その時々で違うでしょ。だって、昨日あの人好きだったけど、今日はこっちの方が好きとか。ただ清潔感があって男らしい人が好きかな。

——結婚しても、このお仕事続けていくつもりで？

冨永　ええ、続けていくつもりです。でも、自分の生活の中で、うまく仕事が入りやすい時間だったら働くけど、どっちかっていうと仕事より家庭の方を一番に考えちゃうと思います。結婚したら。子供の参観日とるか『パトレイバー』とるかって言われたら、子供の参観日もその子の将来考えると大切かなっていう風になるでしょうね。今はもう断然『パトレイバー』だけど。

——いつも買い物とか、どこへ行かれるんでしょう？

冨永　買い物は、いつも、…渋谷とか。あと、買うブランドとかあまり知らないんで、こだわらないんですけど、好きなものがあったら買うみたいな感じで…。その日によって、パターンが決まってないっていうのかな。

——ディスコなんか行くんでしょうか？

冨永　あ、行かないです。意外と遅れてるんです。六本木でも遊ばないし。そういう遊びはないですね。誰かん家に集まってゴハン食べるとか、そういうパターンが多いですね。映画見に行ったり、洋服見に行ったりとか…。ディスコなんてね、大学一年の時にパーティーかなんかで、ちらっと行っただけですよ。その前は、よく行ってましたけどね。早かったんですね、成長が。（笑）

——冨永み〜なの「み〜な」の由来は？

冨永　占い師の人がいて、その人がつけたんです。「美子（よしこ）じゃない方がいいよ」って言われて、じゃ変えよっかねって…。で、何ですかって聞いたら、「み〜な」って。そんな猫みたいな名前はイヤダって。（笑）

今なら、抵抗ないんですけど、…「ーな」っていろいろいるじゃない？　ちっちゃい頃は、みんなから「なんじゃこりゃ!?」と言われました。で、「皆口裕子」ってつけたのも、その先生なんです。

——「み〜な」で名前を出し始めたのはいつ頃ですか？

冨永　小学校四、五年かな、『ラスカル』の時はそうだったかな？　…そのへんだと思います。『ときめき〜』の時は、もう「み〜な」だったから、中学くらいだと思います。「今日から変えなさい！」って言われて。それで、お母さんから仕事場に電話かけてもらったら、劇団の先生も「い、今からですか!?」（笑）

で、その仕事から、印刷変えてもらったんです。その台本は直んないけど、放映になるときに「み〜な」にしてもらったんです。

——（マネージャーの矢崎さんに）マネージャーやられてて、苦労とかありますか？

矢崎　いや、会社の仕事はあるけど、冨永なんとかってのはないですね。

冨永　いい子でしょう！

矢崎　優等生ですね（笑）。

冨永　ねえ、意外でしたでしょう。

——今後やってみたいこととか…

冨永　…そうだな…自作自演までいかなくてもトークショーみたいな感じの…歌が時々はいって、おしゃべりがあってというおしゃれな小ディナーショーができたらなって思ってますけど。キャラクター的には、ちっちゃい頃から言ってるんですけど、「さるとびエッちゃん」のようなキャラクターは絶対やりたいですね。ああいうお茶目な。

——本日は長い間どうもありがとうございました。

Seiyu

冨永み～なさんへのインタビュウは、一九八九年十月十九日に行われた。場所は信濃町の某喫茶店。この日の冨永さんは黒のミニに白と黒のアダルトなスタイルで、その大人の魅力に、暴れん坊将軍の異名をとる編集長のアサミ氏も、思わず息を呑み込んでしまった。そんな中にもどことなく節度を弁えた品の良さが漂っているのは育ちの良さからなのか、それとも、子供のころから劇団にいたからなのか、その辺はいまひとつはっきりしないが、とにかく、一見粗雑に思える何気ない動作のひとつひとつが、実はしっかりとしていて、厳しくしつけられて育ったことを思わせた。

さて、綿密な打ち合わせをしてあったにもかかわらず、実際にインタビュウが始まってみると、こちらが不慣れだったということに加え、時間的な問題もあって、どうなることかとハラハラしどおしだったが、親切にも冨永さんがフォローして下さったおかげで、なんとか無事終わることができた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪

インタビュウの中で話題にもなったが、冨永さんは京阪神でラジオ番組のパーソナリティを二本うけもっている。

ひとつは三ッ矢雄二さんとのバラエティ番組で、キャラクターグッズまでできるほどの人気があるらしい。ちなみにスポンサーは代々木アニメーション学院である。

そしてもう一本は、KBS京都の放送で、こちらもたいへんな人気があるということらしい。

声優さんにとってラジオ番組というのは、役柄とは離れたところで自己主張ができる仕事の場としてたいへん魅力的なものではないだろうか。だから、声優さんが口をそろえて、ラジオをやってみたいと言われるのも納得ができる。そう考えてみると、ラジオのレギュラーを二本持っている冨永さんは、随分恵まれているのではないのだろうか？

そんなことを考えながら、ラジオのスイッチをひねると、聞こえてくるのは冨永み～なの声！ではなくて、同じ丙午の永井真理子……。

東京に声優のラジオ番組が少ないのはなぜだろうか？　東京では声優がラジオをやっても聴く人がいないのだろうか。もし、ラジオ局の人がそう思ってるんだったら、みんなでハガキを出せば、ひょっとしたら番組ができるかもしれない。その可能性は十分ある。えっ、スポンサーはどうするかって？それは大丈夫、「代々木～」があるじゃないか……。

冨永み～なさんは、彼女自身の将来に明確なビジョンを持っている。その上で現在の「自分」の在り方というものに対して、常に結論を出しながら仕事をしている。同世代の若者達と比べても、これほどしっかりとした人はいないだろう。

芯の強さと明るさを兼ね備えた女性、それが冨永み～な。彼女の、これからの益々の活躍に期待したい。

（たけ）

噂のうわさ

噂話をしよう。

なに、声優本作りで、ちょっとばかし小耳にはさんだ話というだけのことだ。そう大したことでもない。それに大したことなんか危なくて話ができるわけもない。マニア氏には周知の話だろうが、つまらないと思う人はとばすがよろしい。

◇　◇　◇

声優の（とくにアニメ番組の）ギャラが安いというのは良く言われる話。いかに安いかは他に真面目なコラムもあるのでそちらを見てほしい。

さて、数年前の話。聞けばきっと名前を知っているはずの某人気女性声優さんが、ちょうど結婚されたころの話だ。そのころのその方と言えば、もう毎日のようにアニメ番組に出ていると言われるほどの人気ぶり、活躍ぶりだった。ところがである。なんとそのころその方はアルバイトをなさっていたというではないか。この話は瞬く間に広がって、今でも、声優がいかに食えないかという例として語り草になっているという。

この話をしてくれた某声優さんいわく、「手塚治虫がいけないのよね」。まあ、トキワ荘的手塚信奉者はおいておいて、みなさん、よくこの言葉を噛みしめようね。

安いといっても、アニメの制作費全体が安いわけで、となると、ベテランを使わずに若手だけですましてしまおうってなことになる。実際、古株の声優さんがスタジオにくると、名も知らない子でいっぱいなんてこともあるらしい。知っているのは昔端役で出ていた今中堅氏だけとかね。プロダクション側もその辺りは心得ていて、依頼数が多いのは若手のうちだけというので、来る仕事来る仕事断らない。うまい若手というのはそういるわけはないんで、結局、極一部の人達が馬車馬のように働かされることになってしまう。某若手女性超人気声優さんがソファにぐったりと横になっていらしたのでお訊ねしたら、なんと一月まるまる休みなしだったとか。

こんな態勢になってしまうというのは、プロダクション側にも問題がある。というわけでプロダクションの話。

まあ、各プロダクションごとにいろいろ特色があるわけだが、最近は、素人の取材お断りというところも多くなっているようだ。某プロダクションなんかは取材内容も聞かずに、チョンだもんね。でも、そういうところがマネージメントがしっかりしているかというと、必ずしもそういうわけではないのが困ったところ。その某プロの事務をやっているのは若い人間ばかり。いいかげんなマネージメントも多いそうな。

例えば、声優の中には営業用の生年をお持ちの方も結構いらっしゃる。で、普段は絶対こちらしか使わない。一方、プロダクション側としては「本当の」生年も知っていなきゃ業務に差し支える。というわけで、プロダクションには、営業用資料と内部用資料の2つが存在する。当然、媒体には営業用資料しか提出しないわけだが、あるとき、ある雑誌の声優事典に、どういうわけか、内部用資料が渡って掲載され、大騒ぎになった。これがその某大手プロのミスなのである。そのために困ってしまった声優も多かったらしい（誰かは言わぬが花）。結構、いい加減なものである。そういえば、最近、その雑誌の企画で生

年ってあまりみかけないなと思った君、そういうわけだったのよ。

※　※　※

プロダクションといえば、それぞれ強い媒体があるのは周知の事実。東映動画に強いところ、ビデオに強いところ、NHKに強いところ様々である。テロップをながめていると「協力××」なんて出ることがあるけれど、その極端な例だよね。キャスティング業務をそのプロダクションが代行しているっていうことだ。端役などで○○風の声が欲しいという場合など、プロダクション側で用意してくれるので、予算枠を考えたり、選考したりする必要がないため、制作側にとって非常に楽なのである。

さて、ここでうまいことを考えた大手プロダクションがいた。このキャスティング業務を一手に独占してしまおうというのだ。企画子会社を使って、スタジオや音響制作会社、制作会社と組み、この番組（orスタジオ）は、ウチの声優だけでやってもらうと言い出したのである。

まあ、こういうのは「声」の豊富な大手だからできることでもあるのだが、いくつかのプロダクション、スタジオ、音響制作会社はこれに当然反発した。中には、それなら結構、そちらの声優は一切使いません、という大手音響制作会社まで出てくる始末。こうして現在、この大手プロ派とアンチ派の2つに音響界は分かれているという。そして、さらにアンチ派には各々別のプロダクションが食い込むという泥仕合を呈しているとか。

番組を見ていて、あれ、この制作会社、このプロの声優を使っていないなとか、協力って出ていないのに、××プロの声優が多いなと気付くはず。これはそういうわけなんですよ。

音響制作といえば、音響監督だが、これもそれぞれ個性があって面白い。細かく指示を出す人もいれば、自由にやらせる人、声優自身でさえおかしいなと思う場合でも指示を出さない人まで千差万別と聞く。その上やはり、音響監督も人の子、いや中年のおじさん（が多い）、どうしたって、若い女の子がお気に入り。その子の才能を信じているのか、それとも単に気に入っているだけなのか、とにかく自分が担当する作品にはチョイ役でもいいから、必ず出演させる声優さんというのが存在する。下手をすると、役柄がないときにもスタジオにその子が来ていたりして…。某若手声優さんいわく、「いいわよね、××さん。いまや売れっ子でしょ。その監督に気に入られれば成長するの間違いないもの。○○さんはかの人のお気に入りなのよね。かの人っておしとやかな子が好みでしょ。私なんか、かの人に嫌われてるから…」――そういうこと言うから嫌われるんだってば。

でも、実際のところ、番組終盤、それまでに出た大物ゲストキャラ勢ぞろいなんてことになると、予算枠の関係で、セミレギュラーの中でもあまり気に入られていない人から外されていくなんていうこともあるらしい。

若手声優を大量にかかえるプロダクションともなると、飼い殺しなんていう問題も出てくるとか。マネージメントが下手だと、一点集中が起こって、他の声優には依頼がこないなんてことも出てくるらしい。そんなわけで、大量に若手を抱える某プロでは、移籍を願う声優も多いというが、移籍の際にゴタゴタするとあとあとまで尾を引いて、そのプロダクションの息のかかったところでは仕事ができなくなり、そのまま鳴かず飛ばずになってしまうこともあるという。

そういえば、スタジオ経営も大変という話。スタジオというのは大抵都下にあるわけで、しかもだだっぴろい空間である。そうなると維持費や税金もばかにならない。スタジオなんかにしておくのはもったいない。と、いうわけで廃業してしまうところも出てきているとか。仕切り分けて、喫茶店とかビルなんかにしてしまうようだ。

＊　＊　＊

かくも声優をとりまく状況は厳しい。オーディションに血眼になるのもむべなるかな。声優の間にまことしやかに流れている、こんなオーディションの心得がある。

「役柄がどうしても自分に合っていない、取れそうもないと思ったら、キャラ表など無視して、別のキャラ表をやってしまえ」

…真実か否か。それは藪の中。

6 声優インタビュー

Mayumi Tanaka 田中真弓

…一生に一本の当たり役があるとしたら、まだ巡り会っていない。まだ、私には当たり役はないと思ってる。

1989年 11月22日 『信濃町ルノアール』にて

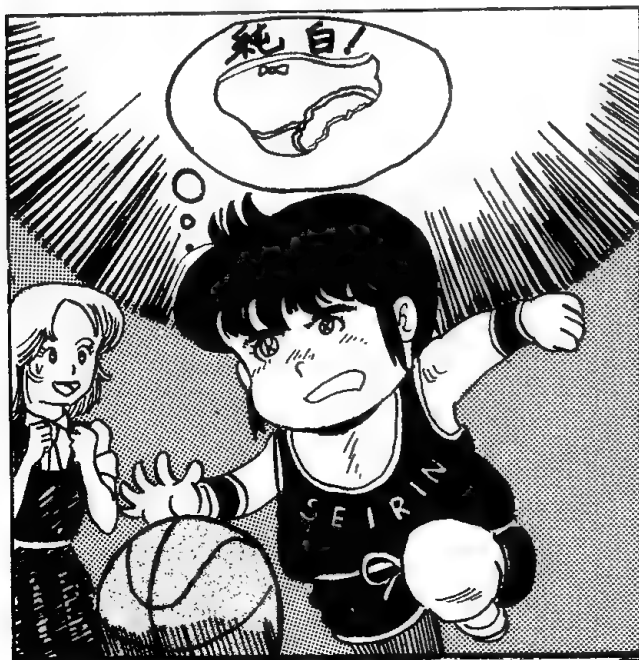
――今日は、これから仕事は何ですか
田中真弓　衛星放送の『コスビー・ショウ』。
矢崎（マネージャー）　昔、TBSでやったんですけど、今度NHKの衛星放送でやるということで、続編を今作っています。
――えっと、最初に受けた大役というと、『ダッシュ勝平』で…。
田中　その前に『ベルフィーとリルベット』っていうのがあったんだけど、視聴率悪かったから。だから『ダッシュ勝平』がデビューだって思っている人多い、初めての視聴率の良い番組だったから（笑）。
――アニメ初レギュラーは何でしょうか。
田中　『激走ルーベンカイザー』（の高木涼子）。結構思いいれがある、という…。だって一八才の社長令嬢だよ。すごいミスキャストじゃん。

《〃はに丸〃と〃ヤンチャー〃――NHK番組について》

――現在のレギュラーをお聞きしますが、『おそ松くん』『獣神ライガー』『ドラゴンボール』『やっぱりヤンチャー』。で、やはり、声優さんのお仕事ということで、『やっぱりヤンチャー』の話を聞きたいなあ、と。
田中　アニメじゃないけれど?
――最近気にいってるものですから、見てて。結構、話題になってますよ。もうアドリブ、バリバリですね。

田中　（笑）そうですね。よくわかる。
――水島裕さんのまねをされた時は、びっくりしました。あれは、みんなアドリブなんですか？
田中　ていうか、アニメみたいに間が決まっていないから、いくら伸ばそうが伸ばしただけ、人形やる人が動いてくれるし。
――ウッドペッカーのまねとかもやっぱりアドリブなんですか？
田中　そう、あれは、やだっていったのよね、ちょっと冗談でやったら、「いや、ぜひそれでいきましょう」「まるで真似ですけど、いいんですか？」って感じでねえ。
――あれは、オーディションか何かで？
田中　いや、『おーい！はに丸』の続きで。
――『はに丸』は、新聞にもいろんな投書載ってましたね。…あれは、オーディションだったんですか？
田中　そうそう、まだ新人だった。その頃は。テアトル・エコーにいた頃だから。
矢崎（マネージャー）　六年前ですね。
――『はに丸』で何か印象深いお話は？
田中　アナブースで屁をこいたことくらいかな（笑）。あれは、すごく印象に残ってるんですよ。番組とは関係ないけど。
――ひんべえは、田中さんと安西さんのお二人の分だけ別撮りということなんですか。
田中　別撮りじゃなくて一緒なんだけど、モニター見て、何だかわからないけど声が回っちゃうのかしらね、その場で生で見ながらやれないの。
矢崎　僕の方のノイズとかそういうのを拾うといけないのか、分けちゃってるんですよね。
田中　だから現場には一緒にいる。しゃべる専用のアナブースっていうのがあって、スタジオで動いてるのをモニターで見ながら、アテてくっていう。
――ああいう3チャンネルの教育番組ってのは、みんなオーディションあるんですか？
田中　オーディション、あるある。
――役柄になりきって声を出すってことなんですか？
田中　ていうか、人形だからね、役柄になりきってっていうか…。そんなに大層なものじゃないんじゃない。（笑）

【〝おそ松くん〟―アドリブギャグの本質】

――最近声優さんのインタビューとか特集記事とか少なくなってきちゃったんですが、ここに一応、昔の本とかあるんですけど、それ以降のお話をちょっと聞こうかなと思って。
田中　（子供を）産んでからの話？
――はい。現在のレギュラーで、一番やってて面白いのは？
田中　『おそ松くん』だった。『おそ松くん』終わっちゃうんで。あと一本で。
矢崎　アフレコはあと一回です。
田中　『おそ松』はほんと面白かった。『ダッシュ勝平』以来のアドリブ…ディレクターのおかげなんだけど。ギャグアニメっていうのは役者に自由に与えてくれて、千葉繁さんなんかも私と同じでどんどん自分で引っ張っていきたいっていうタイプだけど、それを許してくれるディレクターとそうじゃないディレクターとかいるわけ。もう、どうしてもぴっちり台本通りやって欲しかったり、あるいは口パクと尺をぴっちり合わせて欲しかったり。
　でもこの『おそ松くん』は、『ダッシュ勝平』も同じなんだけど、水本さんっていうディレクターは、何しろノリが一番なんです。本当に芝居わかってる人ならそうなんだけど、間の問題でさ、同じセリフでもこの間があるから面白いと、それはもう水もの生ものだから、ちょっとずれたら本当にひとっつも面白

くないっていうものなのね。

　例えば、尺数が合ってないとするじゃない。水本さんだと「合ってなかったけど、今のはすごく面白かったからいいです」っていう感じでOKになっちゃうんだけど、合ってないのがすごくいやな堅いディレクターさんもいるわけ。すると合わせることだけが目的だから、会話の中での面白さなのに一つのセリフ、例えば「ごめんよ」だけ下さいって、オンリー採りにしてしまう。違うんだよ、特にギャグアニメはね。芝居のからみの中で、面白いか面白くないかは間（ま）や息の問題だし。

　だからそういう点で、アドリブとか役者が自由にやることを許してくれるディレクターが水本さん以外にいないんじゃないか、と私は思う。でも私も片寄ってるし、もう一〇年以上になるといっても、あまり知ってるわけじゃないんだけど、私が知ってる中では水本さん以外にこれだけ自由にやらせてくれる人はいないと思う。水本さんは、こんなにディレクターっていい加減でいいのだろうか、と思うくらいで。何か質問しようと、「俺に聞くなよ、お前自分で考えろよ」っていう感じ。

　だからどんどん引っ張ってこられたし。頭の方で「てやんでばーろー」って言ったらもうそれが翌々日の台本には、私のアドリブが書き込まれてたり、しまいには「てやんでえばーろーコーナー」とかできちゃったり。

――ありましたね。

田中　ディレクターがそれを許さなかったら、結局絵を描く人にまで伝わらないわけでしょ。それが絵を描く人に伝わったら、かなり台本をお変えることができて、面白いわけ。でも時々、絶対に面白いのに「やめて下さい」って、チビ太の場合だったら、「チビ太はそういう声出さないでしょ」ってそういう言い方されてしまうのね。チビ太がこんな声出すから面白いっていう考え方をしてくれないの、普通のディレクターは。本当はそういう考え方はギャグアニメの中での生命なんだけど。

　でも芝居作りって全部そうなんだと思うの。こういう人間だからこういうことをする、じゃなくて、こういう人間があんなことしちゃうから面白いんであって。

　それを何か一つで通そうとする、こういう声はこういう性格の人で、とか。でも、そういう声の中で「だから（声色を変えて）」って言うことだってあるわけで、これをギャグアニメの中で大切にしていきたいんだけれど、それをわかっているディレクターがいない。で、『おそ松くん』のディレクターはそれをすごくわかっている。そういう意味では『おそ松』だって、他の人がやっていたらあんなに楽しくなかったろうなあって思う。

――肝付さんとの応酬などもアドリブで？

田中　けっこうアドリブ。

《ラジオとCMでの出演》

――『アニメトピア』についてお聞きしたいんだけど、あれはどういう経緯で？

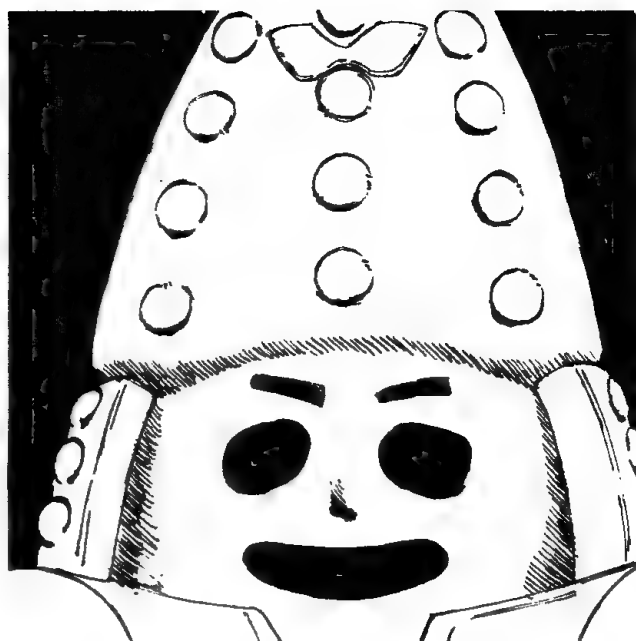
田中　オーディションで哀れに思ったんだって、「こいつはとってやらなくちゃどうなっちゃうんだろう」って。で、とっちゃったっていう。あまりに無口だったんで、これじゃオーディションの意味ないだろうと思って最後に歌った一曲、洗濯の歌を好きだから歌わせて下さいって。「あなたーにーだーけーはー」っていう歌を突然歌って、それが良かったみたいだけどね。

――で、その二年半ぐらいでそれやって変わったなっていうか成長したっていう点は？

田中　慣れたよね。そういうアドリブ…っていうよりもただしゃべる、っていうのに。今まで劇団出身だから、台本あって役を与えら

れればやるけど、自分自身でしゃべれって言われた時にはなかなかしゃべれなかったっていう部分があった。ある時間とりあえずしゃべんなきゃいけないっていうんで、台本がなくてしゃべるっていう。進行台本しかないから。部分部分はあることもあるんだよ、だけどここは何分までフリートークって形で与えられた時に、前はすごくそういうの苦手だったんだけど、あれやってからむしろ台本のないものを好むようになったかな。

――CMのお仕事とか洋画のお仕事とかっていうのは、やはりオーディションを受けに？　それとも事務所の方へ？

矢崎　CMに関してもオーディションがあったりとか、あとは逆にテープ選考があったりとか、ある程度CMの方がディレクターやプロデューサーの意のままってところがあるから。今回はオーディションやろう、とか、あの人よかったから頼んでみようか、みたいな。

――現在、CMはかなり多く出演されてらっしゃる…。

田中　うーん、でも最近ないよね。

矢崎　武藤のかばんとオフィスカラー。あとぁの、カバがランドセル。

田中　はに丸とモンタとさ、あのカバも一緒たしさ、おまけにのらくろも一緒になっちゃったし。目もあてらんない、見事に同じ声で。

　はに丸の後のモンタの時は、もう自分でもおかしくてさ。もんたが…TVに写ってるはに丸を見るところがあって、「あ、僕の声にそっくり」って、思わず言ってしまいました。

　こんなに「変えよう」という努力もしないでやってる人も珍しいって。「変えよう」として変わんないなら仕方ないけどもう少し何とかしろ、なんて言われてますけど。でも変わんないんですね。

《〃ワタル〃――ファン層の世代交替》

――でもパズーをやったあたりから、しっかりした声というか、少年役としての声が出るようになったと思ってんですけど、そのあたりどうなんでしょうか？　それまでは、ニントンとかくせの強い役が多かったように思うんですけど。

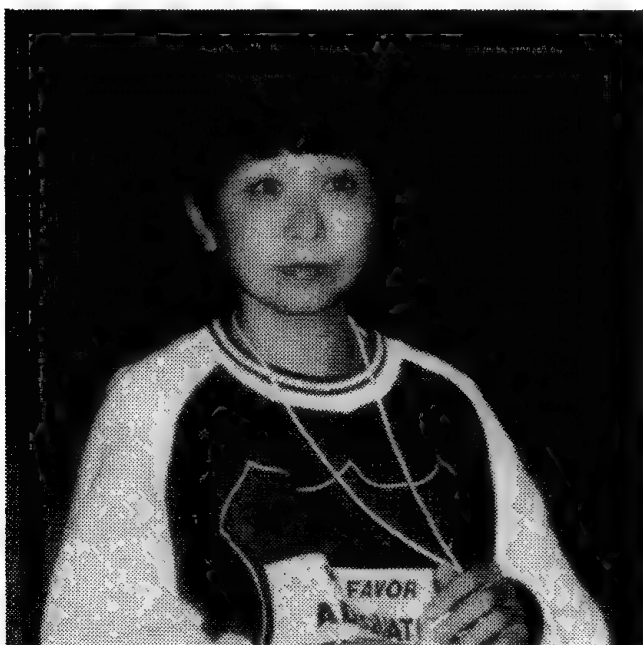
田中　ギャグが多かったからかね、自分ではそんなにわかったつもりはないんですけど。

――最近、他の当たり役っていうとたぶん『魔神英雄伝ワタル』だと思うんですけど、そのあたりは意識されて…イベントとかも多いんじゃないですか？

田中　人気があるからね。でも、あれもギャグで、最初メカ物だと思っていたから意外に面白かったんで、楽しい番組ではあるんだけど、さっき言った点ではもっと面白くなるはずだと思っている。

――来年『ワタル2』始まります。女の子とかの人気が高いという話を聞きましたが？

田中　そうかもね、うん。

――ファンレターなどはどうなんですか、

最近は？

矢崎　中学校高学年くらいの、多分ファンレター初めて描くみたいな。書き始める年齢なんじゃないかな、っていう子が割とよくくれるみたいです。あ、鉛筆の下書きが見えるな、みたいな宛名で。

――それはやはり昔とは層が違っている？

田中　それは当然。もう十年たってますからね。ただ、面白いのは、十年前に応援しててくれた人が、もうほとんど友だちになってるんだけど、ファンクラブの会長やメンバーであったのが、実際に本書きになったり。三井英樹っていたじゃない、彼が今『がきデカ』の脚本書いているんだけど、昔から作家になりたいって言って、響さん（編注・脚本家）のお弟子になったりとかって。

　実際にもうやりだしていて、今度これ書きますという人とか、学校の先生になった人とか、歯医者になるんだってやってる人とか、何かと連絡してきてくれる人が多くて面白い。もう大人だからファンではもちろんないんだけれど。いっしょに仕事ができるといいねって言ってるんだけど。

《若手声優の増加と役者意識の変化》

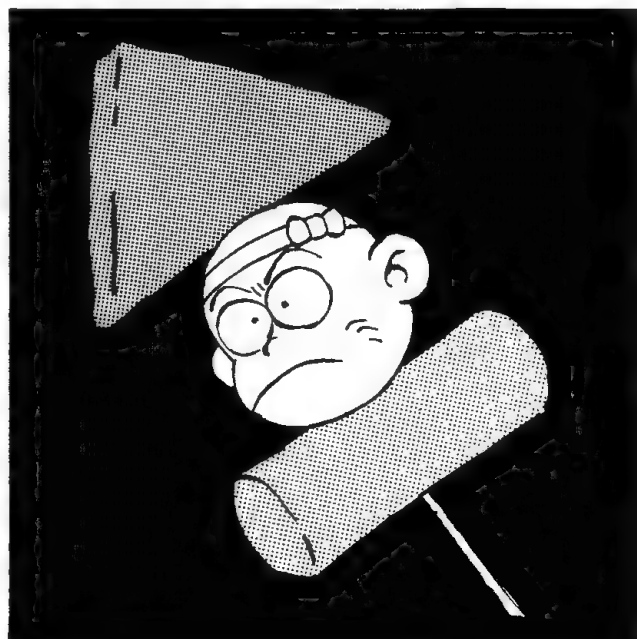
――声優業界についても、十年前と随分変わってきたと思うんですけど。

田中　どんどん若い人ばっかりになってきたから。あたしたちが出たての頃っていうのは、一つの番組で年輩の方が多かったのね。だけど今はとっても少ない。へたするとあたしたちぐらいが最年長で上の人がいないスタジオになっちゃう。

　だから当然雰囲気はゆるんでくるし、今回も話してたんだけど、大平透さんがね、昔よりずっと丸く優しくなったんだけど、それでもやっぱり若い子にとっては恐ろしいのね、全然もう前とは違うんだけど、でも「静かにしろ、バカヤロー」って言ってくれる人がいるっていうのはとってもいいことだなって。スタジオの中で、キャアキャアの延長線上で仕事が始まっちゃうっていうノリが改まるから…今はとにかく層が若いからね。

――若い声優さんのそういう意識はやはり十年前と変わっている？

田中　どうなんだろう。それは、年に関係なくその人の考え方なんだろうけど、一つ言えることは、声優になりたいと思って声優になっちゃった人がもう本当に多くなってきちゃって。その中できちんとしている人はその危険性がわかってるってうのかな、本質的に芝居をきちんとしている人と、技術的にあてるだけがうまくなっちゃった人とがあって。一概には言えないんだけれども、そういうことの危険性は感じる。

　私たちの頃までってのは、結局俳優になりたくてたまたま与えられた仕事が「声」っていう分野の仕事なんだと。俳優なんだっていう意識が強かったんだけど、今、声優になりたいっていう人が現に声優になって仕事してるから、何しろマイクの前でのことだけしか知らないっていう。どんどん世代交代が進んで、使えるだけ使って要するに使い捨てという。それが怖いなって。ギャラが上がってきたらやめて若いの使って、ていうみたいな。もしそうなるのであれば、役者がそういうところできちんとしてないからじゃないかなって。私達の時よりも、そういう人が増えちゃったんじゃないかなっていう危険性は感じる。

《声優の生活と役者としての充実感
――プロジェクト・レヴューの解散》

――それは、やはり制作費が少ないから安

い声優さんを使わざるを得ないという、ギャラの問題も関係してくるわけですね。

田中　あるでしょうね、それは。

———何人かの若手の方にも話をうかがってきたんですが、やはり声優だけでは食べていけないって方が多かったですね。その点について、生活とからめて声優という仕事についてどう思いますか。

田中　嫌いじゃないのね、嫌いじゃないけどモノによるわね。すごくいいなって充実しているものと、お仕事って受け止めるものとあるな。

…今ちょうど、うちの事務所は解散になる時期で、なくなっちゃうんで、うちの連中には節目なんですよ。フリーになる人、他の事務所に移る人、…今考えなきゃいけない時でね、プロジェクト・レヴューのみんなは。私も年齢もあるし、子供持っちゃったし、自分の好き勝手にはできない。生活の問題でもね。だけど、主人とも話をしているんですけど、私は芝居をやめることはできないだろう。だから生活のことを除けば、いわゆる声優の仕事とかはやめられても、芝居はやめられませんっというのは主人は解ってくれていて。

今度の三月には一緒にやるんだけど、彼が原案・演出・振り付けっていう感じで、私が主役の少年役をやるという、子供向けのものを作るんだけど、かなりの赤字になると思うんですよ。青山円形劇場でやるわけね。本当はなるべく毎年やっていきたいと思っているから、赤字を抱えては続けてられないと思うんだけど、ともかくとっかかりを作りたい。とりあえず良いものを作る自信はある。いいメンツを揃えたし、スタッフも役者もみんないい人、あきらめない人を揃えたし。絶対いいものができる。だからその続きはやり易くなる、一回見てもらえばきっとスポンサーも今よりもつけ易くなるだろうと言って。とにかく一回は頑張ってやろうって。

もし今までのように2人だけだったらね、それだけですんだんだけど、やっぱり子供のことを考えちゃうと、すごく心配な部分があって。それで、子供のための貯金—学費とか孝祐（編注・お子さんの名前）のためのに使えるお金をずっと貯金しているんだけど、これには手をつけないっていう…。これに手をつけるようになったら、やはりやめんといかんわねって話はしているのね。生活の部分を抜いといて、芝居と声優の仕事とを考えた場合、私も主人も芝居をとると思う。健ちゃん（編注・ご主人の柴本広之さんのこと、結婚当時の芸名を阿部健太といった）がやりたい芝居と私がやりたい芝居と種類は違うけどね。だけど、やはり生活のことはかなり重くある。だから、その兼ね合い…っていうか、今ちょうど岐路に立たされているからね、よく考えないと。事務所選びに関してもね。

あと、身体のこともあんのよ。私、目が悪

いから、弱視なのね。そういう意味では洋画のほうを増やしていきたい、声優の仕事をするならね、耳がある方が。つまり、目だけが頼りのものは今でもかなりきついの。ロングにひいた絵だと、口パクがもうほんと見えなくて。で、だんだん目に近い方も危なくなるじゃない。…目がなくなってしまう（笑）。

――最近、映画の仕事、確かに多いですね。

田中　うん、ありがたいと思っているんだ。だから、そっちの方へ転向していければいいな、と思っている。

――印象に残っているのは、『ケニー』とか『インディージョーンズ』…

田中　『インディージョーンズ』は楽しかったわ。

《日常の仕事へのジレンマ
――劇場版とＴＶのアフレコの密度の違い》

――今まで役者をやってきた中で、気にいっているお仕事とか役とかありますか。アニメとか、あるいはアニメに限らず。

田中　本当の意味で答えちゃうと、私は舞台の方で考えることになっちゃうんだけど…。もし、本当に私をかってくれる演出家や作家に出会って、そういう人からいただいた私の一生に一本の当たり役があるとしたら、まだそれには巡り会っていないと思う。まだ、私には当たり役はなかったと思っている。

――やはり舞台の方で…。

田中　舞台のほうに気持ちがいっちゃうからね。声優としては『天空の城ラピュタ』はすごく良かったなって。すごく良い作品だったし、やはり映画だと丁寧に作れるじゃない。

　ＴＶシリーズだと三時間位で採っちゃうわけだし。行った日に台本もらって、その場でチェックして、一回テストして本番となっちゃうし。自分もディレクターも妥協しなくちゃいけないしっていう、もうアフレコの時間が決められているからさ。

　劇場用だと、台本を前もってもらえてある程度研究できたり、時間もスタジオでたっぷりとって、結構一言にこだわったりして丁寧にとるから。そういうのやっぱりいいよね、時間のかけ方が違うから。

　あと声優としては、『銀河鉄道の夜』…。あれも何度も時間をかけて採ったり、別々に採ったりね。最後の方では、私があんまりに気持ちがあがっちゃうんで、その前のセリフと別々に採ったりね。でも結局トータルで採ったのを使ったけどね、本編を見たら。やっぱりつながらなかったんだろうね。そういう風に丁寧にこだわるから、充実するよね。

　そういう意味でも、アニメ三〇分のとかレギュラーとかやっているとさ、時間も決められてるからさ、役者って気がしなくなってくるの。職人って気がしてくるの。サラリーマンって感じで、レギュラーで朝一〇時に行って、一二時半に終わって、何しろ時間に合わせてっていう。だから職人みたいな…職人っ

PROFILE プロフィール

☆本名・同じ　S30.1.15生まれ

S52.10 TV「激走ルーベンカイザー」 高木 涼子
55. 1 TV「ベルフィーとリルビット」 リルビット
56.10 TV「ダッシュ勝平」 坂本 勝平
56.10 TV「うる星やつら」 竜之介
57.10 TV「さすがの猿飛」 忍豚
58. 1 TV「未来警察ウラシマン」 ジタンダ
59. 4 TV「巨神ゴーグ」 田神 悠宇
60. 7 劇画「銀河鉄道の夜」 ジョバンニ
61. 2 TV「ドラゴンボール」 クリリン、ヤジロベー
61. 8 劇画「天空の城ラピュタ」 パズー
63. 2 TV「おそ松くん」 チビ太
63. 4 TV「魔神英雄伝ワタル」 戦部 ワタル
H 1. 4 TV「獣神ライガー」 剣
教育ＴＶ 「お〜い・はに丸くん」「やっぱりヤンチャー」
ラジオ 「アニメトピア」「ペアペアアニメージュ」

　ほか多数のＴＶ・映画・洋画吹替え・ＯＡＶ・ＣＭなどに出演。実力派声優として活躍中。プロジェクトレヴューに所属（インタビュー時）。

ていったら、職人に失礼だよね。サラリーマンって言ってもサラリーマンに失礼？（笑）

要するにただ終わっていくという、そういう作業と同じようになっちゃうわけ、本当はそうじゃないはずなんだけど。だから、それがとっても嫌っていうか。

――不満ですか。

田中　うん、ストレスたまるよね。だから芝居をやるのかもしれない。もっと追求したいから。もっと役者でありたいと思うからかもしれない。

《三ツ矢さんのこと
　――芝居を通じて追い求めるもの》

――三ツ矢雄二さんとの付き合いは、『激走・ルーベンカイザー』からですね。そして、プロジェクト・レビューを三ツ矢さんが旗揚げするときに、それに田中さんも賛同したという。

田中　そうですね。参加したということに。

――三ツ矢さんについては、どのようにお感じになっていますか。

田中　これも語り始めたら、一週間しゃべってるっていうぐらい深いものがあります。今だって五年間一緒に作ってきた劇団を解散しようっていう時だから、一緒に作ろうっていった時からのいろんな思いがあって…。

今、一人の役者として言うと、彼は役者としてとってもおもしろい人ですね。すごく魅力的な人、芸術家としても。彼がもし作家・演出家として大成していくとしたら、それは、彼が女の気持ちも男の気持ちも解るからだろうなっていう風には一緒にいて感じた。女の気持ちを彼が解る、彼が女の気持ちになれること、逆に男の気持ちにもなれる。だから、芸術家にホモセクシャルの方が多いというのは解る気がする。すごく神経が鋭いっていうか、両方の気持ちがとってもよく解る。で、女を女以上に演じられるし、それでいて男もちゃんと。

彼、「りりしいおかま」って自分では言っているけど（笑）。

――りりしいおかま？

田中　確かにそういうりりしさもあるし、そういう点で彼はすごくすばらしい人だと思う。

でも、やっぱり彼と別れていく立場にあるという意味で言えることは、彼と私の追求するものが何で違ってきたかというと、やはり私が結婚して子供を持ったことが大きくあると思うの。かれはやはり、そういうことを面白いとは思わないんだと思う。

――それはどういうことでしょうか。

田中　私は日常生活を追求したいって思うの。ほんのささいな何でもない、人が死なない世界っていうんだけど、日常をやりたいと思う。夫婦の何でもない会話とか、嫁と姑の会話とか。だから歌を歌わせるとしたら、私は歌大好きなんだけどさ、お父さんが子供に勉強を教えてるのが、突然歌になっちゃうていうような、そういうものを舞台にのっけたい。

三ツ矢さんは、やはりどこかファンタジックなものや、ちょっと病気を持ったブラックなものや、そういうものをやろうとしている。そこで違ってきたなって思う。それは、私が結婚して子供を持ったことが一つの大きな原因だと思う。私が家庭というものに興味を持ってしまったから。家庭って何って面白いんだろうっていうことに。その面白さっていうのは、彼には一生最後まで解らないことかもしれないから。

それがお互い別のところでやって見ようってことだと思う。

――本日は長い間どうもありがとうございました。

Seiyu

「ハハハ、元気だったか、ヒミコォ」
　『ワタル2』が始まった。田中真弓さんの持ち味であるこの気持ちの良い笑いとともに、ワタルが一年ぶりに画面に登場した。「元気な男の子」役をうまく演じる多くの女性声優の中でも、この快活な笑い声を初めとする田中さんの演技には強く印象づけられるものがある。

　しかしインタビューの中で『ワタル』について、田中さんは「もっとおもしろくなるはずだと思う」とコメントした。確かにギャグという面から見ると、ヒミコ、シバラクなどアクの強いキャラが次々と出てくる『ワタル』の中で主人公のワタルは、ともすれば他のキャラの影に隠れがちになる。自分ではギャグを作れず、周りのギャグに巻き込まれる形でしかない、いわば「優等生」的なワタルは、名アドリブギャグ・プレイヤーである田中さんにとっては、まだ未完成なキャラクターなのであろう。

☆　☆

　インタビューは、冨永み～なさんの時と同じ信濃町の喫茶店で行った。のっけから、電話連絡のミスで、結果的に田中さんを三〇分待たせてしまうという失礼をしてしまった（田中さん、それに矢崎さん、本当にすみませんでした）。さらに、インタビューの最中に田中さんが、堀内賢雄さんが同じ喫茶店にいることを発見し（賢雄さんは田中さんと同じく、『コスビーショー』のアフレコに出るために信濃町に来ていたのだ）、賢雄さんに臨時インタビューをしてしまった（その内容を本誌に記載できなかったのは残念）。ちなみにマジな役の多い賢雄さんだが、ご本人はいたってアカルイ人である。

　ハプニングが続いて、その分慌ただしい感じのインタビューになってしまったが、田中さんは終始落ち着いた様子で今の心境を語って下さった。

☆　☆

　筆者の印象に残ったのは、田中さんが決して今の仕事や声優界の現状に満足していないことだ。すでに名実ともに優れた「声の俳優」としてファンの間に知られている田中さんだが、ほとんど「仕事をこなす」という流れ作業のような形で行われている日ごろのTVの仕事に、充足感を味わえないようである。舞台、それも日常劇を積極的にやりたいという言葉の中に、「役者」としての充足感を追い求める田中さんの姿勢を見ることができる。

　この田中さんの「役者でありたい」という姿勢は、多分他の声優さんにも共通していることであろう。ただ、その反面、その声優の世界しか知らない若手が増えていることに田中さんは危機感を感じているようだ。

　このインタビューにもある青山円形劇場の芝居に、この本の編集長が行ってみたところ、当日券が売り切れていて入場できなかったそうだ。田中さんの舞台活動はまずは順調に始まったようだ。筆者としては、田中さんの舞台も見てみたい一方で、やっぱりTVや映画館で流れる田中さんの元気な男の子の声も引き続き聞いていてみたいと思う。

（邦）

オモシロCD あ・ら・かると

最近、企画モノと言われるＣＤが盛んに発売されている。単なるアニメのドラマ編ではなく、本編からは離れた内容で、スタッフ、声優が一緒になって楽しんで作っているというのがよくわかる、ハチャメチャで面白い作品が多い。その中から私の選んだ3枚のＣＤをご紹介したい。

まずは「天空戦記シュラト・Soul Lovers Only」から。これは、ご存じ八部衆がそれぞれ得意の隠し芸で競い合うというストーリー。その隠し芸の内容がムチャクチャで、下ネタビシバシ。天王リョウマは堀内賢雄さんそのもので、完全なギャグキャラになり果てていた（賢雄さんゴメンナサイ）。さらに松本保典演じる不動明王アカラナータのアスラ神軍一子相伝の隠し芸、水芸というのがこれまたスゴイ。舞台に仁王立ちになった彼はおもむろにズボン（をはいていたかどうかは定かではない）のジッパーを下ろし…。続きは買った人に聞いてくれ。

その他、助太刀に来たマユリは、いきなり大ボケかまして詩の朗読を始めるし（小杉十郎太さんて意外とひょうきんだったのね）、極めつけは林原めぐみ一人三役によるレンゲ、由美子、ミーの会話である。これが別録りじゃないってんだからオドロキだね。これはもうシュラトファン必聴、おすすめの一枚である。

続いて、「獣神英雄伝ワタライガー・今宵はここまで」を紹介しよう。内容は題名とほとんど関係無く、男女十人の声優が繰り広げるミニドラマ集のようなものである。

林原めぐみのほっぺたはドーム球場みたいだとか、松井菜桜子の顔がウーパールーパーみたいだとか、水谷優子は色気ゼロのガキだとか、男性陣が女性陣の事を好き放題言うコーナーの他、子安武人演じる強迫神経症の青年の話はシュラトのガイとは違った子安さんの一面を見る事が出来る。そして最高に笑えるのが、下ネタ言葉を女の子に言わせて喜ぶ松本保典演じる、セクシャルハラスメントマンと田中真弓演じる、おやじギャルXとの壮絶な下ネタ合戦の話である（しかし、よくこんな企画が通ったよな）。

その他、お馴染みほっちゃんやまちゃん（堀内賢雄&山寺宏一）のコントや、『超弩級無敵合身サウザンガー』をはじめとするロボット物の合体シーンも見物ならぬ聞き物である。ちなみに『サウザンガー』54号機のパイロットはベンジャミン松本というそうである。このＣＤは、完全な声優ファン向けとなっているのが特徴。

最後にご紹介するのは、「らんま1／2・熱闘歌合戦」である。これがまたフザケたＣＤなんだ。歌詞カードには全曲フルコーラス歌詞が書いてあって、一見まともなボーカル集なのだが、実際は真面目な歌はほんの2、3曲しかない。

例えば、早乙女玄馬が今まさに歌わんとする寸前に水をかぶってパンダになってしまい、曲の間中パホパホ唸っているだけとか、九能小太刀役の島津冴子さんは完全にブッツン切れて、『森へ行きましょう』を「ホォーッホッホ！」だけで通しちゃうとか、ちょっとやり過ぎな気がしないでもない。しかし、山口&林原の二人デュエットは見事で、技ありといった感じである。まともな方では日高、佐久間、林原の『リトル★デイト』や佐久間レイのソロなどが非常に良かった。

以上3枚のＣＤ、声優ファンなら必聴ですぞよ。

（阿佐美）

番外特別編 録音音響監督

…第一声を聞いただけで、『この人はうまくなる』と感ずる人が千人に一人ぐらいいるんだよ。そのうちの一人ね、林原めぐみさんは。

斯波重治

Shigeharu Shiba

89/11/6オムニバス·プロモーション事務所

――このお仕事（映画などの音響関係）を始めたのはいつ頃からですか。

斯波　僕がこの仕事を始めたのは、昭和三八年の頃からです。アニメーションをやり出したのは今から一三、四年前じゃないかな。それまではテレビの外国映画の吹き替えなどが主で、例えば「太陽がいっぱい」とか「天井桟敷の人々」とかいった名作物、フランスのものが割合多かったんです。それがあるとき、「科学忍者隊ガッチャマン」を読売広告社で作ることになって、そのときにアニメを始めてやったんです。

で、それをやってから、アニメーションばかりで来ちゃったんですけどね。

――現在、TVレギュラーは何をやっていらっしゃるのでしょうか。

斯波　「ジャングル大帝」、「らんま½」、「あひるのクワック」という、その3本です。それから、うちでやってるもう1本の「パトレイバー」は、ビデオから映画まで僕がやっていたんですけどTVシリーズでは浅梨（なおこ）がやっていって、それで今うちでは現在TVシリーズは4本やっているんだけどね。

――基本的な質問なんですけど、音響監督の仕事というのは基本的にどういう仕事なんでしょうか。

斯波　これがまたねえ、よく聞かれる質問なんですけど。分業化の進んでいるアニメーションにだけある変な仕事なんですけどね。

それで僕らの音響監督というのは、実は音

響という言葉から、音の響きで効果と結びついて、効果さんの仕事と同じように受け取られる場合があるんだけども、効果では全然なくて、言ってみれば「録音の演出」ということが主なんです。

「録音の演出」というと何かっていうと、フィルム—台本にしたがって絵も出来て、映画の流れにカッティングされた、ひとつのフィルムがありますね。それは、絵は完成されているから、あと半分、つまり音関係を、俳優さんのセリフ採りを含めて、すべての録音とその全体の構成・演出を考えて、そして最終的に音を全部ミックスして音のほうの完成品を作り上げる。それは勿論絵と一緒になって立体的な作品になる、というのが大まかにいうと仕事なんです。

※具体的な仕事の流れはチャートを参照。

《声優の持ち味の生かし方》

——斯波さんとおっしゃいますと、私には、声優さんの新しい役作り、持ち味を引き出すのがうまい方というイメージがあるのですが。

例えば、古川登志夫さんや神谷明さんなどそれまで二枚目を演じていた方に三枚目の役を演じさせてみたり、平野文さんのラムの声を開発しておられます。最近ですと林原めぐみさんにいろいろな端役を演じさせて、それが「らんま」に生きていると思いますし、そういう点で、新しい役作りとかのプランをご自身で立てていらっしゃるのでしょうか。

斯波　だからそれはねえ…運なんですよね。どんな作品が来るかわかんないんだよ。僕自身が宮崎駿さんのように自分の作品を作るのではないから、この仕事というのは受動的になっちゃうわけ。それが良いか悪いかは別にして、現実はそうなんだよ。そうすると、僕のところがどんな作品をやってくれって頼まれるかで、そういう事も決まってくるわけね。

それで神谷くんの場合でいえば、あの人は「声優界のプリンス」と言われるぐらいに二枚目、二枚目（の役）で来てた人ですね。

でも役者というのは欲張りで、直接本人から聞かなくてもわかるんですよ、二枚目もやれるけど、必ず俺には三枚目もできるぞって、欲求不満になっているのが。そういう変わった役がやりたいぞ、ということを、五年十年やっているうちに必ず思う時期があるわけ。

また、デビューしたときから神谷くんは、声優の中でもいろいろな場面で主役級の役柄ができるものを持っている人だ、と僕らにもわかっていたし。そうすると、二枚目以外の役で、いつかバッと爆発させるというようなものがあるといいな、と多分本人も思っていただろうし、僕自身もそういう役をやってもらうと面白いだろうなと思っていたところに「うる星やつら」がきて面堂をやってもらったわけ。

そういうのは勘なんです。多分この人はそういう役でバッとふっきってね、面白い芝居がやれるだろう、それだけの素地は持っているな、というようなことは、やはり頭の片すみにはあるわけね。また、三枚目中心の人に、ものすごくシリアスな役を—やれない人もいるわけよ、でも多分やれるだろうと思う人にはその役を回してあげると、本人も喜ぶし、僕らも面白いわけよ、結局は。だからそういうことは、いつかチャンスがあればやってみようかなあ、といつも思ってはいるわけ。

で、たまたま神谷君の場合は面堂にぶつかって、神谷君自身も後で自分の役作りの歴史の中では、エポックメーキングの役であったと言っているけどね。

平野さんのときは、また別でね。仕事前に「うる星やつら」の原作を読んだときに「こ

れはでかくなる作品だな」という予感があって、それでラムには新しい人をどうしても使いたかった。最終的にどうしても見つかんなかったらこの人だ、というのを決めておいて、しかし僕も新しい人でやりたいし、周りのスタッフもフジテレビやキティのプロデューサーもみんな新しいフレッシュな人を使ってくれ、ということで探し始めたんです。あの当時、六・七〇人ぐらいオーディションしたかなあ、かなりしたんですけど。三・四〇人ぐらいしたところで、仕方がない、この人に決めようと思っていた時に、文さんがオーディション受けに来たんです。

いつものオーディションは顔を見たりしながらやるんですが、そのときはニュージャパンスタジオのCスタというところで、相手に背中を向けて後ろの方で声を出してもらったの。それで第一声を聞いたとき、おっと思った。すごく華やいでいて、またアドリブの入れ方がすごくうまかったのと、アドリブの最後に、「ククッ」てものすごく可愛らしくって色っぽい、いい笑いが入ったんだよ。それ聞いて「あ、決まりだな」と思ったんですよ。決めた後のオーディションというのは、もう簡単にパーッと…まあ、一所懸命やりましたけど（笑）、でもそれ以上の人はいなかった。

こういうのも、僥倖なんですよ。つまり文さんという人がいて、僕がお願いしたのではなくて、向こうから受けに来てくれたんですよ。しかもそれも「うる星やつら」だからそうなったんで、その作品が「うる星やつら」じゃなかったら、また違った展開になっていたかもしれないし。

林原さんの件については、最初に今、林原さんが属しているアーツビジョンの社長が連れて来てくれて会わしてくれてね。で、第一回のアフレコで第一声を聞いたときに、「この人はうまくなる」と思った。そりゃまだ役者になっていないときだから、基本も何もまだ知らないから、そういう意味では下手だけど。でも第一声を聞いただけで、「この人はうまくなる」と感ずる時が、そうだな、千人一人ぐらいいるんだよ。そのうちの一人ね、林原さんは。

それが良くて、「めぞん一刻」のときにはまだ彼女はある看護学校に行っていてて、夜だったから何とか来れるというので、少しづついろいろな役をほとんど番組レギュラーみたいな形でやってもらったの。一時この世界を選ぶか、それとも看護婦の資格を取ってそちらの道を進むか、ものすごく悩んでいた時期があってね。そのとき僕は「普通の人には勧めないけど、あなただったらこの世界でやって行けるよ」と言いましたけどね。他にもいろいろあって、結局、この世界に入ってきてね。そうしたら、たちどころにうまくなっていったし、レコードまで出しているし。

…そのほかに、千葉（繁）くんなども最初にやったときに「この人はいけるな」と思って使い出したし。

――「ドカベン」が最初になりますか…

斯波　そう、そうだね。それから玄田哲章もそうだし。…思わぬうちに長い間やっているから、何人かそういう人もいますね。

――二又（一成）さんとか島本（須美）さんとか……

斯波　二又さんは僕がやる前に誰かやっていたしね。ただ、彼も初めて出てもらった時に、―こう言うと彼が怒るかもしれないけど―「これは主役にはなれないぞ」と思った。だけど、脇役みたいな形ではうまくなる人だな、とも思った。だけど「めぞん一刻」の時にはついに主役になったけどね。そういう所はアニメーションは得なんだよね。

声優インタビュー

《オーディション・配役決定について》

――――…先程オーディションの話が出ましたが、決定する基準というと、最終的にはやはり勘なんでしょうか。

斯波　勘というか…例えばこういうことがあるんですよ。今「ジャングル大帝」でレオをやっている古本新之輔くん、彼は「エフ」の時にたもつでやってもらったんだけど、あれは不思議なキャラクターでしょう。ぬーぼー・コミカル、それでいながら、シリアスなときには本当に真剣で純粋で、実に友情を大切にするし、ものすごく素朴な面をもっているでしょ、たもつって。ああいうのを表現する人というのは、いないんですよ、声優の中に。

誰にしようかなあって困ってね。最後には、もう少し若ければいいなって思いながら、塩谷翼にしようかなという思いを心の中で持ちつつ、やっぱり探すわけね。

そのとき、古本君の妙な声を思い出してさ。これは何か別の作品のオーディションの時に砂岡事務所の人が連れて来てさ、で、そのとき「お、面白い声だな」というのが、耳の中にピーンと残ってて、それで、たもつで困っているときに、それを思い出してオーディションで声を採ったわけ。そうしたら、局のプロデューサーを始め全員が反対した、「これはものすごく危険だ」というわけ。もう降ろされる寸前まで行ったんだけど、あの時は僕が一人で頑張っちゃって、強引につけちゃったんですよね。

だから、やっぱり最初はものすごく苦労しましたね。だけど、彼は期待にぴったりと答えたね。ものすごく面白かった。たもつがいたおかげか知らないけど、シリーズとしては当たりませんでしたけどね。でも、妙なイントネーションの芝居を、自分の中で意識的にじゃなくて自然にそういう役ができる役者の素質みたいなものを、自分の持ち味として持っている男なんですよ。それがちょっと成功したのかなあ、という気がした。

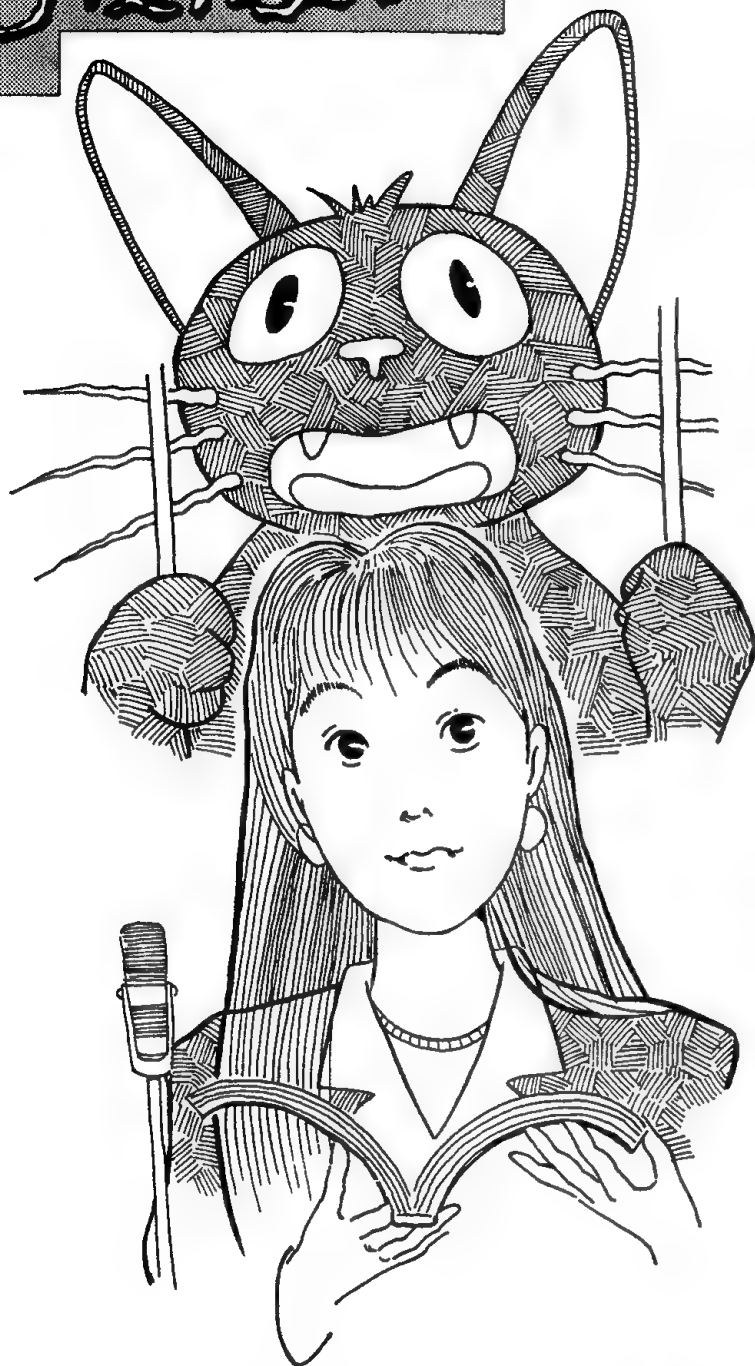
それは、もう勘というか…最後のところは勘なんだけれども、そこまで持っていくまでは、その俳優さんの声の質とか、役作りの仕方とかいう事を論理的に考えていく面もあって、行き着いた所で勘になって決めるわけですね、最終的にはね。

だから、全然考えないで、ピッと来て、最初からこの人っていうときもありますよ。それから全然来なくて、今言ったようにああでもないこうでもない、といって最後にピタッと来る時もある。最後までピタッと来なくて、「うーむ」というまま進んでしまう時もある(笑)。いろいろありますね。

――――そうなりますと、現在声優さんというのは、数の実態が把握ができないぐらい、恐らく三ケタか四ケタ単位でいらっしゃるかも知れませんが、常日頃からそういった声優さんの持ち味などを頭の中に入れておく…

斯波　だからそれはね、これだけコンピュータが発達したんだから、少しづつ分けて入力しておいて、必要な時にポンと出せたらいいなって（笑）。例えば、ふとっちょでコミカルでドジで、だけど人が良い、という役があるとするでしょう。そういうのをさ、僕らが見ている中で、分類して入れておけばさ、いざという時にポンとやれば30人ぐらいズラリッと出てきてさ（笑）、その中から選ぶようにすれば、随分楽だなと思いますよ。
　最近はちょっと疲れてきて、もう参っているんですけど、若いうちはそういう（声優の情報）のが自然にどんどん頭の中に入ってくるでしょ。
　また、この人は大体こういう役作りをする人で、こういう役をやったら多分成功するだろう、または多分失敗するであろう、という見極め、その見極め方が一番難しいんです。その見極め方みたいなものを含めて、僕らみたいな仕事をしている人達っていうのは、多分みんなそれぞれキャスティングするメソッド（手段）みたいな物を持っていると思いますよ。それが一体どういう物かというと、説明するのは大変で、ちょっと面倒臭いことになるんだけど…。
　僕の中でも振り返って考えてみると、いろんな要素が自然に結びつけて、さっとキャスティングしちゃうんだけど、そのキャスティングを思い付いた過程をたどっていくと、その裏側の、なかなか言葉に出来ないような複雑なメソッドみたいなものを、長年のキャリアの中で持ってるんです。そういうことじゃないかと思うんですけど。
――例えば、オーディションなどである役で受けたのに、他の役で、または端役で決まってしまうということもよくあるそうですが。
斯波　それは、こちらがその役でいいだろうな、と考えていたら実際は違う場合とかね。違うんだけれども、「あのときにああいう表現をしているから、こちらの方がいいじゃないか」というようにその場で発見するときがある、これがひとつ。
　それからもう一つ、この人はこの役でもなかなかうまいけど、もっと別の役はないかな、という場合ね。そうした場合、その人でまず採っておいて、キャスティングでどうしても決まらない役が一つ出てきてしまうときに、「さっき採っといたこの人は、この役でいけるんじゃないか」と考えるわけ。それでいける場合はやってもらうんです。
　だから、あてづっぽにやっているわけじゃ決してないんで（笑）。この役で受けて落ちたから、代わりにこっちの役、というような短絡的にあてはめるという形では勿論やってなくて、そこら辺の経緯はいろいろあるんですけどね。

《フィルムの制作事情悪化とキャスティング》

――シリーズ中に、ゲストキャラクターのためにゲストの声優さんを呼ぶ時に、お忙しくてなかなかじっくりキャスティングすることができないということもありますよね。
斯波　あります、それは。
――そうなりますとオーディション以外の役ですと、仕事を頼みやすいプロダクションとか劇団があるとか、そういうことはあるんでしょうか。
斯波　いや、頼みやすい、ということは別になくてね。
　今、フィルム事情が皆さんも知っていると思うんだけど、非常に悪いんですよ。だから本来は――話がちょっと飛んでしまうんだけど、アニメーションに関わった最初の頃は、僕らの時でも、毎回毎回音楽家と会ってね、

フィルムを流して、時間を計って、「ここにこういう曲を」という風に作曲家の人と一緒に見ながら作っていたんですよ、一本一本。それがさっき言ったように先採り音楽になってしまったでしょ。

　それと同じようにキャスティングも、フィルムが2週間ぐらい前に来てさ、フィルムを見て台本もきっちり読んで、キャラクターも全部動いているのを見て、お願いの電話を入れていたわけですよ。それがアニメの全盛と共に（フィルムが）間に合わない、予算の制約その他があって、もう目茶苦茶になって、結局今ではフィルムは何にも出来上がらない、出来上がるのは、線で書いたその人のキャラクターを形どったいわゆる「キャラクター表」という、その人の顔と姿が写っている、それ一枚ね。それと台本を見比べてそれでキャスティングしてしまう、という本来から言うと非常に目茶苦茶なことをやっているわけ。

　でも、そういうのが当たり前だと思って、アニメ会社の絵の方に入ってくる人達もいっぱいいるわけですよ。例えば、あなた達が来年あるアニメの絵の制作会社に入ったとするでしょ、そうするとそれが当たり前のこと、日常になっちゃうわけよ。本来だったら、昔やっていたそういう作り方が当たり前のやり方で、それより悪い作り方をしたら、良い作品なんか出来るわけないんだけど、現実はやはりそうじゃない。フィルム事情が全部悪くなってしまっている。

　そうすると、そのキャラクター表一枚で前日になっている場合もあるんだよ。そこで、この人に頼みたいというのを四人ぐらい考えますよね。で四人全員に電話したけど、もう遅くって誰もつかまんないという場合もある。困っちゃうわけね、明日なのに。そんな時には必死になって、あれやこれや考えて、この人はちょっと違うな、六割だなあ、と思っても、仕方がない、あいてないんだから、ということでその人にお願いするという事も勿論ありますけどね。

――そういう場合に新人とか使う場合もあるんでしょうか。

斯波　ゲストっていうのは、大体その話の中では大きな役で出てきますから、そりゃ、新人を使わないということはないけれども、やはり今までに少しでもキャリアのある人にお願いしますね。

　というのはどうせ今の状況では、フィルム自体が当日見てみても、色は着いてなくて線だけで、絵も何だかさっぱりわかんないっていう…。だから、その人にはキャラクター表を見せて「実はこういう絵が色着いて、あそこでこう動いて」と説明します。そこで、慣れている人でキャリアのある人だったら、そういう絵でもある程度役を作ってくれるんですよ。それが新人だと、やはりきついですよね。どうしても、どうやって良いかわからないな、ということになっちゃうし、それは幾ら説明しても……やはりそうなるとキャリア

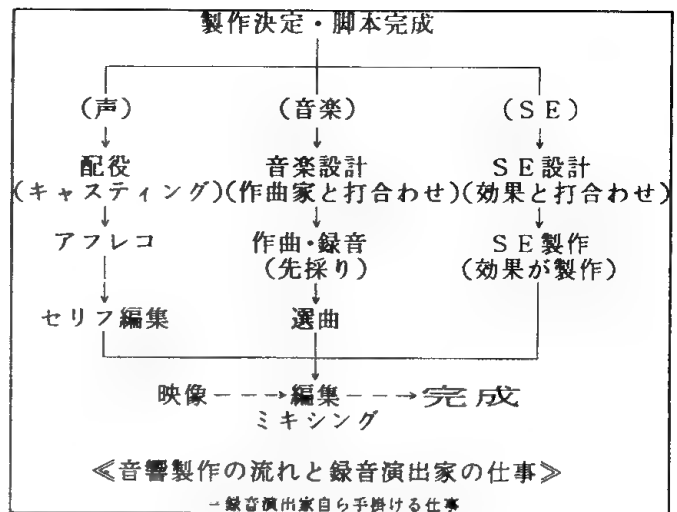
製作決定・脚本完成

（声）→ 配役（キャスティング）→ アフレコ → セリフ編集

（音楽）→ 音楽設計（作曲家と打合わせ）→ 作曲・録音（先採り）→ 選曲

（SE）→ SE設計（効果と打合わせ）→ SE製作（効果が製作）

映像－－－→編集－－－→完成
ミキシング

≪音響製作の流れと録音演出家の仕事≫
―録音演出家自ら手掛ける仕事

が生きてきますね。

――そうすると新人の方を登用するというのは、むしろレギュラーで新しい声が欲しいというときでしょうか。

斯波　そうですね。そういう場合でね。それから単発なんかでも、ビデオとかね、主役に新人を使おうという声もかなりありますね。

《若手声優について》

――そういう若手の方は急激に増えたと思うんですけど、最近の若手の声優の方は、昔の声優の方と、体質というか気質が違うなとお感じになることはありますか。

斯波　それは一般でも言われていることだけど、ものすごく、めげない。

――めげない…

斯波　めげない。昔の連中というのはね、まじめなんだよ。一所懸命考えて、演じる。けど「もう少しこういう風にやりなさい、そうでないとだめだよ。あと四、五回でもうそんなだめなら、もうだめだよ」と、ま、励ます意味で言うでしょ。そうすると、落っこっちゃう人が多かった。

　最近の若い人は、もうどんなこと言ったってめげないよ、あっけらかんとしているよね。あんまりにもあっけらかんとしているんで、「こいつ本当に俺の言うことを聞いているのかな」ていうことがあるぐらい。でも、そうじゃなくて、それはその人なりにしっかり考えている。でも暗くならないね、それはとても良いことですね。

　特に役者なんてやる場合、衆人観衆の中で恥をかくのが第一だから、恥かいたときにさ、自分に対して自己嫌悪を持つような…そういうナイーブさは必要なんだよ、そういう自己嫌悪を感じなくなったらおしまいなんだよ。とはいえ、それで昔の人は自己嫌悪を感じて、めげちゃうんだよ。だけど、今若い人というのは、めげないんだよね。そういうところはすごくいいね。

　ただ、それがもうちょっと〃飛んだ〃子になると、めげることもない、感じることもない、という人も増えているんだよ。それは困るんだよね。あくまでも、心の内部では、恥ずかしいとか、失敗したとか、「これはまずいぞ」と思ったこととかは、心のどこか片すみできちっと考えて押さえておいて、しかし、人前では全然何ともなかったように、めげない風にいる人もいるわけね。そういう人が、役者には向いているんですよ。

《監督と音響演出家の関係》

――アフレコの時には、映像の監督・アニメーション演出家の方と、録音演出家の方と、声優さん、この三者がメインになると思うんですけど、例えば役作りでそれぞれのイメージが違ったりした場合に、どういう風に意思の疎通をしていらっしゃるのでしょうか。

斯波　何と言ったらいいか…、それはとっても難しいんですけどね。…これは僕がいつも浅利とか、これから育てていこうと思っている人に言っていることなんですが、基本的には僕らの仕事というのは、僕ら自身が作っているわけじゃないの。作るのはやはり監督なんです。そうすると第一義的には、監督のイメージなり考え方なりを極力理解して、表現するようにバックアップするっていうのが、僕らの仕事なんです。それが基本ですよ。

　だからといって、監督が全て正しい、ということではない。そういう基本精神を僕らの方が持っておいて、なおかつ監督の言っていることが違っているときは、「それは違うと思います。ここはこう考えたほうがいいんじゃ

ないか」という風に監督に言うことによって、解消していくんですね。それはだから…非常に難しい質問だよね。

特にいま、入って四、五年して監督をやるような若い人達の中には、細かく、狭い範囲を深く見るんだけど、演出という立場で、その作品の世界全体の大きな所からの捉え方というのが、とっても足りない人が多いの。だから、そういう人が監督の時に、僕からしても、「この人は考え方が違うな、間違っているな」っていう場合があるわけ。それで、僕の場合はもう何年かやっていますから、監督に自分の意見を言って、実際に直してみたりします。

だけど、僕は自分を主張するということは、そんなにない。この仕事をやっている時は、どんなに若い人でも監督がいるならば、極力監督を立てなければならない、ということを第一義に置きますからね。ただ、本当に間違ったことを言っちゃったり、それを強引に押し通そうというときは、「ちょっとダメ」、ビシッと言います。

とっても難しいんだよね、アニメーションというのは。よく言われるんだけど、実写の映画ならワンショットの中に、眼差しとか表情とかセリフのしゃべり方とかさ、その人間がいる状況や気持ちを僕らに語りかけるものが、感じさせるものが、いっぱいあるわけですよ。ところがアニメーションというのは、残念ながら動かない絵が一枚平面であるだけ。表情だってそんなに動かない。だからそこから僕らが得る物は少ないから、足してあげなければいけない所がたくさんあるわけ。

ということは、例えば宮崎駿さんという、ああいう素晴らしい監督ではあってもね、自分の意図を絵の中にあれだけ細かく画いても、画ききれない場合があるの。そうすると、ある部分から先は、その子の気持ちや心理状態、行動について、いくらアニメーションで画いても画き尽くせなくて、監督だけがこうしたいと思っている部分が出てきちゃうんだよ。その時に、監督の考え方と違う方向で、その子がひとつのセリフをしゃべってもね、いいんではないか。それをいけないと言えるものは、今この時点で、そこまできたドラマの中で、まだ語られていない、という場合がある。

その場合、僕の考えと監督の考えとが違ってくることもある。こういう状態になったときが一番難しいんだよ。そこを、監督の考えと僕の考えとを話し合って何とか合わせて、今度は役者のほうにそういう立場に立ったダメ出しをしながら、そういう方に役を持っていくとか、ということをやるわけ。そこが非常に難しい所なんですよ。

《音響演出家の素質と演劇的センス》

——音響の仕事につくというのは、どういうコースを通るかというのは興味があるんですが。例えば、浅利さんなどまだお若いのにもう音響監督の仕事につかれているとか…。

あるいは音響監督というと、昔役者さんをやってらした方がなるというようなケースがあるようですが、演技を指導する時に演劇的センスとかいったものが大きいのでしょうか。

斯波　僕の考えでは、この仕事というのは、昔から女性でできると思っていたの、本当に。

ある意味では、そういうセンスが必要な仕事なんですけどね。全部が全部女が向いているとは限らないけど、ある種の女性にはかなり向いていると昔から思っていたんだよ。それで、浅利というのが来て、僕に付いてやってもう七、八年になるんですけど、見てたらやはり非常にセンスがあるんで、仕事やってもらっているんですけど。

PROFILE プロフィール

S47.10 TV「科学忍者隊ガッチャマン」に始まり、無数のＴＶ・劇場版・ビデオのアニメ音響制作に携わってきたベテラン音響演出家。この本の中で出て来た声優・演出家との絡みで見ると、

S49.10 TV「てんとう虫の歌」（安原義人）
51.10 TV「ドカベン」（千葉繁）
53. 4 TV「未来少年コナン」（宮崎駿）
56.10 TV「うる星やつら」（神谷明・平野文）
59. 3 劇场「風の谷のナウシカ」（宮崎駿）
61. 3 TV「めぞん一刻」（二又一成・林原めぐみ）
61. 8 劇场「天空の城ラピュタ」 田中真弓
63. 4 劇场「となりのトトロ」（宮崎駿）
63. 4 OVA「機動警察パトレイバー」 冨永み～な
H 1. 4 TV「らんま½」 山口勝平・佐久間レイ・高山みなみ　などの作品がある。

音声制作会社オムニバスプロモーション代表。「魔女の宅急便」の浅利なおこなど若手育成も手掛けている。

僕の基本的な考えでは、芝居心があった方が良いとは言える。それは何故かと言うと、何と言っても録音演出というのは、ドラマが基本なんです。ドラマをいかに表現するかをきっちり理解することから、つまり「本」を読むこと—そこから全てが始まるんです。

それが、キャリアを積んで職人的になっていくと、そんなことを考えなくても、見た瞬間にパパッとまとめられるという所までいっちゃうんだよ。だけど基本的には、その芝居をどういう風に理解するかというところから始まるわけね。それが、芝居心ということなんでしょうね。

舞台のうえの芝居を役者であれ演出であれ経験した人が、僕らの仕事をやるというのが一番良いだろうと僕は思います。だけど、そういう所でやる人は大抵こういう世界でやらないですよね。

《後進の育成と新人声優の発掘》

——後進の育成に関してはかなり積極的になさってらっしゃるのでしょうか。

斯波　まあ、積極的というか…。でも、他の仕事もやってはいるけど、うちのメインはアニメーション、それが一番慣れている仕事だし、今のアニメ界の中では多少とも、この会社も「音」としては認められているという段階に来ているから、投げ出すわけにはいかないでしょ。

正直言って僕も—かなり年なものですからね—疲れてきているし、現場の仕事というのは、もう後数年で、やるのは無理かなと思うんですよね。その時に、仕事をやれる人を作っておかなければならないから、ここ二、三年は一所懸命そのことにかかると思いますけどね。しかし、これは業界全体の傾向では決してないけどね。

この仕事は暗い仕事です、はっきり言って。お天道様を拝めない（笑）。いつも暗いスタジオでさ、それで今だと、見えない絵を見ながらさ、夜の夜中もやることがあるという…。全く、このハイテクの世だと言うのに、ひどい現場ですよ。ただ、この仕事をやっている以上は、やはりきっちりやらないという、日本人の大勢を占めるA型気質みたいのがあるんですよ。そのためにも、若い人に仕事をやってもらわなければなりませんしね。

——それでは、発掘してみたい新人声優に関してはどうでしょうか。

斯波　それはもう、ものすごくしたいですよ。とはいっても、忙しいこともあってなかなか行けないんだけど、時々いろんな舞台に行ってますよ。いつも八割失望しますけど、でもいい人はやはりいるんですよ。そういった人を使ってみたい。

例えば、山口勝平君は肝さん（肝付兼太さん）の舞台を見に行って、その中で黒子の役をやっていた何人かの一人だった。黒子だから顔が見えないんだよね。だけどその四人の中で、その素直な芝居というのが目についた。それに年に似合わず若い声を出すしさ。不思議な人だなって。それでやってもらうってことになったんですよね。

ところが、その「ああ、これは」と思う人は、そうねえ、…五、六百人に一人ぐらいかなあ。それから、必ずこの世界で安くても飯が食える、主役もやれる、ちょっとやれば、みんなに認めてもらえるという、そういう人は、千人に一人ぐらいかな…。なかなか見つからないものですよ。

Seiyu

（斯波さんとのインタビューを終えて…音響演出家とアニメーション監督の関係について）

「こわい人だよ」

これは、劇場版「めぞん一刻・完結編」、TV「らんま½」などで斯波さんと仕事をしたことのあるアニメーション演出家・望月智充さんに、斯波さんの印象をうかがったとき、開口一番に出てきた言葉である。その訳を聞くと、

「例えばアフレコのとき、斯波さんに〃これとこれ、どちらにする〃と聞かれた場合、こちらが安易に〃お任せします〃と言うと、〃あなたがたが作ったんでしょ〃という感じのことをきつく言われてしまう。そういう中途半端な妥協に対しては厳しい人」

また、望月さんは次のようにも語った。

「僕個人としては、映像の部分―絵コンテでこだわれる絵の部分全体の出来に関心があるし、それに特に音響に詳しいわけでもない。」

「とは言っても、アフレコの時に、シナリオに対して基本的な誤解が生じた場合―クセのあるしゃべり方をするキャラクターの場合や、声優さんが疑問形のセリフを感嘆形にして言ってしまったりした場合など―には、勿論注文を出す。しかし、それ以上のことは、音の専門の人の仕事だと思っている」

斯波さんは録音演出の仕事を「監督のイメージや考え方を表現するのをバックアップする」と同時に「監督が映像の中で表現しきれなかった部分を補う」とおっしゃっていた。このことと先程の望月さんの語ったことを踏まえて、筆者は次のように考えた。

――音響演出家としては、作品を作り上げていく上でのしっかりとしたイメージや考え方を、〃絵〃の方から示して欲しいと考えている。それゆえに、〃絵〃の方に中途半端な妥協が見られたときは、若手の監督から見れば、〃こわい〃ほどに厳しくなるときもある。しかし、そのような〃音の作り手〃としての姿勢が音響演出の側にあるからこそ、〃絵の作り手〃―アニメーション演出家としても、音の部分を任せることができる、という信頼関係があるのではないだろうか…。

八九年秋の番組改編期での新作アニメの急増により、現在フィルム事情はますます悪化している。こうした中で、完全にビジネスと割り切って、作品を作っている会社もあるかもしれない。しかし、一方で製作費の制限とスケジュールに悩ませられながらも、〃絵〃のスタッフも〃音〃のスタッフも、両者の間の〃プロとしての信頼関係〃に基づいて、なるべくよい作品を作ろうとしている所もある…この取材を通じて、筆者はこのような感想を持った。

＊　＊

この約九〇分のインタビューの間に度々事務所の電話が鳴り、斯波さんも四、五回電話のために席を立たれた。応対する斯波さんの話し声からそれらは、アフレコスタジオ、レコード会社、アニメ演出家、声優など、様々な所からかかってきた電話のようだった。

斯波さんは私たちスタッフには大変穏やかで、質問にも丁寧に答えて下さり、とても「こわい」という感じは受けなかった。しかし、次々にかかって来る電話と、それに応対する斯波さんやスタッフの方々の姿に、制作現場の多忙な日常の一端を垣間見た思いがした。

（邦）

て儲かるの？

声優ギャラ裏(うら)事情

私達が行ったインタヴューの質問の項には、必ず「ギャラに関して」の項があった。「声優のギャラは安く、生活は苦しい…」、これまでアニメ誌を始めマスコミでも報じられてきたことである。そこで、声優を始め、音響製作会社や日本俳優連合の話も含めて、声優の生活と製作現場の実態について見てみよう。映像やイベントなどでの演技やファンサービスの世界とはまた違う、芸能関係で働いている「労働者」としての立場からみた、声優の実生活の一端が浮かんでくる。

声優のギャラは「ちょっと割りの良いアルバイト」程度

まず声優インタヴューでの話題をもとに、若手の声優（仮にAさんとしよう）のギャラと生活のモデルケースを考えてみた。（このモデルケースは、特定の個人を基にしたわけではない。）

Aさんはデビュー二年目、TVシリーズで当たり役を得てファンへの知名度も高まりつつある。おかげで最近TVシリーズのレギュラーも週四本に増えた。しかし、収入の方は一本平均八千円、一カ月で一二万円位である。もちろんボーナス等はない。しかも、レギュラーのうち二本は次の改編期で打ち切りになりそうである。そのため、空いている時間はアルバイトをしている…。

声優のギャラの安さについては、有名な逸話がある。初の国産アニメ「鉄腕アトム」が、アメリカに輸出され放映された際、英語版のアトム役の女優はビバリーヒルズにプールつきの家を買った。しかし、日本のアトム役の清水マリは子供用のビニールプールが一つ買えただけで、あとは生活費で消えてしまったという。

これは今から20年も前の話ではあるが、現在でもこの状況は基本的には変わらない。むしろ、近年の若手の声優の増加、製作本数の増加、オリジナルビデオアニメ（OVA）の急増などによって問題はさらに複雑化していると言えよう。

声優のギャラとに関しては、かつて永井一郎氏が文藝春秋「オール讀物」八八年九月号で、「磯野波平ただいま年収164万円」という文章を書いている。

それによると、すでに五〇代後半のベテラン声優である永井氏でも、代表的なレギュラー番組である「サザエさん」の一年分の出演料（手取り額）は約一六四万円。当時三本のレギュラーを持っていた永井氏の年収は約五〇〇万円と推定できる（注1）。レギュラー一本では（たとえそれが国民的人気番組に出演しているベテランであっても）生活していけないし、年収にしても同年代のサラリーマンのそれに及ばないのであ

る。それでも永井氏の出演料は高いほうで、先程のモデルケースでもわかるように若手声優の生活条件はさらに悪い。

ある音響スタッフは、次のように言う。

「TVシリーズのアフレコに拘束される時間は一回三時間から四時間ぐらい。これは、他の俳優の出演時間やあるいは普通のサラリーマンの労働時間に比べれば少ない。だから、時間給としてみると、声優もサラリーマンもそう変わらないかもしれません。しかし、声優として周りから認められるようになるには、それなりの特殊な素質と実力がいるわけで、そのような才能や技術に対する報酬はまったくない」

こうして見ると、声優の収入はサラリーマン並になれば良い方、ということになる。しかし、永井氏は「声優はサラリーマンの収入の三倍なければやっていけない」という。なぜなら声優には「ボーナスは無い、有給休暇は無い、失業保険は無い、退職金は無い、厚生年金は無い、健康保険も国民健保で自己負担が大きい、何の保証も無い」からである。

『才能・技術に対する報酬の無視』
『収入・福利厚生の不安定性』
──「声優」とは誰にでも出来る仕事ではないのに、その待遇面は「ちょっと割りの良いアルバイト」程度のものでしかないのである。

このような状況は、アニメーションの制作事情の悪化と密接に絡んでいる。

（注1）これに再放送権料やゲスト・単発番組への出演を加味すると、年収はもう少し高くなるかもしれない。

制作状況の悪化──制作費の減少とスケジュールの切迫

斯波氏のインタヴューにもあったように、現在フィルムの制作状況は非常に悪くなっているという。TVシリーズの場合、その原因としては、直接的には次の二つが考えられる。

①制作費の制約…放送局・スポンサーからの制作費の限度額。
②スケジュールの切迫…企画・制作時間の制約。

この背景には、多くの制作事情が絡んでいる。

一つは制作を依頼する放送局、スポンサーが、番組の質的な向上よりも、番組が生み出す商業的な価値を重視する、という傾向が強い事にある。つまり、TVシリーズは、玩具・菓子類などスポンサーの製品を宣伝するための「三〇分間のCM」という一面を持つのである。そのために、商品イメージを高めるのに必要最小限のコストで制作しようとする。

また、番組の評価が視聴率に左右されている現状では、放送局の戦略としても短期的な視聴率の向上を求める傾向が強くなる。そのため、より安定的な視聴率の期待できるマンガ原作物や、過去の番組のリメイクが増加している。と同時に、制作に入る前の準備期間や制作期間も極端に短縮される傾向が強まっている。

さらに、映像メディアの中でもアニメーションは制作過程の分業化が進んでいるメディアである。例えば作画・彩色など人手がかかる部分を韓国など人件費の安いアジア諸国に発注するというように、分業化は制作費の削減に拍車をかけている。

それに加えて一九八九年秋の番組改編期によって四三本の新作TVシリーズの制作ラッシュを迎えた。こ

のため、極端に安い制作費で発注されている新番組もあったという。ここ数年、三〇分番組一話分の総制作費は平均約九〇〇万円、そのうちアニメーション制作会社には六〇〇万円から七〇〇万円が分配されていた。しかし、一九八九年秋には五〇〇万円を切るものも出て、制作費は全体的に低下傾向にある、という。また、制作数の急増は、特に動画・仕上げ（彩色）・撮影など人手がかかる部門や専門技術者の数が限定されている部門に皺寄せを生み、制約された制作スケジュールをさらに混乱させる要因になっている。（注2）

　声優のギャラを含めた音響部門の制作費は、アニメーション制作会社とは別会計で支払われている場合もある。正確な実体はつかめないが、やはり同じような低下傾向があると考えられる。

　また、スケジュールの遅れにより、アフレコの時までにフィルムが出来上がらず、「白味撮り」「線撮り」のフィルム—動画・絵コンテ、あるいは「線」（セリフのタイミングを表したもの）を撮影したフィルム—を使用することも多い。これは、アフレコの時の声優の演技の質や労力に影響するばかりでなく、撮影に二度手間を要するため、切迫しているスケジュールや制作費の制約にさらに拍車をかけるという結果をもたらしている。

　こうした悪い制作環境の中でも、声優を現場の人々の多くが、できるだけ良いものを作ろうという努力を続けていることを、インタビューの中から知ることができる。しかし同時に、細かい所までこだわった「質の良いもの」を作るためには、やはりそれなりの費用がかかるし、また「質の良いもの」に必ずしも人気が集まるとは限らない。ある音響制作関係者は、次のように語った。

「例えば音響部門では、声優や音楽に比べるとSE（効果音）は視聴者から注目されない事が多いし、また、音響部門自体が注目されないという事もあります。となると、〃音〃に八〇万円かけているものを一〇〇万円にまで引き上げても、そのアップした分の二〇万円が必ずしも視聴率のアップに結び付くという証拠は全くない。だから、注目されない部分から順になるべく安く、つまり音に金をかけない、安い声優を使う、ということになるんです」

　もちろんこうした制作事情の悪化は、絵を作る側—アニメ制作会社の方でも変わらない。この事態は、八〇年代前半のアニメブーム以降顕著に現れてきたが、八九年秋以降の制作ラッシュで更に加速しているようだ。そして、スケジュールの切迫によって加速化された制作費への圧迫は、声優のみならずアニメ制作に携わる人々全体の待遇面の悪化へと結びついているのである。

（注2）詳しくは、「アニメージュ」八九年一一月号・特集「現場は週四三本をどう作るのか？」を参照。メージュはこうした特集を組むあたりが偉いな、と思う。

日俳連（にっぱいれん）とは

　正式名称「協同組合日本俳優連合」。一九七一年二月、著作権法上の俳優の権利を確保するため、ジャンル越えたあらゆる俳優の正当な権利の擁護、演技力などの職能にふさわしい報酬と社会的地位の確立を目指し結成される。我が国では唯一団体交渉権を持つ俳優団体として、
①出演料の全体的な向上　②作品の二次利用（劇場映画のＴＶ放映など）、洋画・アニメの再放送に対する報酬請求権の確立　③放送局との団体協約の締結
などの成果を上げ、さらにその成果の拡大を図っている。理事長森繁久弥。

　声優に関しては、「日俳連・外画動画部会」で扱われている。日俳連の設立当時、吹き替え・アフレコは俳優の片手間仕事という認識が制作会社・放送局側に強かったという。こうした中で声優の待遇・権利の向上を目指し、声優の有志により一九七一年四月にこの部会が設立される。一九七三年夏には二〇〇人デモ・二四時間時限ストライキなどを行い、同年従来比平均三・一四倍のギャラアップ、その後も洋画日本語版・アニメの再使用に関する協定締結などの実効を上げた。

　現在、部会員数約八〇〇人。これは声優の八〇〜九〇パーセントにあたるといい、俳優の各専門分野の中でも組織率が特に高い。現在の部会長は池水通洋氏。

「ランク」——声優のギャラを保証するための制度の実態

声優さんにギャラの話をすると必ず出て来るのが、「にっぱいれん」という名前だった。日本俳優連合については別項に述べてあるが、その主な活動の一つにギャラを決定する際に大きな影響力を持つ「ランク」の設定がある。

声優のギャラは、「日本音声製作者連盟（通称音声連・注3）」に所属している音響制作会社から支払われる。少し立ち入った話をするが、日俳連では、音製連との交渉を通じてギャラを次のように設定している。

「出演料＝基準料金（ランク）
　　　　＋時間割増」
「総出演料＝出演料＋使用料」

☆「総出演料」…出演した時点で支払われるべき料金。出演した事に対する「出演料」と、「声」の著作権ともいうべき「使用料」に分かれる。

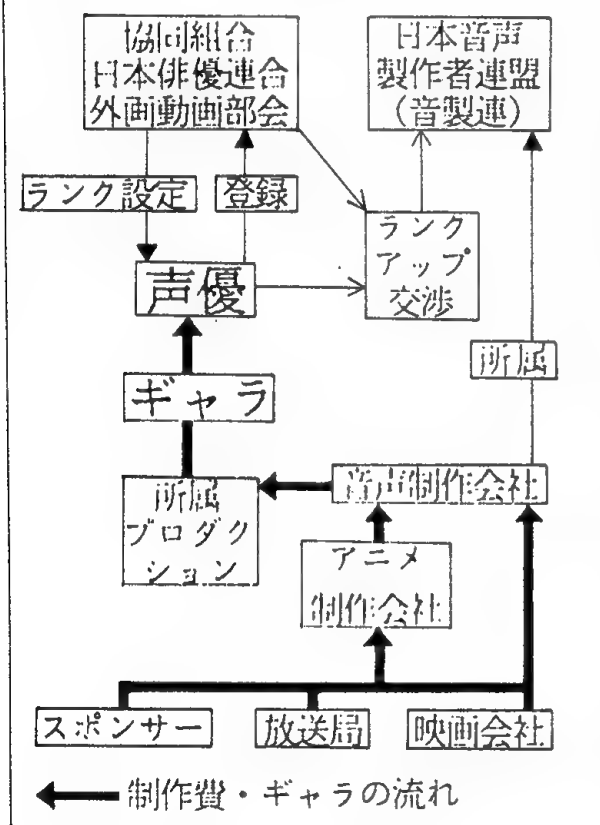
☆「基準料金」…これが、通称「ランク」。TV三〇分番組の出演料金を基準とする。「ランク」は最低を九千円、上限を三万円とする。（三万円以上の人は特にランクを設けない）

☆「時間割増」…三〇分を越える場合、三〇分毎に「ランク」の五〇パーセントを付け加える。

☆「使用料」…声優の出演した録音物（サントラなども含む）を使用する場合、使用する度に「使用料」を出演者に支払う。つまり、出演した時点で支払われると同時に、再放送や劇場版のTV放送などの際にも、声優が請求する事が出来る料金である。「使用料」は「出演料」を基に算定される。（三〇分のTV番組1話分だとランクの六〇パーセント分）

（ただし、この総出演料から税金の源泉徴収、所属プロダクションへのマージンなどを差し引くため、実質的な出演者の収入は総出演料の六〇〜八〇パーセント位になるらしい。）

このように「ランク」は、出演者のギャラを決定する際に中心的な役割を果たしており、俳優としての実力の評価を測る目安とされている。

「ランク」のアップは俳優側の要求と放送局・音声連（声優の場合）の同意により毎年四月に改定され、また「ランク」を下げることは禁止するというルールが確立している。

逆に言えば、ランクアップは年に一回、千円単位で行われるため、ギャラのアップは遅々として進まず、年功序列的な傾向が強い。また「ランク」がギャラを決定する唯一の要素であるため、ランクの高いベテランならば一言しかセリフがなくても、三〇分間しゃべりっぱなしの若手の人気声優よりもギャラは高くなる。

「ランク」の設定は、声優の側としては出演料のダンピングなどの横行を防止し、最低限の報酬を確保するという目的がある。同時に「使用者」である放送局・音声制作会社の側としては、一つ一つの番組につきわざわざ契約交渉をするという手間を省き、効率的にキャスティングができるというメリットがある。

しかし、この「ランク」の設定にも問題が生じている。

①　「ランク」の設定の水準そのものが時代の流れに取り残されているということがある。最低九千円に始まる「ランク」の基本水準自体が、すでに5年以上前のものである。そのため、ランクアップしても、物価の上昇や一般企業の給与水準の向上には追いついていけないという事態

組織図及び関係図―ギャラの流れ―

協同組合
日本俳優連合
外画動画部会
日本音声
製作者連盟
（音製連）
ランク設定
登録
ランク
アップ
交渉
声優
所属
ギャラ
所属
プロダクション
音声制作会社
アニメ
制作会社
スポンサー
放送局
映画会社
←制作費・ギャラの流れ

が生じている。
　また、若手の中には正式な「ランク」に登録される前の「準登録者」、いわゆる「ジュニア」が多数おり、最低ランクよりさらに低いギャラしか分配されていない。

②　使用者側の示す制作費の枠の狭い中で、「ランク」が高くなる、すなわちギャラが高くなると使われなくなるという傾向も強くなっている。

　永井氏の文章によると、三〇分番組一話あたりの出演者全員分の出演料枠が約二七万五千円分、平均出演者数が一五・五人、という。つまり一人当たりの総出演料が平均約一万八千円。これから六〇パーセントの使用料分を差し引くと、出演者の平均「ランク」は一万一千円となる。つまり最低ランク・九千円に近い声優が多用され、中堅・ベテランには殆ど仕事が来ないということになる(ちなみに永井氏はランク二万七千円)。ランクアップした途端に仕事が来なくなる、ということが起きるのである。

　そのため、ランクアップを希望しない声優が増えており、「ダンピングにならない範囲で、自分のランクより低いギャラで出演するという場合があっても良いのでは」という声もある。

③　ビデオなど新しいメディアの登場により、「声」の著作権にあたる使用料に問題が起きてきた。

　従来からのTVシリーズでは本放送および再放送における使用料は、放送回数にしたがってほぼ完全に徴収されているという。しかし、利益が販売本数に左右されるビデオでは、従来の使用料の基準がうまくあてはまらず、制作会社によっては使用料の請求を認めない所もある。

　また、玩具・食品などアニメの周辺の商品化権利料に関しては、放送局、アニメ制作会社、原作者を含む出版社に分配されており、声優は関係ないらしい。

　このように、「声優の最低限のギャラを確保し、声優の実力の目安となる」という意味をもっていた「ランク」も、制作費が一方的に減少している現状の中では、事態を打開する決定策とはなっていないようだ。

(注3)アニメ・洋画吹き替えを主たる業務としている音響制作会社の団体。

「好きな仕事で生活するのは後ろめたいことなのでしょうか」

　では、アニメーション業界の中に「悪党」がいて、それで分配の不平等が起こっているのだろうか。アニメーターなどアニメの「絵」の部分に携わるスタッフの多くも、やはり悪い労働条件と生活環境に直面している。音響制作会社や声優プロダクションが過大な取り分を取っているとも思えない。一方で、放送局や広告代理店のプロデューサーの個々人は、音声制作は音響制作会社に一任しているため、声優のギャラにまでは関与していない。

　つまりこれは、低予算・短期間制作という枠組みに組み込まれている、というアニメーション業界自体の体質の問題である。こうした状況の中ではプロとして「仕事をこなせばよい」という事になってしまうのだ。

　しかし、一方で、「良いものを作りたい」というのもまたアニメ制作者全体の基本的な考えである。やはり最終的には、何らかの形でのアニメ制作業界全体の取り分の拡大、すなわち制作費の向上が必要とされている。声優の場合なら、視聴率や劇場での興行成績、ビデオの販売実績に応じてボーナスを支払うという案もある。また、日俳連では二年ないし三年で出演料を二倍化させる方針を決めているという。

　池水通洋氏はギャラに関する声優の微妙な心理を次のように記している。

「(前略)好きでやってる仕事で生活するのは後ろめたい事なのでしょうか?　私等も言われます。『好きな仕事で生活できてお幸せですね。』内情を知らない人は我々の職業を羨ましがる。多くを語らず『お陰様で、感謝しています』と明るく答えることにしている。『いえ、とんでもない!悲惨な暮らしで…』とあからさまに言っては、余りに〃自分がかわいそう〃だし、我々の職業に対する憧れを踏みにじってはいけないという〃相手への思いやり〃と幾分の〃見栄〃などが交錯する。(後略)」
(日俳連ニュース四三号より)

　一視聴者である筆者としては、これからも良い作品・声優さんの妙技に巡り会うためにも、少しは現場の人達の「ナマ」の部分を知っていた方が良いと思っている。

声優大事典

阿佐美達也

編

あ行

青野　武

【青二プロダクション】
昭和？年六月十九日生まれ

「宇宙戦艦ヤマト」の真田志郎は余りにも有名。「こんなこともあろうかと作っておいてよかったよ」というセリフは一時アニパロネタで流行した。私の記憶では初レギュラーは「破裏拳ポリマー」の車錠という探偵長役である。その後「家なき子」のジュローム、「宇宙魔神ダイケンゴー」のロボレオン、昭和五十年代には「宇宙戦士バルディオス」のガットラー総統、「愛してナイト」の三田村秀麻呂ぐらいで目立った役はやらなかった。しかし、さすがにヤッコちゃんのお父さんと真田志郎を同一人物が演っていると知ったときには驚いたね。

昭和六十年代に入ると、にわかにアニメの仕事が増え、「コンポラキッド」の初代、「忍者戦士飛影」の悪役ハザード長官、「ウルトラキッズのことわざ物語」のグローサー先生、「北斗の拳」のリハク、「破邪大星タンガイオー」のターサン博士など多彩な役をこなした。最近では「ついでにとんちんかん」の毒鬼警部、「ビックリマン」のスーパーデビル、「ゲゲゲの鬼太郎」のぬらりひょん、「ドラゴンボール」の神様とピッコロ大魔王など、ギャクキャラから残虐無比の悪役まで演じている。

アニメ以外では、ゆうきまさみ原作「究極超人あ～る」のイメージアルバムで成原成行を演り、その声、演技ともにキャラのイメージにバッチリ合っていた。すでに〈青野節〉と呼べる程に、この人独特の演技の形を作り上げてしまった青野氏であるが、まだまだ年をとる毎に、いい味を出し続けているベテラン声優の一人である。

最近では、イメージアルバム「未来放浪ガルディーン」のキリー、「美味しんぼ」の快楽亭ブラック役などで活躍。

麻上　洋子

【アクセント】
本名・大久保洋子
昭和二十七年七月十日生まれ
蟹座　A型

アニメ声優を目指して声優になった最初の人だといわれている。初のアニメレギュラーは「ゼロテスター」のリサ役であった。そして、第1次アニメブームの火付け役である「宇宙戦艦ヤマト」の森雪を演じることによって人気急上昇、当時若手の女性声優が殆どいなかったことと、持ち前の明るさと比較的可愛いルックスなども手伝って、アイドル声優の走り的存在となった。

その後は「わんぱく大昔クムクム」のフルフル、「ポールのミラクル大作戦」のパックン、といった可愛らしいキャラや、「ブロッカー軍団・マシンブラスター」のユカ、「恐竜戦士アイゼンボーグ」の立花愛などの闘う女性も演った。「魔女っ子チックル」ではチーコ役だったが、そのとき共演したチックル役の吉田理保子とは人気ラジオ番組「アニメトピア」の初代パーソナリティも務めることになる。「トピア」のパーソナリティは結婚できないという説を最初に覆し、昭和六十年十一月にプロデューサーの大久保近下氏と結婚した。「宇宙戦艦ヤマト」シリーズでは森雪で全作品に出演、森雪はまぎ

れもなく彼女の声優としての代表作となった。

それからは「さすらいの少女ネル」のネル、「ベルフィーとリルビット」のベルフィー、そして異色作「伝説巨神イデオン」のハルル＝アジバを演じた。どこかの雑誌でハルル役は失敗だったという意見があったが、確かに彼女にとって少々無理があった。しかし今までの彼女のイメージとは異なる、新しいタイプのキャラに挑戦した事は十分に評価できる。

それ以降は、可愛いお嬢様のイメージを脱し、「銀河旋風ブライガー」のエンジェルお町、「銀河烈風バクシンガー」の不死蝶のライラ、「銀河疾風サスライガー」のバーディ＝ショウと一連のJ9シリーズで色っぽい大人の女を演じた。しかし結婚したあたりからレギュラーが激減、「名探偵ホームズ」のハドソン夫人、「おねがいサミアどん」のアンなどのレギュラーの他には、「オバケのQ太郎」のユカリ、「火の鳥」の速魚、「ミスターペンペン」の美加、OVA「マドックス01」の楠本マリー、「シティーハンター」の野上冴子など、単発・ゲストばかりが目立っている。それでも野上冴子は、色気ムンムンのキャラに成熟した声いく～いけが良くあっていて、非常にいい雰囲気を出している。最近では「ビリ犬なんでも商会」のタツオ役、OVA「うろつき童子」などで活躍。

伊倉 一恵

【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和三十四年三月二十三日生まれ

「シティハンター」の槇村香役で人気上昇中。声優歴は浅いが、もうけっこうなお年である。デビュー作、初のレギュラーは不明。私の調べた

限り、最も古い作品は「まんが水戸黄門」で、お琴という役をやっている。また同時期に「名犬ジョリィ」にも出演していた。代表作は「六三四の剣」の嵐子、六三四のライバルであり、友達でもある男勝りの気の強い女の子の役だった。「魔法のスターマジカルエミ」では、舞のクラスメイトのひ弱な男の子、小金井武蔵を演じた。また「魔神英雄伝ワタル」では、ワタルの敵であり、また真の「ともだち」である虎王を演じ、根強いファンを生んだ。

その他、「キャプテン翼」来生哲兵、「がんばれキッカーズ」キャプテン(本郷勝)、「機動戦士ガンダム逆襲のシャア」レズン＝シュナイダー、最近では「ピーターパンの冒険」のトートルズを演じた。

この人には、是非色っぽい大人の女の役をやってもらいたいというのが私の希望である。本人は、ちょっとキツイ感じのする美人だが、イベントに行ってもあまりしゃべってくれないので、実際はどんな性格の女性なのかわからない。音楽活動としては、声優の坂本千夏、神代知衣、プラス男性四人の合計七人で《ギャロップ》というグループを組んでライブ活動を行っている。ボーカル三人娘のハーモニーは絶妙で、下手な歌手は真っ青の上手さである。最近では「まじかるハット」ハット、「桃太郎伝説」、「ワタル2」などで活躍。

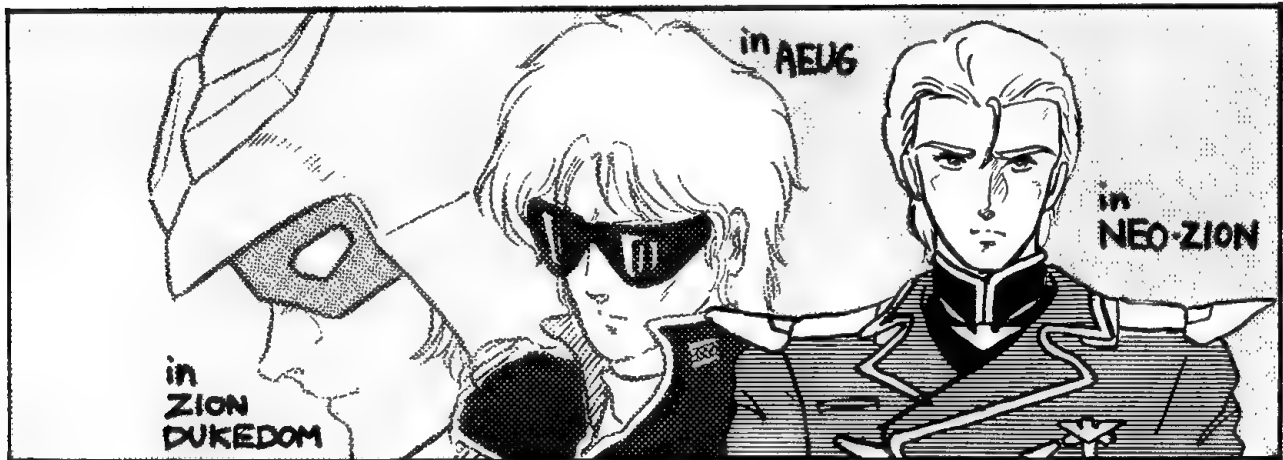
池田 秀一

【俳協】
本名・同じ
昭和二十四年十二月二日生まれ
射手座 O型

八才で劇団こまどりに入団して以来、役者生活は三十年を越える超ベテラン。その昔「次郎物語」「路傍の石」「がしんたれ」などに主演、全国のファンの紅涙をしぼった名子役である。最近、「大岡越前」に出演しているのを再放送で目撃、まだあどけない少年であった。私の母親がこの人の名前を知っていたのには驚いた。

アニメ声優としては「機動戦士ガンダム」のシャア＝アズナブルであまりにも有名。この人の声があったからこそ、シャアというキャラがあそこまで人気を得ることができたと思う。市川治ではこうはいかなかっ

いけ～いしただろう。「認めたくないものだな若さ故の過ちというものを。」などの名セリフを残し、これらは当時のアニパロやファンの間で大流行した。

おっと話を戻そう。シャア以前には「無敵鋼人ダイターン3」でコマンダー＝ラディック役を、その後は「火の鳥2772」でロック役をやったきりしばらくブランクが続く。この頃、同じ声優の戸田恵子と結婚。幸せな夫婦生活を送っていると聞いていたが、数年で離婚、誠に残念なことである。劇場版「ガンダム」終了後、「巨神ゴーグ」のロッド＝バルボアでアニメレギュラーが復活。「炎のアルペンローゼ」ではグールモン伯爵、OVA「幻夢戦記レダ」ではゼルを演じ、貴公子然とした二枚目を演らせたら天下一品ということを再認識させられた。そして、「機動戦士Zガンダム」でシャア＝アズナブルことクワトロ＝バジーナとして甦ったが、その余りの情けなさに人気が再燃することもなかった。これではあんまりだということで、劇場版「機動戦士ガンダム・逆襲のシャア」ではタイトル通り主役を張り、期待していたのだが、これまた思いきりコケてしまい、過去の栄光が再び彼に訪れることはなかった。可愛想な池田さん。

その他のキャラでは、「県立地球防衛軍」の電柱組の頭、「プロジェクトA子」の艦長、「燃える！お兄さん」の火堂害など、二枚目しかできないと思っていた彼がこんな三枚目ギャグキャラでもサマになってるんで驚いてしまった。

他に単発、ゲストでは「聖闘士星矢」スコーピオンのミロ、「バブルガムクライシス」メイスン、「ヴィナス戦記」カーツ、「宇宙皇子」魚養、「超人ロック」ロードレオン、「哭きの竜」竜、などがある。

池田　昌子

【俳協】

昭和十四年一月一日生まれ

「銀河鉄道999」のメーテル、「エースをねらえ」のお蝶夫人こと竜崎麗香役で有名。あの上品な女性の声がたまりません。アニメではその他に、「ペリーヌ物語」のお母さん、「クラッシャージョウ」のジョナ＝マチュア、「パタリロ」のエトランジュ、「愛少女ポリアンナ物語」のカリウ夫人などがある。最近では「火の鳥」の火の鳥、OVA「吸血姫美夕」美夕の母、「魔法使いサリー」隣のおばさん、などの声をアテている。

洋画の吹き替えでは名女優オードリー＝ヘップバーンの声を担当。

石丸　博也

【ぷろだくしょんバオバブ】

本名・石出伸二

昭和十六年二月十二日生まれ

水瓶座　A型

アニメ初レギュラーは御存じ「マジンガーZ」の兜甲児である。あの兜甲児の元気な声からは二十歳ぐらいの若者を連想するが、当時既に三十歳を越えていた。この人も芝居をやっていたけど食えなくて、声優を始めたというクチである。「UFOロボグレンダイザー」でも兜甲児役を務め、「SF西遊記スタージンガー」ではまたまた主役のジャン・クーゴに抜擢された。それから、「超人戦隊バラタック」のディッキー、「宇宙魔神ダイケンゴー」のライガーなど、ロボットアニメが大半であったが、その他に「マルコポーロの冒

■声優大事典

険」のコガタイという役もやった。

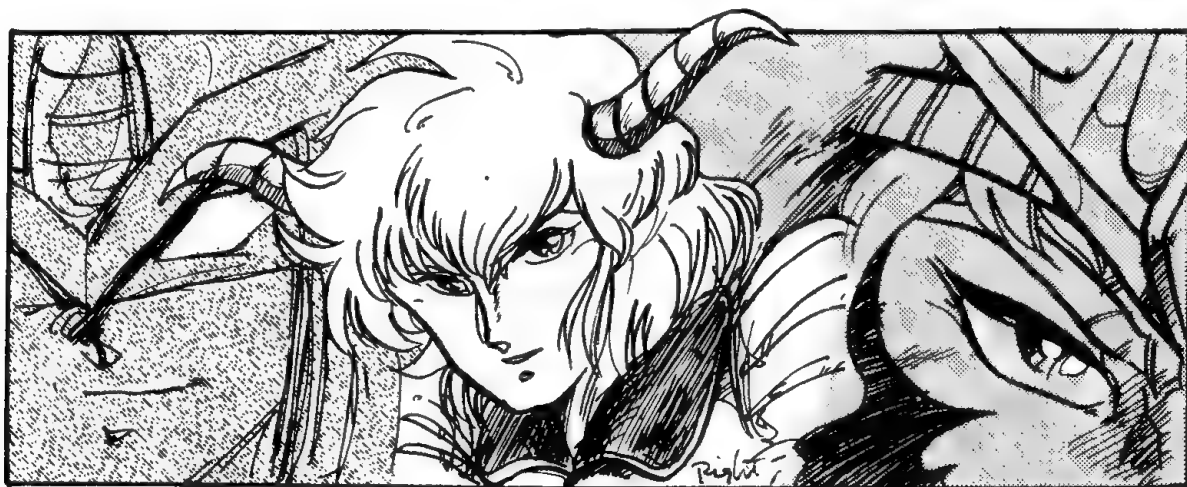
このように若い元気のいい青年ばかりやってきた彼であったが、寄る年波には勝てず、それまでのような役はあまり回って来なくなった。「最強ロボダイオージャ」のデューク＝スケード、「さすがの猿飛」のスパイナー学園の教頭、「超獣機神ダンクーガ」の葉月博士など、徐々に老け役になって行ったが、その後「ボスコアドベンチャー」では久々の主役級キャラ、タッティーを演り、「トランスフォーマー」ではロディマス＝コンボイというロボットアニメの主役に返り咲いた。OVAでは、「孔雀王」の王仁丸役がある。最近レギュラーが無いので、もっとガンバッテ欲しいものだ。

私は「ダンクーガ」の葉月博士が特に気にいっている。なんてったって、あの兜甲児を演ってた人が、今や博士役を演るようになったんだから、月日の経つのは早いよなぁ。

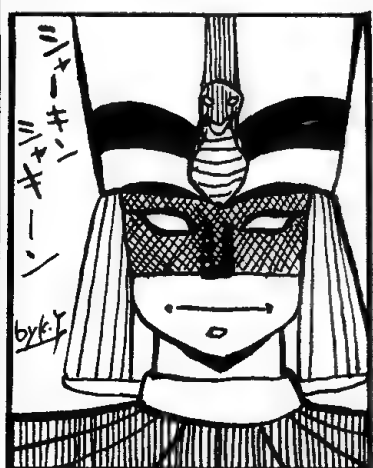
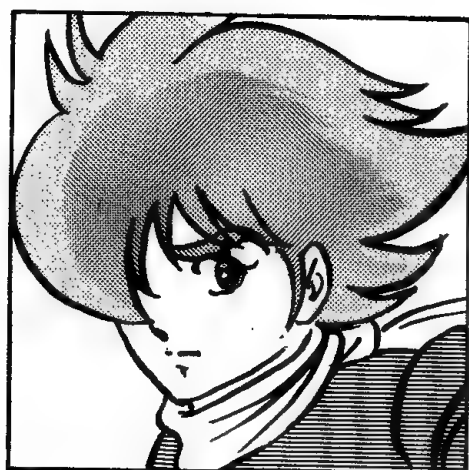
いち

市川 治

【アーツビジョン】
本名・同じ
昭和十一年六月二十一日生まれ
蟹座　AB型

「鉄腕アトム」のゲストキャラ、「スーパージェッター」のジェッター役と、日本のテレビアニメの創世期から声優をやっている超ベテランである。やはりこの人といったら「勇者ライディーン」のプリンス＝シャーキンを筆頭に、「超電磁ロボコンバトラーV」のガルーダ、「超電磁マシーンボルテスV」のプリンス＝ハイネル、「闘将ダイモス」のリヒテルと続く、往年の二枚目美形敵キャラ路線が有名である。この澄み透った、上品な、まさにプリンスと呼ぶにふさわしい声に、当時どれ程の女の子たちが酔っただろうか。あんな声出せるのは芸能界広しといえどもこの人しかいまへんで。

しかしそんな市川さんも二枚目ばかりやっている訳ではなく、旧「エースをねらえ」の千葉ちゃんや「ろぼっ子ビートン」のノーベル、「ベルサイユのばら」のオルレアン公などの役もこなしている。

その他に「激走ルーベンカイザー」のコリンズ、「未来ロボ・ダルタニアス」のクロッペン総司令、「ドカベン」の不知火、といった役がある。

その後、喉を痛め、声の仕事から離れていたが、数年前「超時空要塞マクロス」のボドルザー役で久々に姿を現し、我々ファンを驚かせた。最近では「鎧伝サムライトルーパー」の剣舞卿の声をアテ、あの美声を再び聞かせてくれた。

氏　　名	井上 和彦
本　　名	同じ
所　　属	大沢事務所
生年月日	昭和二十九年三月二十六日
星　　座	牡羊座
血 液 型	O型
性　　別	男
出　　身	横浜

≪演じたキャラクター≫

『一休さん』哲斎、『キャンディ・キャンディ』アンソニー、『超合体魔術ロボ・ギンガイザー』白銀五郎、『キャプテン・フューチャー』ケン・スコット、『新サイボーグ００９』島村ジョー、『ムーの白鯨』白城譲、『とんでも戦士ムテキング』遊木リン、『伝説巨神イデオン』ハタリ、『百獣王ゴライオン』黄金旭、『おはようスパンク』亮、『太陽の牙ダグラム』クリン、『ダッシュ勝平』松原キャプテン、『魔法の天使クリィミーマミ』立花慎吾、『おかわりボーイ・スターザンＳ』スターザンＳ、『星銃士ビスマルク』ビル、『機甲界ガリアン』ウーズベン、『三国志』劉備玄徳、『機動戦士Ｚガンダム』ジェリド、『炎のアルペンローゼ』レオンハルト、『タッチ』新田明男、『忍者戦士飛影』ジョウ、『蒼き流星ＳＰＴレイズナー』エイジ、『昭和アホ草紙あかぬけ一番』丹嶺光次郎、『メガゾーン２３・Ⅱ』ガラム、『マシンロボ』ロム兄ちゃん、『陽当たり良好』克彦、『赤い光弾ジリオン』チャンプ、『アニメ三銃士』バッキンガム公、『銀河英雄伝説』アッテンボロー、『超音戦士ボーグマン』チャック、『美味しんぼ』山岡士郎、『ＦＳＳ』コーラス三世、『天空戦記シュラト』レイガ、『らんま１／２』三世院帝、他多数

★コメント★

高校時代は弓道一筋、神奈川県大会の優勝経験もある。高校卒業後はプロボウラーを目指しボウリング場に就職するが一年でやめ、歌手が間近で見られるというミーハー根性から日本テレビ系の大道具会社に就職、しかしここでも体力が続かず四苦八苦している時、友人に誘われてテレビタレントセンターの試験を受け見事それにパス、一年間そこに通った後この世界へ入ったという異色の経歴の持主。アニメデビューは『ゲッターロボ』の科学者A役。しかし、食えない頃は神谷明によくおごってもらったそうだ。この人が名実ともに人気声優の仲間入りをしたのは、『サイボーグ００９』からだろう。そして、S55～S56年にかけては主役から端役まで週５本以上もレギュラーを持つようになる。

だが、それまで二枚目声優で通して来た彼も、56年の『ダッシュ勝平』松原キャプテン役でのくずれた演技が大成功で、それ以降二枚目路線とギャグ路線を並行してやっていくようになる。ギャグ路線の代表作といえばやはり、アニメ界不朽の迷作、『あかぬけ一番』の丹嶺光次郎であろう。

井上真樹夫

【青二プロダクション】
本名・井上孝夫
昭和十五年十一月三十日生まれ
射手座　O型

アニメ初レギュラーは「巨人の星」の花形満だと思われる。燃える瞳、長い前髪、中学生なのに何故かスポーツカーを乗り回している所など、かなり話題になったキャラではあった。「巨人の星」終了後に、この人が古谷徹に「君とはライバル同士の役だったので普段からあまり話をしないようにしていた、悪く思わないで欲しい。」と言ったというエピソードがある。この話を聞いて、改めてこの人の芝居に対する情熱の深さを感じさせられた。

それからは「男どアホウ甲子園」藤村甲子園、「さすらいの太陽」ファニー、「ミクロイドS」ヤンマ、「侍ジャイアンツ」眉月光、と次々に二枚目、主役を演じた。五十年代に入ってからは、「勇者ライディーン」神宮寺力、「少年徳川家康」広忠、「大空魔竜ガイキング」ピート、「キャンディキャンディ」アルバートなど、いの

渋い脇役をやる事が多くなったが、五十二年には「新ルパン三世」石川五右衛門、五十三年には「宇宙海賊キャプテンハーロック」ハーロックと、この人の代表作となる二役を相次いで演じ、若いアニメファン、特に女の子の支持を得るようになった。

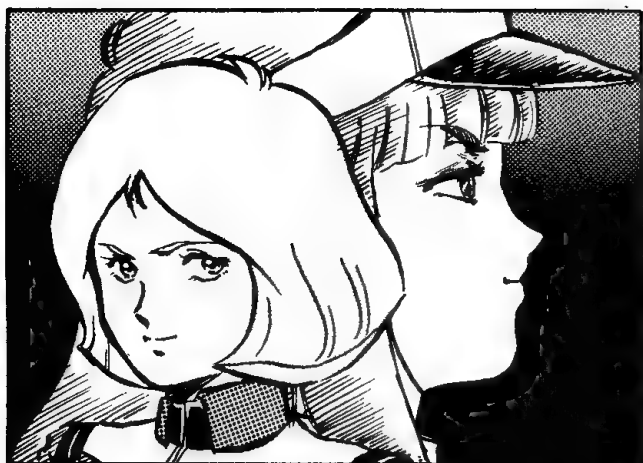
またその頃から、神谷明、富山敬と共に「声優御三家」と呼ばれ、声優ブームの先駆者となる。

その他には「宇宙戦艦ヤマト・新たなる旅立ち」北野、「円卓の騎士燃えろアーサー」トリスタン、「がんばれ元気」シャーク堀口、などの端役があるが、「機動戦士ガンダムⅢ・めぐりあい宇宙」のスレッガー・ロウはキャラの魅力をTV版以上に引き出した、非常に印象的な演技だった。しかし、その後は「巨人の星」、「ルパン三世」の劇場版、リメイク版ぐらいにしか出演していないのは、非常に残念なことである。最近はテレビのナレーションや「銀河英雄伝説」のアンスバッハ役などで活躍。

私個人としては、かなり前にやったラジオドラマ「エロイカより愛をこめて」（青池保子原作）のエーベルバッハ少佐役が一番気に入っていたりする。

井上瑤

【プロジェクトレビュー】
本名・同じ
昭和二十一年十二月四日生まれ
射手座　AB型

海外旅行癖がこうじて『南洋じゃ美人』という本を出した上、外人男性と再婚までしてしまった人。「機動警察パトレイバー」の香貫花クランシーのセリフからみて、英語も堪能と思われる。実はこの人、早大のOGで私の先輩なのである。

初のアニメレギュラーは「くまの子ジャッキー」のアリス、続いて「宇宙魔神ダイケンゴー」オトケ、「無敵鋼人ダイターン3」三条レイカ、さらに「機動戦士ガンダム」で演じたセイラ・マスがえらい人気で、彼女の代表的キャラとなった。そういやぁ、「ガンダム」ではキッカの声もやってたなぁ。そして「伝説巨神イデオン」ではフォルモッサ・シェリル役に抜擢され、富野アニメに三作続けて出演した。

「闘士ゴーディアン」のピーチィ、「ガンダム」「イデオン」の劇場版をやった後、「うる星やつら」のランの声をアテたが、ランが本性を表した時のドスのきいた声と演技はそれまでの彼女になかったもので、我々に演技の幅の広がりを見せてくれた。しかし、残念ながらラン役は途中から小宮和枝に交代、おそらく彼女の海外旅行のためだろう。

また、「黄金戦士ゴールドライタン」では初の主役ヒロを、そして「さすがの猿飛」の出門葉子、「プラレス三四郎」のシーラを演じたが、五十九年頃から長期の海外旅行に出たため、アニメから遠ざかってしまう。帰国後は「ハイスクール奇面組」の天野邪子のようなセミレギュラーやゲストキャラばかりで、レギュラーは前述の香貫花クランシーと「おそ松くん」のおそ松ぐらいである。アニメではないが、イメージアルバム「未来放浪ガルディーン」のシャラ・シャール・サキなんかけっこう好きだ。この人は声優だけでなく、台本作家、ダンサーの三役をこなす才女でもある。現在はどうか知らないが、以前は「クイズダービー」などの台本を書いていたそうだ。さらに日本のモダンダンスの第一人者の門下生として舞台に立っていたらしい。

上田　みゆき

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名・佐々木美由紀
昭和十九年六月一日生まれ
双子座　O型

国産アニメの放送開始当初から声優をやっていた超ベテラン。アニメ初レギュラーは「エイトマン」のサチコ役である（その時の芸名は本名の上田美由紀であった）。しかし、その後十年余りは、これといったアニメの仕事はしていない。二十一才の時に劇団NLTに入団して以来、舞台活動の方に力を注いでいたためであった。が、大病を患い、泣く泣く退団した後、再び声の仕事に戻った。

「宇宙の騎士テッカマン」の天地ひろみが復帰後初レギュラー、そして「コンバトラーV」の南原ちずる、「ボルテスV」の岡めぐみ、「闘将ダイモス」のエリカ、と立て続けにロボットアニメのヒロインを演じ、当時の男の子のファンの間で大人気であった。他に「科学忍者隊ガッチャマンII」のバンドラ博士、「さらば宇宙戦艦ヤマト」のテレサなどを演じ、そして「ベルサイユのばら」では、マリー・アントワネットの少女期から二児の母となり、そして死んでいくまでを見事に演じた。なかでも"Au revoir"といってオスカルと別れるシーンは感動もんである。

ところで、皆さんもご存知のように、彼女は昭和五十六年に歌手の佐々木功氏と結婚、お互い子供のいる"子連れ再婚"であった。一時期、二人の子供がうまくいかず、ずいぶん苦労したと聞くが、現在はとっても幸せに暮らしているそうな。結婚後、「レディ・ジョージィ」の母親役以外、ほとんどアニメの仕事をし

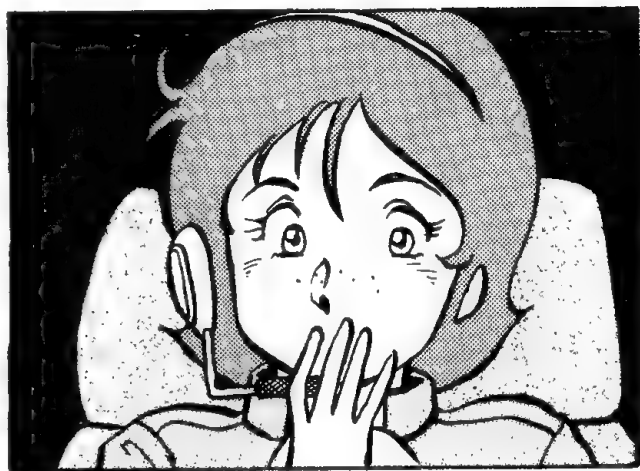
ていないのは非常に残念である。

鵜飼るみ子

【81プロデュース】
昭和三十年五月二十四日生まれ

アニメデビューは「はいからさんが通る」の端役、続く「機動戦士ガンダム」のフラウ・ボウで一躍有名になる。「ガンダム」では他にレッを、同じく富野作品である「伝説巨神イデオン」では死に様が衝撃的だったキッチ・キッチンを演じた。その他に「フクちゃん」大場先生、「重戦機エルガイム」女スパイ、OVA「ダロス」レイチェル、「プロゴルファー猿」猿丸の姉、「愛の若草物語」「小公子セディ」の脇役、などがある。しかし、何と言ってもこの人の代表作は「六神合体ゴットマーズ」のロゼであろう。「ゴットマーズ」人気の波に乗って、彼女自身も多くのイベントに顔を出すようになった。

そして、三ッ矢雄二と共に、ラジオ番組「ペアペア・アニメージュ」金曜日に起用されるが、彼女は常に三ッ矢のオモチャであった。髪形が

うか～おい

ドイツ軍のヘルメットみたいだとかカメレオンにそっくりだとか言われたり、その昔、彼女が出演する芝居のパンフレットに間違えて「鵜飼ゆる子」と書かれていたのを事ある毎に三ッ矢にバカにされたりしていた。でも、何故かこの二人のコンビは面白くて、一週間の中で最も楽しみな曜日であった。最近では、NHKのナレーションや劇場映画「The Five Star Stories」のリトラー、「チンプイ」のダルーサなどの声をアテていた。

及川　ひとみ

【アーツビジョン】
本名・堀川ひとみ
昭和三十三年十一月十日生まれ

名前からわかるように、同じ声優の堀川亮の奥さんである。「六三四の剣」出演中に知り合ったそうな。及川ひとみといえば、言わずと知れた「くりぃむレモン」の亜美ちゃんである。ビデオでは名前が出なかったが、同じ時期に「牧場の少女カトリ」で主役のカトリをやっていたもんだから、亜美の声が及川ひとみだということはモロバレていた（あれで気付かない奴はいないわな）。

しかし、「おにいちゃん！」、この一言が、いったい全国の何人の野郎どもの下半身を奮い立たせたことか。それ以来、普通の仕事よりも“亜美”としての仕事が増え、ラジオ番組「今夜はそっとくりぃむレモン」でも亜美の名でパーソナリティをつとめた。演っている本人はさぞ歯がゆかったと思うよ。聞いている方はみんな知っているのに、自分の名前出せないんだもん。

アニメの初レギュラーは「イタダキマン」の三蔵法子と思われる。それと同時に、「パソコントラベル探偵団」では、リベカという役もやっていた。続いて「牧場の少女カトリ」、「らんぽう」のむつみちゃん、「六三四の剣」の小宮もなみ、となかなか順調に可愛い女の子の役ができるようになったが、結婚後はレギュラーはほとんどなし、主婦業に専念でもしているのかなあ。しかし、亜美の新シリーズがこの人じゃなかったのは残念だ。

大林　隆介

【青年座】
昭和二十二年三月十三日生まれ

「パトレイバー」の後藤隊長に、「らんま1/2」の天堂早雲である。その昔、「みゆき」で間崎竜一なんてふざけたキャラをやっていたが、有名なのはやはり「超時空要塞マクロス」のエキセドル参謀であろう。その他、「機動戦士Zガンダム」のベン＝ウッダー大尉、「ガンダムZZ」のラカン＝ダカランなど、渋いキャラの声をアテている。最近では、「鎧伝サムライ・トルーパー」のナレーターをやっていたが、いやあ、やはり後藤さんでしょうねえ。「みんなで幸せになろうよ。」

太田　淑子

【テアトルエコー】
昭和？年四月二十五日生まれ

昭和三十九年、「ビッグX」の朝雲昭役から声優をやっている大ベテラン。この人といえば、手塚治アニメ「ジャングル大帝」のレオ、「リボンの騎士」のサファイア役で有名である。

その他に、「冒険ガボテン島」イガオ、「新オバケのQ太郎」正太、「ジムボタン」ジム、「タイムボカン」丹平、「ヤッターマン」ガンちゃん、「一発貫太くん」貫太、「子鹿物語」ジョディなど、四十年から五十年代初期にかけて、元気のいい少年役を総ナメにしてきたが、唯一、可愛い女の子を演っている。それが《テクマクマヤコン》の呪文で一世を風靡した「秘密のアッコちゃん」のアッコなんだよね。リメイク版ではさすがにアッコ役は出来なかったけど、今度は元気なイラストレーターのアッコママを演じた。

この人のキャラの中で特におもしろいのは、旧「エースをねらえ」の意地悪ねえちゃん、音羽信子であろう。最近は「ミラクルジャイアンツ童夢くん」の通天閣虎男役で活躍。

大滝　進矢

【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和二十八年七月二十九日生まれ

以前の芸名を小滝進という。あまり目立たない人だけど、「逆転一発マン」の隠玉四郎と「戦斗メカ・ザブングル」の主役、ジロン＝アモスを好演した。また、「マシンロボ」のブルージェットや「ぶっちぎりバトルハッカーズ」のアールジェダンなどのカッコイイ役も演っている。

そして、「ボーグマン」ではナレーションの他に、病気で倒れた井上和彦の代役としてチャック＝スウェーガー役を務めた。脇役ではあるが、「ミスター味っ子」の味将軍七包丁の阿部兄弟はなかなかよかった。「ほお～ら痛くない痛くない。」というセリフは大いに笑えた。あっ今、目の前でやってる「マジカルエミ」で明の声をやってる。

最近は、「魔動王グランゾート」の江のグランゾート、「童夢くん」の江川卓、「天空戦記シュラト」のクンダリーニなどの声で活躍したが、いま一つメジャーになりきれない可愛想な人。

大塚　周夫

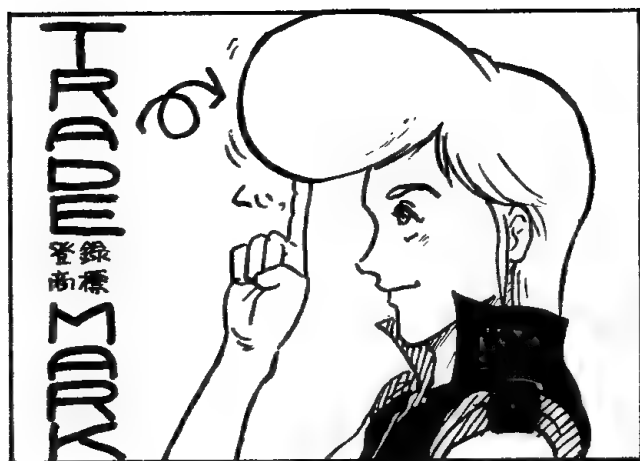
【エーアンドイー】
昭和？年七月九日生まれ

かの有名な「チキチキマシーン猛レース」のブラック魔王である。えっ、知らない？　おかしーなー。「バビル2世」のヨミや「ガンバの冒険」のノロイも良かったなぁ。（ちなみに私の母はあのかわいいラッコが大嫌いである。何故かというと、その理由が面白くて、あれを見ると「ガンバ」のノロイを思い出すからなんだそうだ）。

それでは、「ルパンIII世」の石川五右衛門に「ゲゲゲの鬼太郎」のネズミ男といえばわかるだろう。え、井上真樹夫に富山敬じゃないのかって？　ようし、これならどうだ。「美味しんぼ」の海原雄山に「ピーターパンの冒険」のフック船長だ。どうだ、わかったか。

その他、「仮面の忍者赤影」の幻妖斎、OVA「装甲騎兵ボトムズ」のヨラン＝ペールゼンなど、渋い声が持ち味のベテラン声優である。実はこの人、怖そうな顔のおじさんなんだけど、とてもネズミ男を演った人とは思えないんだよねぇ。最近は、教育テレビ「ピコピコポン」のガリガリ博士や、NHK大河ドラマ「翔ぶが如く」などで活躍。

大塚　芳忠

【同人舎プロダクション】
本名・同じ
昭和二十九年五月十九日生まれ
牡牛座　？型

この人の声を聞いたのは確か「機甲創世紀モスピーダ」の敵キャラだったと思う。それがデビューだとすれば、年の割りには声優歴はそう長くないということになる。やはりこの人といえば「重戦機エルガイム」のミラウー＝キャオであろう。番組開始当時は、主役の平松広和の頼りない声に比べ、無名ながらもなかなかインパクトのある声の持ち主だなあと感心した覚えがある。

その後も「Ζガンダム」「ガンダムΖΖ」のヤザン＝ゲーブル、「機甲戦記ドラグナー」のタップ＝オセアノ、「G.I.ジョー」のフリントなどロボットアニメで活躍した。その他、「日本経済入門」では津川役、「トランスフォーマー」ではウルトラマグナスを演じ、またOVA「プロジェクトA子2」ではB子の父、大徳寺輝なんていう気色悪いキャラも演っている。

P.S.名もない悪役、やられキャラがやたら多い人である。

大山　のぶ代

【アクターズセブン】
昭和？年十月十六日生まれ

昭和四十年「ハッスルパンチ」のパンチ役から声優をやっている超ベテラン。つい最近は「巨人の星」の第1話で飛雄馬のクラスメイトのいじめっ子を演っているのを目撃した。「ハリスの旋風」「国松さまのお通りだい」の石田国松、「のらくろ」シリーズののらくろ、「ハゼドン」などの声をアテた。なんとこの人は「サザエさん」のカツオの声も演ったことがあるのだ。

しかし、私の見た限りでは、これらはただ声を張り上げて叫んでいるだけで、とても演技と呼べる代物ではなかった。ファンの心に深い感動を与えた「ザンボット3」の神勝平でさえ、その域を出ていない。作品自体はとても良かったけどね。

やっぱりこの人というと、全国に一大ブームを巻き起こした「ドラえもん」のドラえもんであろう。当時はよくテレビに出演して、「ぼく、ドラえもんです。」というあのダミ声が異常に受けてたね。「ドラえもん」の途中あたりから落ち着きが出てきて、やっと演じているという感じが出てきた。多分この人はもうドラえもん以外のアニメキャラを演ることはないだろう。

小粥　よう子

【アーツビジョン】
本名・高橋よう子（だと思う。）
昭和三十四年七月五日生まれ

言わずと知れた漫画家高橋陽一氏の奥様である。あたしゃ、この人の名前初めて見たとき「おがゆようこ」だと思ったね（"おがい"と読みます念のため）。今は亡きラジオ番組「アニメトピア」の"ようこそようこのインフォメーションコーナー"がこの人の声を聞いた最初だったと思う。2代目パーソナリティ、島津冴子と田中真弓の時に、番組の中で「キャプテン翼」の翼の声をやることになったと聞いた時には、こりゃまたえらいミスキャストだなと思ったんだけど、実際アニメ見てみるとそうでもないんだよね。

かつ〜かゆ
それにしても、あんなに女子中高生に人気が出るとは、夢にも思わなかったし、それにも増してブームってのは恐いもんで、ファンなんて冷たいもんだって、つくづく感じたね。次のアイドルが出てブームが去ると一時期頂点にいた声優が、全く見向きもされなくなるんだから。
去年「日本アニメフェスティバル」に行ってきたら、「キャプテン翼ショー」というのがあったんだけど、客はみんな白けてて、「みんな一緒に歌って。」って言ってるのに誰も彼女と歌ってやらないの。「トルーパー」とか「星矢」の時はキャーキャー言ってるのに。彼女、可愛想だったなあ。
また彼女は『翼』以外にも少年役が多く、デビュー作「超時空要塞マクロス」のヨッちゃん、「超音戦士ボーグマン」のシンジや「トランスフォーマー」などに出演していた。最近では金貨のコマーシャルで「江川さん江川さん、手にもっているのはな〜に?」とか言っているのが印象に残っている。

か行

勝生真沙子

【テアトルエコー】
本名・佐藤雅子
昭和三十四年十月十五日生まれ

ニックネームはガー子(たった半年ではあったが、田中真弓と共に「ペアペア・アニメージュ」木曜日のパーソナリティをやっていたことがあり、その時真弓さんが彼女のことをこう呼んでいた)。男勝りの女性を演らせたら天下一品である。そのため『かちきまさこ』とも呼ばれる(ウソウソ)。
初のレギュラーは「未来警察ウラシマン」の猫のミャーだった。そして初の主役は、あのクサい演技がなんとも言えない「ガラスの仮面」の北島マヤである。実は彼女、『アテナ』には余程の縁があるらしく、「超時空世紀オーガス」のアテナ、「アリオン」でもアテナを演り、「機動戦士Zガンダム」のレコア・ロンドはパラス=アテナに乗っていた。ここまで来ると当然、「聖闘士星矢」のアテナも彼女が演ると思っていたのだが…。また、この人は熟女を演らせてもイイ演技をするんだなこれが。「超音戦士ボーグマン」のメモリー・ジーンや「獣神ライガー」のドルサタンなんかは色っぽくて良かった。「鎧伝サムライトルーパー」の迦遊羅も好きだったな。『私はカユラ、よーじゃかいのカユラ、ホホホ』(何のこっちゃ。)
その他に、「ハイスクール奇面組」伊狩増代、「ボーダープラネット」ミラ、「機甲戦記ドラグナー」ダイアン・ランス、「アップルシード」デュナン、「トップをねらえ」カシワラさん、「銀河英雄伝説」ヒルダ、「がきデカ」あべ先生、「ドラゴンクエスト」ティアラ、「冥王計画ゼオライマー」ロクフェル、など数多くの脇役を演じている。

家弓家正

【青二プロダクション】
昭和?年十月三十一日生まれ

アニメファンには馴染みのない名前かも知れないが、洋画の吹替えではかなり有名。数少ないアニメ作品では、「0テスター」のメビウス、「未来少年コナン」のレプカ(宮崎駿の『悪役』の基本的なイメージの

もととなっているキャラである）、「風の谷のナウシカ」のクロトワ、が有名である。その他に、「宇宙エース」タツノコ博士、「宝島」リブシー、劇場版「聖闘士星矢」ドルバル、「クラッシャージョウ」ヒュー ム、「銀河英雄伝説」レベロ、など長年にわたって声の仕事をしているベテランである。

川浪葉子

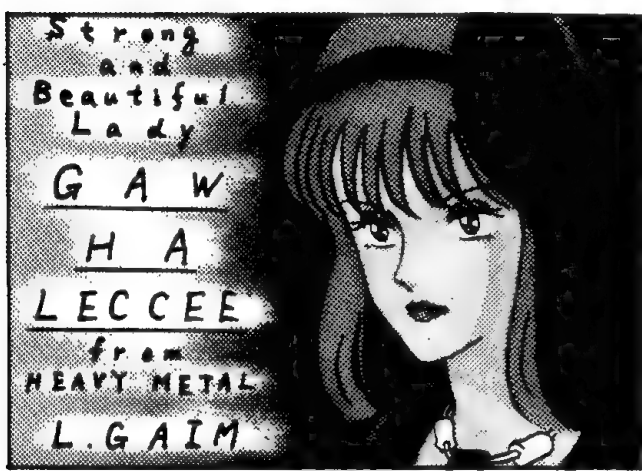
【青二プロダクション】
昭和?年四月二十二日生まれ

元気な女の子の役が多い。「夢戦士ウイングマン」の夢あおいさんは良かったなぁ。「六神合体ゴットマーズ」の日向ミカ役で初めて知り、けっこういい声だなと思っていたら、「装甲騎兵ボトムズ」のココナ以来アニメにはとんとご無沙汰していた。だが、「ミスター味っ子」の山岡みつ子役で見事復活、その後は「ついでにとんちんかん」吉沢今日子、「トランスフォーマー」アーシー、「TWIN」アキ、「ゴクウ」ジェーンなど少しずつアニメの仕事をするようになった。

かわ〜き

川村万梨阿

【アーツビジョン】
本名・川村繁代
昭和三十六年十一月二十一日生まれ
蠍座　AB型

「聖戦士ダンバイン」のチャム・ファウ役でデビュー。続く「重戦機エルガイム」では、リリス・ファウとガウ・ハ・レッシィの二役をこなし一躍有名になる。その後も「六三四の剣」橘麻里、「ガルフォース」エルザ、「メガゾーン23」高中由唯、「プロゴルファー猿」青花、「機動戦士Zガンダム」ベルトーチカ、「トップをねらえ」ユング、「聖闘士星矢」フレア、「ガンダム逆襲のシャア」クェス・パラヤ、「The Five Star Stories」ラキシス、と次々にヒロインクラスを演じ人気は上昇したのだが、一般にはどうやら色物としてのイメージが定着してしまったようである。

聞いた所によると、彼女はもう高校時代からゆうきまさみや戸的あきらのグループと親交があり、かなりのアニメファンだったらしい。デビュー後、ラジオ番組「アニメトピア」四代目パーソナリティをつとめたが、ここに二つのエピソードがある。ある時、彼女がハガキに書いてある住所の『弘前』を『ひろまえ』と読み、富永み〜なに『ひろさき』ですよ、と注意されたにもかかわらず、「だって『ひろまえ』って書いてあるじゃない。」と言って真剣に大ボケをかましたことがある。

またある時、ゲストの高橋美紀に向かって、「美紀ちゃん、荒んじゃったのねぇ。」などと無神経な発言をし、ムッとした高橋美紀に問い詰められるという事もあった。いかにも彼女らしい話である。こうして彼女は今までのヒロイン的イメージだけでなく、三枚目としての人気も得るようになった。その代表的キャラがイメージアルバム「究極超人あ〜る」の西園寺まりいであろう。そう言えば「あ〜る」の宣伝ビデオや「アッセンブル・インサート」のCMでの彼女もスゴかったなぁ。

その他のキャラに、「ピーターパンの冒険」タイガーリリー、ルナ、「ホワッツ・マイケル」ポッポ、「クレオパトラD.C.」クレオパトラ、「メガゾーン23Ⅲ」リサ、「おぼっちゃまくん」沙麻代、「ハローレディリン」ヴィヴィアン、「虚無戦史MIROKU」夜叉姫、「やじきた学園道中記」雅貴子、「レア・ガルフォース」フォルティ、などがある。

キートン山田

【賢プロダクション】
昭和二十年十月二十五日生まれ

テレビ東京「テレビあッとランダム」のナレーションでお馴染み。実はこの人、以前は『山田俊司』（本名かどうかは分からない）という名で数多くのアニメに出演していた。

氏　名　**神谷 明**

本　名　同じ
所　属　青二プロダクション
生年月日　昭和二十一年九月十八日
星　座　乙女座
血液型　Ａ型
性　別　男
出　身　横浜

≪演じたキャラクター≫

『バビル２世』古見浩一、『荒野の少年イサム』渡イサム、『ゼロテスター』吹雪シン、『ゲッターロボ』流竜馬、『勇者ライディーン』ひびき洸、『シンドバッドの冒険』アリババ、『合身戦隊メカンダーロボ』ジミー・オリオン、『氷河戦士ガイスラッガー』ミト・カヤ、『惑星ロボ・ダンガードＡ』一文字タクマ、『大空魔竜ガイキング』ツワブキ・サンシロー、『宇宙海賊キャプテンハーロック』台羽正、『宇宙戦艦ヤマト』加藤三郎（四郎）、『闘将ダイモス』竜崎一矢、『宝島』パピー、『マルコポーロの冒険』チャンパウドウ、『円卓の騎士燃えろアーサー』アーサー、『ドカベン』里中智、『うる星やつら』面堂終太郎、『超時空要塞マクロス』ロイ・フォッカー、『北斗の拳』ケンシロウ、『キン肉マン』キン肉マン、『ナイン』山中健太郎、『伊賀のカバ丸』目白沈寝、『オヨネコぶーにゃん』オヨヨ、『未来警察ウラシマン』クロード水沢、『めぞん一刻』三鷹瞬、『11人いる』ダダ、『げらげらブース物語』ブース、『アニメ三銃士』アトス、『シティハンター』冴羽リョウ、『聖闘士星矢』アルゴル、ジークフリート、『破邪大星ダンガイオー』ロール・クラン、『銀河英雄伝説』バクダッシュ、『地底人』地底人、『トンデケマン』ダンダーン、『ＹＡＷＡＲＡ』風祭、『星猫フルハウス』チラク、『もーれつア太郎』ニャロメ、他多数

★コメント★

アニメデビューは『魔法のマコちゃん』の少年Ｂ。初レギュラーは『赤き血のイレブン』のヤシマサスケである。続く、『いなかっぺ大将』『メルモ』の脇役経験が、後の彼の少年ヒーロー路線につながっていく。『バビル２世』や『イサム』のオーディションでは、共に最後まで野沢雅子さんと競い、結局どちらも彼が選ばれ、今でも時々『あの頃は、よく神谷ちゃんに仕事取られたわねぇ。』なんて笑いながら言われるそうである。また当時、『マジンガーＺ』兜甲児の石丸博也、『デビルマン』不動明の田中亮一らと、アフレコ終了後喫茶店に集まって、「オレたちって本当にヘタクソだね。」って言い合ったというエピソードもある。

また神谷明の神谷明たるゆえんは、やはりロボットヒーロー物における、「ゲッタービィーム！」「ライディーン！」等の叫び声にあると言えよう。そして

付けられたニックネームが“叫びの神谷”である。しかし、熱演のあまり喉を痛め、声が出なくなったこともしばしば。子供の頃は何気なく聞いていた雄叫びも、よく考えてみるとあのアクセントは驚くべき大発明だと思う。

そんな彼も、わずかではあるが悪役を演っている。最初の悪役は『ガッタイガー』のエリック・ベルゲンで、宮崎アニメの悪役で有名な家弓家正氏をイメージして役作りをしたそうである。『ガイスラッガー』のミト・カヤ役では、ひねくれた声を出すために、歌手の森進一が歌う時の（眉間にシワを寄せた）顔を作って発声するよう心掛けたそうである。

そして、昭和56年あたりから、演じるキャラの傾向が変わってくる。ロイ・フォッカーやケンシロウといったニヒルな二枚目路線と、面堂終太郎、クロード水沢といった、一見二枚目実はズッコケ三枚目路線、さらにはオヨヨやキン肉マン等の完全なギャグキャラの三本柱を並行して演っていくことになる。その代表的なものが『シティハンター』の冴羽リョウで、中高生の圧倒的な支持を受けている。彼自身も、アニメグランプリでは、過去11回中９回人気No.1に輝くという快挙を成し遂げた。

アニメ以外での活躍もめざましく、ラジオでは『オールナイトニッポン』『こんにちは神谷明です』『アキラとミッチの底抜け日曜拳銃』等数多くのレギュラーを抱えていた。音楽活動ではソロアルバムを何枚か出しているが、私としては『ウラシマン』の挿入歌“ハート・ウォーカー”が一番気に入っている。

40才を越えた今でも、その声質、演技力は衰えるどころか、ますます円熟味を増し、常に第一線で活躍し続ける声優界の第一人者である。

きも〜くさ

「ゲッターロボ」のひょろっとした奴（ハヤト）、「惑星ロボ・ダンガードA」トニー・ハーケン、「一休さん」足利将軍、「コンバトラーV」十三、「ベルサイユのばら」アラン、と言えばもうおわかりでしょう。
　その他に、「アパッチ野球軍」オケラ、「侍ジャイアンツ」長嶋、「大空魔竜ガイキング」ゲン、「サイボーグ009」004（ハインリヒ）、「巨神ゴーグ」ドクター・ウェイブ、「機動戦士Zガンダム」ジャマイカン少佐、「ちびまるこちゃん」ナレーション、などが有名。

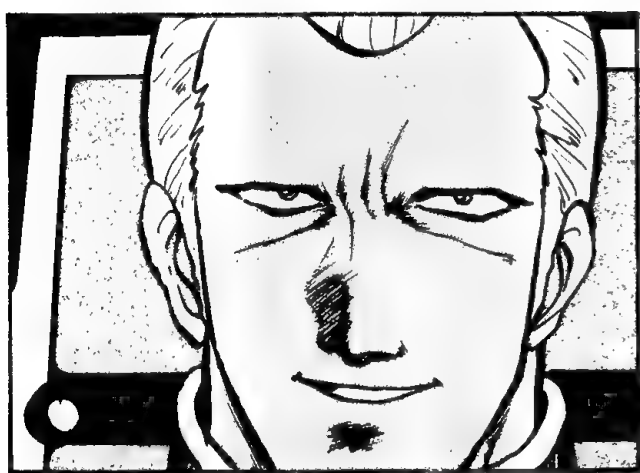
肝付兼太

【劇団21世紀FOX】
昭和?年十一月十五日生まれ

「ドラえもん」のスネ夫役で知らない人はいないだろう。それ以外でも有名なキャラを多数演じているベテラン。代表作に、「ドカベン」殿馬、「ジャングル黒べえ」黒べえ、「銀河鉄道999」車掌、「サイボーグ009」007（グレート・ブリテン）、「野球狂の詩」甚久寿、「忍者ハットリくん」ケムマキ、「オバケのQ太郎」ハカセ、「おそ松くん」イヤミ、NHK「おかあさんといっしょ」じゃじゃまる、などがある。劇団21世紀FOXの主催者でもある。

銀河万丈

【青二プロダクション】
昭和?年十一月十二日生まれ

なんか派手な芸名だが、その昔は田中崇という地味な名であった。「機動戦士ガンダム」のギレン・ザビは有名。一見、その声からは渋いダンディーな役が連想されるが、意外とひょうきんなキャラも多い。「戦闘メカ・ザブングル」のティンプ・シャローンや「ななこSOS」のドクター石川、「ひみつのアッコちゃん」のパパ、などが主なもの。
　代表作としては、「サイボーグ009」005（ジェロニモ）、「UFOロボ・グレンダイザー」ズリル長官、「ダンガードA」ドップラー総統、「太陽の牙ダグラム」チコ、超時空世紀「オーガス」ジャビー、「愛少女ポリアンナ物語」ペンデルトン、「タッチ」原田、「ボスコアドベンチャー」フードマン、「魁!男塾」J、「ミスター味っ子」味将軍、「マスターフォース」ブラックザラックなどがある。

草尾毅

【青二プロダクション】
昭和四十年十一月二十日生まれ
蠍座　B型

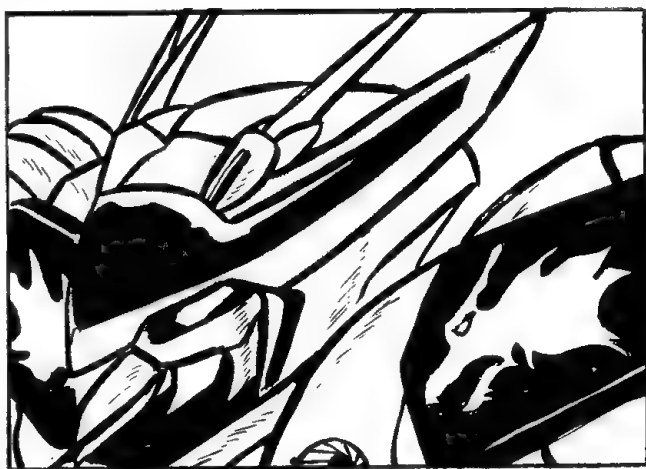
　な、名前が読めない…。『たけし』と読むそーな。「鎧伝サムライトルーパー」烈火のリョウ（真田遼）役で女子中高生の間に人気大爆発。番組終了後も「トルーパー」の声優五人でNG5を結成、各地でコンサート活動を展開し、いずれも大盛況だった。中には感激の余り、（信じられないことだが）失神したり、その場に泣き崩れる子もいたそうだ。この模様がTBSテレビ「地球発19時」で放映され、巷では『噂の失神アニメ』などと呼ばれる程、話題になった。本人たちとしては一刻も早く「トルーパー」のイメージを払拭したいようではあったが…。
　デビューは「ボスコアドベンチャー」の端役。初の主役はOVA「ジャ

ンクボーイ」の山崎良平（これがとんでもない軽いキャラで、リョウの声を聞いた時には、その余りのギャップにブッ飛んでしまった）。最近では「アーシアン」、「桃太郎伝説」、「メガゾーン23Ⅲ」エイジ、「強殖装甲ガイバー」深町晶、「勇者エクスカイザー」グリーンレイカー、等で活躍。そうそう、「美味しんぼ」で演った東北弁の芋売り兄ちゃんは良かったなあ。

音楽活動では、ソロアルバム『もういちどI LOVE YOU』を出したばかり、いまノリにノっている若手声優の一人である。

玄田哲章

【81プロデュース】
本名・横井光夫
昭和二十三年五月二十日生まれ
牡牛座　AB型

野太い声のキャラをやらせるなら玄田哲章か郷里大輔かと言われる程ゴツい男＝玄田さん、というイメージが定着している。しかし、この人ぐらい数多くの脇役を演じたベテラン声優はいないんじゃないだろうか。

キャリアが長い割に主役を張ったのは、「トランスフォーマー」のコンボイぐらい。その代わり、脇役を数え上げたらキリがない。

「マシンブラスター」厳介、「ボルテスV」大次郎、「機動戦士ガンダム」ドズル、スレッガー、「重戦機エルガイム」セムージュ、「魔神英雄伝ワタル」龍神丸、「シティハンター」海坊主、「仮面の忍者赤影」白影、「アニメ三銃士」トレビル、「第三野球部」海堂タケシ、「エースをねらえ2」桂大悟、などの硬派から、「ドカベン」岩鬼、「スターザンS」エビルス、「ハイスクール奇面組」冷越豪、「昭和アホ草紙あかぬけ一番」ヒカリキン、「ガンダムZZ」ゲモン・バジャック、「プロジェクトA子」D、「パラソルヘンベエ」ゴリ太のような、お笑いギャグキャラまで幅広く演じている。

中でも「あかぬけ一番」ヒカリキンの『光ちゃんのバカ!ベキヤロイ!夢みんぞー!』というセリフは今でも耳に焼き付いて離れない。それから、「ミスター味っ子」の三船敏八も大いに笑かしてくれた。今年で三児の父となった玄田さん、より一層の活躍を期待したい。

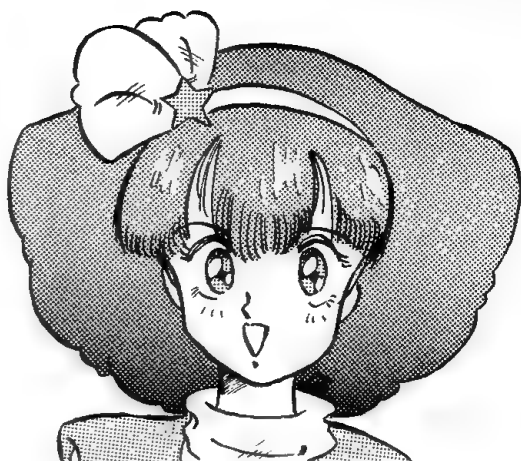
小林清志

【俳協】
昭和八年一月十一日生まれ

言わずと知れた「ルパン三世」の次元大介である。ビデオ版では銀河万丈が演ったが、やはり次元はこの人しかいないと思う程、小林清志＝次元大介というイメージが固まってしまっている。私個人としては、「クラッシャージョウ」のタロスなんかが気に入っている。昔は、「妖怪人間ベム」ベム、「ラ・セーヌの星」ザ・ラール他、多数アニメキャラを演じていたが、最近は洋画の吹替えが主で、アニメでは「装甲騎兵ボトムズ」グレゴルー、「銀河英雄伝説」アドリアン・ルビンスキー、「ルパン三世」の特番、ぐらいでしかお目にかかっていない。

小山茉美

【青二プロダクション】
本名・小山真美
昭和?年一月十七日生まれ
山羊座　A型

私が一番最初に好きになった声優さんである。以前の芸名は『まみ』と平仮名で書いた。ご存知の方も多いと思うが、古谷徹氏の元夫人である。デビュー直後から売れっ子街道まっしぐら、「キャンディキャンディ」アニー、「大空魔竜ガイキング」フジヤマミドリ、「グランプリの鷹」逢瀬すず子、「あしたへアタック」美々、「バンダーブック」ミムール姫、「巴里のイザベル」イザベル、「青い鳥チルチルミチルの冒険旅行」ミチル、「ムーの白鯨」ラ・メール、「ニルスのふしぎな旅」ニルス、「ハ

ロー！サンディベル」キティ、「タイガーマスク二世」淳子、「若草の四姉妹」ジョー、と次々にヒロインを演じる。そして昭和五十六年には全国に大ブームを巻き起こした「ドクタースランプ」のアラレちゃんを演じることによって、アニメファン以外にも小山茉美の名が知られるようになった。

私個人の好みで言えば、「機動戦士ガンダム」のキシリア・ザビが一番気に入っている。特に「めぐりあい宇宙」のキシリアは、彼女の演技の頂点だと今でも思っている。昔は「魔法のプリンセス・ミンキーモモ」の大人と少女の演じ分けにド肝を抜かれ、「戦国魔神ゴーショーグン」のレミー島田、洋画「チャーリーズエンジェル」のクリスの大人の色香に魅かれて、彼女が死ぬ程好きだった頃もあったよなあ。うるうる。

その後も、「ラジオアニメック決定アニメ最前線」のDJ、「うる星やつら」面堂了子、「レンズマン」クリス、「ワンダービートS」リーメイファン等を演り、長年トップ女優の座を守って来たが、数年前にラジオのDJ(オールナイトニッポン)や音楽活動に力を入れるようになってからはアニメにはあまり出なくなり、人気も下降気味だった。

それでも、「あんみつ姫」のあんみつ姫、「キテレツ大百科」のコロ助といった主役から、「聖闘士星矢」シャイナ、「アキラ」ケイ、「シティハンター」美樹、「エリアル」美亜などの脇役まで味のある演技を見せており、彼女の一刻も早い完全復活を期待したい。

さ行

榊原良子

【俳協】

昭和三十三年五月三十一日生まれ

美人である。この人の声を初めて聞いたのは「六神合体ゴットマーズ」のフローレ、次いで「スペースコブラ」のアーマードレディだったように思う。名前を覚えるようになったのは、「うる星やつらオンリーユー」エル、「キャッツアイ」浅谷刑事、「ゴットマジンガー」アイラ・ムーあたりからである。「さすがの猿飛」の冬子も印象的だった。しかし、何と言っても私は「風の谷のナウシカ」のクシャナが一番好きだ。この人のハスキーで力強い、それでいて憂いを秘めた、男心をそそるような声がたまりません。

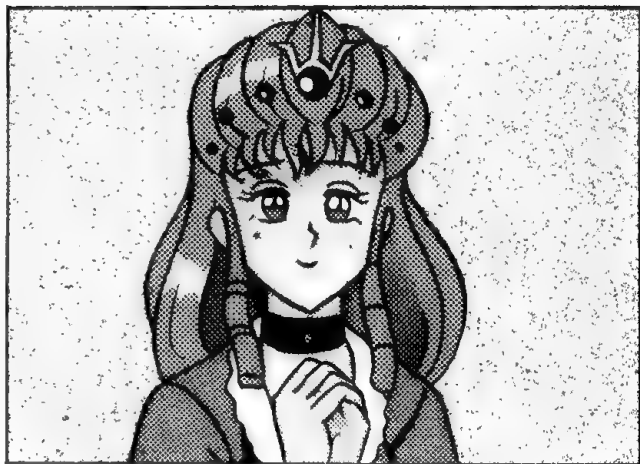
その後「超力ロボ・ガラット」では、どすこい姉妹の声をアテ、キャラと榊原さんとの余りのギャップにいつも大笑いしていた。また、「くりぃむレモン・パート4ポップチェイサー」のお姉さま役にも驚かされた。まさか彼女がアダルトアニメに出演するとは…。その他に、「グリード」ミマウ、「ザ・ヒューマノイド」アントワネット、「ブラックマジック・M66」シーベル、「バブルガムクライシス」シリア、等がある。

そして、この人の代表作と言えば、やはり「機動戦士Zガンダム」のハマーン・カーンであろう。しかし、人気とは裏腹に、当の本人にとっては非常に苦痛な役だったらしく、録音スタジオに行きたくないと思ったこともしばしばあったとか。我々としてはあの陰湿さがいいんだけど、

演ってる方としてはけっして気持ちのいいもんじゃないのかも知れない。
　最近では、「エスパー魔美」お母さん、「機動戦士ガンダム逆襲のシャア」ナナイ・ミゲル、「エースをねらえ2」お蝶夫人、「アイドル伝説えり子」朝霧典子、「みなしごハッチ」女王、などでますます円熟した演技を見せてくれている。

佐久間レイ

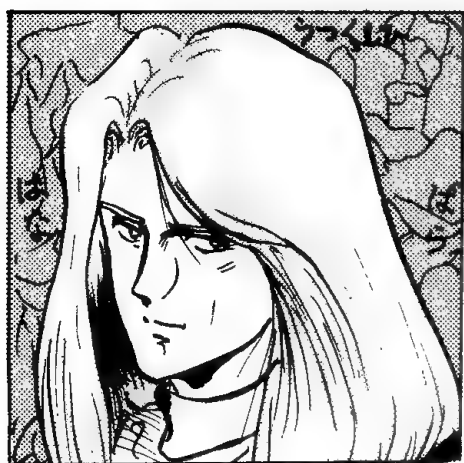
【81プロデュース】
本名・野田玲子
昭和四十年一月五日生まれ
山羊座

　アイドル歌手として、昭和五十八年『はみだし天使』（「うる星やつら」のED『宇宙は大ヘンだ』のアレンジ曲）でデビュー、NHK「レッツゴーヤング」サンデーズのメンバーだった。しかし、残念ながらアイドルとしては余り売れなかったようである。ところが数年後、81プロデュース公演「バッカーズオーディション」で、いきなり主役を張って所狭しと舞台を踊り回っている彼女を見てべっくらこいてしまった。
さく～ささ

　アニメデビューは、「夢の星のボタンノーズ」のピアス役、続いて「ハレー伝説ラブポジション」由美、「コスモスピンクショック」ミッチー、「ポリアンナ物語」サディ・ディーン、「機動戦士ガンダムZZ」ルチーナ等を演ったが、この時はまだレイさんが演ってるとは気付かなかった。分かり始めたのは「愛の若草物語」のエイミーからである。あの鼻詰まり声は結構話題になったな。
　その後は、「日本経済入門」アンマリー、「小公子セディ」キャサリン、「F」るい子、「アンパンマン」バタ子、「美味しんぼ」花村典子、「トップをねらえ」アマノカズミ、「F.S.S」クローソー、と子供から色っぽい女性まで見事に演じ、声優としての実力の程を見せてくれた。最近でも、「らんま1／2」シャンプー、「魔女の宅急便」ジジ、「童夢くん」メロディ、「ダッシュ四駆郎」輪子、「パラソルヘンベエ」いずみ、「T.P.ぼん」リーム、「トンデケマン」シャララ姫など数多くのレギュラーを抱えている。
　しかし、前からあやしいと思ってはいたが、本当に水島裕と結婚してしまうとは。水島裕とは彼女の声優としてのデビューである「パトカーアダム30」から共演している。その他に、NHK「ワープロ講座」や「ピックンとアップン」、日本テレビのアニメ新番組特番、テレビ東京「海外トピックス」などに出演、顔出しの仕事もかなりこなしている。今後も大人の魅力で頑張って欲しい声優さんの一人である。（詳しくは『声優インタビュー』参照のこと。）

ジジイのジジ
by k.Y

佐々木功

【いさお企画】
本名・同じ
昭和十七年五月十六日生まれ
牡牛座

　おそらくこの人の「宇宙戦艦ヤマト」を聞いたことのない人はいないんじゃないだろうか。三十年代にロカビリー歌手として一世を風靡したが、「ヤマト」のヒットによりアニメ歌手・ささきいさおとして全国にその名を響かせるようになる。
　声優としては、元祖美形キャラ「科学忍者隊ガッチャマン」G2号コンドルのジョー役が有名。（毎回バードミサイルのガラス修理するのは大変だったろうなあ）。その他のキャラに、「さらば宇宙戦艦ヤマト」、「ヤマト2」斎藤始、「太陽の子エステバン」メンドーサ、「愛してナイト」加藤剛、「新ジャングル大帝」パンジャ、などがある。
　最近は洋画の吹替えがメインで、「スーパーマン」シリーズのクラーク・ケント、「ナイトライダー」のマイケル・ナイト役などが代表作。また、テレビ東京「ふれあい出逢い

氏　名　塩沢 兼人

本　名　塩沢　敏一（としかず）
所　属　青二プロダクション
生年月日　昭和三十年一月二十八日
星　座　水瓶座
血液型　A型
性　別　男
出　身　東京

≪演じたキャラクター≫

『機動戦士ガンダム』マ・クベ、『伝説巨神イデオン』ジョリバ、ナレーター、『宇宙戦士バルディオス』マリン、『戦国魔神ゴーショーグン』ブンドル、『銀河旋風ブライガー』木戸丈太郎、『戦闘メカ・ザブングル』アーサー・ランク、『銀河烈風バクシンガー』真幌羽士郎、『銀河疾風サスライガー』ロック、『ＧｕＧｕガンモ』サイゴー、『みゆき』村木、『ふたり鷹』東条鷹、『エリア８８』風間真、『メガゾーン２３』Ｂ.Ｄ.、『未来警察ウラシマン』ルードビッヒ、『北斗の拳』レイ、『ナイン』倉橋、『蒼き流星ＳＰＴレイズナー』ル・カイン、『タッチ』黒木、『超獣機神ダンクーガ』司馬亮、『ハイスクール奇面組』物星大、『戦え！イクサー１』サー・バイオレット、『陽当たり良好』美樹本伸、『ついでにとんちんかん』東風、『聖闘士星矢』ムウ、『湘南爆走族』江口洋助、『仮面の忍者赤影』霞丸、『ビックリマン』ベリー・オズ、『ハーイあっこです』ジュンイチ、『エリアル』ハウザー、『究極超人あ～る』あ～る田中一郎、『未来放浪ガルディーン』ガルちゃん、他多数

★コメント★

演じて来たキャラクターやひょうきんな語り口からは、13才で両親を失くし、兄弟親戚もいない、天涯孤独の身の上だとは到底想像できない。一見、細身のヤサ男風だが（若い時のマ・クベを想像していただきたい）、その声はまさに二枚目のそれである。その生い立ちが示すように、やはりこの人ほど影を背負ったキャラの似合う声優はいないだろう。ルードビッヒや『北斗の拳』のレイあたりが彼の二枚目路線の頂点だったと言える。ところがそれとは全く逆に、『みゆき』の村木、『奇面組』の物星大といった、おちゃらけ・オカマキャラも見事にこなすマルチ声優である。一時期は、アブノーマルなら塩沢兼人、というような雰囲気があったが、どうせやるならキレイなオカマでありたいと自ら言うくらいだから、本人も結構ノッてやっていたのかもしれない。

最近、テレビのレギュラーが減って来てはいるが、依然としてビデオアニメの帝王といわれる程、ありとあらゆるビデオ作品に出演している。

いたって地味な性格で、特に趣味もなく、自分の部屋で好きなジャズでも聴きながらお酒を飲むのが一番の幸せという、平凡な男性である。でもやっぱり普通の人に、“あ～る”や“ブンドル”は出来ないよなぁ。

旅」のレポーターとしても活躍している。離婚歴はあるが、同じ声優の上田みゆきと子連れ再婚、現在は幸せに暮らしているそうな。

佐々木望

【アーツビジョン】
昭和四十二年一月二十五日生まれ
水瓶座　O型

「鎧伝サムライトルーパー」の毛利伸役で女子中高生に人気急上昇、現在人気ナンバー1の若手声優である。デビューは「ドテラマン」の短鬼。同時期に「ガンダムZZ」のゲストを演っており、その特徴ある声が印象的だった。自慢じゃないが、この声は売れると思ったたね、ホントに。そして、「アキラ」の鉄雄役で脚光を浴び、あれよあれよという間にスターダムにのし上がってしまった。

その他に、「バブルガムクライシス」マッキー、「ガンダム逆襲のシャア」ハサウェイ・ノア、「バトルハッカーズ」ゼン小川、「ミスター味っ子」中江兵太、「おぼっちゃまくん」柿野、「メガゾーン23Ⅲ」バド、ささ～しま「桃太郎伝説」桃太郎、「チンプイ」内木、「銀河英雄伝説」ユリアン、「アーシアン」ちはや、「天空戦記シュラト」火帝クビラ、など脇役から主役まで幅広く演じている。私はイメージアルバム「ここはグリーンウッド」の蓮川一也が好きだったりする。そのアルバムの中で彼が歌っている『正しい兄弟愛』は必聴である。

また、NG5やFM横浜「サイバーミュージック工場」のパーソナリティなど、アニメ以外の仕事にも力を入れている将来が楽しみな声優の一人である。

水滸

柴本広之

【プロジェクトレビュー】
本名・阿部信行
昭和三十年十二月十八日生まれ

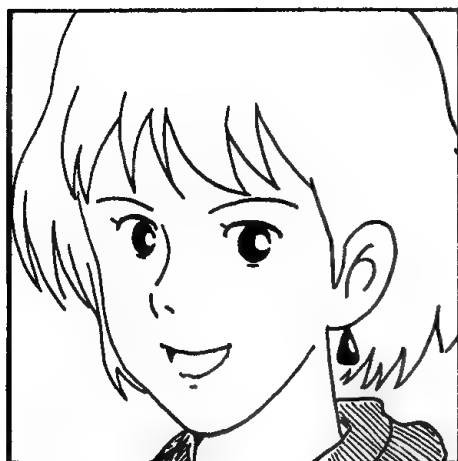
実はその昔、川口亮の名でレコードデビューしていたという事実が判明した。以前の芸名を阿部健太といい、我々にとってはこちらの名前の方がなじみ深い。声優としてはあまり活躍していないが、「Zガンダム」アポリー、トーレス、「ガンダムZZ」クレイユ、「セディ」ディック、「エスパー魔美」高畑（あのフニャフニャした声が好きだ）、「アイドル伝説えり子」大沢ひろし、などが有名である。

はっきり言ってハンサムである。しかし、まさかこの人が田中真弓と結婚するとは…。さらに、劇団四季のオーディションに受かっていながら、それをけってわざわざプロジェクトレビューの公演に参加するなど、顔に似合わずかなりの変わり者のようである。

島田敏

【テアトルエコー】
本名・同じ
昭和二十九年十一月二十日生まれ
蠍座　B型

けっこうひょうきんなお兄さんなのだが、「機甲創世記モスピーダ」のスティック役や「宇宙船サジタリウス」のトッピー役などで主役を張ったこともあるベテランである。私は「Zガンダム」のパプテマス・シロッコや「北斗の拳」のユダ、「聖闘士星矢」のハーゲンのようなシャープな悪役の声が大好きである。これと対照的に、「うる星やつら」トンちゃん、「超時空騎団サザンクロス」シャルル、「ついでにとんちんかん」ゴンベエのようなギャグタッチのキャラも演ってはいる（こちらが地らしい）が、やはりこの人の良さは二枚目を演って初めて発揮されると言えよう。

その他に、「イタダキマン」サーゴ浄、「ハローサンディベル」ジョージ、「銀河烈風バクシンガー」ケイ・マローン、「重戦機エルガイム」チャイ・チャー、アントン・ランドー、「アリオン」アーレス、「ガン

氏　名　**島本 須美**

本　名　同じ
所　属　フリー
生年月日　昭和二十九年十二月八日
星　座　射手座
性　別　女

≪演じたキャラクター≫
『ザ・ウルトラマン』星川ムツミ、『ルパン三世・カリオストロの城』クラリス、『ウイングマン』松岡先生、『風の谷のナウシカ』ナウシカ、『うる星やつら』水小路飛鳥『スプーンおばさん』ルウリィ、『めぞん一刻』音無響子、『ＯＨ！ファミリー』フィー、『ザ・超女』スー、『忍者戦士飛影』ロミナ姫、『キテレツ大百科』キテレツの母、『アンパンマン』しょくパンマン、他

★コメント★
前記、島津冴子と同じように、写真によっては美人かどうか判断に迷う女性だが、やはり美人であると思う。『プリンセスボイス』と称される美声の持主で、特に『ナウシカ』役で有名である。ただし本人の言う通り、『ナウシカ』を演じていた頃の彼女は声の調子が変化し始めた頃で、筆者は『プリンセスボイス』そのものと演技力が均衡していたのは、小山田マキ（『新ルパン三世』最終話）の頃だと思っている。『ナウシカ』の時、むしろ筆者の印象に残っているのは、「照明弾！ようい、テェ!!」などのセリフのような力強い、ハスキーな声である。アニメ初レギュラーは星川ムツミ役だが、それ以前に『赤毛のアン』(S54) の主役オーディションを受け、山田栄子と最後まで競い合ったという経歴を持つ。しかし、この時の声と演技力に印象づけられたアニメ演出家宮崎駿の推薦によりクラリス役に抜擢され、一躍人気声優の一人となる。

1981～82年の一年半位の間、青年座の学校講演のため各地を巡業し、この時に得たタフさが後のハスキーな声と演技力に結び付いたとも言える。1982年には『うる星やつら』の露子役で音響演出家斯波重治に出会い、以降彼の下でナウシカや音無響子などヒロイン系の役を数多くこなしている。また、フィーのようなボーイッシュな少女役や『ミスター味っ子』での10才前後の少年役など新しい分野にも挑戦している。筆者としては、こうしたハスキーボイスと演技力を充実させ、20才前後の元気な女性をやってもらいたいなどと思っている。

島本須美は『プリンセスボイス』などに見られるように、ヒロイン的存在としてアニメ誌（特に徳間書店）に扱われることが多かった。しかし、1984年12月には青年座時代の同僚、越川大介と結婚、現在は一女の母でもある。また、1988年の宮崎駿作品『となりのトトロ』でおかあさん役を演じている。その見事な母親役の演技ぶりに月日の流れるのは早い、と驚く筆者である。

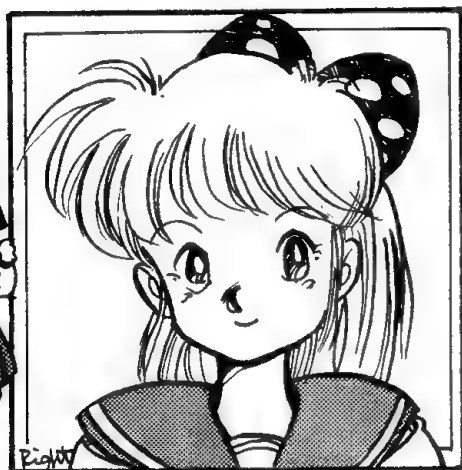
ダムZZ」ニー、「機甲戦記ドラグナー」ジン、「小公子セディ」ウィルキンス、「獣神ライガー」ドルコマンド、「力王」力王、「たいまんぶるうす」清水直人、など数え上げたらキリがない程数多くのキャラを演じている。

島津冴子

【プロダクションエム・スリー】
昭和三十四年九月八日生まれ
乙女座　A型

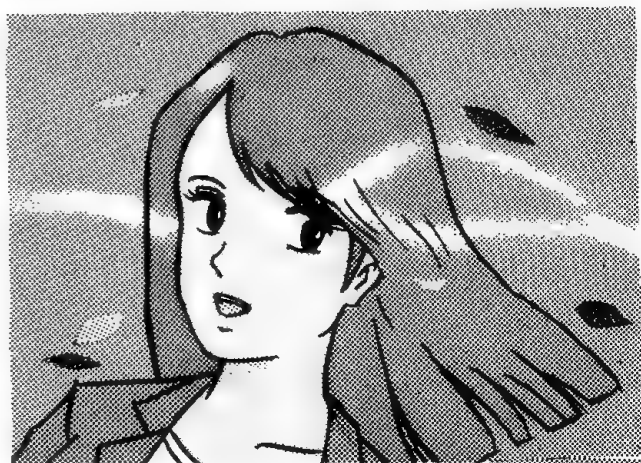
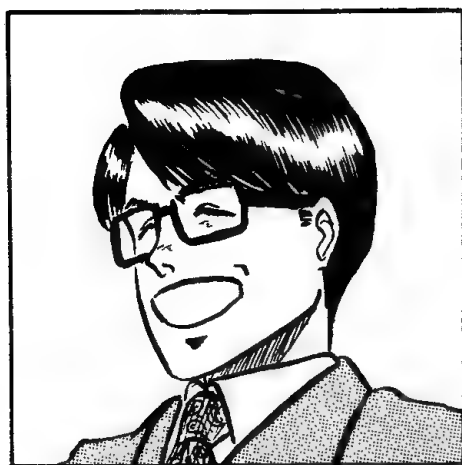
本名・大河原康代という噂があるが定かではない。写真うつりによっては随分と落差があるが、絶世の美女であることは間違いない。しかし、「さすがの猿飛」の霧賀魔子と「闘斗メカ・ザブングル」のラグを同一人物が演っているとは信じ難かったが、その疑問も「アニメトピア」を聴くことによって解消された。実はラグの方が地に近かったんだよね。『スキスキ冴子のポルノランド』とか『冴子、お茶飲んで終わりのデートなんてイヤ』事件とか、面白かったよな。

デビューは、「オタスケマン」オタスケマン2号ナナちゃん、「うる星やつら」しのぶ、「ダーティペア」ユリ、「Zガンダム」フォウ・ムラサメなどが代表作。その他、「エルガイム」ポセイダル、ミアン、「超獣機神ダンクーガ」ルーナ、「ドラグナー」ミン大尉、「ついでにとんちんかん」アンディ、「ミスター味っ子」章吉などあまり多くないが、昭和六十年第八回アニメグランプリでは、最優秀女性声優賞を受賞したこともある。

そんな彼女も、テレビ製作会社に勤める井村英樹氏と昨年めでたく結婚、現在は人妻である。最近は「らんま1／2」黒薔薇の小太刀役で活躍。やっぱり、あのキャラは彼女しか出来ないよなあ。

荘真由美

【青二プロダクション】
昭和？年二月五日生まれ
水瓶座　O型

この人の声を初めて聞いたのは、「メガゾーン23」の夢叶舞だった。その後すぐに「戦えイクサー1」の加納渚をやり、注目されるようになる。舞はアーパー娘だし、渚はキャーキャーわめいてるだけだったから上手いも下手もなかったが、「愛の若草物語」のベスではキャラの持つ繊細さを見事に演じ、ただのキャピキャピギャルではないことを知った。そう思うと「めぞん一刻」の郁子や「ハイスクール奇面組」の一堂霧もかわいく見えてくるから不思議だ。

「破邪大星ダンガイオー」ではミア・アリス役で主役を張ってはいるが、かけ声など声量不足の感はいなめない。しかし、声質は爽やかで好感が持てる。その他に、「コンポラキッド」有見衣音、「ワンダービートS」マユミ、「ガンダムZZ」クム、「メイプルタウン物語」ダイアナ、「レディレディ」メアリー、「キテレツ大百科」みよ子、「ドラゴンボール」チチ、OVA「ルパン三世」紫、「ゼオライマー」幽羅帝、などを演っている。最近は「美味しんぼ」の栗田ゆう子役でさらにファンが増えたことだろう。

以前『マミーポコ』のCMでアイロンをかけていた彼女も、めでたく結婚し、元気にアイロンをかけている、かどうかは定かではない。

氏　　名　**鈴置 洋孝**

本　　名　同じ
所　　属　俳協
生年月日　昭和二十五年三月六日
星　　座　魚座
血 液 型　A型
性　　別　男
出　　身　名古屋

≪演じたキャラクター≫
『無敵鋼人ダイターン3』破嵐万丈、『機動戦士ガンダム』ブライト・ノア、『ムーの白鯨』白風信、『宇宙戦艦ヤマトⅢ』太田健二郎、『戦国魔神ゴーショーグン』北条真吾、『超攻速ガルビオン』ムウ、『超時空要塞マクロス』リン・カイフン、『機甲創世記モスピーダ』イエロー、『超時空世紀オーガス』ネルソン、『県立地球防衛軍』カーミ・サンチン、『アリオン』アポロン、『キャプテン翼』日向小次郎、『聖闘士星矢』ドラゴン紫龍、『ドラゴンボール』天津飯、『F』聖一人、『うる星やつら』因幡くん、『魁！男塾』伊達臣人、『ミスター味っ子』小西和也、『エリアル』ラグナス、『らんま1／2』九能帯刀、『天空戦記シュラト』雷帝インドラ、『究極超人あ〜る』鰯水、『未来放浪ガルディーン』スリム・ブラン、『機動警察パトレイバー』内海課長、『アイドル天使ようこそようこ』山下秀樹、他

★コメント★
アニメデビューは『ボルテスV』の係員役。演じて来たキャラの大半は二枚目だが、最近は少々クセのある変わった役が多くなっている。『♪インドラふめふめ、お池にほかけてシュラシュラト、わたしはインドラ、ウラドラじゃありませんよ、ボテチン♪』 これがインドラのテーマソングである。なんでも、『シュラト』のドラマ編の録音中に、彼がアドリブで作ったそうな。周りにいた人達は、いきなりこれをやられて、さぞや驚いたことだろう。また、小西和也の“当たり前、当たり前、当たり前ぇ〜！”も完全にプッツン切れてたし、九能帯刀も内海課長も本当にいい味だしてるよなぁ。その他、『ショウビズ』のナレーターとしても活躍中。

昭和48年から8年間所属していた、野沢那智率いる劇団薔薇座を退団、俳協に移籍した。理由は、舞台と声の仕事の両立が難しくなってきたため、食うことだけに専念することにした、とのこと。学生時代は、ただハンコ押すだけで食えるからという理由で、税理士になりたかったという。本人曰く、“かなり性根のすわったグウタラ”だそうだ。というわりには、何をどう間違ったのか、俳優なんて本人の希望とは対極に位置する仕事をしている。どちらかと言えば、奥さん（同じく薔薇座の女優）に引っ張られて演劇を始めたと言えない訳でもない。奥様は東京経済大学の後輩で、学生結婚である。

曽我部和恭

【テアトルエコー】
本名・曽我部和行
昭和二十三年四月十六日生まれ
牡羊座　A型

通称ガベさん。奥さん、子供有り。デビューは「破裏拳ポリマー」の鎧武士だった。青野武演じる探偵長との掛け合いは面白かった。ガベさん本人はスリムで渋い二枚目。スラップスティックではベースを担当。彼の演じたキャラの中では、「パタリロ」のバンコランが一番気に入っている。以前は、「マシンハヤブサ」隼剣、「メカンダーロボ」八島小次郎、「闘将ダイモス」夕月京四郎、「ヤットデタマン」時ワタル、「銀河旋風ブライガー」剃刀アイザック、「北斗の拳」風のヒューイ、「聖闘士星矢」アーレス（サガ）、シードラゴン（カノン）など、主役や二枚目を数多く演っていたが、最近ではテレビアニメでお目にかかれることはめったにない。悲しい限りである。

その他のキャラに、「機動戦士ガンダム」ワッケイン司令、「ボルテスV」一平、「ルーベンカイザー」秀人、「プティアンジェ」マイケル、「千年女王」千年盗賊、「クラッシャージョウ」キリー、「愛の若草物語」アンソニー、「バブルガムクライシス」ラルゴ、「湘南爆走族」大影彫二、「超人ロック」ウェン・リー、などがある。

た行

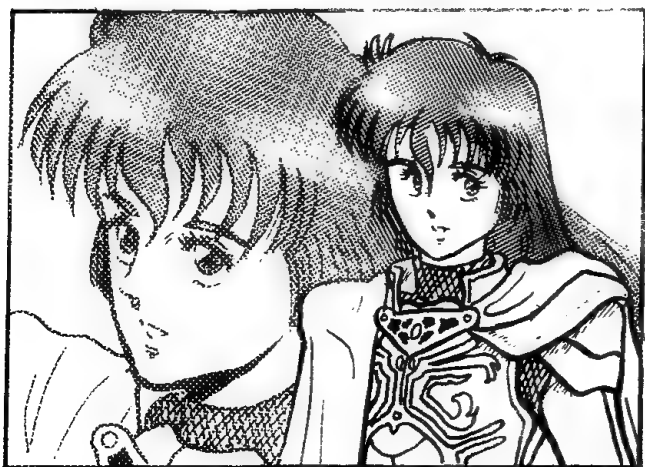
高橋美紀

【キャリーアウト】
本名・同じ
昭和三十六年九月十九日生まれ
乙女座　O型

アニメデビューは「聖戦士ダンバイン」のシーラ・ラパーナのはずだが、本当は「クリィミーマミ」の女の子Aである。新人ながら、人気ラジオ番組『アニメトピア』の三代目パーソナリティに抜擢され、その可愛らしい声とルックスから一躍人気声優となる。しかし、慣れてくるに従って自己主張をするようになり、ただのブリッコではないところを見せた。『ビールちょうだいっ！』発言には正直驚かされたぜ。

アニメでは、彼女の性格そのものと言われる「ＧｕＧｕガンモ」の市ケ谷あゆみや、「モスピーダ」アイシャ、「奇面組」河川唯、「魔女でもステディ」麻美など、可愛い女の子の役しか演らなかったが、彼女のイメージと異なる熟女や少年を演って欲しい。

音楽活動では、富沢美智恵と共に『雨に神様』という名でポプコンに出場、最終のつま恋本選会まで行ったという経歴も持っている。

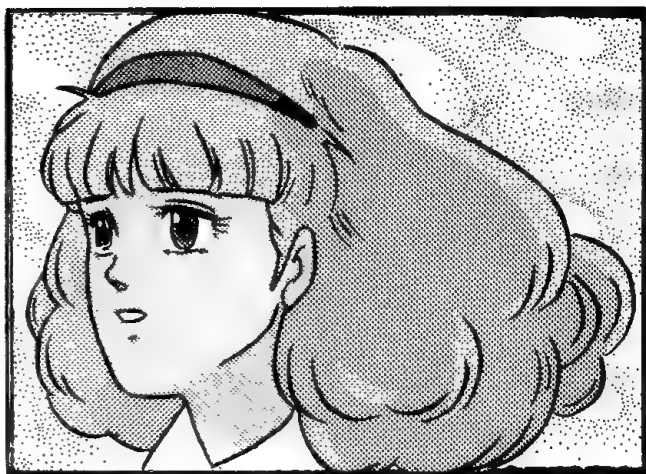
しかし、声優としてこれからという時に、高校時代からのお付き合いだという男性、稲生氏と結婚。芸能界をスッパリと引退…、したはずなのだが、昨年「第三野球部」の鬼頭さゆり役で突然カムバックし、ファンを驚かせた。フッ、所詮一度この世界に足を踏み入れた人間は、そう簡単に抜け出す事は出来ないのさ。（なんちゃって！）

氏　　名　関 俊彦

本　　名　同じ
所　　属　８１プロデュース
生年月日　昭和三十七年六月十一日
星　　座　射手座
血 液 型　Ｂ型
性　　別　男

≪演じたキャラクター≫
『赤い光弾ジリオン』ＪＪ、『Ｆ』赤木軍馬、『学園特捜ヒカルオン』四方堂ヒカル、『ザ・サムライ』血祭武士、『孔雀王』孔雀、『冥王計画ゼオライマー』秋津マサト、『聖闘士星矢』フェンリル、『天空戦記シュラト』修羅王シュラト、『ＹＡＷＡＲＡ』松田耕作、『らんま１／２』ムース、『ダッシュ四駆郎』南進駆郎、『ようこそようこ』早見亮、『ガッデム』ハンス、他

★コメント★
私が初めて彼の声を聞いたのは、アニメではなく舞台であった。確か『バースデイ・ゲーム』という８１プロデュースの公演で、ミルクっていう坊ちゃんの役を演じていたのだが、結構味のある演技をしていた。このミルクという役は、同じ８１の中尾トモさんも演った由緒ある役柄なのだが、けっしてひけは取っていなかったと思う。また、同公演『バッカーズ・オーディション』でも、軽快なダンスを披露してくれた。その舞台青年がいきなりアニメ番組、『赤い光弾ジリオン』のＪＪ役で声優をやっているのを聞いたときには、さすがに驚いたね。

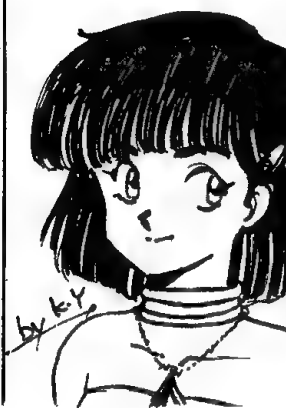
アニメデビューは、確か『タッチ』か『ＯＶＡコールミートゥナイト』の脇役だったと思う。その後、たて続けに主役級ばかり演じているのは、本人の才能もさることながら、持って生まれた明るくひょうきんな性格と、劇団での下積み時代の努力の賜物であろう。また、ＮＨＫ教育テレビの『ふえはうたう』にお兄さん役で出演したり、『ワープロ講座』では、鈴木清信とコンビでコントをやったりもした。その時の女装姿を思い出すと、今でも笑いがこみ上げて来る。アニメキャラとしては、ひょうきんで野性味あふれる熱血漢タイプの役が多いが、今後はアダルトな役にも挑戦して、演技の幅を広げていって欲しい。いずれにしても、彼がこれからの声優界をしょって立つ存在になることは間違いないだろう。最近は、『天空戦記シュラト』のシュラト、『ＹＡＷＡＲＡ』の松田耕作役で活躍。

今年は、ついにミニアルバムをリリース。『ＫＩＣＫＳ　ＯＮ　ＴＨＥ　ＷＡＹ』というタイトルで、これがなかなかノリの良い曲が多く、お買得の一枚である。

鷹森淑乃

【アーツビジョン】
本名・同じ（旧姓）
昭和三十八年十一月二十日生まれ
蠍座

「超音戦士ボーグマン」のアニス・ファームで一気に売れっ子声優になる。デビューは「超力ロボ・ガラット」のパティ・パンプキン。続く「炎のアルペンローゼ」では主役のジュディを演じ、（私が赤石路代のファンだったせいもあるが）たちまちその可愛い声に惚れ込んでしまった。しかし、彼女にとってもジュディのインパクトが強すぎて、しばらくは何を演ってもジュディになってしまうような気がしたそうだ。

その後、「日本経済入門」の松本佐和子や、「ホワッツマイケル」小林夫人、「シティハンター」野上麗香を演ったあたりから、やっとジュディ病を脱し、それ以降それぞれのキャラの特徴を生かした素直な演技が出来るようになった。

その他に、「あかぬけ一番」おカヨ、OVA「ダンバイン」レムル、「竜世紀－神章－」璃子、「F.S.S」リィ・エックス、「アイドル伝説えり子」靖子先輩、「つるピカハゲ丸くん」桜先生、OVA「エースをねらえ」アンディ・レイノルズ、などがある。最近は、「YAWARA」本阿弥さやか、「ふしぎの海のナディア」ナディア役で活躍中。

高山みなみ

【81プロデュース】
本名・新井泉
昭和三十九年五月五日生まれ
牡牛座　B型

「ミスター味っ子」こと味吉陽一役で、今やアニメファンの間で知らない者はいない。デビューは何でも「学園特捜ヒカルオン」だそうだが何の役だか分からない。昨年は宮崎アニメ「魔女の宅急便」で主役のキキとウルスラの二役を見事に演じ、日本アカデミー賞で表彰までされた。また、異色作として「らんま1/2」の天道アンニュイなびき役があり、九能（鈴置）帯刀との掛け合い漫才は絶妙であった。「シティハンター3」では、女弁護士役で珍しく大人の女性を演じたりもした。

その他のキャラに、OVA「デビルマン」「ドラグナー」「おぼっちゃまくん」「ダッシュ四駆郎」の脇役、「小公子セディ」ロイ、「エクスプローラーウーマンレイ」橘真魅、「魔狩人」六道夜摩、などがある。

アニメビジョンスペシャルでは、みなみさん本人が実際にパイナップルカレーを作って食べていたが、あれはどう見てもまずそうだった。ゴメンナサイみなみさん。（詳しくは『声優インタビュー』参照のこと）。

竹村拓

【フリー】
本名・同じ（「ひろし」と読む）
昭和二十八年十月二十四日生まれ
蠍座

代表作は何と言っても「クラッシャージョウ」のジョウであろう。それまで全くの無名だったのに、ジョウ役に抜擢されてから、あれよあれよという間に人気声優になってしまった。「銀河漂流バイファム」のバーツ、「ゴットマジンガー」では主役の火野ヤマト、「ドラグナー」ではウェルナー、と次々に二枚目を演じ

氏　　名　田中 真弓

本　　名　阿部　真弓
所　　属　プロジェクトレビュー
生年月日　昭和三十年一月十五日
星　　座　山羊座
血 液 型　A型
性　　別　女
出　　身　東京

≪演じたキャラクター≫
『激走ルーベンカイザー』高木涼子、『野ばらのジュリー』ハインリッヒ、『金髪のジェニー』ベティ、『ベルフィーとリルビット』リルビット、『白い牙』ミトサア、『ダッシュ勝平』坂本勝平、『さすがの猿飛』忍豚、『未来警察ウラシマン』ジタンダ、『イタダキマン』イタダキマン、『うる星やつら』竜之介、『巨神ゴーグ』田神悠宇、『ＧｕＧｕガンモ』半平太、『ワンダービートＳ』スギタススム、『名探偵ホームズ』ポリー、『ロボタン』キーコ、『アリリオン』セネカ、『銀河鉄道の夜』ジョバンニ、『天空の城ラピュタ』パズー、『ドラゴンボール』クリリン、ヤジロベエ、『おそ松くん』チビ太、『アニメ三銃士』ジャン、『魔神英雄伝ワタル』戦部ワタル、『獣神ライガー』剣、『ガタピシ』平太、『やっぱりヤンチャー』モンタ、ギャースカ、『未来放浪ガルディーン』コロナ・フレイア、他

★コメント★
声優の柴本宏行氏の奥様にして一児の母である。初のレギュラーは『ルーベンカイザー』の高木涼子。実際そのアニメは見たことがないが、美人のお嬢様があの声でしゃべっているのを想像すると、思わず吹き出してしまう（真弓さん、ゴメンナサイ！）。彼女が声優界にその名を轟かせ始めたのは、多分ダッシュ勝平からであろう。初めて聞いた時は、男性がやっているものとばかり思っていたが、『アニメトピア』を聞いて女性だと知った時の私の驚きようは、とても言葉では表せない。にしても、『トピア』があれ程の人気を誇っていたのは、やはり彼女の力による所が大きい。その他、教育テレビの『おーい！はに丸くん』や、『コクヨくるくるメカ』、『もまずにあったまるキンチョーどんと』などのＣＭでもお馴染みである。

青山学院短期大学を卒業後、鈴木邦彦ポップススクールで歌の勉強をしながらパブなどで弾き語りの仕事をしていた時、劇団テアトルエコーのスタッフにスカウトされ、この業界へ。この業界の雰囲気が余程彼女の体質に合っていたのか、テレビに舞台にラジオのパーソナリティにと、その後の活躍は周知の通りである。1986年にはアニメグランプリ女性声優人気No１となり、いまでは押しも押されぬ演技派女優として認められるようになった。余談ではあるが、彼女が某有名コントトリオのリーダーと恋仲にあったことは公然の秘密である。

たが、そうかと思えば、「オバケのQ太郎」のゴジラ、「サザエさん」のじん六などの三枚目も上手にこなしている。

最近まで、人気大爆発の「サムライトルーパー」では、一番人気の天空のトウマ（羽柴当麻）を、「トランスフォーマーV」では主役のゴットジンライを演じるといった活躍ぶりであった。嬉しいことに、OVAで「ジョウ」が復活したが、やっぱり昔の「ジョウ」を演ってた頃の声の方が好きだなあ。

龍田直樹

【青二プロダクション】
昭和二十五年九月八日生まれ
乙女座

一言で言えば脇役のベテラン。古くは、「グロイザーX」「野球狂の詩」「はいからさんが通る」あたりから、新しくは「魔動王グランゾート」のドクターバイブルまで脇役一筋、筋金入りの名バイプレイヤーである。

「魔法のスター・マジカルエミ」のトポで初めて龍田直樹という名を目にして以来、「ガラット」キウイ博士、「ドラゴンボール」ウーロン、「オバケのQ太郎」木佐、「奇面組」大間仁、「メイプルタウン物語」ヨータ、「ついでにとんちんかん」毒鬼醜憎、「ドメルとロン」ドメル、「アニメ三銃士」コピー、「がきデカ」亀吉、など数え上げたらキリがない程無数のキャラを演じている。目立たない存在だが、こういう人がいないとアニメというものは成り立たないんだよね。でも一度でいいから、龍田さんの二枚目ヒーローを見てみたいな。

田中秀幸

【青二プロダクション】
昭和?年十一月十二日生まれ
蠍座

再放送で知った人も多いと思うが、あの「ドカベン」の山田太郎くんである。二枚目路線では、「戦国魔神ゴーショーグン」キリー・ギャグレー、「キン肉マン」テリーマン、「バリバリ伝説」巨摩グン、「聖闘士星矢」アイオリアなど、おじさん路線では、「タッチ」柏葉監督、「ポリアンナ」チルトン、「シティハンター」槙村、「アニメ三銃士」ルイ十三世、などが挙げられる。また、それだけでなく、「らんぽう」角丸先生、「さすがの猿飛」風間小太郎、「奇面組」時代錯誤、のようなギャグキャラまでこなすオールラウンドなベテラン声優である。

その他、「アリオン」プロメテウス、「銀牙・流れ星銀」ベン、「レディレディ」ジョージ、「魁!男塾」大豪院邪鬼、「TWIN」ヒョオ、「第三野球部」鬼頭、「トランスフォーマーV」スターセイバー、など多岐に渡って、幅広い演技を見せてく

ベスも忘れちゃやだよ〜ん

氏　　名　　戸田 恵子

本　　名　　同じ
所　　属　　青二プロダクション
生年月日　　昭和三十二年九月十二日
星　　座　　乙女座
血 液 型　　O型
性　　別　　女
出　　身　　名古屋

≪演じたキャラクター≫

『機動戦士ガンダム』マチルダ・アジャン、『伝説巨神イデオン』カララ・アジバ、『千年女王』雨森始、劇場版『宇宙戦士バルディオス』アフロディア、『キャッツアイ』来生瞳、『特捜機兵ドルバック』アロマ、『ガラスの仮面』麗、『蒼き流星ＳＰＴレイズナー』エリザベス、『夢幻紳士』魔実也、『新ゲゲゲの鬼太郎』鬼太郎、『戦え！イクサー１』イクサー２、『妖刀伝』綾之介、『アンパンマン』アンパンマン、『魔女の宅急便』おソノさん、他

★コメント★

ＮＨＫ名古屋放送劇団に所属し『中学生日記』等に出演中スカウトされ、歌手として“あゆ朱美”の名でデビュー。しかし、さっぱり売れず野沢那智に誘われて劇団薔薇座に入団、舞台女優へと180°転身した。その時付けられたニックネームがグリコである。で、何故グリコかというと、グリコのキャラメルとは全く関係なく、入団当時の彼女が“いがぐり”のような頭だったので“いがぐりこ”→“グリコ”となったそうだ。アニメでは『ガンダム』のマチルダ役で人気を得ると同時に、『イデオン』のEDテーマ「コスモスに君と」が大ヒットし、歌手としての実力も認められた。また、声優としても『千年女王』で少年役を好演、演技の幅の広さを見せた。その後は大人の女性の役を数多くこなし、人気声優の地位を不動のものにするかと思われたが、59年頃から次第に舞台に力を注ぐようになり、アニメの本数は減っていった。薔薇座の看板女優として数多くの舞台に出演し蘆原英了賞などの権威ある賞を受賞するなど、舞台女優としての活躍はめざましいものだった。それでも声優は続け、現在は『アンパンマン』で活躍中、全国の子供達の一大アイドルである。

56年に声優の池田秀一と結婚したが、残念ながら別れてしまったようである。実は彼女、三ッ矢雄二とは幼なじみで、同じ劇団に所属し、三ッ矢氏の母君の事も知っている程の仲らしい。ラジオでは、中尾隆聖と共に『ペアペア・アニメージュ』木曜日のパーソナリティを努め、他の曜日とは違った大人の会話（別にいやらしい意味ではない）を楽しませてくれた。しかし、そんな彼女も、今では薔薇座を退団し、声の仕事やラジオのパーソナリティに専念しているようである。最近はＮＨＫのバラエティー番組で島田歌穂らと共に歌やダンスを披露したり、文化放送『走れ歌謡曲』月曜日のパーソナリティなどで活躍。

れている。アニメではないが、実写映画「紅い眼鏡」（押井守監督）での渋い演技も光った。

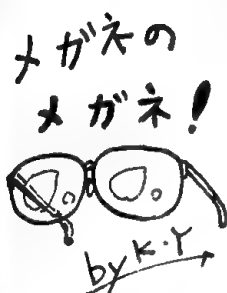
千葉繁

【プロダクションエム・スリー】
本名・前田正治
昭和二十九年二月四日生まれ
水瓶座　O型

脇役の帝王。と言いつつも、「奇面組」では一堂零役で堂々と主役を張った。しかし、この人の代表作はやはり「うる星やつら」のメガネではないだろうか。初めは原作にも出て来ないオリジナルキャラだったのが、彼の演技の巧妙さから、ついには作品には欠くことの出来ない主要キャラクターにのし上がってしまった。あのマシンガンのように発せられるテンポの良い彼独特のセリフ回しに、多くのファンが魅了された。

「ドカベン」の山岡役でデビューし、「リスのバナー」ゴチャ、「ニルスのふしぎな冒険」グスターを経て、「まいっちんぐマチ子先生」山形先生、「ドクタースランプ」つんつくつん、「さすがの猿飛」００８９３（オカマ役が妙に板についていた）などで、ファンに知られるようになる。その後、「ダグラム」ジョルジュ、「ボトムズ」バニラ、「ガリアン」ウィンドウ、と立て続けにサンライズロボット物のレギュラーを演り、さらに、「北斗の拳」のヤラレ役やナレーションではメガネを上回るハチャメチャぶりを発揮した。また、これとは対照的な「めぞん一刻」の四谷氏は、その渋い演技が好評で彼の影の代表作と言われている。

さらに、「ドクタースランプ」ニコチャン大王の部下、「ＧｕＧｕガンモ」デジャブー、「スプーンおばさん」ゴローニャ、「魔法の妖精ペルシャ」ゲラゲラ、「タッチ」パンチ、「めぞん一刻」惣一郎と、人間以外の役も多い。その他に、「マジカルエミ」国分寺、「パステルユーミ」国光、「アニメ三銃士」ロシュフォール、「メガゾーン２３Ⅲ」ライトニング、「おそ松くん」おまわりさん、「ダンガイオー」ギル・バーグ、「Ｆ」木下ケイタ、「第三野球部」桑本、「ウルトラＢ」とさか、「ドラゴンボール」ラディッツ、「パトレイバー」シバ・シゲオ、「トンデケマン」トンデケマン、ビデオ版「がきデカ」こまわりくん、などがあるが、これでもまだ一部にすぎない。

実写映画『紅い眼鏡』では主役の都々目紅一で体当りの演技を見せ、ファンをうならせた。相楽晴子とのコンビで話題になった『深夜秘宝館』のシーゲル・バーチーけっこう笑えた。奥様とは十五年前に結婚。下積み時代はスタントマンなど、かなりハードな仕事をしていたとか。その他、劇舎バーストマンという演劇集団で西村智博や玉川砂記子らと共に舞台活動もしている。

つかせのりこ

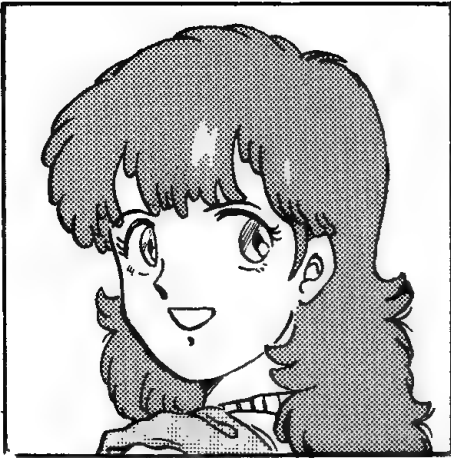
（故人）
本名・原紀子
昭和二十年十二月二十三日生まれ
山羊座

教育テレビの人気長寿番組『できるかな』のナレーションで有名。しかし、「つるピカハゲ丸くん」や「ひみつのアッコちゃん」に出演中、病気のため降板。一時手術は成功と伝えられたが、昨年五月十五日、ついに帰らぬ人となってしまった。ハゲ丸の後任は杉山佳寿子が、「アッコ」のガンモは三田ゆう子がそれぞれ務めた。

アニメでは、「おはようスパンク」スパンク、「超人戦隊バラタック」フランコ、「ガイキング」ハチロー、「くまの子ジャッキー」ジャッキー、「ハーイステップジュン」吉之介、「メイプルタウン物語」グータ、「ドテラマン」ハジメ、などが有名である。

私個人としては、「魔女っ子メグちゃん」のノンと「キューティーハニー」のアルフォンヌ先生が特に気に入っている。知的で冷たいノンとパッパラパーなアルフォンヌ、その

氏　　名　**冨永 み〜な**

本　　名　冨永　美子
所　　属　プロジェクトレビュー
生年月日　昭和四十一年四月三日
星　　座　牡羊座
血 液 型　O型
性　　別　女

≪演じたキャラクター≫
『あらいぐまラスカル』アリス、『ときめきトゥナイト』神谷曜子、『綿の国星』チビ猫、『バース』ラサ、『銀河漂流バイファム』クレア、『魔法の妖精ペルシャ』速水ペルシャ、『メガゾーン２３』村下智美、『タッチ』新田由加、『魔法のアイドル・パステルユーミ』カキ丸、『めぞん一刻』こずえ、『北斗の拳２』リン、『機動警察パトレイバー』泉野明、『究極超人あ〜る』堀川椎子、他

★コメント★
芸能生活17年のキャリアを持つ若手声優。読者の中にもテレビドラマや『ウルトラマンレオ』で子供時代の彼女を見たり、『禁じられた遊び』『ペーパームーン』などの洋画の吹替えで彼女の声を聞いたことのある人も多いだろう。初アニメは『みつばちマーヤ』の女の子役であった。ところが当時彼女はなんと録音スタジオでおにぎりやお団子などを大人の声優に売って金儲けをしていたというオソロシイ子供だったそうな（ちょっとオーバーかな）。しかし学校では、速攻帰宅部だったにもかかわらず小１から中３まで９年間学級委員をつとめた自称真面目少女だったということだ。小学校一年から“グループこまどり”の子役として、現在は三ッ矢雄二率いる“プロジェクトレビュー”の看板女優として活躍中。川村万梨阿と『アニメトピア』の四代目パーソナリティをやり始めてから、我々ファンもよく知らなかった彼女の素顔が見えるようになり、この番組を聴いてファンになった人も少なくないんじゃないだろうか。

アニメの仕事は、『ときめきトゥナイト』あたりから増え始め、その頃から声優として認識されるようになった。そして、彼女の代表作ともいえる『ペルシャ』では「〜ですの」という独特のしゃべり方と可愛らしさが受けて、一躍人気声優の仲間入りをした。あっ、今目の前で『シティハンター』のゲストで空飛ぶおしり子ちゃんの声を当ててる〜。（だからなんなんだ！）

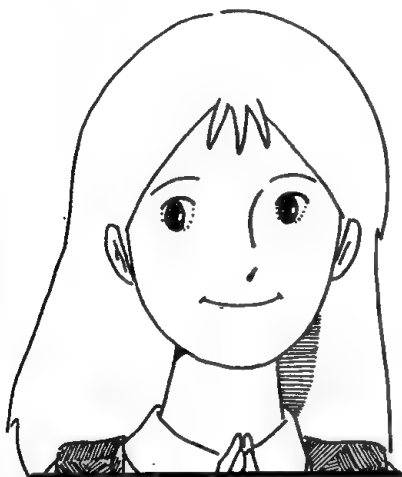
また、音楽活動、舞台活動も盛んで（今はそうでもないが）、何枚かのＬＰを出し、アニメの主題歌、挿入歌、イメージソングなども歌っている。その中でもディスクミュージカル『ジミーとジョアン』の中の“ごめんねかわいくて”や『あ〜る』のイメージアルバムの中の“マスカットシーズン”などは特におすすめである。

両極端さが何とも言えずおかしい。本当に惜しい人を亡くしたものだ。

鶴ひろみ

【青二プロダクション】
昭和三十五年三月二十九日生まれ
牡羊座　A型

北海道生まれの横浜っ子だそうな。デビューは「ペリーヌ物語」のペリーヌである。当時はまだ高校生で、演技もけっして上手いと言えるものではなかった。しかし、その後メキメキと力をつけ、「みゆき」の鹿島みゆき役あたりから人気が上昇し、OVA「幻夢戦記レダ」の朝霧陽子役で一躍脚光を浴びる。それからは、「特装機兵ドルバック」ルイ・オベロン、「キン肉マン」ナツコ、「マクロス」キム、「ドラゴンボール」ブルマ、「タッチ」西尾久美子、と気の強い女の子を演ることが多かった。

そして、女の子のリリカルな心理を見事に表現した「きまぐれオレンジロード」の鮎川まどかは彼女の演技の頂点と言えるものであった。その他のキャラに、「GuGuガンモ」浅草先生、「陽あたり良好」関圭子、「めぞん一刻」九条明日菜、「ワンダービートS」ビジュラ姫、「湘南爆走族」津山よし子、「花のあすか組」九条あすか、「アンパンマン」ドキンちゃん、「聖闘士星矢」テティス、「第三野球部」村下夕子、「カルラ舞う」扇翔子、などがある。

また、『ラジオマクロス』や『ラジオアニメック決定アニメ最前線』など、ラジオ番組のパーソナリティとしても活躍、これでファンになった人も少なくないはずだ。舞台の方でも、『アクターズスリル&チャンス』という劇団で精力的に活動中である。

土井美加

【劇団昴】
昭和三十一年八月四日生まれ
獅子座　O型

初のレギュラーは「ヤットデタマン」のカレン姫。続く「逆転イッパツマン」ではミンミン、「ミンキーモモ」ではママを演っていたが、名前を覚える程ではなかった。だが、彼女の代表作「超時空要塞マクロス」の早瀬未沙役で一気に人気を集め、その年のアニメグランプリでは女性声優部門第二位となった。その後、「モスピーダ」フーケ、「ダンバイン」マーベル、「クリィミーマミ」森沢なつめ、「サザンクロス」ラーナなど、かなりのレギュラーをかかえるようになる。私個人としては、「重戦機エルガイム」のフル・フラットが一番好きだったりする。

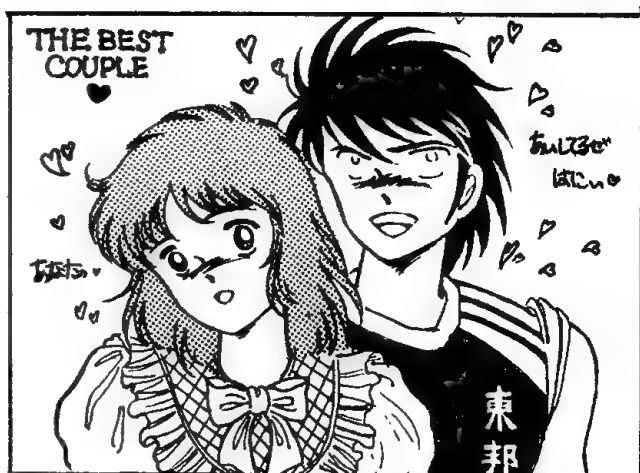
しかし、劇場版「マクロス」終了後は、「北斗の拳」トウ、「ポリアンナ」ジェニー、「仮面の忍者赤影」山吹、「のらくろくん」木下圭子、「トウキョウバイス」教授夫人、「レディリン」美鈴、「天空戦記シュラト」後三世明王トライローなどの、セミレギュラーぐらいしか演っていない。

最近は、「エクスプローラーウーマンレイ」杵築麗奈、「エンゼルコップ」三加和蓉など、OVAの方の主役で頑張っている。

飛田展男

【アーツビジョン】
本名・同じ
昭和三十四年十一月六日生まれ
蠍座　AB型

茨城県水戸出身。「機動戦士Zガンダム」のカミーユ・ビダン役で有

名。しかし、演ってる本人がキャラの性格を理解出来ないってんだからとんでもない話だよな。「サイボット・ロボッチ」のボブ役でデビュー後、「キャプテン翼」の若島津健で女子中高生の支持を得る。また、これは公然の秘密であるが、「くりぃむレモン」亜美シリーズのヒロシお兄ちゃん役は有名である。

それ以外には、「あした天気になあれ」南、「光の伝説」大石誉昭、「ビリ犬」ホネヒコ、「ビックリマン」霊界一本釣、「ミスター味っ子」劉虎鋒、「天空戦記シュラト」比婆王ダン、「風魔の小次郎」霧風、「超人ロック」ロック、などのキャラを演っている。

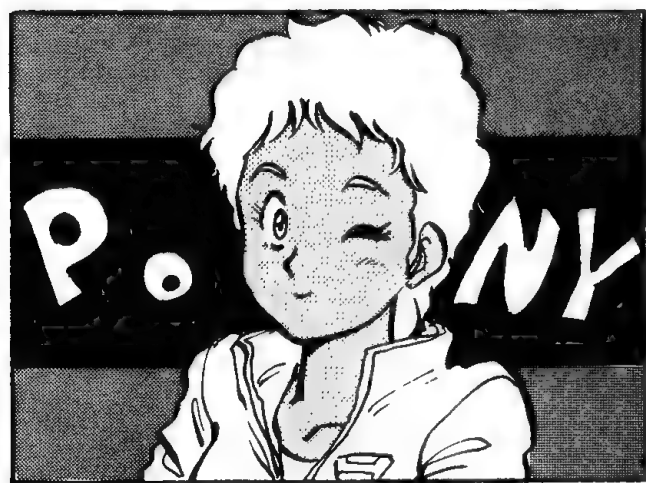
本人は小さい頃からアニメが好きで、アニメージュを創刊号から揃えている程のアニメファンだそうだ。これで、声優になった動機も理解出来る。最近は、『ズバリそうでしょう』でお馴染み、「ちびまるこちゃん」の丸尾くん役で活躍。

富沢美智恵

【青二プロダクション】
本名　富沢美智江
昭和三十六年十月二十日生まれ
天秤座　A型

アニメデビューは「聖戦士ダンバイン」のエル・フィノ役。顔出しではその前に『ゴーグルV』に出演したことがある。教育テレビでは『小学一年社会・うちの人学校の人』のお姉さん役を二年間務めた経験もある。その当時の写真を見ると、今からは想像も出来ないほど太っている。それがあんなにスリムになっちゃうんだから女の子ってのは変わるもんだねぇ。おっと、話を元に戻そう。

初の主役は「超時空騎団サザンクロス」のジャンヌだったが、エル・フィノと同じくキンキン声でただ喚いているだけで、とても演技とは思えなかった。その後「ミームいろいろ夢の旅」ひろこ、「あした天気になあれ」白石えつ子、「ふたり鷹」パットなどを演じるが、今一つパッとしなかった(シャレではない)。それでも、「吸血鬼ハンターD」のドリスなんか色っぽくてけっこう好きだった。

そして、「プロジェクトA子」の寿詩子こと『み～んな元気だねヤッホー』C子や「ガルフォース」ボニー、「バブルガムクライシス」リンナ、「光の伝説」椎名葉月などを演ったあたりから徐々に人気が上昇してきた。その他に「きまぐれオレンジロード」まなみ、「ビックリマン」ビーナス白雪なども演じた。また、音楽活動の方も活発で、高橋美紀とポプコンに出場、つま恋本選会まで残った経験を持つ。その後も、自らバンドを組んでボーカルをつとめたり、アニメの主題歌や挿入歌を数多く歌ったりした。その中でも彼女の歌った『Dance Away』の日本語バージョンが特に気に入っている。聞いた話によると､彼女はマイケル・ジャクソンの大ファンで彼の日本でのコンサートツアーで彼女が最前列にいた時、コンサートの最中、幸運にも彼女だけマイケルに舞台にあげてもらいキスまでしてもらったらしい。あくまでもこれは噂であって事実かどうか定かではない。

富山敬

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名　富山邦親
昭和十三年十月三十日生まれ
蠍座　O型

「宇宙戦艦ヤマト」の古代進である。旧満州の鞍山で生まれ、弟が二人いたが一人は事故、一人は栄養失調で現地で亡くなり終戦と共に日本に引き揚げて来たという悲惨な経験の持主。しかし、この人の語り口からはこれらの悲惨な過去のかけらも感じられない。現在一人の女の子と双子の男の子の父親である。

初の主役は「佐武と市捕物控」の佐武。その後は「アニマル1」東二郎、「男一匹ガキ大将」戸川万吉、「タイガーマスク」伊達直人、「侍ジャイアンツ」番場蛮、「ヤッターマン」ナレーション、「UFOロボ・グレンダイザー」宇門大介、「グランプリの鷹」轟鷹也、「キャンディキャンディ」テリー、「マルコ・ポーロの冒険」マルコ・ポーロ、「ザ・ウルトラマン」光超一郎、「宇宙大帝ゴットシグマ」壇闘士也、「逆転イッパツマン」豪速球、「さよなら銀河鉄道999」ミャウダー、「野球狂の詩」国立、「SF西遊記スタージンガー」サー・ジョーゴ、と数え上げたらキリが無い程多くの主役や二枚目を演じる反面、「刑事スタスキー&ハッチ」のハギー・ベアや「ゲゲゲの鬼太郎」のねずみ男のような三枚目をやってもピタッとサマになる。さらに「ガンバの冒険」ガクシャ、「三国志」諸葛亮孔明といった知的な役もこなし、近年では「ホワッツマイケル」マイケル、「あんみつ姫」源内、「みゆき」『ファミリータイズ』「Oh!ファミリー」「きまぐれオレンジロード」などではお父さん役まで演じるようになった。しかし、これらどれ一つとっても違和感がないというのは、彼の演技の幅がいかに広いかということを表している。

最近の注目作に「銀河英雄伝説」のヤン・ウェンリーがあるが、これまたハマリ役だった。あそこまで完璧にヤン・ウェンリー像を表現し得る役者は他に存在しないだろう。神谷明、井上真樹夫らと共に声優ブームを築いて来た偉大な俳優の一人である。現在は「バックスバニー」のバックスバニー役で活躍。

☆ヤマトIIまではみてた記憶があんだけどな……。
艦長姿の古代は描く気がしないんで
こーなったのだった。

な行

中尾隆聖

【81プロデュース】
本名　竹尾智晴
昭和二十六年二月五日生まれ
水瓶座　A型

本名は昔の芸名でもある。早稲田実業出身、私の先輩にあたる。子供の頃は名子役の名を欲しいままにしてきた。四才の時劇団ひまわりに入団、ラジオドラマで『フクちゃん』のキヨちゃん役を五年間務め、その間にジャイアンツの金田正一や長嶋茂雄にインタビューした経験もある小学校五年あたりからテレビドラマにも出るようになり、NHKの『一休さん』などに出演した。高校時代はセッセとバイト（『弾き語り』というところがスゴイ）して、卒業後は新宿二丁目に『骨と皮』という名のスナックを弱冠十八才で開店してしまったというバイタリティの持主でもある。しかし、その店も友人達の溜まり場となってしまい、四年で閉めることになる。その後も何軒か店を持つが同じような理由でつぶしている。

アニメ声優としては、中学校一年の時「宇宙パトロールホッパー」のジュン役を演ったのが最初。代表作に「アニマル1」東一郎、「ゼロテスター」荒石ゴウ、「キャプテン」近藤、「タッチ」西村、「陽あたり良好」モミアゲ、「プロゴルファー猿」トマホークなど脇役が多いが、「トッポジージョ」ジージョ、「伊賀のカバ丸」では堂々主役を演じ、シリアスとギャグのギャップの激しさが異常に受けていた。その他、「ボトムズ・ザ・ラスト・レッドショルダー」のムーザや「バリバリ伝説」のヒデヨシなんかも渋くてカッコ良かったが、何と言っても一番印象深いのは「あしたのジョー2」のカーロス・リベラだろう。

また、舞台の方も数多くこなし、ラジオでも『ペアペアアニメージュ』

や『FMアニメストリート』のパーソナリティを務めた。この人の持っている渋さの中のひょうきんさは非常に好感が持てる。ギラギラした上昇志向がなく、謙虚なところも根強いファンの多い理由かも知れない。

最近は、『お母さんといっしょ』ポロリ、「アンパンマン」バイキンマン、「美味しんぼ」ジェフ、「ビリ犬」ドンニャン、「ダッシュ四駆郎」皇、「パラソルヘンベエ」メモスケ、などで活躍。

中原茂

【ウイットプロモーション】
本名　同じ
昭和三十六年一月二十二日生まれ
水瓶座　O型

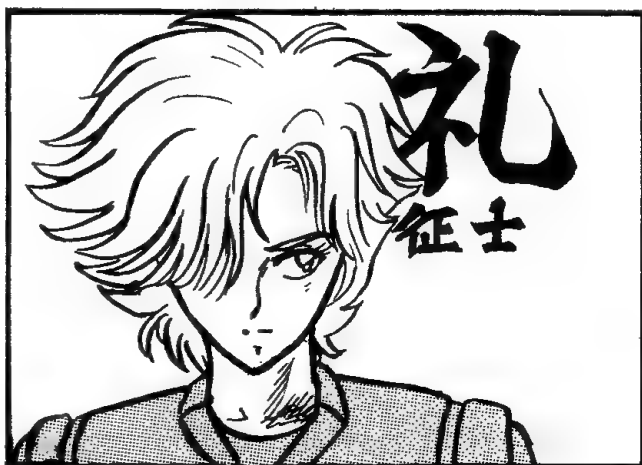
神奈川県出身。「魔境伝説アクロバンチ」のジュン役でデビュー。続く「聖戦士ダンバイン」のショウ・ザマ役でいきなり主役の座を射止めてしまったラッキーな人。しかし、演技はけっして上手いとは言えず、一生懸命さは伝わって来るのだが、ただ叫んでいるだけという印象が強かった。「キャプテン翼」の井沢守も同じようなものだったが、「超獣機神ダンクーガ」の式部雅人では肩の力を抜いた軽い演技がキャラクターにピッタリ合っていて、多少なりとも進歩の跡が見られた。

その後は「アリオン」アリオン、「六三四の剣」日高、「Oh!ファミリー」ケイなど多彩な役をこなし、徐々に人気も上昇してきた。一時は「ボスコアドベンチャー」のフローク、「鉄拳チンミ」のキンタンと三枚目が続いたが、「レディリン」アーサー、「聖闘士星矢」ではブラックペガサスやアルベリッヒ、「風魔の小次郎」では項羽、小龍といった美形キャラを演じ、中原茂の面目躍如というところだった。

最近は、「ひみつのアッコちゃん」キーオ、「アイドル伝説えり子」内田一樹、「湘南爆走族5」財津愛、「青き炎」桐岡、「レア・ガルフォース」ホーディ役などで活躍。また、音楽活動では矢尾一樹、山本百合子らと『獣戦機隊』を組んでライブコンサートをやり、渋谷のライブハウスTAKE・OFF7観客動員新記録を作るほど爆発的人気を呼んだ。

中村大樹

【アーツビジョン】
本名　中村大樹（だいき）
昭和三十七年十二月二十五日生まれ
山羊座

「鎧伝サムライトルーパー」の光輪のセイジ（伊達征士）役で女子中高生たちに大人気。「トルーパー」の声優五人で『N・G・FIVE』を結成、ライブコンサートも大盛況で、ノリにノっている若手声優のホープの一人。それ以外には目立たないキャラではあるが、「ダンガイオー3」キルケル、「赤い光弾ジリオン」デイブ、「アイドル伝説えり子」鮒野、「チンプイ」大江山、「緑山高校」伊集院、なんてのも演っている。最近は「勇者エクスカイザー」スカイマックス役で活躍。

納谷悟朗

【テアトル・エコー】
昭和四年十一月十七日生まれ
蠍座

御存知「ルパンⅢ世」の銭形幸一郎警部である。銭形警部はコミカル

タッチで非常に良かったが、低い落ち着いた声の役も渋くてなかなかに味のあるものが多い。その代表作が「宇宙戦艦ヤマト」の沖田十三艦長である。あの威厳のあるズッシリとした声はこの人にしか出せないものである。それ以前には、「サスケ」半蔵、「のらくろ」モール、「原始少年リュウ」キバ、「月光仮面」ドラゴンの牙などの敵役が多かった。

　五十年以降は、「ジェッターマルス」長官、「野球狂の詩」岩田鉄五郎（これは味のあるキャラだったよなぁ）、「六神合体ゴットマーズ」ズール、「風の谷のナウシカ」ユパ・ミラルダなど次々と好演、演技の渋さにいっそう磨きがかかった。これらと正反対にギャグタッチの役では「昭和アホ草紙あかぬけ一番」の石打老人なんていうのもある。しかし、特に印象深いのは『キャシャーンがやらねば誰がやる』で有名な「新造人間キャシャーン」のナレーションだろう。ところが、「未来放浪ガルディーン」のイメージアルバム『大歌劇』の中に出てくるエイハブ・沖田艦長はこれら総てのキャラの要素を盛り込んだ、とんでもない役だった。

なや～なん

　また、洋画ではチャールトン・ヘストン、クラーク・ゲーブル、ジョン・ウェインなど二枚目映画スターの吹替えでも有名である。特撮では「仮面ライダー」ショッカーの首領なんてのも演っている。最近は「青いブリンク」四季春彦、「孔雀王2」慈空、「吸血姫美夕」ナレーション、「銀河英雄伝説」メルカッツ提督などで活躍。

キャシャーンがやらねば誰がやる!!

納谷六朗

【江崎プロダクション】
昭和七年十月二十日生まれ
天秤座

　以前は「魔法のプリンセス・ミンキーモモ」モモ、「魔法のスター・マジカルエミ」舞、「めぞん一刻」こずえ、「レディレディ」リン、などのパパ役ばかり演っていた人が、いきなり「聖闘士星矢」アクエリアスのカミュ役で登場した時はビックリした。この人にあんな若い二枚目が出来るとはね。私は「侍ジャイアンツ」の八幡先輩が結構気に入っている。最近は、「機甲猟兵メロウリンク」のフォックス中尉役でなかなか渋い敵キャラを、「神州魍魅変」では葉月高晴を演じた。再放送ではあるが、「若草のシャルロット」で二枚目のナイト役を演っているのを見かけた。

難波圭一

【青二プロダクション】
本名同じ
昭和三十二年八月二十六日生まれ
乙女座　A型

　映画「超人ロック」のロック役でデビュー、初レギュラーは「魔法の妖精ペルシャ」の室井学。その後、「タッチ」上杉和也、「炎のアルペンローゼ」ランディ、「ハーイ！ステップジュン」ゼロ、と立て続けに二枚目を演じ人気急上昇。しかし、「機動戦士Zガンダム」のカツは、なんとも情けないキャラだった。

　また、「Oh！ファミリー」のレイフや「きまぐれオレンジロード」の小松整司のようなギャグタッチの演技はなかなか良かった。それからは、「北斗の拳2」バッド、「鉄拳チンミ」リュウカイ、「レディレディ」トマス、「レディリン」エドワード、「聖闘士星矢」アフロディーテ、ポセイドン、「風魔の小次郎」小次郎、「キャプテン翼」シュナイダーと相変わらず美形のカッコイイキャラが多かったが、最近は、「悪魔くん」のこうもりネコ、「かりあげクン」古川クン、「クレオパトラD.C.」ナッキー、「マドンナ2」大林、「ヤンキー烈風隊」門田紋之丞などで活躍。

　アニメ以外では、数年前までNHK教育テレビ『ふえはうたう』のお

兄さん役を務めていた。余談ではあるが、この方は声優の鶴ひろみさんの旦那さんでもある。

西村智博

【賢プロダクション】

「うる星やつら」のコタツ猫あたりからアニメ界に出現。ラジオ番組「ラジオアニメック決定アニメ最前線」の第一回日陰キャラ大賞にコタツ猫が選ばれ彼がゲストに来た時、アシスタントの女の子達に「汚なーい!」とか「気持ち悪ーい!」とか言われて可愛想な人だなと思った記憶がある。

「イタダキマン」ハッ男、「炎のアルペンローゼ」ジド、「六三四の剣」有働大吾、「めぞん一刻」「ジリオン」のゲストなど数多くの脇役を経て、ついに「鎧伝サムライトルーパー」では、金剛のシュウ(シュウ・レイ・ファン)を演じるに至る。このキャラは美形ではないが、少年らしい純粋さが受けてけっこう人気があるらしい。また、彼は声優だけでなく、シンガーソングライターとしてライブ活動を行ったりもしている。売れない頃は、幕が開いたら客が二人しかいない、なんてこともあったそうだ。「サムライトルーパー」のLPや「ミスター味っ子」のLPなどで彼の歌を聴いたことがある人もいると思うが、これは最高に笑えるので、まだ聴いたことのない人には是非聴いてもらいたい。一聴の価値アリ。

最近は、「桃太郎伝説」クマゴロー役で活躍。ソロアルバムも発売し、人気も上々とか。これからも声優、歌手両方でメジャーを目指してガンバッテ欲しい。

西村知道

【アーツビジョン】
本名　同じ
昭和二十一年六月二日生まれ
双子座　A型

「うる星やつら」の校長先生と言えば知っている人も多いだろう。初レギュラーは「超合体魔術ロボ・ギンガイザー」の荒波トラジロー(だと思う)。最近では「魔神英雄伝ワタル」の剣部シバラクを演っていたが、モロはまり役であった。「機動戦士ガンダムZZ」ではスタンパ・ハロイ、「ミスター味っ子」では毛利をやり、これらに代表されるように、この人はギャグタッチの役が多いのだが、「重戦機エルガイム」では渋い悪役キャラのギワザ・ロワウを演じ、シリアスもOKという所を見せてくれた。最近は「アイドル伝説えり子」の内田社長、「パトレイバー」松井警部、「プロジェクトA子ファイナル」学園長、「仏典物語」阿難、「勇者エクスカイザー」パパ、「ワタル2」シバラク役などで活躍。

野沢那智

【青二プロ・薔薇座】
本名　野沢那智(やすとし)
昭和十三年一月十三日生まれ
山羊座

劇団薔薇座を率いる名俳優。また、他の劇団からも度々お呼びがかかるほどの名演出家でもある。この人と聞くとやはり一番最初に思い出すのが、白石冬美とのコンビで有名なTBSラジオ「パックインミュージック」である。この番組は終了してからかれこれ七年程経つのだが、十五

年もの長きにわたって放送された長寿番組である。私も中学生の頃よくこの『ナチチャコパック』を聴いていて、真夜中の真っ暗な部屋に自分の不気味笑いを響かせたものだ。

洋画の吹替えでは、アラン・ドロンやジェームス・ディーン、ジュリアーノ・ジェンマの持ち役として有名である。

アニメーションでは「悟空の大冒険」三蔵法師、「チキチキマシーン猛レース」ナレーション、「ドクタースランプ」マシリト博士、などのギャグ物から、「どろろ」百鬼丸、「新エースをねらえ」宗方仁、「ベルサイユのばら」フェルゼン、「釣りキチ三平」魚紳、「ガラスの仮面」速水真澄、などのシリアス二枚目キャラまで多彩な役をこなしている。その他に、「海底少年マリン」ガラリン、「スペースコブラ」コブラ、「まんがなるほど物語」ナレーション、などを演っている。

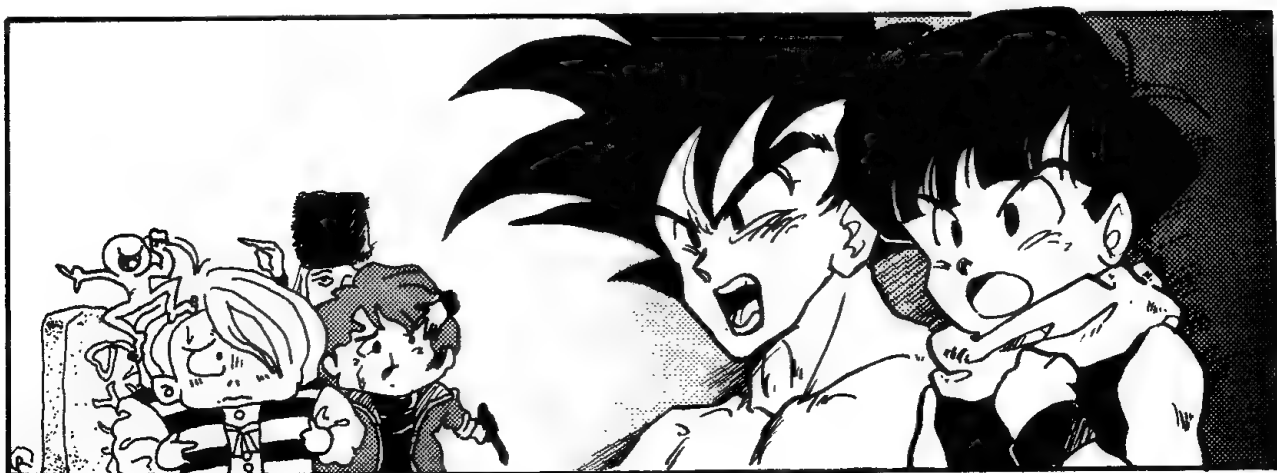
この人の演技は誰が聴いていても上手いと思うのだが、一つ難を言わせてもらえば、少々早口なのが気にかかる。そう思ってる人も少なくないはずである。また、この人はタレントの野沢直子の叔父さんでもある。しかし、あの女の親戚とはどうしても信じられない。

野沢雅子

【81プロデュース】
本名　塚田雅子
昭和?年十月二十五日生まれ
蠍座　O型

声優の塚田正明夫人である。少年役をやらせたらこの人の右に出る者はいない。演じたキャラは、初の主役であった「ゲゲゲの鬼太郎」鬼太郎、「いなかっぺ大将」風大左衛門(大ちゃん)、「ミクロイドS」学、「ど根性ガエル」ひろし、「ドロロンえん魔くん」えん魔くん、「ガンバの冒険」ガンバ、「おれは鉄兵」上杉鉄兵、「みつばちマーヤ」ウィリー、「ピコリーノの冒険」ピコリーノ、「銀河鉄道999」星野鉄郎、「釣りキチ三平」三平、「トム・ソーヤの冒険」トム・ソーヤ、「怪物くん」怪物くん、「銀河漂流バイファム」ケンツ、「ドラゴンボール」孫悟空、「へーい!ブンブー」ブンブー、「仮面の忍者赤影」青影、「ウルトラB」ママ、「ビリ犬」ビリ犬と枚挙にいとまがない。しかもこれらの作品のほとんどが深く心に印象づけられているのである。

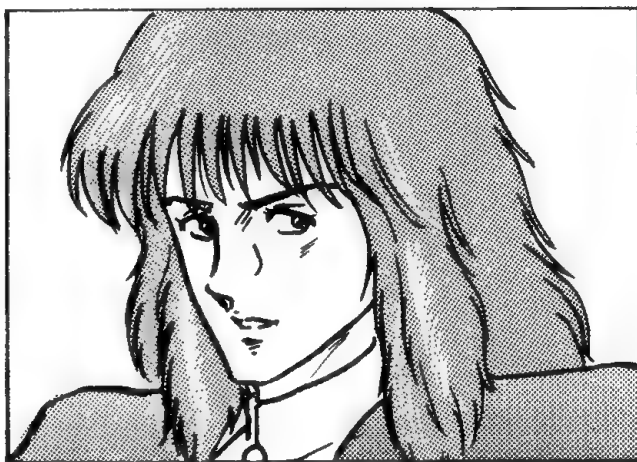
この間、レギュラーが途絶えた期間はほとんどなく、出ずっぱりだった。この裏にはなんと、「いなかっぺ大将」を演っている時に交通事故に遭いながらも、病院のベットからスタジオに通ってやり通したというエピソードもある。この女性のタフさ、役者根性には頭が下がる。

余談ではあるが、「あらいぐまラスカル」でラスカルの声をこの人が演っていたとはさすがの私も気が付きませんでしたぜ。また、この人は少年役だけでなく、「愛少女ポリア

ンナ物語」ではパレーという本当に女性らしい大人の役で素晴らしい演技を見せてくれた。さらに、かつて「銀河鉄道999」のメーテル役と鉄郎役で共演した池田昌子と野沢雅子の二人が、再び「ポリアンナ」で、しかもお互いおばさま役で相対した時は胸がワクワクしたなぁ。あれは本当に感動ものだった。

最近は「ダッシュ！四駆郎」四駆郎、「青いブリンク」カケル、「ドラゴンボールZ」では孫悟空と孫悟飯の一人二役で活躍。悟飯を彼女が演ると知ったときにはさすがに驚いた。個人的には是非一度、彼女の舞台姿を見てみたい気がする。

は行

速水奨

【大沢事務所】
本名　大浜靖
昭和三十五年八月二日生まれ
獅子座　A型

初アニメは「千年女王」のガヤ（とはいってもキャラの名前ではない）。初レギュラーは「機甲艦隊ダイラガーXV」の出雲タツオ。「みつばちマーヤ」のミミズ役など売れない頃はいろいろな脇役、ゲストをやった。

それまで本名を名乗っていたが、芸名を変えてからは急に役に恵まれ始め、「超時空要塞マクロス」のマクシミリアン・ジーナス役で人気急上昇、続く「超時空世紀オーガス」では主役の桂木桂に抜擢される。

その後は「聖戦士ダンバイン」バーン・バニングス、「特捜機兵ドルバック」イデル、「装甲騎兵ボトムズ」ポル・ボタリア、「レディジョージィ」アーウィン、「ゴットマジンガー」エルドと立て続けにシリアス二枚目美形敵キャラをつとめる。またシリアスキャラだけでなく「重戦機エルガイム」ではギャブレット・ギャブレーというコミカルな役もこなし、ただの二枚目声優でない所も見せてくれた。この頃は美形敵キャラと言えば速水奨しかいない、という位の売れっ子ぶりだった。

それからも、「機甲界ガリアン」ハイ・シャルタット、「赤い光弾ジリオン」バロン・リックス、OVA「デビルマン」不動明、「ドリームハンター麗夢」円光、「マシンロボ」ガルディなどの美形キャラから、「バトルハッカーズ」ナレーション、「燃えるお兄さん」不知火のようなギャグ物までコンスタントにこなした。

最近までは「マスターフォース」シックスナイトや「聖闘士星矢」シーホースのバイアン、「風魔の小次郎」飛鳥武蔵などを演っていたが、一時期パッタリと声を聞かなくなった。しかし、最近になって、「ゼオライマー」葎、「虚無戦史MIROKU」霧隠才蔵、「銀河英雄伝説」ファーレンハイト、「クレオパトラD.C.」エリック、「獣神ライガー」ドルガイスト、「童夢くん」カルロス役などで、復活の兆しを見せている。現在は、「勇者エクスカイザー」のエクスカイザー役で活躍。

原えり子

【フリー】
本名　小高節子
昭和三十四年十一月一日生まれ
蠍座　A型

「ときめきトゥナイト」の江藤蘭世役で一躍有名になる。初レギュラーは「逆転イッパツマン」の放夢ラン（だったと思う）。可愛い女の子

しか出来ない、にわか声優かと思いきや、「銀河漂流バイファム」シャロン、「プロゴルファー猿」小丸、「蒼き流星SPTレイズナー」コンピューター・レイなど多彩な役をこなす、演技派声優であった。

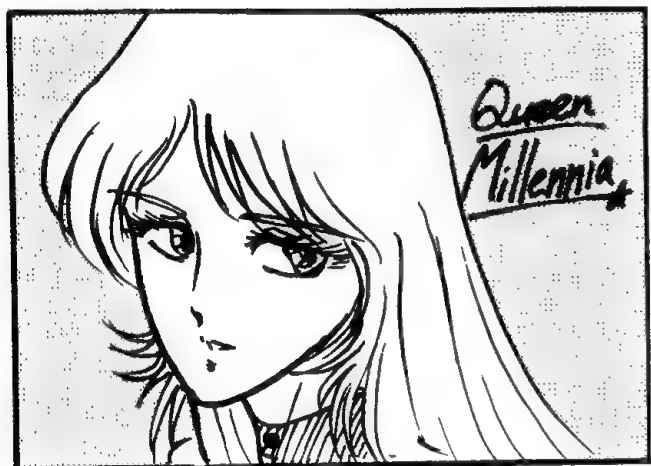
その後は、「機動戦士ガンダムZZ」エル・ビアンノ、「ガルフォース」パティ、「きまぐれオレンジロード」では檜山ひかる、といった元気な女の子を演じることが多く、特に劇場版「オレンジロード」でのひかるの演技はまさに絶品だった。

最近は、「ワット・ポー」セレーネ、「ヴイナス戦記」スウ、「レアガルフォース」メロディ、「トルーパー外伝」ルナ、「YAWARA」和美役などで活躍。ラジオではラジオ日本の早朝番組「グッデイ・サンシャイン」のパーソナリティをつとめ、毎日楽しいトークを聞かせてくれた。

去年、芸名を『光野栄理』と変えたばかりなのに、たった一年でまた元に戻ってしまった。一体何があったのだろう。

潘恵子

【青二プロダクション】
昭和?年四月五日生まれ
牡羊座　O型

初アニメは「サザエさん」のゲスト。初の主役は「女王陛下のプティアンジェ」のアンジェ役。「超人戦隊バラタック」ユリ、「未来ロボ・ダルタニアス」白鳥早苗、「円卓の騎士燃えろアーサー」ギネビアなど戦争もののヒロインを経て、この人の代表作とも言うべき「機動戦士ガンダム」では、イセリナ、ララァ・スンを演じる。その魅力的な声と愛らしいルックスから（ちょっとおでこが広いという話もあるが）、若くして、一躍人気声優の仲間入りをする。

その後は、「無敵ロボ・トライダーG7」砂原郁絵、「ヤマトよ永遠に」サーシャ、「ヤマトIII」ルダ・シャルバートなど、ロボット物のヒロインを演りつつも、「若草の四姉妹」ベス、「サザエさん」みつ子、のような比較的おとなしいキャラも演じた。

そして、第二の当たり役「千年女王」の雪野弥生をやり、劇場版では声だけでなく、イメージソングまで歌うという大活躍だった。これがまさに彼女の絶頂期だったのである。

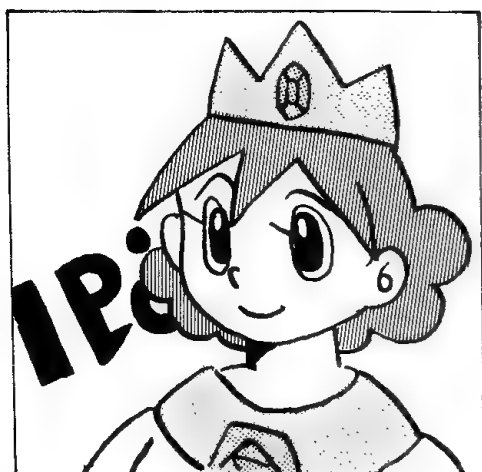
余談ではあるが、彼女とスラップスティックが歌っていた『星空のメッセージ』は、私の最も好きなアニソンの一つである。また、これらの派手な役に隠れて名作物でも「トム・ソーヤの冒険」ベッキー、「アルプス物語わたしのアンネット」アンネットなどをつとめ、少女役も見事にこなした。

しかし「ビデオ戦士レザリオン」のオリビア以降、ロボットアニメのヒロインはパッタリとなくなり、「ポリアンナ物語」のナンシー、「愛の若草物語」のメグなど、専ら名作物に出ていた。また、「聖闘士星矢」では城戸・アテナ・沙織役で女性の強さと優しさを上手に表現している。あの威圧感のある声は彼女にしか出せまい。

一時は、出産のためレギュラーであった「サザエさん」のうきえ役も降りて休業していたが、最近は「ガンダム逆襲のシャア」ララァ、「銀河英雄伝説」アンネローゼ、「パラソルヘンベエ」可愛役で活躍。

平野文

【俳協】
昭和?年四月二十三日生まれ

アニメデビューは当然、「うる星やつら」のラムちゃん。このキャラ一つで彼女は一躍人気声優となってしまった。元々、原作やラムというキャラクターに人気があったせいもあるが、彼女自身ラジオの深夜放送のパーソナリティとして以前からかなり有名だったのである。「うる星やつら」が四年間も続いたため、ラ

氏　名	林原 めぐみ
本　名	同じ
所　属	アーツビジョン
生年月日	昭和四十二年三月三十日
星　座	牡羊座
血液型	O型
性　別	女
出　身	東京

≪演じたキャラクター≫
『プロジェクトA子』うめ、『おそ松くん』トド松、『燃えるお兄さん』かえで、『魔神英雄伝ワタル』ヒミコ、『機動戦士ガンダム0080』クリスチーナ・マッケンジー、『アヒルのクワック』アルフレッド、『らんま1／2』早乙女らんま、『魔動王グランゾート』グリグリ、エヌマ、『天空戦記シュラト』那羅王レンゲ、ミー、由美子、『エリアル』和美、『チンプイ』春日エリ、『ジャングル大帝』レオ、『平成天才バカボン』バカボン、他

★コメント★
デビューからたった一年そこそこで、これだけ多くのキャラを演じた女性声優が今までにいただろうか。それも主役級ばっかり。ヒミコ、らんま、クワックと、上・中・下の声を出し分ける七色の声の持主で、さらにキャラの特徴を一瞬にして読み取る天才的センス、まさに斯波重治氏の言われる通り、声優界に彗星の如く現れた千人に一人のシンデレラガールである。
デビューは『めぞん一刻』の端役。こずえの弟のようすけ、八神のクラスメート、保母さんなど、いわゆるシリーズレギュラーだった。（と言われているが、一部では『ＧｕＧｕガンモ』という噂もある）。『めぞん』に出演しながら看護学校に通い、看護婦の資格を取得するが、音響演出家、斯波重治にその素質を見い出され、彼の勧めにより声優業に専念することになる。その後の活躍は皆さんご存知の通り。
また、歌唱力も抜群で、自らのミニアルバムを出し、ほうぼうの音楽集などでひっぱりだこである。私のおすすめは､山口美由紀のイメージアルバム、『美由紀ワールド』の中の“クローバーイノセンス”、“JUSTICE”の２曲である。おっと、『ガンダム0080』の“夜明けのShooting Star”や『ＳＤガンダム』の“Hold You”も捨て難い。いやいや、やっぱり『PULSE』の“COME TRUE…”だろう。つまり、この人の曲はすべて素晴らしいということ。また、『シュラトSoul Lovers Only』のレンゲ、ミー、由美子の一人芝居はスゴかった。私は当然、別録りだと思っていたのだが、『らんま』のアフレコで実際に本人に尋ねてみたところ、「ううん、あれは同録だよ。」と平然と言われてしまった。うん、やっぱり彼女は凡人とは違う。それにしても、オフが全然なくて、疲れてソファーでグッタリしている彼女の姿がやけに印象的だったなぁ。

ムのイメージばかり強いのは仕方がないが、彼女はそれ以外にも多くのキャラを演じている。

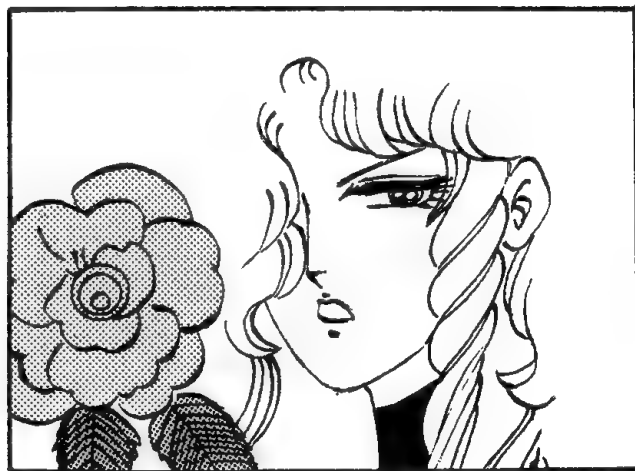
「ストップひばりくん」つぐみ、「亜空大作戦スラングル」セクシィ、「機甲界ガリアン」ヒルムカ、「蒼き流星SPTレイズナー」シモーヌ、「プロゴルファー猿」紅蜂、「三国志」麗花姫、「アニメ三銃士」ミレディーなど、ラムとは違った謎めいた大人の女性の役が多かった。しかし、これは平野文という女性のイメージからすればむしろ当然のことなのである。深夜放送や松野達也とのコンビでパーソナリティを務めた、『ラジオアニメディア・だんぜんアニメナンバー1』、あるいはイベントなどで彼女の話を聴いたことのある方なら分かるだろう。

また、私の大好きな新井素子原作「扉を開けて」では勇猛果敢な女将ラミディン・ディミダを演じ、その他OVAでは、「超時空ロマネスクサミー」沙美、「装鬼兵MDガイスト」パイア、「アウトランダーズ」カーム、「トウキョウバイス」山咲恵子、「ARIEL」シモーヌ、など幅広く演じている。

最近は、アニメのレギュラーはほとんどなく、「恋子の毎日」恋子、「銀河英雄伝説」ドミニク、さらにNHKテレビのレポーターなどで活躍。

藤田淑子

【青二プロダクション】
本名　同じ
昭和?年四月五日生まれ
牡羊座　O型

子供の頃から児童劇団でならし名子役と呼ばれる。「ムーミン」の主題歌の大ヒットによって十九歳で歌手デビュー。声の仕事は、「長靴をはいた猫」「アンデルセン物語」あたりから一足先に始めていた。「怪盗プライド」ハミー、「遊星少年パピィ」パピィ、「遊星仮面」ピーター、など私の生まれる前から声優をやっている超ベテラン。

主役の一休を務めた「一休さん」は七年も続き、日本全国の子供たちに愛され続けて来た。私も小、中学生の頃は毎週見てたなぁ。その他、「がんばれ元気」元気、「パタリロ」マライヒ、「こてんぐテン丸」テン丸、「牧場の少女カトリ」カトリの母、「キャッツアイ」泪、「ミームいろいろ夢の旅」ミーム、「超人ロック」コーネリア、「北斗の拳」マミヤ、「ドリモグだァ」ドリモグ、「銀牙」クロス、「トッポジージョ」アメリア、など少年役もあれば大人の女性もあり、さらには動物もある。極めつけはニューハーフと、あらゆる役をこなす女優さんである。さらに、こうして見ると本当に主役が多いことも分かる。

しかし、本人にとっては子供の声を作るのはかなりつらいらしく、苦痛でさえあるらしい。また、マライヒとバンコランのラヴシーンは、自分で演ってて本当に気持ち悪くなり吐き気がしたそうだ。しかし、何と言ってもこの人で忘れられないのは、OVA「妖獣都市」のヒロイン『魔紀絵』である。美しい川尻善昭デザインのキャラ『魔紀絵』にこの人の声と演技が見事なまでにシンクロして、希に見る魅力的なキャラが出来上がった。また、アニメではないが、アメリカのTVドラマ『ファミリータイズ』のアレックス（マイケル・J・フォックス）の母親役もなかなか良かった。

最近は「キテレツ大百科」の英一（キテレツ）、「新ビックリマン」ピア・マルコ、「朱鷺色怪魔」雷祥

氏　名	日高 のり子
本　名	伊東　範子
所　属	河野プロモーション
生年月日	昭和三十七年五月三十一日
星　座	双子座
血液型	ＡＢ型
性　別	女
出　身	東京

≪演じたキャラクター≫

『超時空騎団サザンクロス』ムジカ、『よろしくメカドック』小町、『タッチ』浅倉南、『忍者戦士飛影』レニー・アイ、『ついでにとんちんかん』白井甘子、『アニメ三銃士』コンスタンス、『となりのトトロ』さつき、『トップをねらえ』タカヤノリコ、『ピーターパンの冒険』ピーターパン、『らんま１／２』天道あかね、『ふしぎの海のナディア』ジャン、他

★コメント★

声優の他、ラジオのＤＪ、テレビの司会やレポーター、さらに歌手までこなすマルチタレントである。現在のここまでの高い人気は、やはり『タッチ』の浅倉南によるところが大きい。児童劇団に所属し、小さい頃から芝居をやっていたそうだが、『バトルフィーバーＪ』等で顔を見たことのある人もいるだろう。もともとは、ＮＨＫ『レッツゴーヤング』のサンデーズのメンバーとしてアイドルでデビュー。当時は、『たのきん全力投球』、『鶴光のオールナイトニッポン』などのレギュラーを持ち、かなりの売れっ子であった。彼女のレコード『もう一度ブラックコーヒー』や『ひとつぶの涙』は未だに覚えている。

しかし、それ以後はパッタリと歌番組にも出なくなり、『おはようサンデー』位でしかお目にかかれなくなって残念に思っていたところへ、聞き慣れた声が耳に飛び込んで来た。それが彼女のアニメデビュー作『超時空騎団サザンクロス』のムジカだったのである。まさに寝耳に水の出来事であった。しかし、その演技はお世辞にも上手と言えるものではなかった。ところが、浅倉南やレニー・アイの頃になると見違えるように上手くなり、しっかりとした役作りが出来るようになっていた。やはり劇団でお芝居の基礎をやっていたおかげだろう。その後も次々とヒロインを演じ、ついには宮崎駿の劇場映画『となりのトトロ』で主役“さつき”を演じることになる。その演技は実に自然でキャラと完全に一体化し、見事と言う他なかった。さらに、『トップをねらえ』のタカヤノリコでは観るものを圧倒する程に気迫のこもった演技を見せ、また、ピーターパンや『ナディア』のジャン等、少年役も絶品で、ここまでくると彼女を声優界でもトップクラスの演技派女優と認めざるを得ないだろう。

最近までは、フジテレビ『なっとく歴史館』のレポーター、現在はテレビ東京『ＲＣカーグランプリ』の司会兼レポーターとして活躍中。

絵役などで活躍。

藤本譲

【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和十年九月二十四日生まれ
天秤座

「ミスター味っ子」の味王役でにわかに注目され始めた超ベテラン声優。現在までに携わったアニメ、洋画は数知れず、とてもとても書き切れるものではない（単に私がよく知らないだけだったりする）。主な作品に、「ゴーショーグン」ネオネロス、「忍者ハットリくん」のパパ、「ガラスの仮面」小野寺一、「マシンロボ」ナルム、「赤い光弾ジリオン」のミスターゴード、OVA「エースをねらえ2」の竜崎理事、「ぴーひょろ一家」龍念和尚、などがある。

しかし、この人の名前の読み方は『じょう』なのか『ゆずる』なのか分からない。本人は『じょう』と言っているが、雑誌のプロフィール記事には『ゆずる』と書いてある。まあ、本人が言っているのだから間違いはないと思うが…。

ふじ～ぶち

最近は、「チップとデールの大作戦」モンタリー、「ヴイナス戦記」将軍、「クラッシャージョウ」ゲルスタン、「少年モーグリ」ア・ケーラ、などがある。

二又一成（いっせい）

【アーツビジョン】
本名　二又一成（かずなり）
昭和三十年三月十五日生まれ
魚座　B型

「恐竜大戦争アイゼンボーグ」でデビュー。「未来少年コナン」「はいからさんが通る」「ゴールドライタン」のライタン役を経て、「うる星やつら」チビ、「忍者ハットリくん」小池先生、「らんぽう」ワッペン、「戦闘メカ・ザブングル」キッド・ホーラ役あたりから名前が知られるようになる。

その後、「クラッシャージョウ」ドンゴ、「キン肉マン」キン骨マン、「超時空騎団サザンクロス」ルーイ、「装甲騎兵ボトムズ」グラン、「超獣機神ダンクーガ」ヘルマット将軍、「ハイスクール奇面組」出瀬潔などを演る頃には名脇役として認められるようになっていた。そして、ついに「めぞん一刻」では主役の五代裕作役を射止め、原作のキャラのイメージを崩すことのなかった彼の演技はとても印象的で、すっごく良かった。

その他、「聖闘士星矢」スキュラのイオ、「鎧伝サムライトルーパー」毒魔将・那唖挫のような渋い敵キャラと同時に、「名門！第三野球部」斎藤輪大といった従来通りのイメージの役も演じ、最近では、「ピーターパンの冒険」海賊、「機動警察パトレイバー」進士幹泰、「ファイブスター物語」トローラ、「サザエさん」三郎、「銀河英雄伝説」フレーゲル男爵、「アッセンブルインサート」部下弐など、相変わらずの名バイプレイヤーぶりを発揮している。

余談ではあるが、何度か出演したという『太陽にほえろ』で、沖雅也に追いかけられる二又さんていうのを是非見てみたいものだ。

渕崎ゆり子

【グループこまどり】
本名・渕崎有里子
昭和四十三年十二月五日生まれ
射手座

氏　　名　**古川 登志夫**

本　　名　古川　利夫
所　　属　青二プロ・劇団青杜
生年月日　昭和二十一年七月十六日
星　　座　蟹座
血 液 型　不明
性　　別　男
出　　身　栃木県

≪演じたキャラクター≫
『マグネロボ・ガ・キーン』北条猛、『惑星ロボ・ダンガードA』大星秀人、『無敵超人ザンボット3』香月真吾、『未来ロボ・ダルタニアス』楯剣人、『ムーの白鯨』プラトス、『無敵ロボ・トライダーG7』大山健一、『宇宙戦艦ヤマトⅢ』揚羽武、『グランプリの鷹』ハンス・ローゼン、『ドカベン』渚圭一『最強ロボ・ダイオージャ』ミト王子、『機動戦士ガンダム』カイ・シデン、『うる星やつら』諸星あたる、『Drスランプ』空豆タロウ、『パタリロ』タマネギ、『ザ・かぼちゃワイン』青葉春介、『光速電神アルベガス』円条寺大作、『戦闘メカ・ザブングル』ブルメ、『北斗の拳』シン、『レンズマン』キム・ボール・キニスン、『とんがり帽子のメモル』リュックマン、『仮面の忍者赤影』赤影、『ドラゴンボール』マジュニア（ピッコロ大魔王）、『ルパンⅢ世・風魔一族の陰謀』ルパンⅢ世、『悪魔くん』メフィストⅡ世、『機動警察パトレイバー』篠原遊馬、他

★コメント★
アニメデビューは『草原の少女ローラ』のカルロス役。その時既に30才だったのだから、かなり遅いデビューだった。にもかかわらず、その後は立て続けにロホットアニメの主人公ばかりを演じることになる。その中でもかなり異色で注目され、私自身も彼がやった中で最も気に入っているのが『ガンダム』のカイ・シデンである。二枚目専門声優の彼が、あんな軽薄でひねくれたキャラをやろうとは。でもそれがけっこう気に入ってたりして。その後は、諸星あたるや、『めぞん一刻』の坂本のようなおちゃらけキャラから、ピッコロ大魔王まで幅広く活躍している。声の仕事だけでなく、舞台役者、演出家としても自ら主催する劇団青杜で精力的に活動中。ラジオでは数年前、声優の山本百合子と共に『アニメシティ』という番組をやっていて、これがかなり面白く毎週楽しみにしていたのだが、無情にも半年で終了してしまった。

十五人兄弟の末っ子として生まれる。日大芸術学部を卒業後、二十五才の時に結婚。売れない頃は、酒が一滴も飲めないのにバーテンのアルバイトをした経験もある苦労の人。仕事で稼いだ金は、ほとんど劇団の公演資金にしてしまうという根っからの役者である。その存在は地味ながら、常に人気投票の上位に位置している、かくれた人気声優といえよう。

初めて彼女を見たのはアニメではなく、『台風クラブ』という映画であった。女子生徒の一人として出演していたのだが、下着姿で雨の中を歌を歌いながら踊り回っていた姿が印象的だった。

アニメでは、「機甲界ガリアン」のチュルル役でデビュー。「魔法の妖精ペルシャ」紀信、「魔法のアイドル・パステルユーミ」ケシ丸役をつとめ、いきなり演技派声優の程を見せつけてくれた。さらに「六三四の剣」では、主役の六三四を元気一杯に演じ、その体当りの演技と、難しい東北弁をこなした努力は賞賛に値する。「ドテラマン」のオニゾウくんは、『ナーモ、ナーモ』ばかりだったが（悪かったな、うちは音声多重じゃないんだよ）、「めぞん一刻」では彼女の地のままという感じの八神いぶきを見事に演じ、徐々に人気も上昇してきた。

最近は「アキラ」かおり、「トップをねらえ」キミコ、とその娘のタカミ、「エスパー魔美」ノン、「ピーターパンの冒険」マイケル、「ソル・ビアンカ」ジュン、と少年役から三枚目、はたまた美少女まで幅広く演じ、目立たないながらも活躍している声優さんの一人である。

ほり〜ほん

堀川亮

【青二プロダクション】
本名　堀川　亮（まこと）
昭和三十三年二月一日生まれ
水瓶座

初の主役は、「夢戦士ウイングマン」の広野健太だったが、彼のオーバーで軽い演技にはあまり良い印象は持てなかった。しかし、「六三四の剣」の六三四役での男らしく堂々とした演技や、「聖闘士星矢」のアンドロメダ瞬役を巧みに演じることによって、私の彼に対する評価は変わっていった。。さらに、「銀河英雄伝説」のラインハルト・フォン・ローエングラムを、「ファイブスター物語」では、私のイメージとは少し違っていたがレディオス・ソープをしっかり演じ、演技の幅の広さを見せた。

その他の出演作を挙げると、「コンポラキッド」ヨー、「ドクタースランプ」チャーミー、「ワンダービートS」テツヤ、「レディレディ」アーサー、「バグってハニー」カワダ・チュー、等がある。

一昨年、「六三四の剣」で共演した、同じ声優の及川ひとみ（なんとあの『亜美ちゃん』ですぜ!）と結婚した。最近は、「ドラゴンボールZ」ベジータ、「新ビックリマン」ヤマトウォーリア、「かりあげクン」佐藤くん、「手天童子」手天童子郎など、今までにはなかったタイプのキャラで活躍。今後がますます楽しみな声優さんである。

本多知恵子

【俳協】
本名　同じ
昭和三十八年三月二十八日生まれ
牡羊座　A型

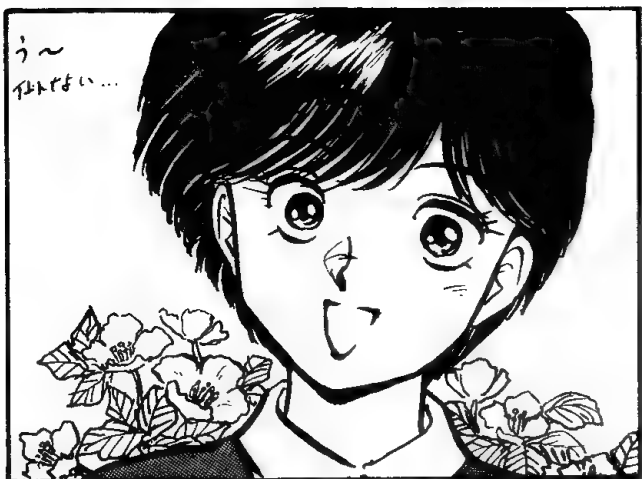
間違っても『ほんだち・けいこ』とは読まないように。身長が百五十センチにも満たない小さな可愛い女性である。「プラレス三四郎」の素形真知子役でデビュー。この頃からこの可愛い声に注目していた目ざとい奴もいるだろう。何を隠そう私もその一人だったりする。「重戦機エルガイム」ではヒロインのファンネリア・アムをほとんど地で演ってるんじゃないかと思う程自然に演じ、

氏　　名　**古谷 徹**

本　　名　同じ
所　　属　青二プロダクション
生年月日　昭和二十八年七月三十一日
星　　座　獅子座
血 液 型　Ａ型
性　　別　男
出　　身　横浜

≪演じたキャラクター≫
『巨人の星』星飛雄馬、『鋼鉄ジーグ』司馬宙、『グロイザーX』海阪譲、『氷河戦士ガイスラッガー』シキ・ケン、『魔女っ子チックル』明、『機動戦士ガンダム』アムロ・レイ、『宇宙空母ブルーノア』日下真、『千年女王』夜森大介、『地球へ…』トゥニー、『宇宙戦艦ヤマト』徳川太助、『不思議な島のフローネ』フランツ、『ストップひばりくん』坂本耕作、『ななこＳＯＳ』飯田橋ヒロシ、『亜空大作戦スラングル』ジェット、『プラレス三四郎』成田しのぐ、『特捜機兵ドルバック』無限真人、『幻魔大戦』東丈、『パタリロ』黒タマネギ、『ビデオ戦士レザリオン』香取敬、『ふたり鷹』沢渡鷹、『ナイン』新見克也、『ウィンダリア』イズー、『剛Ｑ超児イッキマン』源天空、『ドラゴンボール』ヤムチャ、『ハイスクール奇面組』春曲鈍、『県立地球防衛軍』盛田章人、『聖闘士星矢』ペガサス星矢、『きまぐれオレンジロード』春日恭介、『宇宙皇子』皇子、『がきデカ』西城、他

★コメント★
アニメデビューは『海賊王子』のキッド役。その時中学生だった彼は、既に子役としてテレビや映画で活躍していたが、続く『巨人の星』が大ヒットし、彼は“星飛雄馬”の名で全国に知られるようになった。中学、高校と続けて来た『巨人の星』が高３の時に終了すると、何を思ったか彼は芸能界からスッパリ足を洗い、明治学院大学に入学する。そこで４年間アマチュアバンドの活動をしたが、結局、夢捨て切れず再び芸能界へ。復帰第一戦のレギュラーは『鋼鉄ジーグ』の司馬宙だった。その後も順調に二枚目キャラばかりを演じたが、この人の代表キャラといえばやはり『ガンダム』のアムロだろう。彼自身、アムロを演じる事によってはじめて、人気声優の仲間入りをすることになった。

その後は、飯田橋ヒロシや、春曲鈍を初めとする三枚目ギャグ路線もこなすようになり、演技の幅の広がりを見せた。最近、彼が演じたキャラの中で特に良かったのが、『オレンジロード』の春日恭介である。あれはいい雰囲気出してたよなぁ。また、テレビのナレーターやラジオのＤＪとしても引っ張りだこで、『カーグラフィックＴＶ』を筆頭に数多くのレギュラーを抱えている。ちなみに、この人が小山茉美さんの前夫であったことは有名だが、離婚後に、同じ声優の間嶋里美と再婚したことは意外と知られていない。

将来の人気声優を予感させた。続く「昭和アホ草紙あかぬけ一番」一の瀬雪華役でのブリッコと凶暴なレスラーの演じ分けや、「機動戦士ガンダムZZ」での、エルピー・プルの演技は見事と言う他なかった。

その後も、「エルフ-17」ルウ、「きまぐれオレンジロード」春日くるみ、「レディレディ」セーラ、「燃えるお兄さん」国宝雪絵、「赤い光弾ジリオン」エイミ、と可愛い女の子を立て続けに演じる。また、「冥王計画ゼオライマー」の氷室美久は今までにない謎めいた大人の雰囲気を持ったキャラだったが、これも違和感なく、非常にいい感じだった。

その他、コミックのイメージアルバム『八神くんの家庭の事情』の八神野美はハマリ役で、アニメ化されたら是非彼女に演ってもらいたいものだ。最近は、「アイドル伝説えり子」麻美、「魔法使いサリー」カブ(これを最初に聞いた時はブッ飛んだ)役で活躍。余談ではあるが、彼女も富沢美智恵と同じくマイケル・ジャクソンの熱狂的ファンらしい。

ま行

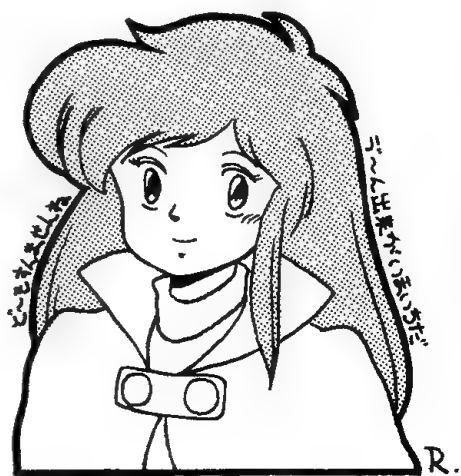
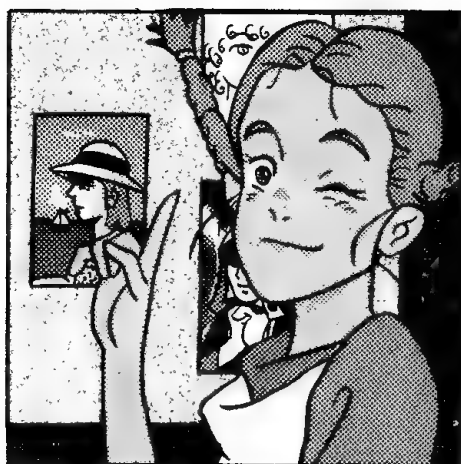
松井菜桜子

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名　同じ
昭和三十六年四月四日生まれ
牡羊座

デビューは「魔法の天使クリィミーマミ」の鏡の中のマミ(ということにしておこう)。その後は、「マミ」早川愛、「アタッカーYOU」早瀬奈美、「キャプテン翼」大沢リカ、「チックンタックン」ではムッコというガーガー声の女の子を演じる。ガーガー声といえば忘れてならないのが「ハイスクール奇面組」の宇留千絵ちゃんだね。これは目立たないがけっこう気に入っているキャラの一つである。そして「ドリームハンター麗夢」の麗夢役で人気急上昇。続いて、「機動戦士ガンダムZZ」ルー・ルカ、「ガルフォース」ラビィを演り、ようやく「ウィンダリア」アーナス、「宇宙船サジタリウス」パルバラ姫あたりから考えて役作りをするようになった。それからは、「Oh!ファミリー」トレーシー、「ウルトラB」タケミ、「ドテラマン」鈴木まなみ(思春鬼)、「のらくろくん」リカ、と女の子役が続くが、「マンガ日本経済入門」幸枝、「ぶっちぎりバトルハッカーズ」ミア・ホワイト、「破邪大星ダンガイオー」パイ・サンダー、など大人っぽい役もきちんとこなしている。

爆笑異色キャラといえば、やはり「ミスター味っ子」の浪速のどんぶり兄弟こと太郎と次郎であろう。ほとんどおビョーキで松井菜桜子が地で演っているとも言われている。「太郎がええなら次郎もええよ。」「うちはかましまへん。」「ハイッ!ハイッ!ハイッ!」などのセリフは爆笑もんである。その他に、アダルト版「麗夢」や「くりぃむレモン」シリーズ、「みんなあげちゃう」悠乃など、そちらの方でも我々を楽しませてくれた。

音楽活動では、歌もそこそこ上手くルックスも良い方なので主題歌や挿入歌をよく歌っている。「麗夢」や「ガルフォース」のキャンペーンの時、サインや握手にも気軽に応じてくれて非常に感じの良いお姉さんだった。

最近は、「おそ松くん」トト子、「ピーターパンの冒険」ウェンディ、「獣神ライガー」神代ゆい、「アイドル伝説えり子」朝霧麗、など多くのレギュラーをかかえる超売れっ子ぶり。ゲストでは「らんま1／2」

氏　　名	堀江 美都子
本　　名	同じ
所　　属	青二プロダクション
生年月日	昭和三十二年三月八日
星　　座	魚座
血 液 型	ＡＢ型
性　　別	女
出　　身	横浜

≪演じたキャラクター≫
『宇宙魔神ダイケンゴー』クレオ、『大恐竜時代』レミ、『魔法少女ララベル』ララベル、『Ｄｒスランプ』オボッチャマンくん、『夢次元ハンターファンドラ』ファンドラ、『愛してナイト』三田村八重子、『宇宙船サジタリアス』シビップ、『愛少女ポリアンナ物語』ポリアンナ、『プロゴルファー猿』若葉、『聖闘士星矢』ヒルダ、『ひみつのアッコちゃん』アッコちゃん、『私のあしながおじさん』ジュディ、他

≪代表曲≫
『魔法のマコちゃん』、『ハクション大魔王』アクビ娘の歌、『ジムボタン』ジムボタンの歌、『てんとう虫の歌』、『仮面ライダー・ストロンガー』、『キャンディ・キャンディ』あしたがすき、『野球狂の詩』勇気のテーマ、『宇宙魔神ダイケンゴー』、『ボルテスＶ』ボルテスＶのうた、『未来ロボ・ダルタニアス』ダルタニアスの歌、『マグネロボ・ガ・キーン』たたかえ!!ガ・キーン、『花の子ルンルン』、『ハロー！サンディベル』、『秘密戦隊コレンジャー』進めゴレンジャー、『愛してナイト』恋は突然、『破邪大星ダンガイオー』クロス・ファイト、『ひみつのアッコちゃん』、『私のあしながおじさん』他

★コメント★
ささきいさお、水木一郎と並ぶアニメ歌手の元祖であり、第一人者でもある。８才の時、フジテレビの『ちびっこのど自慢』に出演したのがこの世界に入るきっかけ。11才でコロンビア学芸部の専属歌手となった。小学校６年の時、初めて『紅三四郎』の主題歌を歌って以来、これまでに吹き込んだアニメ主題歌はゆうに３００曲を越える。その活躍ぶりは、上記の作品群を見れば一目瞭然である。また、ラジオのパーソナリティとしても売れっ子で、以前は『ミッチとアキラの底抜け日曜拳銃』、『こちらミッチ放送局』、『ミッチの独言倶楽部』など、何本ものレギュラーを抱えていた。

声優としては、普通の女子高校生から男の子まで、果ては変な宇宙人と多彩なキャラを演じ、役者の素質も十分に兼ね備えていることを世に知らしめた。一時期はオリジナルの音楽活動に力を入れ、アニメから遠ざかっていたが、今では押しも押されぬ人気声優である。数年前に結婚し、幸せな生活を送っている事と思う。

の白鳥あずさなどは、完全にプッツンしており彼女の良さがよく出ていた。

アニメ以外では、フジテレビ『いただきますⅡ』で、巷で話題のお花畑トリオの一人、ラッパスイセンなおことしてまっ昼間から、茶の間にお色気をふりまいている。

松田辰也

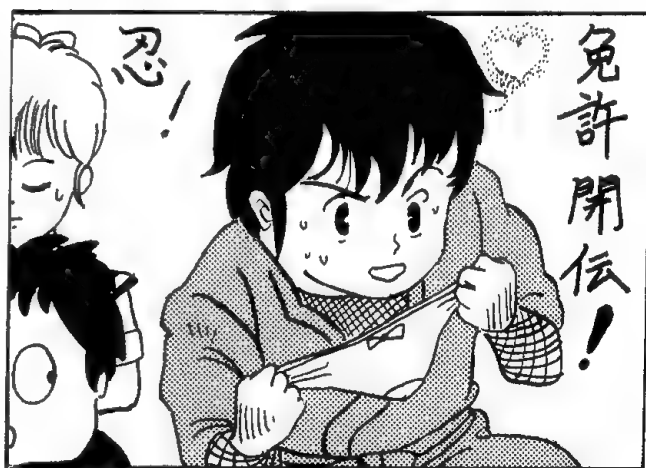
【グループこまどり】
本名　同じ
昭和四十年十月十七日生まれ
天秤座

かつては『CMあらし』と言われる程あらゆるCMに登場していた名子役である。アニメでは「伝説巨神イデオン」のデクが有名。しかし、最近まで二年間程休業してスタイリストになるべく修行。やっと『メンズ・ノンノ』などで、フリーのスタイリストとして仕事が出来るようになったが、芝居を忘れることが出来ず、再びこの世界に戻って来た。その復帰第一弾が「アニメ三銃士」のダルタニャン役である。デクを演っていた頃とはずいぶん声も変わってしまったが、役者としての力は衰えていなかった。

その他の作品には、「さすがの猿飛」のゲストキャラ・四月ばか、劇場版「陽あたり良好」の相戸誠役などがある。最近は「魔動王グランゾート」のガス役で活躍。役者とスタイリストの二足ワラジではあるが、まだ二十二才の若さ、これからもっと活躍して欲しい声優さんの一人である。

松野達也

【プロジェクトレビュー】
本名　同じ
昭和四十二年十月十六日生まれ
天秤座　A型

私と同じ名前で年も同じなので親近感がわいてしまうのだった。小学校三年で劇団ひまわりに入団して以来、子役として『ケンちゃん』シリーズをはじめとして数多くのドラマに出演。初の主役は、アニメ「星の王子さま」のプチフランスで、それはそれは可愛らしい声の少年であった。他には「クリスマスキャロル」「ゆき」「ねむの木学園」「十五少年漂流記」、そして彼の代表作「さすがの猿飛」の服部優一郎役があるが、ああ悲しきは男の運命!変声期によってあの可愛らしい声は後片もなく消え去ってしまった。それでも田中真弓、島津冴子の二代目『アニメトピア』に三ッ矢雄二の弟分として頻繁に出演するようになってからは人気急上昇、挙げ句にレギュラー同然となり『アニメトピア』のLPでは自分の歌まで歌ってしまった。

その後は「らんぽう」「チックンタックン」にゲスト出演した程度なのだが人気は衰えることなく、ラジオドラマ『超人ロック』のロック、『ラジオアニメディアだんぜんアニメナンバー1』では平野文と、『ペアペア・アニメージュ』では太田貴子とのコンビでパーソナリティを努め、テンポの良いおしゃべりとひょうきんなキャラクターがさらに人気を呼んだ。

声の仕事だけでなく、顔出しの方でも頑張っており、『裂けた家族』『一休さん・喝』(柳沢慎吾主演)、『ときめきざかり』(喜多嶋舞主演)、フジテレビの学園ドラマなど数多くのテレビドラマに出演し頑張っている。

音楽活動では、コミックのイメージアルバム「まひろ体験」の『夜まで待てない』でソロ初体験後(私はこの『夜まで待てない』が大好きでお風呂でよく歌っている)、「銀河パトロールPJ」のテーマ曲『銀河の女王』、『夜明けのプレリュード』を歌い、またオリジナルのLPも二枚出している。その他では、『アニメトピアⅢ』の三ッ矢雄二とのデュエット曲、『二人がヒロイン』や謎のグループ・コマンタレブー(といいつつ三ッ矢、田中、松野のトリオなんだけど)などで、爆笑ソングも歌っていた。

ところが、高校三年の時、大学受

氏　　名	水島 裕
本　　名	野田　憲治
所　　属	浅井企画
生年月日	昭和三十一年一月十八日
星　　座	山羊座
血 液 型	Ｂ型
性　　別	男
出　　身	東京

≪演じたキャラクター≫

『超人戦隊バラタック』マック、『ボルテスＶ』剛健太郎、『一球さん』真田一球、『バンダーブック』バンダー、『花の子ルンルン』セルジュ、『オタスケマン』ヒカル、『百獣王ゴライオン』黒鉄、『おはようスパンク』篠田亮、『タンサー５』海波流、『六神合体ゴットマーズ』明神タケル、『レインボーマン』ヤマトタケシ、『ときめきトゥナイト』真壁俊、『オヨネコぶーにゃん』モンブラン、『ＧＵＧＵガンモ』カシオ、『オバケのＱ太郎』伸一、『Ｂｕｇってハニー』高橋原人、『クリィミーマミ』大伴俊夫、『ペルシャ』室井力、『マジカルエミ』結城将、『パステルユーミ』恭平、『炎トリッパー』宿丸、『強殖装甲ガイバー』深町晶、『鉄拳チンミ』ラオチュウ、『ブラックマジックＭ６６』リーキー、『聖闘士星矢』ミスティ、シド、バド、ロキ　他

★コメント★

小学校６年の時「劇団若草」に入団、子役でならす。初アニメの『熊のプーさん』、『一休さん』を経て、初レギュラーは『バラタック』のマック役だった。そして、初主役の真田一球役で注目され、次々と二枚目キャラを演じ、一躍若手人気声優の仲間入りをした。Ｓ56にはＮＨＫの人気番組『連想ゲーム』のレギュラーに抜擢される。その童顔と元気一杯爽やかな姿勢が好評で、全国のお茶の間に彼の名と顔が知られるようになる。

それ以後、ラジオのパーソナリティやＴＶのレポーター、司会等の仕事が増えていく。ＴＶでは『連想ゲーム』の他に、『笑ってる場合ですよ』で顔出しはないが進行役を努め、『クイズ地球まるかじり』『海外トピックス』等に出演した。特に『海外…』では、昨年５月に結婚したばかりの佐久間レイとのコンビ司会だった。ラジオでは『ヤロメロジュニア出発進行』『ペアペア・アニメージュ』『裕のアニメージュ・イン』に出演。『ペアペア』火曜日では吉田理保子お姉様とペアで三年間パーソナリティを努めた。

今年に入って、81プロデュースからよりバラエティー色の強い、小堺一機らの所属する浅井企画に移り、意識的に仕事の分野を変えていこうという姿勢がうかがえる。現在は、テレビ東京『テレビおもしろ情報館』、文化放送『全日本歌謡選抜』、他多数の司会として活躍中。もう彼は、“声優”という枠におさまりきらないマルチタレントとして世に認められるようになったのである。

験のため半年間休業したはいいが、総て失敗。それ以来パッタリ姿を見せなかったが、三ッ矢雄二の劇団に移籍して舞台活動に専念している彼を見て安心した。しかし、こんな明るい彼も小学校二年の時に交通事故に遭って生死の境をさまよったという悲惨な経験の持主でもある。

松本保典

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名　同じ
昭和三十五年二月七日生まれ
水瓶座

　中大卒というから結構な秀才でもある。アニメ初レギュラーは「マンガ日本経済入門」新入社員の上田くん役というから声優歴三年にも満たない、役柄と同じフレッシュマンである。それまでは舞台で時代劇の股旅ものなどをやっていたが、バオバブ移籍後は二年目でいきなり「超音戦士ボーグマン」の熱血ヒーロー、響リョウ役に抜擢される。そして、「鎧伝サムライトルーパー」では渋い美形敵キャラ、亜奴弥守を、「機甲猟兵メロウリンク」では主人公のメロウリンク・アリティと、立て続けに大役を演じる。おっとその前にOVA「メタルスキンパニック・マドックス01」という作品で主役の杉本紘二を演ったのだが、ほとんど話題にのぼらなかった。
　そして最近では、「アイドル伝説えり子」阿木星吾、「天空戦記シュラト」マリーチ、不動明王アカラナータ、「新キャプテン翼」ナポレオン、「ハイスピードジェシー」ドナルド、「ぶっちぎり」御子柴、「力王」若松、「アッセンブルインサート」部下壱、などで活躍。演技そのものは舞台でやってきただけあって下手ではない。今後に期待したい声優さんである。
　さらに、『いただきますII』ではお花畑トリオの一人、ベンジャミン松本（ドクダミン松本）として毎週くだらないダジャレを聞かせてくれている。一説によると、ベンジャミンはリョウ、ドクダミンはアカラナータそのものだとか…。松本さん、ガンバッテ下さいネ。

三浦雅子

【アーツビジョン】
本名　同じ
昭和三十四年十一月二十九日生まれ
射手座

　最近はレギュラーがめっきり減ってしまい、あまり馴染みのない名前となってしまった。初のレギュラーは「ヤットデタマン」の姫栗コヨミ役だっと思う。吾妻ひでお原作「おちゃめ神物語コロコロポロン」でポロン役を演り、世のロリコンアニメファンの支持を受ける。その後しばらくブランクがあったが、「昭和アホ草紙あかぬけ一番」では『〜だに!』で有名なレル（ヒカリキンは“クソこせがれ”と呼んでいたが）を演り、私はこの番組で初めて彼女の名前を知った。
　しかし、その後は「パーマン」ミチ子、「ドリモグだァ」ハナモグ、「悪魔くん」モス、「青いブリンク」アイフリ、「ちびまるこちゃん」まる子のクラスメート、位しか演っておらず、非常に残念である。それでも「くりぃむレモン・いけないマコちゃん前後編」では可愛い女の子とセクシーで淫乱な女性の二役を演り、我々を楽しませてくれた。

水谷優子

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名　同じ
昭和三十九年十一月四日生まれ
蠍座

　青年座での舞台活動を経て、声の世界に入る。初レギュラーは「機動戦士Zガンダム」のサラ・ザビアロフ（本当はミライの娘のチェーミンが先）。演技はお世辞にも上手いと言えるものではなかった。「マシンロボ・クロノスの大逆襲」でレイナという美少女を演ると、これが何故

氏　名	三ッ矢 雄二
本　名	同じ
所　属	プロジェクトレビュー
生年月日	昭和三十年十月十八日
星　座	天秤座
血液型	Ａ型
性　別	不明
出　身	名古屋

≪演じたキャラクター≫

『コンバトラーＶ』葵豹馬、『キャンディ・キャンディ』アーチー、『超人戦隊バラタック』ユージ、『激走ルーベンカイザー』速水俊介、『野バラのジュリー』アラン、『ゼンダマン』鉄ちゃん、『夏への扉』クロード、『宇宙戦艦ヤマト』新米俵太、『六神合体ゴットマーズ』マーグ、『とんでモンペ』チリチリ、『さすがの猿飛』肉丸、『レディジョージィ』ロエル、『超力ロボ・ガラット』サラダーユ、『ガラスの仮面』桜小路優、『蒼き流星ＳＰＴレイズナー』ギウラ、『タッチ』上杉達也、『陽当たり良好』高杉勇作、『聖闘士星矢』シャカ、ミーメ、オルフェウス、『キテレツ大百科』トンガリ、『らんま１／２』東風先生、『トンデケマン』はやと、『がきデカ』こまわりくん、他多数

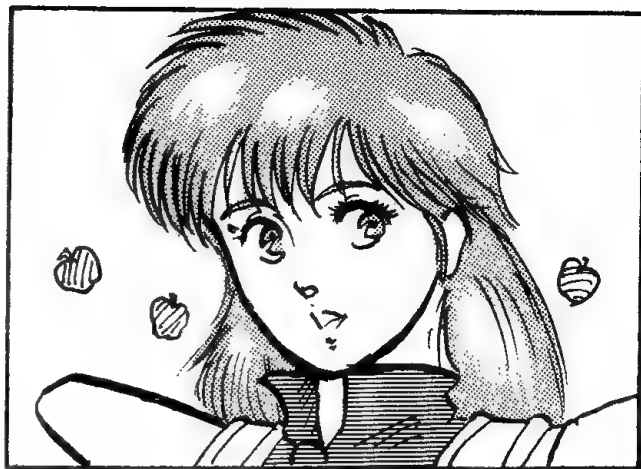
★コメント★

名古屋国際児童劇団に所属、ＮＨＫ『中学生日記』に女優の竹下景子らと出演した。同じ声優の平野文と共演した事もあり、その頃から二人は知り合いだったそうだ。そのためか彼は彼女の事を“ヘーノブン”（平野文の音読み）と呼んでいる。高卒と同時に渡米、ベビーシッター等のアルバイトをしながら三ケ月ほど滞在した。帰国後、明治大学在学中、声の仕事を始める。初アニメは『コンバトラーＶ』。その後は本人のキャラクターとは逆の二枚目キャラが続く。

ラジオ番組では、オカマみたいにしゃべるし、早口で機関銃のようにまくしたてて非常にうるさい人なんだけど、その反面、非常に頭の切れる（切れている、ではない）、本当に頭の良い人なんだなということを感じさせられる。声優やってりゃ、レギュラー何本も抱えてそこそこ良い生活が出来たってのに、それ全部断ってアメリカに行ってしまったこともある。そのうえ、28才の若さで自ら劇団を作ってしまった。やはり、良い意味で普通の人間とは違う。

しかし、この人の常識外れは悪い方向にも発揮されている。そう、あれは忘れもしない、田中真弓と島津冴子がパーソナリティをやっていた頃の『アニメトピア』で、かの有名な“ロンパールーム・キャンタマ事件”論争というのがあった。この放送の時にまたまた三ッ矢氏がいたもんだから、さぁ大変。彼は「キンタマのどこが汚いんだ。見せてやる！」と言って、こともあろうにズボンのジッパーをずり下げ、「これからは自分の事をキンタマ会長と呼んでくれ！」などと絶叫したそうだ。もう完全にビョーキである。

■声優大事典

かピタリハマって男の子の間で大人気となる。レイナの人気は番組終了後も衰えるどころか上昇する一方で、レイナが主役のOVAが何本も製作された。ゲストではあるが、「ドテラマン」のサイコーユ鬼は歌がとても可愛くて私は好きだったな。次に演じる「赤い光弾ジリオン」のアップル役では、キャラの特徴をしっかりとらえた役作りが出来るようになり、かなり進歩のあとが見られると同時に彼女自身の人気も上々で、アニメグランプリ人気投票の第五位にランクされた。

その他の作品に「機動戦士ガンダムZZ」ミリィ・チルダー、「F」ユキ（これがけっこう気に入ってたりして）、「トッポジージョ」ミミ、「ビリ犬」ヨーコ、「ガルフォース」スピア、「バブルガムクライシス」アンリ、「ARIEL」絢、「ヴィナス戦記」マギー、「レスラー軍団」マリリン、「聖戦士ロビンJr」黄バラ姫、「妖魔」琴音など、脇役でも特徴のある演技を見せている。

みた

最近では、「エースをねらえ2」岡ひろみ、「天空戦記シュラト」蓮華山のラクシュ、「強殖装甲ガイバー」瀬川瑞紀、「風魔の小次郎」北条姫子、「キャッ党忍伝てやんでぇ」おみつ、「ふしぎの海のナディア」マリー役で活躍。中でも、「エースをねらえ」の岡ひろみ役での迫真の演技は特筆に値する。

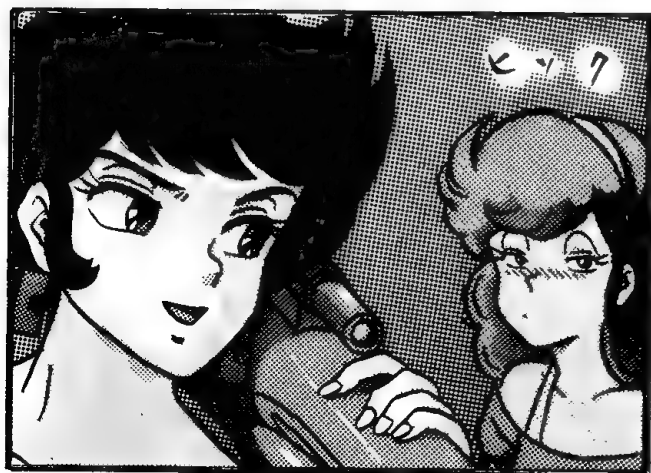
歌も歌う彼女であるが、アップルのイメージソング『ラブソングは上手くない』と、ラクシュのイメージソング『ソーマッち! Love you』は必聴ですぞ。ミニアルバムも発売し今ノリにノっている若手声優の一人である。

三田ゆう子

【青二プロダクション】
本名　出口友子
昭和?年八月十四日生まれ
獅子座

彼女の声を初めて聞いたのは、確か「うる星やつら」の弁天だったような気がする。非常に威勢の良い声から、きっと男の子みたいな女の人なんだろうなと思っていたら、「忍者ハットリくん」のシンゾウも同じ人が演っているというではないか。正直言って信じられなかったね。しかし、「ミンキーモモ」のピピルもそうだと知った時には、ああこの人は何種類かの全く違う声を使い分けられるスゴイ人なんだなと感動してしまった。しかし、そんな彼女の事を三ッ矢雄二はアニメトピアの本の中で、〈とっちゃんぼうや〉ならぬ〈ばっちゃんおじょう〉と評していたので、そんなに童顔なのかと思っていたら、写真で見る限りは普通の優しそうなお姉さんという感じだった。

また、三ッ矢氏が語るところによると、ある時彼が渋谷の公園通りを歩いていると、三田ゆう子に後ろ姿がそっくりな女性が前方を歩いていたので、彼は何も疑わずその女性に向かって「そのルーズな腰つき、締まりのない足首、三田ゆう子だ!」と声をかけたら全くの人違いで、平謝りに謝ったというエピソードがある。よく考えると、何かとんでもない事言っているような気がする。三田さんごめんなさい。

その他では、「さすがの猿飛」美加、「GUGUガンモ」リンダ・スカイラーク、「めぞん一刻」六本木朱美などの弁天路線のほか、「愛してナイト」大川橘蔵、「クリィミーマミ」ネガ、「マジカルエミ」香月

氏　名　矢尾 一樹

本　名　同じ
所　属　俳協
生年月日　昭和三十四年六月十七日
星　座　双子座
血液型　不明
性　別　男

≪演じたキャラクター≫
『バース』シュルギ・ナム、『超獣機神ダンクーガ』藤原忍、『ザ・ヒューマノイド』エリック、『機動戦士Ｚガンダム』ゲーツ・キャパ、『機動戦士ガンダムＺＺ』ジュドー・アーシタ、『メガゾーン２３・Ⅱ』矢作省吾、『妖刀伝』織田信長、『魔境外伝レディウス』ライオット、『奴の名はゴールド』ゴールド、『燃えるお兄さん』国宝憲一、『ラムネ＆４０』ダサイダー、『八神くんの家庭の事情』八神裕司、他

★コメント★
デビューは『バース』のナム役。次の彼の出世作とも言うべき『ダンクーガ』では、初の主役、藤原忍役を演じ、“やってやるぜ”の決めゼリフが大流行、彼自身の人気も急激に上がって行った。それと同時に、冨永みーな、川村万梨阿の『アニメトピア』にゲスト出演するようになり、「ヤーオ神父のお助け教会もうしませーん！」という自らのコーナーまで持つに至る。持前のひょうきんさと自分は主役しかやらないと言い切る自信、長渕剛ばりのルックスから一躍声優界のスターダムにのし上がり、『アニメトピア』なき後は、『やってやるぜ情報局』他で二年以上もメインパーソナリティをつとめた。また異色作として、特撮番組『勝手にカミタマン』で、不気味生物モスガをほとんど地でやっていたりもした。そして、62年には人気も頂点に達し、アニメグランプリにおいて人気声優第一位に輝く。
音楽活動としては、『ＹＡＯ』『Destiny 28』の二枚のソロアルバムを出し、いずれも大ヒット。『ＹＡＯ』に収録されている“やってやるぜ”が特にイイ。また、『ダンクーガ』で共演した山本百合子、中原茂らと共に「獣戦機隊」を結成、ライブ活動を展開した。渋谷のライブハウス、『ＴＡＫＥ　ＯＦＦ７』では、一日の観客動員数の新記録を作った程の盛況ぶりだった。
舞台の方では、大学一年の頃から『怪物ランド』の前身である小劇場芝居『劇団摩天楼』で芝居をやっており、『ウソップランド』にも出演していた。その他テレビでは、『気になる隣の新家族』というドラマで浪人生役を演じ、“いっそセレナーデ”をギター片手に歌ってしまったり、『ヒルビリーザキッド』やフジテレビの学園ドラマにも出演した。現在は、マルチタレントを目指し、声の仕事以外も意欲的こなしている。

岬、「オバケのQ太郎」P子、「のらくろくん」圭太、「パステルユーミ」桃子、「ウルトラB」UB、「レディリン」ソフィ、「ゲゲゲの鬼太郎」猫娘など、赤ちゃんからお母さんまでありとあらゆるタイプのキャラを演じ、演技の幅の広さを見せている。

最近では「悪魔くん」悪魔くん、「ピーターパンの冒険」カーリー、「ドラゴンクエスト」デイジー、「トンデケマン」アラジン、と少年役が多いが、声優としては中堅ながらも、実力派バイプレイヤーの一人として活躍中である。

森功至（モリカツジ）

【青二プロダクション】
本名　同じ
昭和?年七月十日生まれ
蟹座　B型

この人も他の多くの声優と同じく児童劇団上がりである。若い頃から車に狂い、現在の暴走族、当時の言葉で言えば『カミナリ族』出身。一時は役者やめてサラリーマンになったこともあるという変わり種。初レギュラーは「マッハGOGOGO」の三船剛。余談ではあるが、剛の兄の覆面レーサー役は現在テレビの司会等で有名な愛川欽也だった。

その後は「サイボーグ009」島村ジョー、「アパッチ野球軍」大学、「柔道賛歌」巴突進太、「イルカと少年」ヤン、「アタックNo.1」一の瀬努、「男どアホウ甲子園」豆タン、「科学忍者隊ガッチャマン」大鷲の健、と立て続けに演じ、硬派二枚目路線定着かと思いきや、「キューティーハニー」では速水清二を演じ三枚目も出来ることを証明した。

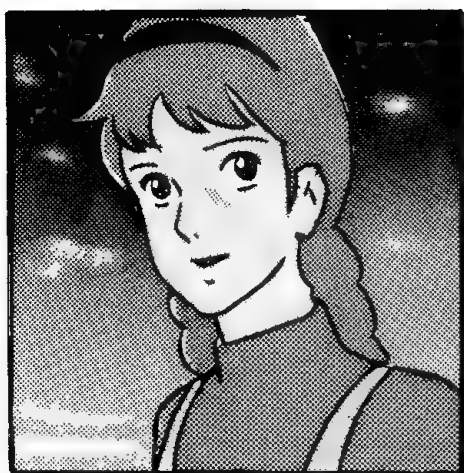
それからも、「宇宙の騎士テッカマン」南城二、「恐竜探検隊ボーンフリー」北山丈二、「ガッチャマンII」大鷲の健、「ドカベン」土井垣と硬派が続くが、徐々に「エースをねらえ」藤堂貴之、「はいからさんが通る」伊集院忍、「機動戦士ガンダム」ガルマ・ザビといったお坊っちゃま役が増えてくる。「無敵超人ザンボット3」宇宙太、J9シリーズでは通しレギュラーで、「銀河旋風ブライガー」飛ばし屋ボウイ、「銀河烈風バクシンガー」佐馬之介、「銀河疾風サスライガー」ビート、そして「ビデオ戦士レザリオン」ギャリオ・サバーン、ナレーション、「戦闘メカ・ザブングル」ビエル、とロボット物の多い中、「ストップひばりくん」椎名、「愛してナイト」里美のような軟派タイプも演じた。こうして見ると、ここまでは年を感じさせない若い役しか演っていないことが分かる。本当にこの人の若々しい声には感心させられてしまう。

しかし、「ベルサイユのばら」ロベスピエール、野沢那智から引き継いだ「ガラスの仮面」速水真澄、「北斗の拳」シュウなどでは渋い大人の演技を見せてくれた。そして「闘え！拉麺男」ラーメンマン、「超人マスターフォース」ホーク、「聖闘士星矢」アウリガのカペラ、「奴の名はゴールド」イオン、「ダーティペア」カースン、「魔龍戦紀2」椋里と演じ、最近では「銀河英雄伝説」の疾風ウォルフこと、ウォルフガング・ミッターマイヤー役で活躍している。その他、テレビのナレーターとしてもお馴染みである。

行

八奈見乗児

【青二プロダクション】
昭和?年八月三十日生まれ
乙女座

声優界きっての超ベテラン名バイプレイヤー。しかし我々の前にその姿をほとんど見せたことがないので普段どのように話す人なのか全く分からない。一度、生でその姿を拝見し声を聞かせて頂きたい。この人に関する資料が手元に全く無いので、デビュー作も初レギュラーも不明。私が覚えているので最も古いものは「花のピュンピュン丸」の所長と、あの有名な「巨人の星」の伴宙太で

氏　　名　山田 栄子

本　　名　同じ
所　　属　青二プロダクション
生年月日　昭和？年六月十三日
星　　座　双子座
性　　別　女

≪演じたキャラクター≫
『赤毛のアン』アン・シャーリー、『伝説巨神イデオン』バンダ・ロッタ、『新鉄人28号』正太郎、『太陽の牙ダグラム』キャナリー、『忍者ハットリくん』影千代、『六神合体ゴットマーズ』なみだ、『ビデオ戦士レザリオン』サハラ、『伊賀のカバ丸』大久保蘭、『キャプテン翼』岬太郎、『小公女セーラ』ラビニア、『銀牙・流れ星銀』銀、『愛少女ポリアンナ物語』ジミー、『忍者戦士飛影』シャルム、『がんばれキッカーズ』上杉、『愛の若草物語』ジョオ、『ドラゴンボール』ピラフの部下マイ、『アニメ三銃士』アラミス、『ビリ犬なんでも商会』ガリ犬、『小公子セディ』ジェーン、『極黒の翼バルキサス』レムネア、『ビックリマン』神帝フッド、『エースをねらえ２』緑川蘭子、『らんま１／２』紅つばさ、『やじきた学園道中記』篠北礼子、他

★コメント★
名作劇場中、最高傑作の誉れ高い『赤毛のアン』のアン役でデビュー。そのアンの印象のあまりの強烈さゆえに、のっけから山田栄子という名前を強くアピールする結果となった。『鉄人…』の正太郎役ではアンのイメージを引きずることなく、正義感あふれる元気な少年を爽やかに演じた。しかし、この正太郎くん､彼女にとってはあまりにイイ子ちゃんすぎて､演っていてつまらなかったそうである。

その後は『ハットリくん』の影千代のようなギャグタッチのキャラから､『カバ丸』の金玉学園の校長、大久保蘭というおばあさん役、さらには『キャプつば』の理事長役では大人の女性まで演じ、徐々に演技派女優としての実力を示し始めた｡『キャプつば』では２役をこなした上、当時女子中高生に大人気だった岬太郎を演るようになってから若いアニメファンの間で知名度が上昇し人気も一気に上がっていった。『若草物語』では、名作シリーズ２回目の主役ジョオを見事に演じ、その評価をさらに高めた。そして、『アニメ三銃士』の男装の麗人、アラミス役で人気再上昇。アニメグランプリの人気投票でも第２位に浮上してきた。最近では『エース２』加賀のお蘭や、『ビリ犬』のガリ犬などを演り、あらゆる役をこなせる彼女の演技の幅の広さ、巧みさというものにはさすがの私も脱帽し、思わず帽子をかじってしまいます。これからは、その円熟した演技にさらに磨きをかけ、妖艶な熟女なんて演って欲しい気がする。

ある。伴宙太の野太い声は、今のこの人からは想像も出来ない。この声の路線はその後も「マジンガーZ」弓教授、「ゲッターロボG」ベンケイ、「キューティーハニー」如月博士と続く。

　ギャグキャラでは「デビルマン」ポチ校長、「もーれつア太郎」ココロのボス、そしてこの人の代表作となるタイムボカンシリーズでは、「タイムボカン」グロッキー、「ヤッターマン」ボヤッキー、「ゼンダマン」トボッケー、「オタスケマン」セコビッチ、「ヤットデタマン」コケ松、「イッパツマン」コスイネン、「イタダキマン」ダサイネンの計七本を八年以上に渡って演り続けた。また、この人はアドリブの名人でもあり、「タイムボカンシリーズ」では、自分の好きなように演って構わないということで、あらかじめ台本には白紙の部分があり、スタッフの方がこの人のアドリブを楽しんでいたというようなエピソードもある。忘れてしまうものが多いなかで、この人の強烈な個性から生み出される見事な演技（アドリブ）はいつまでも心に残っている。

　その他、「カリメロ」フクロウ先生、「グレンダイザー」源蔵、「ダンガードA」佐渡、「ストップひばりくん」大空いばり、「銀河旋風ブライガー」パンチョポンチョ、「スプーンおばさん」おじいさん、「GuGuガンモ」あけみのばあや、「風の谷のナウシカ」老人の一人、「魔法のスター・マジカルエミ」おじいちゃん、「ゲゲゲの鬼太郎」一反木綿、「ドテラマン」インチキ大王、「ビックリマン」スーパーゼウス、「のらくろくん」のら山くろ吉、最近では「ドラゴンボール」界王、ナレーション、「まじかるハット」タウ爺さん、「チンプイ」ワンダユウなど、独特な味のあるキャラを数多く演じ、健在ぶりを見せてくれている。

山形ユキオ

【81プロデュース】
昭和三十二年三月十一日生まれ
魚座

　ロック歌手としてデビュー後、しばらくは鳴かず飛ばずの状態が続くが、「銀河旋風ブライガー」の挿入歌『星影のララバイ』で、そのハスキーでパワフルな歌声がファンの心をとらえ、折からのJ9ブームも手伝ってアニメ歌手として一躍有名になる。その後すぐに「魔境伝説アクロバンチ」の主題歌『夢の狩人』、「銀河烈風バクシンガー」の主題歌及び『不死蝶のライラ』などの挿入歌を歌い、J9コンサートや彼のライブは、のきなみ異常なまでの盛り上がりをみせた。しかし、J9シリーズ終了後は人気にも陰りが見え初め、アニメ歌手としては全く起用されなくなってしまう。

　このまま、水原朋子、増田直美、詩織らのように消えてしまうのかと思いきや、島津冴子とペアでやっているラジオ番組『ペアペアアニメージュ』のパーソナリティは健在だった。というのも、実は彼はそれ以前から既に81プロデュースに所属しており、『飛べ!京浜ドラキュラ』というミュージカルの主役もこなす程の舞台役者になっていたのである。『ペアペア…』のメンバーがほとんど81の所属だったのだから、若手の有望株の彼がパーソナリティを続けていたのは当然のことだったのである。

　その後も81の公演に次々と出演、ミュージカル役者としてメキメキ力をつけていった。ちなみに私の観た限りではダンスはなかなかのものだが演技はイマイチである。それでも劇中での彼の力強い歌声は演技の稚拙さをカバーして余りあるものがある。

　声優としては、「グットモーニング・アルテア」ハッカーや、「ダッシュ四駆郎」ゲストの他、洋画の吹替えを少々かじった程度でまだまだ声優と呼べる程ではない。音楽活動としてはLPとシングルを何枚かリリースしているが、私は彼の歌の中では『サイレント・シティ』や『渚のデイドリーム』などが気に入っている。最近は久し振りにアニメ歌手として復活し、「冥王計画ゼオライマー」の主題歌『紅のロンリネス』を相変わらずの渋い声で歌っているが、役者としてだけでなく彼の本職である歌の方でも一層の活躍を期待したい。

山田康雄

【ぷろだくしょんバオバブ】
本名　同じ
昭和七年九月十日生まれ
乙女座　A型

やま

役者歴二十五年以上の大ベテランアニメファンのみならず「ルパンⅢ世」の山田康雄を知らない人は少ないだろう。また、洋画の吹替えでもクリント・イーストウッドの声でお馴染みである。（『ダーティハリー』シリーズ、西部劇等でこの人の声を聞いたことがあるはず）それ以外では『お笑いスター誕生』『TVジョッキー』等テレビの司会やラジオのパーソナリティでも有名。しかし、声優としてこれだけ有名な人がアニメのアテレコでは主役らしい主役は「ルパンⅢ世」一本だけというのはなんだか不思議な感じがすると同時に、いかにルパンⅢ世の印象が強烈であったかがよく分かる。本人も「これからはルパン以外はやりたくない。」と言っているように彼自身にとっても人生を左右するような重大な役柄だったに違いない。

この人の経歴に少しばかり触れてみると、当時東大合格率トップだった都立日比谷高校（今でも名門であるが）から早稲田大学に進学したという秀才なのだが、本人の弁によると高校時代から野球ばかりやっていて六大学でも野球を続けようと思ったのだが、即レギュラーを狙っていた東大に蹴られ、早大に入ったものの、当時の新入生には、後に巨人に入団し活躍した広岡達郎等のズバ抜けた選手が多かったため、野球を続ける事を断念。ブラブラしているうちになんとなく役者の道に入ってしまったという変わった経歴の持主。

他のアニメ作品は、初レギュラーである「アンデルセン物語」のズッコ（キャンティとの掛け合い漫才は絶品だったね。しかし、この頃から増山江威子と共演してたんだ。）そして、「星の子チョビン」のウサタン（これは可愛かった！）、「宇宙の騎士テッカマン」では前記二作と打って変わって劇画タッチのシリアスキャラ、アンドロー梅田を演じた。その他、「野球狂の詩」日の本盛、「パンダコパンダ」ではおまわりさん等の端役もこなしている。

最近は、「ルパン三世」の特番でしかお目にかかれなくなってしまったが、なんとなく覇気がないように感じられるのは気のせいだろうか。

山本百合子

【青二プロダクション】
昭和三十五年二月十三日生まれ
水瓶座

とてもそうは見えないけど、二十四才の時既に結婚なさっている人妻である。声優やる前はアイドル歌手だった事は有名。「サイボーグ009超銀河伝説」の挿入歌を歌った事もある。「ハローサンディベル」のサンディベル役でデビュー、いきなり主役に抜擢されたラッキーな人。

「キャプテンハーロック無限軌道SSX」ではサンディベルと打って変わって大人の女ラ・ミーメを、「レディジョージィ」ではジョージィを演じた。これは私の最も好きなアニメの一つなのだが、それは山本百合子がジョージィの声をやっていたからである。

その後「北斗の拳」ユリア、「はーい・ステップジュン」ジュン、「超獣機神ダンクーガ」結城沙羅という全くタイプの違う三つのキャラを同時に演じ、特に結城沙羅は大人気で彼女自身も獣戦機隊のライブ活動などで人気の頂点にあった。この人の歌は抜群だったよなあ。まあ元歌手

なんだから当たり前か。それからもOVA「ノーラ」ノーラ、「戦え！イクー1」イクサー1、「剛Q超児イッキマン」モナカ、「ガルフォース』ラミィ、「カムイの剣」チコ、「レンズマン」キララ姫、と多彩な役をこなし、演技派としても認められるようになった。

その他のキャラに、「機動戦士ガンダムZZ」ラサラとサラサ（これも気に入っているキャラの一つで、特に双子の演じ分けが上手い）「聖闘士星矢」魔鈴、「マスターフォース」ミネルバ、「TWIN」響、「燃えるお兄さん」綾小路さゆりなどがある。

最近では、「アーシアン」孝子、「ハイスピードジェシー」テレーヌ、「カルラ舞う」扇舞子、「やじきた学園道中記」矢島順子、「魔法使いサリー」サリー、などで活躍しているが、レギュラーがちょっと少ないので、ガンバッテ欲しい。

横沢啓子

【横沢啓子オフィス】
本名　難波啓子
昭和二十七年九月二日生まれ
乙女座　O型

高校一年の時の初恋の相手と五十三年に結婚、十才になる女の子がいるそうな。大学在学中からテレビドラマに出演していたが、顔出しの仕事に見切りをつけ声の仕事一筋に。デビューは「ポールのミラクル大作戦」のニーナ。「明日へアタック」西すみえを経て、初の主役は「若草のシャルロット」シャルロットだった。だが、最近の再放送を観ると、若いせいかやはり演技過剰という気がしてしまう。そして「ドンチャック物語」ララ、「メカンダーロボ」ミカ、「はいからさんが通る」ではギャグありシリアスありの男勝りの女の子、花村紅緒を演じる。アニメでは紅緒というキャラクターに彼女の声がピッタリ合って最高に魅力的な女の子になった。

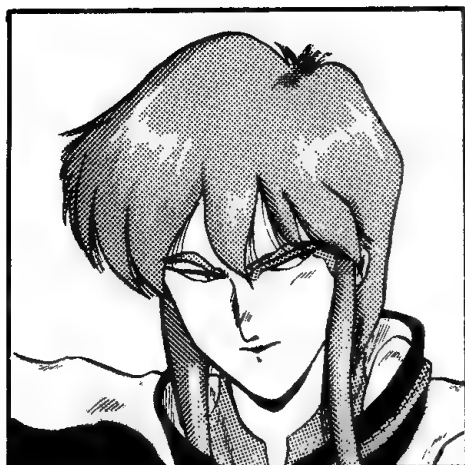
その後、「リスのバナー」スー、「タンサー5」神秘瑠璃、「ドラえもん」ドラミ、「こぐまのミーシャ」ミーシャ、と可愛い役が続き「宇宙戦士バルディオス」ではジェミー役で、ロボットアニメのヒロインも経験した。ゲストでは、彼女自身が気に入っているものに、「うる星やつら」テンのお母さんこと、火消しママがある。

それから、「伝説巨神イデオン」フォルモッサ・リン、「ザ・かぼちゃワイン」朝丘夏美（女の子には不評を買ったが『春介くん大好き！』なんて可愛いくてとても好きだったよな）、「超攻速ガルビオン」のレイ緑山は大人の女性役でかなり期待していたのに打ち切りなんてヒドイ。

その後は「未来警察ウラシマン」ソフィア、「オヨネコぶーにゃん」うずら、「オバケのQ太郎」O次郎、「スプーンおばさん」リトルボン、そして「天空の城ラピュタ」のシータを演じ、ベテランながら若いアニメファンの支持を得て一躍人気声優の上位にランクされる。

「極黒の翼バルキサス」リアン、「レディレディ」美鈴、最近は「エスパー魔美」の魔美、「おかあさんといっしょ」のピッコロ役で元気に活躍。

吉田理保子

【81プロデュース】
本名　同じ
昭和二十四年一月二十四日生まれ
山羊座　A型

氏　　名	山寺 宏一
本　　名	同じ
所　　属	俳協
生年月日	昭和三十六年六月十七日
星　　座	双子座
血 液 型	不明
性　　別	男

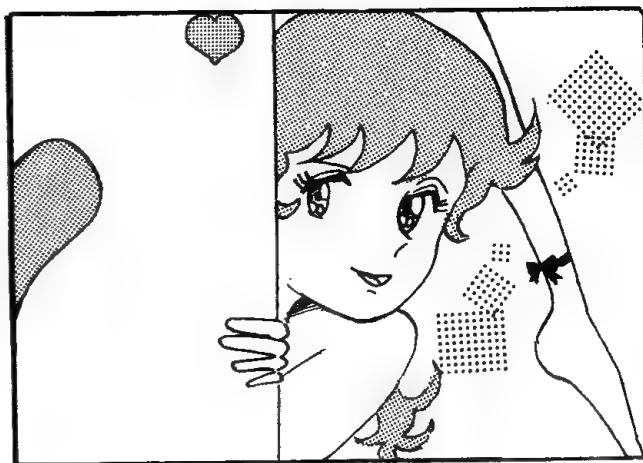
≪演じたキャラクター≫

『ボスコアドベンチャー』オッター、『バトルハッカーズ』ドリルクラッシャー、『魔神英雄伝ワタル』クラマ、『超音戦士ボーグマン』ダスト・ジード、『わんぱくダックの夢冒険』ナレーター、『ピーターパンの冒険』チャッコ、『チップとデールの大作戦』デール、『天空戦記シュラト』竜王リョウマ、ナレーター、『それいけアンパンマン』チーズ、『魔道王グランゾート』シャマン、『らんま1/2』良牙（Ｐちゃん）、『魔女の宅急便』アナウンサー、『燃えるお兄さん』ダックくん、『ガッデム』轟源、『ナディア』エアトン、他

★コメント★

林原めぐみと双璧をなす、天才声優の一人である。山寺宏一ってよく見る名前なんだけど役名がどうも思い出せないと悩んでいたら、なあんだ『シティハンター』のＥＤテロップに毎週登場してたんだよね。それも名前もないチンピラとか殺し屋みたいなやられ役で。どうりで名前しか覚えていないわけだ。どうにかこの人の名前と声が一致するようになったのは、『ワタル』のクラマあたりからだった。山寺さんというと、クラマやダスト・ジードなどからクールな二枚目をイメージしていたのだが、実物はおしゃべり上手のとてもひょうきんな人なのであった（ちなみにルックスはしっかり二枚目である）。昨年のアニメフェスティバルでの堀内賢雄との掛け合い漫才、おっとトークショウは本業の漫才師も真っ青のテンポの良さと面白さであった。

アニメ声優としては新人の方で、役名が付いて来たのは確か『ボスコアドベンチャー』のオッターあたりだったと思う。彼の演じたキャラの中では『らんま1/2』のＰちゃんと呪泉郷のガイドのへんなおじさんが特にイイ。声の仕事だけでなく、テレビの情報番組のレポーターとしても活躍している（この間はジャガーという缶コーヒーのレポートをしていた）。また、歌も上手で『ボーグマン』の挿入歌“ＢＯＲＧ・ＧＥＴ・ＯＮ”なんか聴いていると思わず燃えて来るぜ。

ダスト・ジードのような渋いキャラからコミカルタッチのキャラ、果ては動物まで違和感なくこなす演技力とひょうきんな性格、それに加えたルックスの良さ。これは人気上昇間違いなし。またまた今後の楽しみな声優が現れた、と一人ほくそ笑んでいる筆者であった。

この人も児童劇団の子役上がりである。本当に元気なお姉さんだが、今年でもう四十一才、果して結婚出来るのでしょうか。（余計なお世話だって！）水島裕とのコンビの『ペアペアアニメージュ』は一週間の中で最も楽しみな曜日であった。日本全国タコちゃんの輪！とか面白かったな。残念ながら私は麻上洋子との初代『アニメトピア』は全く聞いたことないんだよね。録音テープ持ってる人がいたら是非貸して下さい。

アニメデビューは「アンデルセン物語」村人A、初レギュラーは「ワンサくん」、そして初の主役があの「魔女っ子メグちゃん」の神崎メグである。エッチなシーン（主にメグのパンチラ、ネグリジェ姿）が多いことから、女の子だけでなく男の子にも高い人気を得た。次に、メグとは打って変わって「アルプスの少女ハイジ」の清楚可憐な女の子、クララは感動ものであった。それからは「ゲッターロボ」「ゲッターロボG」早乙女ミチル、「鋼鉄ジーグ」卯月美和、「グレンダイザー」グレース・マリア・フリード、「ダンガードA」霧野リサ、と当時ロボット物のヒロインといえばこの人しかいないという程に彼女の声がテレビで途切れることはなかった。

しかし、この人の明るく元気な所が魅力と言えば魅力なんだけど、当時の演技はとても演技と呼べるものではなかった。その後は「侍ジャイアンツ」ユキ、「キューティーハニー」夏子、「はじめ人間ギャートルズ」ピーコ、「マシンハヤブサ」さくら、「明日へアタック」明日香、「一休さん」弥生、「グランプリの鷹」香取利恵、「未来少年コナン」モンスリー、「魔女っ子チックル」チックル、とロボット物から離れ可愛らしい女の子が続いた。そして、彼女が演じた中で私が最も好きな、「ベルサイユのバラ」のロザリーを演る頃からやっと、しっかりとした役作りが出来るようになった。

その他に、「宇宙大帝ゴットシグマ」ミナコとジーラ、「ムーの白鯨」マドーラ、「おはようスパンク」科ちゃん、「はいからさんが通る」環（これもけっこう気に入ってる）、「新エースをねらえ」宝力冴子、と主役以外でも多彩な役をこなす。そして彼女の代表作とも言える、「まいっちんぐマチコ先生」のマチコ先生を演じるが、これが随分と世間を騒がせた。PTA等からはかなりの抗議があったようだが、当の本人はどんな心境だったろうか。この人のことだから案外ケロッとしていたりして。

それから「南の虹のルーシー」ケイト、「とんでモンペ」お母さん、と初めてお母さん役がきた。その後暫くはレギュラーが途絶えるが、「GuGuガンモ」のお母さん役に続き、「六三四の剣」では六三四の母、夏木佳代役で元気なお母さんを演じた。しかし、彼女は実際に結婚もしていないし、子供もいないのにとても味のある素晴らしい演技をしていた。さすがに年の功は違う。続いて「光の伝説」石崎監督、「愛少女ポリアンナ物語」デラ、「ガルフォース」司令官、「ガミーベアの冒険」グラミー、「小公子セディ」サラ、「マスターフォース」メガ、とベテランらしい渋い演技を見せている。

最近では、「パラソルヘンベエ」ママ、「ウルトラマンUSA」スーザンランド、「ギャラガ」ミン、劇場版「アンパンマン」氷の女王、「虚無戦史MIROKU」三好伊佐入道などで活躍しているが、如何せんレギュラーが少なすぎる。アニメでももっと活躍して欲しい声優さんである。

わ行

若本規夫

【シグマ・セブン】
本名　若本紀夫
昭和二十年十月十八日生まれ
天秤座　A型

以前の芸名を『若本規昭』といった。現在四十五才の超ベテランと言いたい所だが、この業界に入ったのが二十七の時、役がついたのが三十

わた
過ぎというからかなり遅咲きの人である。それまでは洋画の吹替えが主であったが、「ドカベン」明智先生以来アニメの仕事が増えていった。「新巨人の星」掛布、「未来少年コナン」ドウークと続き、初レギュラーは「魔境伝説アクロバンチ」のヒロ蘭堂で、これが大当たり。渋い声と演技でファンにその名が知られるようになる。「聖戦士ダンバイン」ではナレーションとアレンを演じ、渋い二枚目路線が定着したかと思いきや、一転して「さすがの猿飛」では三枚目ギャグキャラ緒方先生と、若本氏の人柄からは想像もつかない崩れた演技で新境地を開拓しファンを驚かせた。

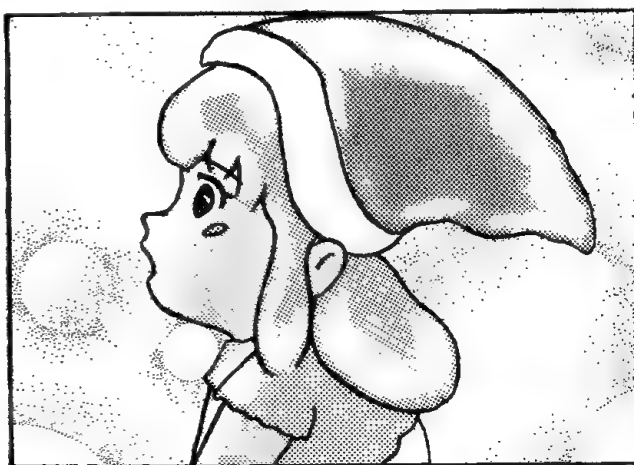
また、それと同時に「サザエさん」では番組レギュラーで、あなごを初めとする脇役を、「ストップひばりくん」ではサブを演じる。その後はロボット物が増え、「レザリオン」チャールズ、「エルガイム」リョクレイ・ロン、「ダンクーガ」シャピロ・キーツなどを演じ、渋い敵キャラをやらせれば天下一品という所を見せてくれた。また、「めぞん一刻」茶々丸のマスター、「六三四の剣」藤堂国彦、「装鬼兵MDガイスト」ガイストと多彩な役もこなす。「G.I.ジョー」リッパーなんてのもあったな。

その他OVAでは、「ジャスティ」レクター司令、「ウィンダリア」カイル、「アモン・サーガ」デノン、「超時空ロマネスク・サミー」ノア、「バイオレンスジャック」ハーレム・ボンバー、「魔鏡外伝レディウス」カイザー、など数多くの作品に出演し、劇場映画でも「オーディーン」竜王、「ファイブスター物語」ではボード・ヴュラードという非常に魅力的なキャラを演っている。さらに、「美味しんぼ」岡星、「鎧伝サムライトルーパー」迦雄須、「トップをねらえ」太田浩一郎コーチ、「銀河英雄伝説」金銀妖瞳のロイエンタールと、渋めのおじさんキャラが続いているが、どれもみな文句なくカッコイイ。おじさんをここまでカッコ良く演じられるのはこの人しかいないんじゃないだろうか。

最近では、「ギャラガ」アルフ、「アッセンブルインサート」服部警部、「強殖装甲ガイバー」リスカー監察官、「ドッグソルジャー」マコト、「ぶっちぎり」堀場、「マドンナ2」不破、「ゴクウ」白竜幻二、「ヤンキー烈風隊2」岩倉、などで活躍している。これからもその渋い声と演技で我々を楽しませて欲しいものである。

渡辺菜生子

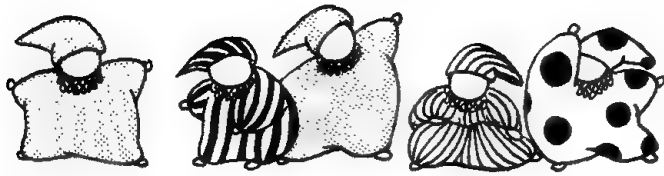
【青二プロダクション】
本名　同じ
昭和三十四年十一月二十一日生まれ
蠍座　O型

はっきり言って美人だと思う。デビューは「ザ・かぼちゃワイン」の女生徒B、初レギュラーは「タオタオ絵本館」のタルタルというウサギだった。「光速電神アルベガス」円条寺大作の妹、「リトル・エル・シドの冒険」ルイ役を経て、彼女の名が一躍ファンの間に知れ渡った「とんがり帽子のメモル」のメモルを演ることとなる。その可愛らしい声がメモルというキャラにピッタリ合って数多くの男性ファンを獲得した。

また、それと並行して「夢戦士ウイングマン」では美紅を演じていたが、こちらはあまり印象に残っていない。その後は役に恵まれず、「小公女セーラ」ロッティ、「愛少女ポリアンナ物語」ジェミー、「剛Q超児イッキマン」天馬宿子、「ボスコアドベンチャー」ラビー、「ドラゴ

ンボール」プーアル、「聖闘士星矢」美穂、「ガルフォース」キャティと主役級のキャラは一つもなかった。
　最近では「吸血鬼美夕」でヒロインの美夕を演じ、「ひみつのアッコちゃん」では猫のシッポナを好演、少しづつ注目され初めた。その他のキャラに、「かりあげクン」ヒサエさん、「ナマケモノが見てた2」ジョセフィーヌ、「ダンガイオー3」ミドー、などがある。しかし、美夕や美紅のようなキャラを演っている時よりも、メモル、プーアル、シッポナといったディフォルメされたキャラを演っている時の方が魅力を感じるのは私だけだろうが。これからに期待したい声優さんである。

◆事典執筆・編集にあたって◆

この事典に収録されている声優さんは、現在第一線で活躍されている方々の中から特に若手を中心に、百人余を私自らが選んだものです。読者の中にはごひいきの声優さんが載っておらず、不満に思っている方もいらっしゃるでしょうが、ひとえに私の不徳のいたすところです。誠に申し訳ありません。また、インタビューに応じて下さった山口勝平さん、西原久美子さんのお二方については、誌面の都合上勝手ながら割愛させていただきましたので、詳しくはインタビューページを参照下さい。

声優大事典 追補版

追補版

天野由梨

【アーツビジョン】
昭和四十一年一月五日生まれ

京都府出身だが、愛知県にも住んでいたことがある。勝田話法研究所三期生で、その後日本ナレーション演技研究所で演技を学んだ。日ナレ時の同期生には、佐々木望や林原めぐみがいる。

主な出演歴には「マシンロボぶっちぎりバトルハッカーズ」（パトリシア）、「レスラー軍団〈銀河編〉聖戦士ロビンJr.」（クィーン火美子）、「ミラクルジャイアンツ童夢くん」（由貴）、「私のあしながおじさん」（ジュリア）、「機甲警察メタルジャック」（吉沢えり子）「新世紀GPXサイバーフォーミュラ」（葵今日子）、「あしたへフリーキック」（有高みづほ）、「幽遊白書」（蛍子）、「無責任艦長タイラー」（ユリコ・スター）、「勇者特急マイトガイン」（松原いずみ）「熱血最強ゴウザウラー」（朝岡しのぶ）などがある。

幼稚園の学芸会で演技に興味を覚え、小学校の時は宝塚にあこがれていたが、「アルプスの少女ハイジ」を好きになり、将来の志望は声優へと変わった。反対していた親を説得し、高校卒業と同時に勝田話法研究所に入所、女子大に通いながら演技の勉強をした。デビューは十九歳の時である。

アーツビジョンの宣伝文句には「響きのある可憐な少女の声」と書かれている彼女、確かにデビュー当初はそういう可憐な少女役が多かったが、ここ最近は気の強い女の子の役ばかりである。筆者は彼女に会ったことがあるが、人ごみの中にいても声を出せば一度で分かるほどに響く声で、非常に目立つ。アニメで出している声は、ほとんど作っていないと思われる。

ここ最近人気がうなぎのぼりで、TVアニメやOVAで大活躍中の彼女、これまでたくさんの役をこなしてきているが、実は主役をしたことがない。筆者が知らないだけなのかもしれないけれど。ヒロインなら山ほど演じてきているのに……不思議である。

最近ハープを習い始めたそうで、インタビューの時には必ずその話を持ち出すらしい。ハープを弾いていると雑念がなくなるという事だが、これは最近仕事でストレスがたまっているということだろうか？将来は弾き語りもしたいということで、日々の練習の成果をぜひ聞かせていただきたいものである。

大谷育江

【江崎プロデュース】
昭和？年八月十八日生まれ
本名：同じ

デビューは「がんばれ！キッカーズ」はらきよし、そして「コボちゃん」コボちゃんを経て、「21エモン」（八一年には別キャストの映画がある）モンガーでは元気の良さとテレポートの時の「モンガー！」と

いう叫びが印象的であった。また、この作品は「21エモン宇宙ゆけ！裸足のプリンセス」という映画にもなった。そして、再び「コボちゃんスペシャル夢いっぱい」でコボちゃんを演じた。続いて「ゲンジ通信あげだま」では平家こだま役で、純粋にヒーローにあこがれるが現代っ子らしさも持つ少年を演じていた。そして「元気爆発ガンバルガー」では流崎哲哉、鷹介の母、小牧百合香の三役を演じ、更に「姫ちゃんのリボン」では野々原姫子・エリカ・姫子の分身の三役を同じ声で演じ分けており、その表情のつけ方は見事と言うしかあるまい。そしてテレビシリーズとなった「コボちゃん」でもコボちゃんを演じ、「熱血最強ゴウザウラー」では小島尊子（教授）や水原結花を演じている。　元々は舞台女優志望で、OLをしながら養成所に通っていたそうである。筆者は彼女に会ったことがあるが、ソバージュの似合う、はっきり言って美人だぞ。スキューバダイビングを始められたそうで、スポーツはなんでもござれという話。

　その他の作品として、「ああっ女神さまっ」長谷川空、外画「フルハウス」ステファニー、ラジオドラマ「影技（シャドウスキル）」キュオ「レジェンドオブクリスタニア」ライファンなど。

折笠愛

【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和？年十二月十二日生まれ
B型
本名：折笠きく江

　東京都出身。彼女の声はよく「鼻が詰まった声」と言われるが、本人によると、鼻が本当に詰まっているわけではないが、風邪をひいても鼻声にならないから便利だそうだ。

　そんな彼女の初主役は一九八八年に放映されていた「小公子セディ」のセディである。元々舞台女優であり、オーディションを経た彼女ではあるが、最初はアニメ的な誇張表現に戸惑ったそうである。

　そして、「キャッ党忍伝てやんでえ」プルルン役では作品のテンションの高さに完全に適合し、彼女の声優としての地位を不動にしたとも言えるであろう。また、この作品中でおミツ役の水谷優子とアイドルデュオ「ミップル」を結成している。

　その他に「聖戦士ロビンJr.」マーシ・ラメイル、「ジャングルブック　少年モーグリ」ララ、「桃太郎伝説外伝」ティンクル、「ピグマリオ」クルト、「おれは直角」じゅん、「ジャンケンマン」ジャンケンマン（OP：「ジャンケンマンえかきうた」も歌っている）、「丸出ダメ夫」トンマ、「元気爆発ガンバルガー」虎太郎、力哉の母、「鉄人28号FX」陽子、「マリーベル」ケン、「トップストライカー」マリオ、「おにいさまへ…」愛人、「幽遊白書」静流、実況のお姉さん、OVA「砂の薔薇」ヘルガ、洋画「ホーム・アローン」等で活躍している。

　しかし、忘れてはならないのは、「天地無用！」の魎呼であろう。彼女は、魎呼の恐ろしくて色っぽく、内にかわいらしさを秘めた魎呼を十分に表現した。また、高田由美演じる阿重霞とのやりとりはサイコーである。イベントでも、あたかも魎呼がそこにいるかの如く、ハイ・テンションで私達を楽しませてくれた。

　「Vガンダム」でもファラ・グリフォン等を演じ、九州工大でコンサートをする等、今一番ノリにノッている声優の一人と言っても過言ではないであろう。

かないみか

【賢プロダクション】
昭和?年三月一八日生まれ

何を隠そう、「花のピュンピュン丸」の主人公ピュンピュン丸こと田上和枝の実の娘である。「ビリ犬何でも商会」でデビュー、「ようこそようこ」で一躍有名になり、一部のファンの熱狂的支持を受ける。「きんぎょ注意報」のわぴこでタダ者でないことをアピール。見た目も言動も幼く感じるが、結構年である（スイマセン）。

母親が声優で、引退後も某録音スタジオ付近で、カラオケスナックをやっていることもあって、小さい頃から業界の人間に可愛がられてきたようである。今年、同じ声優の山寺宏一と結婚。『トリックすたあ』のライブにおいて、山寺宏一ファンの女性の冷たい視線の中、夫婦で競演するという離れワザを演じた。

その他の出演作に、「ムーミン一家」フローレン、「リカちゃん」香山リカ、「つる姫」おはな、「ビースト三獣士」メイ・マー、「ヤダモン」ヤダモン、「アンパンマン」メロンパンナ、などがある。

こおろぎさとみ

【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和四十一年十一月十四日生まれ
本名：興梠さとみ

デビュー作は「アップルポップ」か？主な出演歴には、「ミラクルジャイアンツ　童夢くん」かおり、「獣神ライガー」リエ、「はーいアッコです」ハナコ、「キャッ党忍伝てやんでえ」おタマ、「ママは小学4年生」水木なつみ、「花の魔法使い　マリーベル」ユーリ、「少年アシベ」ゴマちゃん、OVA「ドリームハンター麗夢4」、「聖伝」愛染明王、PCエンジンCD-ROM「雀偵物語2　宇宙刑事ディバン」さっちゃん、「雀偵物語3　セイバーエンジェル」、「ムーンライトレディ」などがある。

麗夢ではEDも歌ってる。童夢くんの前にどこかで見たような気がする。大きな当たり役がまだ無いため、今一つメジャーになりきれていないが、一部に熱狂的ファンを有する。背がちっちゃくて、年の割にとても若く見える。カワイイぞ。

白鳥由里

【アーツビジョン】
昭和四十三年八月二十日生まれ

男の子役は、「クレヨンしんちゃん」十九話Bパートに出てきた、横山智佐じゃないほうのいじめっ子しか見たことがない。

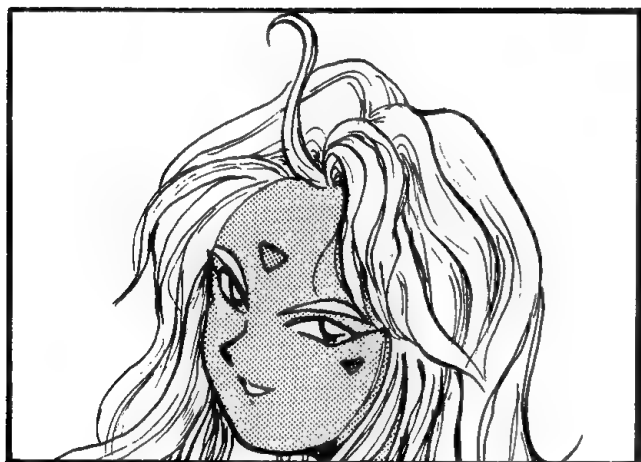
大熊昭が音響監督を務める作品では、かないみかやこおろぎさとみ、また横山智佐、大谷育江などがチョイ役で出てくることがあるので要注意。

デビュー作は、「トラップ一家物語」小さなマリア。「イクサー3」霞渚、「ママは小学4年生」えり子「草原の天使ブッシュベイビー」マーフィー、「伝説の勇者　ダ・ガーン」綾小路螢、「元気爆発ガンバルガー」結城千夏、「姫ちゃんのリボン」愛子、「金髪のジェニー」ベティ、PC-エンジンCD-ROM「雀偵物語3セイバーエンジェル」や、マニア必見の「丸出ダメ夫」モモ子などがある。

冬馬由美

【青二プロダクション】
昭和？年十二月二十日生まれ

青二なので、そのスジの作品を（例．東映）をくまなくあたってみる覚悟が必要。売れるまでは男の子役の多かった人、男の子役「ばっかり」と言ってもいいくらい。「ああっ女神さまっ」で井上喜久子、久川綾とトリオで歌を歌っているが、歌唱力ではちょっとつらいところか。

デビュー作は、「トランスフォーマー　超神マスターフォース」主役シューターである。その他、「21エモン」ルナ、NR、「まじかるたルるーと」河合伊代菜、「機動戦士ガンダム　F91」セシリー、「伝説の勇者　ダ・ガーン」山本ピンク、レディー・ピンキー、「ワタル2」スケバーン、EXマン、「フランダースの犬」（新）アロア、「セーラームーンR」アン、OVA「ロードス島戦記」ディードリッド、「サイバーフォーミュラ11」クレア、「ああっ女神さまっ」ウルド、PC-エンジン・CD-ROM「BABEL」などがある。

西原久美子

【劇団21世紀FOX】
昭和四十年四月二十七日生まれ

「レディリン」で一躍有名に。その後の活躍はインタビューページを参照のこと。最近では「ラムネ&40」のうれPちゃんがお気に入りである。

その他の作品に、「タルるート」ミモラ、「トップストライカー」アンナ、「スーパービックリマン」リトルミノス、「ヘポイ」キャッスルプリンセス、などがある。

久川綾

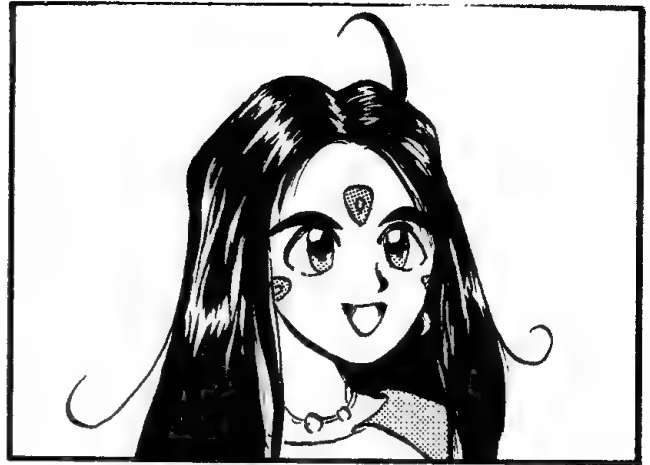
【青二プロダクション】
昭和四十三年十一月十二日生まれ

大阪府出身。青二塾東京八期生。
主な出演歴には、「新ビックリマン」プッチー・オリン、「魔法使いサリー（第二作）」すみれ、「RPG伝説ヘポイ」（ミーヤ・ミーヤ）「ダイの大冒険」レオナ、「美少女戦士セーラームーン」水野亜美、「魔物ハンター妖子」真野妖子、「ヴィルガスト」クリス、「ああっ女神さまっ」スクルドなどがある。ちなみにアニメの初めての役は「キテレツ大百科」の生徒A、初めてのレギュラー役は前述のオリン、初めての主役は「気ままにアイドル」の夏樹である。「ヘポイ」では、EDの作詞と歌までこなした。

中学生の時TVで「さらば宇宙戦艦ヤマト」を見て声優になりたいと思い、高校卒業時にアニメ雑誌に載っている声優の学校を見て回って、青二塾に入ることを決意した。青二塾から青二プロへの所属試験に落ちたら実家へ帰る約束を両親としていたとか。しかし今では、イベントに親戚を引き連れて見に行くなど、家族ぐるみで娘のことを応援しているそうである。

最近人気はうなぎ登りで、演じるキャラがみな人気者になるが、本人は他のキャラがあって自分のキャラが引き立つものだから、人気があるという事を意識せずに演じることを心がけているという。

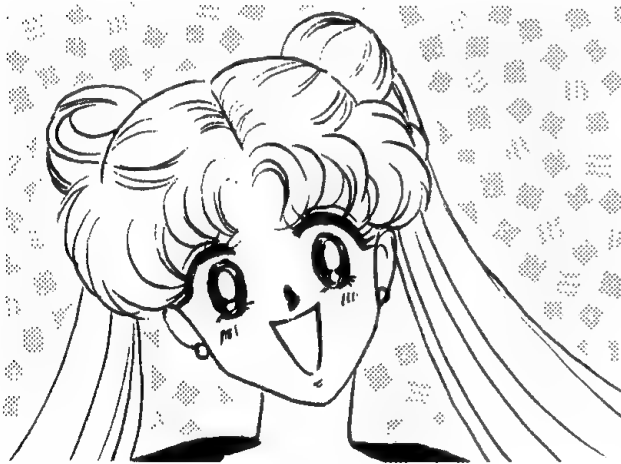
実家は金物屋である。笠原弘子とラジオ番組をしていた際に、実家のことを話してしまったため、その「久川金物　水間支店」は、大阪付近のアニメファンの観光名所になりつつある。

追補版

三石琴乃

【アーツビジョン】
昭和四十二年十二月八日生まれ
A型（AO）
本名：同じ

東京都出身。言わずと知れた「セーラームーン（R）」のセーラームーン役であり、アニメージュ第十五回アニメグランプリでは昨年の二十九位から二位へと人気急上昇中の彼女ではあるが、そんな彼女でさえデビュー前はOLをしていたそうだ。

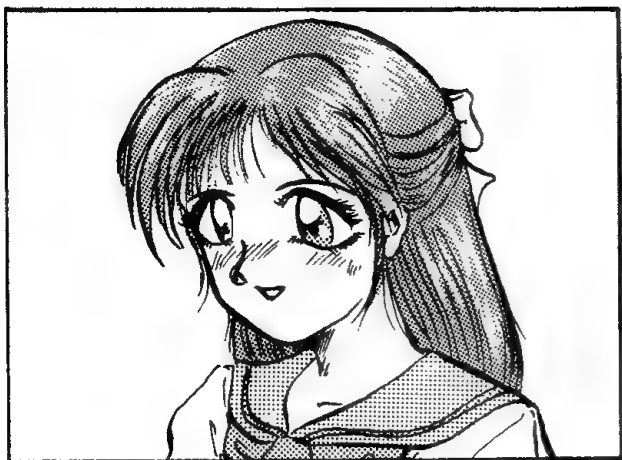
デビューはOVA「エースをねらえ！ファイナルステージ」の名もない役である。（ひろみが藤堂を追ってニューヨークへ行ったとき、藤道が引き払ったアパートにいた東洋系の少女であったと記憶している。）

そして「新世紀GPXサイバーフォーミュラ」菅生あすか役で一部のファンに名が知られるようになり、（ちなみにこの作品の視聴率は、本放送時には悲惨なものであったが、名古屋で再放送されたときには十％を軽く越える視聴率をマークし、小学生がCFごっこをするほど有名になった。）「ジャンケンマン」のチョッキン役を経て、「ゲンジ通信あげだま」平家いぶき役では話が進むにつれてハゲしくなっていく演技はみものである。（最後には「セーラームーン」のパロディもあった…小学生美少女戦士ワンダーいぶき（仮名））そして「花の魔法使いマリーベル」リボン役では愛らしいオス犬を演じ、ついに「美少女戦士セーラームーン（R）」では主役・セーラームーン（月野うさぎ）を演じることになり、これが彼女の出世作となった。他にも、「ツヨシしっかりしなさい」渡辺由美、OVA「イース・天空の神殿」リリア、「無責任艦長タイラー」キム中尉を演じているがテンションが上がると「うさぎ」になってしまうというなんともいえない魅力がある。

そんな飛ぶ鳥を落として地下三三七六八mまでめり込ませてしまうような勢いの彼女であったが、運命の一月二一日に盲腸に穴があき、腹膜炎を起こし、手術して一八日間入院する羽目になってしまい、代役をたてざるを得なくなってしまった。

（うさぎの代役の荒川香恵はちびうさ役だが、また琴乃さんが倒れたらどうするのであろうか？）しかし、順調に回復し、「YAIBA」さやか、OVA「ドラゴンハーフ」ミンク、OVA「ラムネ&40DX」シルバーマウンテン、「ハミングバード」皐月などを演じている。また彼女は歌も歌い、彼女の歌った多くのイメージアルバムの中でも「リリアフロムイース」はほとんど彼女のアルバムであり、ハミングバードの一員としてアイドル真っ青の活動をしたり、「Mo. Merry」という彼女のオリジナルアルバムを出しているなど、歌の方でもこれからの活躍が期待できる。最後に余談ではあるが、林原めぐみのミュージックビデオ「りぼん」のコーラス隊（黄地に赤の模様のパジャマの人）もやっていたので、若かりし頃の（今でも若いが）彼女を見たい人はどーぞ。

矢島晶子

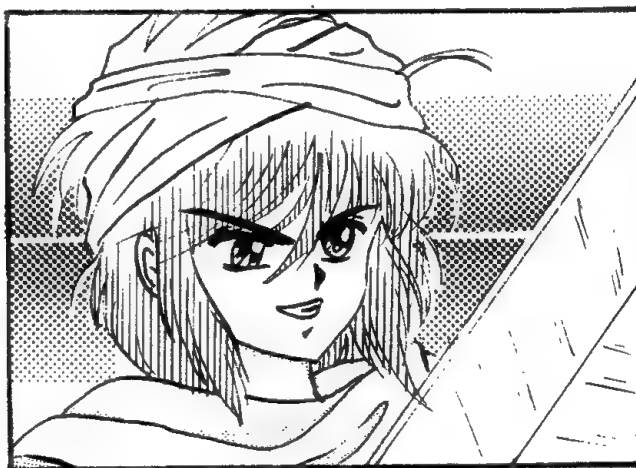
【ぷろだくしょんバオバブ】
昭和四十二年五月四日生まれ

デビュー作は「アイドル伝説えり子」田村えり子。その他、「ジャングルブック　少年モーグリ」メシュア、「ジャンケンマン」、「ちいさなおばけ　アッチソッチコッチ」コッチ、「クッキングパパ」えつ子、「花の魔法使い　マリーベル」ビビアン、「クレヨンしんちゃん」しんちゃん、「コボちゃん」、「勇者特急　マイトガイン」吉永サリー、教

育テレビ「あつまれ！　じゃんけんぽん」（九一年度版〜）ベル（黒猫の女の子）、NHKラジオ第二「ことばの教室三年生」、など。
「コボちゃん」の前番組「YAWARA！」でも番組レギュラーだったような気が。九二年二月一日に結婚。相手は不明。しんちゃんで新境地を開いたと見える男の子役だが、「ジャンケンマン」が盲点である。「ジャンケンマン」は三石琴乃の男の子声も聞ける作品。
私は絶対に一発屋だと思っていたのだが。今でもしんちゃんの声をあてているとは信じられない。それにしても、しんちゃんの真似をしている幼稚園児ってとってもムカつきません？

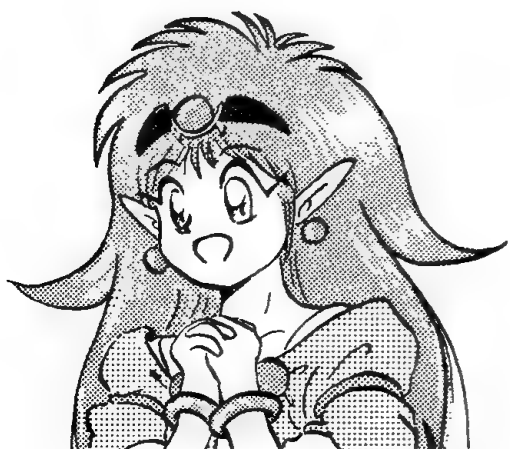
山口勝平

（やまぐち・かっぺい）

【劇団21世紀FOX】
昭和四十年五月二十三日生まれ
本名：山口光雄
（やまぐち・みつお）

『甘えん坊将軍』と言われる（三十路もちかいというに）。「らんま1／2」のらんま役でデビュー。林原めぐみと並んでこの作品から一気に人気声優の仲間入りをした。詳しくは、インタビューページを参照のこと。歌やラジオをやってみたいという希望は見事に実現し、『アニメキングダム』（東海ラジオ）のメインパーソナリティとなるが、何故か本人の狙っていたイメージとは別の方向で人気者となる。最近では下ネタの帝王となり、また、サルの『ビリー』が受けたのか「ジャングルの王者ターちゃん」では、本当にサルのエテ吉をやることとなった。歌の方では、何枚かCDを出したが、声優界では山口勝平か堀内賢雄かと言われるほど、歌唱力は（ピー）である。
数年前に結婚しており、現在は一児の父となっている。また、最近の芝居では『私の青空』の山下清モドキが結構良かった。
その他の作品に、「アルスラーン戦記」アルスラーン、「MADARA」マダラ、「あしたへフリーキック」トトなどがある。

横山智佐

【アーツビジョン】
昭和四十四年十二月二十日生まれ
本名：同じ

「ブラックマジック・M-66」でデビュー。以前、矢尾一樹がメインパーソナリティを務める「ポップスアニメ情報局」でアシスタントをやっていた。その時はちーちゃんと呼ばれていた気がする。その後、「ラムネ＆40」のミルクで有名になるが、未だこれといった当たり役がないのがつらいところ。少年ジャンプ巻末のジャンプ放送局でちさタローの愛称で親しまれる。最近では「笑っていいとも」に何回か出演、タモリに気に入られる。また、その筋では『中指姫』と呼ばれけっこうアブナイ娘だと発覚。
その他の作品に、「テッカマンブレード」ミリー、「アイアンリーガー」ルリー銀城、「エクスカイザー」コトミ、「オーマイコンブ」メンメン、「ミンキーモモ」ルピピ、「ジャンケンマン」ウルルン、「天地無用！」砂沙美、などがある。

編集後記

★ども、腹の編集長田です。前回はステーキを喰わしてもらいました。今回は寿司です。ちなみに三軒茶屋は「将太の寿司」の舞台でもあります。風寿司みたいな所でタラフク喰わせてもらえるかと今から楽しみです。デヘヘ……（食いモンにつられる男）

☽今回の改訂版の表紙を描いて下さったありざわひろしサンのコメントです。「ん〜と、ん〜と、ん〜と、ん〜と、（以下同じなので30行省略……）えっと、セーラームーン以外のアニメキャラってほとんど描いた時ないんですけど、楽しく描けました。ノリノリで描いたシャンプーちゃんです。自分でもお気に入りなんですよ〜」。御存じない方の為にちょっとありざわ女史について書かせていただきますと、この方は~~ガA~~セーラームーン系（…になりつつあるよナァ…）のVICTORY

EAGLEと云うサークルの主筆で、「ダッシー・マッジー」のシャルロッテみたいなコロコロした可愛い女の子です（ト、ホメておかなと…）しかし、本人はセーラーヴィーナスの生まれかわりであると固く信じているみたいなので、一応そーゆー事にしておきます。（笑）（代筆・六道銭）

○○○ ……………

佐々木誠が一っ さっ……
トレードに出されたっ——っ しかも西武……
♪もうホークスはおしまいダァ〜っ♪
秋山なんかいらねーよー
R.

（六道銭）

☀4年前社会人になり[illegible]に行って4ヶ月後に本が出た。そして今、[illegible]から帰ってきてやはり4ヶ月後に本が出た。しかし同じ本なのは何故だ。それにしても彼女欲しいぞ。（岡村）

@万能ドローイングマシン2号誕生!!……と、喜んでもいいのだろうか……。今回で、イラストのレベルは上がったぞ。たぶん……（八十島）

●思えば、この本の初版が発行されて、もう3年以上の月日が経ってしまったんだよなあ。再販するつもりはなかったんだけど、再版の要望があんまり多かったので、ついに我々も、重い腰を上げることになりました。でもずいぶん前の本なので粉失してしまった原稿が多く、差し替えのページが多くなったため、一見すると全く別の本に思える方もしれません。初版をお持ちの方で、この本を買ってしまわれた方、本当にゴメンナサイ。来年の夏には絶対×100、2号を出します。こりずに待っていて下さいませ。最後に、再版に協力して頂いたすべての皆様どうも有難うございました。この場を借りて御礼申上げます。（編集長、阿佐美）

編　集　長	阿佐美達也	
編　集　副　長	木村光伸	
レイアウト&アステア	小西進	
万能ドローイングマシーン	山中清和	
インタビュアー・ワープロ・執筆	岡村邦孝	
インタビュアー・執筆	小川敏明	
インタビュアー・カメラマン・執筆	竹内克行	
プリンティングアドバイザー	八田貴司	
カットマン&すたあぷらちな	田嶋尚之	
編集協力&飯炊き	常木建一	
カットマン&編集協力	柳本直樹	
	加藤孝一	
	福永寛	
	八十島聖子	
ワープロ&編集協力	工藤純也	
執筆&ワープロ	浅井俊隆	
執筆	田部伸一	
	藤井和之	
	上野正俊	
資料提供	あっぷるはうす	
カットマン	羽原義剛	野下正彦
	高元則匡	古怒田武史
	原田竜三	高野正章
	篠原道子	小林英美
	ＲＩＧＨＴ	六連銭&法学部モラトリアマーズ
編集協力	中村年男	安藤浩司
	小川浩伸	百瀬隆文
	板屋多門	
インタビューおこし協力	竹村恵美	
ワープロ	野村広	
専属運転手	今西彼方	
演奏	多羅尾伴内楽団	

特別協力
東京大学ＳＦＡ

（ 表紙・あいざわひろし　　裏表紙・八十島聖子 ）

おくづけ

Character Voice vol.1（改訂版）

平成2年　8月18日　初版発行
平成5年12月29日　第2版（改訂版）発行
平成7年　8月18日　第3版（改訂版）発行

編集・発行　　声優倶楽部
印刷・製本　　（株）栄光印刷

この本に関する連絡先
〒154　東京都世田谷区太子堂2-4-4
阿佐美　達也

Character Voice

声優倶楽部